柳條梢色づいて

舞夜じょんぬ

　はい、はい、はいと、あちらこちらで手を上げる男子たちがいる。今度は誰が当てられるのだろう。五人目だ。誰でもいいから早く終わらせてほしい。いつものこととわかっているけど、疲れるだけだから。
「では、次」
　溝口先生が梨南（りなん）の後ろにいる男子を当てた。
「はい、むかつくからです」
「賛成！」
　合いの手が入った。拍手する奴もいた。前の席にいるはるみが梨南に振り返った。いつもそうだ。はるみはその前も、その前の前も、男子が手を上げて発言するたびに、ごめんなさいと言いたそうな顔をする。梨南は無視して黒板の文字を読んでいた。
　――性格が悪い。
　――人をばかにした言い方する。
　――歩き方が変。
　――顔みると吐きそうになる。
　つけ加えて隣りに「むかつく」と、溝口先生は書いた。
「先生、はい、はい、はい！」
　四、五人の男子が叫んでいる。手で下ろすようにしぐさしながら、溝口先生は、
「では次に、女子、どう思うか？」
　と問いかけた。誰も手を上げる人がいない。
「本当に、杉本についてそう思うか？」
　前の席にいるはるみが、横から顔を出し、発言したそうなそぶりをしていた。
「佐賀（さが）、どうした」
「あの、私」
　しずしずと立ち上がると、はるみは身体を堅くして先生に向かった。
「杉本さんはこんな黒板に書かれるようなこと、してないと思います。杉本さんと私は、小学校の時から一緒でしたけれど、男子が勝手にそう言っているだけで す。杉本さんはみんなが嫌がることを自分からどんどんやってくれるし、困った時には手伝ってくれるし、頭もいいし。一Ｂの評議委員としてふさわしいと思っ たんです」
　すとんと石を落としたように座った。はるみの髪型は、校則違反ぎりぎりのところでキープされている。最近はやっている「鈴蘭優（すずらんゆう）」の二つ分けおだんごヘアーにしている。髪が長いからできることだ。
「他に、杉本について意見がある人はいないのか？　おっと、男子はいい、女子に聞いてるんだ」
　声はしないけれど、後ろの方でまた立ち上がろうとする気配がした。
「あの、いいですか。先生」

「いいぞ」
　めんどうくさそうに語尾を伸ばすのは、花森（はなもり）さんの声だった。梨南は振り向かず聞いていた。
「私も、佐賀さんと一緒です。杉本さんはほんっとに、女子に対しては差別したりしないです。どうして男子がそこまで嫌うのか、私にはわかりませんけどお。ばっかじゃないのって感じ」
　だよねだよね、とつけ加えてくれた。花森さんが梨南のことを嫌いじゃないっていうのは、なんとなく感じていた。なんで花森さんが口紅塗って学校に来るく らいで男子は騒ぐのだろう。梨南にはわからなかった。ばかじゃないのと素直に言ったら、さっそく死ね死ねコールをされた。
「わかった。じゃあ、聞くが、どうして男子はそこまで杉本のことが苦手なんだ？　今の話を聞いている限りだと、男子連中の方が明らかに不利な立場にあるは ずだが。それはわかるな？　好き嫌いはあるだろうし、男子も女子も、いろいろ思うところはあるだろう。でも、なぜ、そこまで杉本をお前ら嫌うのか、理由が わからないぞ」
　手を上げずに、斜め前の男子がすっくと立ち上がった。右手を申しわけ程度に上げた。
「なんだ、指名してから立て」
「先生、俺たちの意見、全然通じてないと思うんだけどどうですか。なあ」
　立ち上がったのは、新井林健吾（にいばやしけんご）だった。
　梨南と一緒に評議委員をしている。
　天敵だ。
「俺たちは先生に、杉本のどこがむかつくか聞かれたから、手を上げて答えただけであって、それ以上のこと、言ってないです」
　梨南の顔を見るのも嫌なのだろう、じっとクラスの男子だけに笑顔を振りまきつつ、先生には冷たい視線だった。ずいぶん極端だ。
「じゃあ、新井林は杉本のどこがむかつくんだ？」
「すべて」
　簡単過ぎる言葉だった。まあ、わかっていることだし、新井林に言われなくても梨南が十分感じ取っていたことだった。
「いじめたりなんてしてないですよ。きちんと、『礼儀』と青大附中の校訓守ってます」
「『紳士であれ、淑女であれ』だな」
　大きく新井林は頷いた。話口調は、同い年の男子にしては大人っぽい。三年生と混じっても区別つかないんじゃないだろうか。
「全部じゃわからん」
「俺たちが、むかつくのがまんして『紳士』で杉本に接するんだから、杉本にもそのくらいの『礼儀』がほしいと思っただけであって」
　新井林の言葉は続いた。
「わざわざ俺たち男子がでかい地図を持ってきてやったり、授業の時に席を貸してやった時に、『ありがとう』の一言もないっていうのは、誰だってむかつくと思います。な」
　男子連中が頷く気配。首が動くだけ。

「給食の時だって、牛乳を持ってきてやったら、上にのっけるくらいはしたっていいだろ。なのに、杉本の場合は男子に仕事を押し付けっぱなしで、いいとこばっかり取っちまう」
「いいとこってどこだ？」
「最後にいかにも自分ひとりでやったような顔する」
　新井林の足がこつこつとつま先で床をたたく。
「俺たちは理由がなくてそんなこと言ってるわけじゃないってことです。俺たちはがまんして、がまんして、がまんしてるんです」
　言いたいことはまだありそうだったが、溝口先生はちらりと梨南に目をやった後、また手で新井林に座るよう指示した。
「杉本。以上のことを君はどう思う？」
　梨南に視線が集まるのを感じる。はるみがもう一度梨南の方を振り返った。梨南の席は縦軸横軸真中。花火の芯みたいだった。
「いいです。いつものことですから」
　これしか答えようがなかった。
「いつものことっていったいどうしてだ？」
　溝口先生が顔をしかめて梨南に問い掛けてくる。黒板に綴られた文字を指先でひとつひとつ指しながら、
「男子がこう思っている以上、君もきちんと言い返さないと同じことのくりかえしだよ」
「いいです。別に」
　小学校時代よりも状況は良くなっているんじゃないかと思っている。誰も髪の毛にチューブのりをかけたりしないし、腐った牛乳を靴の中に入れられたりもし ない。青大附中の校訓「紳士であれ、淑女であれ」が浸透している結果だろう。梨南を受け持った先生たちはみな「杉本梨南のため」に学級会を開いてくれた。 たまには反省したふりをする男子もいた。でも、先生がいなくなるやみな
「さっき言ったことは嘘だからな。またちくるのかよ」
と来る。
　慣れている。
　溝口先生のオーバーヘッド七三分けが、いかにも学校の先生っぽい。いまさら何を言っても始まらない。
　わかっている。
「じゃあ、このままでいいのか？　杉本。みんなが心配してくれてるんだぞ」
「別に」
　はるみがまた、身体を右に傾けた。言いたいことがあれば手を上げればいいのに。先生に目立たないように見つけてほしいってことだろうか。ずるい。ぶりっ子するのもいいかげんにしてほしい。
「佐賀、どうした」
「私、杉本さんが小学校の時から知ってますけど」

――しつこい。同じ小学校だっただけじゃない。
「どんなひどいことを言われても、一生懸命がまんしてる杉本さんのことを、誰もわかってあげないんです。それってかわいそうです」
――かわいそう。か。
――はるみ、あんたに言われたくない。

梨南はいつものように黙ったまま、時間が立つのを待っていた。どうせあと十分くらいで終わるのだ。このまますーっと終わってしまえば、あとは委員会があ るだけ。はるみのぶりっこ声も聞かないですむ。新井林とまた一時間隣りあわせにならなくてはならないのがむかつくけれども、他クラスの評議委員と一緒だか ら、がまんできる。
「佐賀、杉本はいつも男子とこうもうまくいってなかったのか？」
「はい。男子が勝手に杉本さんにいやがらせするんです」
おいおいそれは違うぜ、と後ろからまた声がする。梨南の席はどの方向からも聞こえてくる。ただ一方だけ、違うのは新井林の視線だけだった。ずっとはるみちゃんの方を向いている。つめを噛みながら、気付かぬふりして、ちろちろと見つめている。
――汚い奴だ。
――私は許さない。
――あんたも、あんたも。
「では、杉本、男子の言い分を君は認めるのか。周りから散々悪口を言われるだけで終わってしまうぞ。君にはちゃんと言いたいことがあるだろ？」
オールバックの前髪が一筋垂れ下がってきた。ポマードでかためたら、もっと面白いのに。いつものパターンでまたやるか、と決めた。早く終わらせたい。それだけだ。

「さっき、私が男子を無視するといいましたけど、無視してるのは向こうです」
立ち上がるのも面倒だ。梨南は黒板の文字に向かって語りかけた。人間を見るなんてうんざりだ。
「給食の時も、運ぶのは男子と決まっています。だからいまさらお礼を言う必要はないはずです。してくれたのではなく、義務だと思います」
かあーっと、つばを吐き散らす音。
「それと、男子に用事があって呼びに行く時、私が声をかけても全然返事してくれません。たぶん、聞こえているんだろうと思って帰るだけです。あとで聞いていないと言われても私の責任ではないです」
声が増えた。ばかやろう、死ね。ぶさいく、ぶた。慣れている言葉ばかりだ。
「いいところばかり取るといわれるけれど、男子がなんにもしようとしないから認めてもらうだけなんですけど」
以上、梨南は言い切った。
ぶああ、くたばれ、なにかんがえてるんだあの女。青大附中でなければぶんなぐってやるぜ。

以上の言葉も、もう免疫ができている。
「別に痛いことはされてないのでいいです。どうせ、男子は死ねばいいと思ってますから」
　梨南は間違ったことを言ったつもりなんてなかった。周りの人が梨南を「いじめられている」ということで、心配してくれたのはわかるけど、感謝なんてして いない。女子に言うと傷つくから口にはしない。梨南は女子以外とつきあいたいとは思っていない。男子が嫌いなだけだ。死ねばいい。レズといわれようが、男 子なんていなければいい。それが本音だった。
「杉本、言いすぎだぞ」
「だって、男子も私のことを死ねばいいと思っているはずですから、同じです」
　梨南は冷静に話したつもりだった。台詞を暗誦しているみたいなものだったし、それでいつも終わるはずだった。溝口先生はいきなり黒板の文字をこすり出した。
「お前ら、いいか。どういう感情を持つか、それはかまわない。心の中にしまっておくなり、もしくはきちんと受け入れるなりすればいい。でもな、こういうこ とを平気でしゃあしゃあとしゃべることが問題なんだ。いいか、新井林。お前が杉本のことを嫌いなことはよくわかった。他の男子が杉本のすることにむかつい た理由もよくわかった。だが、だからといって杉本の前で死ねばいいとか、くたばれとか、言っていいわけがない。人間としてのルールだ。それは」
「あの、すみません、じゃあいまの杉本の言葉はどうなるんでしょうか」
　新井林はやっと梨南の顔をにらみつけ、すぐに先生へ質問を投げた。
　確かにこいつは頭がいい。男子の中ではだんとつだろう。だから評議委員に選ばれたのだろう。残念ながら梨南の方がはるかに成績上だった。むかつく原因なのかもしれない。
　もっと別の理由があるのはわかっているけれども。
「そうだ、杉本、『死ねばいい』とはどんなことがあっても、人前で言ってはいけないんだ。男子が君に対してどういう感情を持っているか、よくわかっただろ う。お互いを傷つけあうのはやめろ。いじめる側が悪いのは当然だが、今回に関してはいじめられる君の側にも反省するところがあるんだぞ」
「それ以外言い方わからないんですけれど」

　射た溝口先生のまなざしを忘れないだろう。
　新井林をはじめとする男子たちと同じものだった。
　最初から先生なんて当てにしていなかったけれども、梨南は決めた。
　――私以外はみな敵。

　ようやく鐘が鳴った。梨南もがんばって時間稼ぎしたけれども、結局はいつものパターンだった。号令をかけた後、梨南はさっさと机を下げて教室から出て 行った。はるみ以外の女子、および梨南をかばってくれた花森さんにはちゃんとお礼を言った。化粧をしていて、他の学校に彼氏がいるらしいけれども、ばか男 子たちに悪口を言われる必要なんてない。煙草を吸っているらしいけれど関係ない。
　少なくともはるみのように、梨南を裏切るようなことをクラスの女子はしなかった。

――そう、佐賀はるみ以外。

六時間目は評議委員会だった。憎き新井林の隣りに座らなくてはならないのだけが憂鬱だった。
女子はみな、梨南の味方だ。
はるみを除いて。
はるみは梨南の顔を見て、何かを言おうとしていた。言い訳したいだけだろう。たくさん説明したいんだろうと思う。梨南は本当のことを知っている。許すことなんて、絶対にできない。
「梨南ちゃん」
梨南はきびすを返して、三年Ａ組の教室に向かった。

評議委員会は三階で行われることになっていた。途中で他クラスの評議の子と一緒になりノートを見せ合いながら、教室に入った。
「おはよう！」
入るとすぐ、清坂美里（きよさかみさと）先輩が呼びかけてくれた。
二年Ｄ組の評議委員だ。
「おはようございます！」
四人で声を合わせて挨拶した後、席につく。黒板の隣りには手書きの時間割を始め、書いた絵やクラス一人一人の顔写真が飾られていた。最初見た時につい、
「この教室って、葬式会場みたい。よく遭難した人が集団で葬式するでしょ」
と話したら、男子評議から冷たい視線を投げられた。
「そうそう、杉本さん、ちょっといい？」
清坂先輩が近寄ってきた。梨南に近づくと同時に一年の評議はみな自分の席に戻った。
「一年の全体集会のことなんだけど、あとで立村くんが話あるって言ってたからね」
「ありがとうございます」
「杉本さんも本当に大変だと思うな。男子と女子が仲いいのって、一番大切なことなのにね」
よくあるおかっぱ髪のはずなのに、するんと形が決まっている。絶対ブローをしているに違いない。襟元には小さなブローチをいつもつけている。爪にはうっすらとマニキュアしていた。化粧品のポスターに出ている女の人と、同じような爪の色をしている。
一年女子評議からも、「清坂先輩可愛いよね」と噂している。
梨南には絶対に、なれないタイプの人種だった。
今日の学級会みたいにつるし上げられることなんてないんだろうと思う。男子もきっと、清坂先輩みたいな人だったら「くたばれ」とか「死ね」なんて絶対言わないと思う。梨南の顔を見てつばをかけることもないだろう。梨南のような経験を全くしてないに違いない。
「立村くん、遅いよ、どうしたの」
清坂先輩が立ち上がって手招きしていた。私も振り返った。後ろのドアを開けて入ってきたのは、二年生の男子評議委員だった。立村上総（りつむらかずさ）先輩だ。

「また呼び出しくらってさ」
「今日の数学のテストで？」
「そう、追試は免れた」
　だんだん二年生の先輩がそろい始めていた。みな椅子を一つの席に持ち寄って、男子女子問わず盛りがっていた。立村先輩のことだ、きっと試験か小テストのことを話の肴にされているのだろう。数学の成績が良くないとよく話していた。
　軟弱そうで、やたらと顔が白くて、梨南好みのタイプでは絶対にない人。
「あ、杉本、さっき清坂さんに頼んだんだけど、伝言聞いてくれたか？」
「せっかくいるんだから、自分で説明してあげなよ、立村くんってば」
「清坂氏、悪い」
「あやまらなくたっていいのに」
　清坂先輩のことを立村先輩は「清坂氏」と呼ぶ。ふつう呼び捨てのことが多いのに。二年の先輩たちはそういう呼び方をしている立村先輩を全く、物笑いにしたりしない。不思議な人たちだ。
　立村先輩は梨南の方に近づいてきた。また、話をしていた女子が自分たちの席に着く。落ち着かない。白いワイシャツにネクタイをきちんと締め、生成りのジャケットを羽織っていた。珍しい。暑くないのだろうか。汗はかいていなかった。
「さっき清坂先輩から聞きました」
「今日委員会が終わったら、少しだけ残ってもらえないかな」
　片手を机の脇において、じっと梨南の顔をうかがった。梨南の大嫌いな少女漫画的、細面の顔立ちだ。蹴飛ばしたらぽきんと折れそうだった。
「はい、わかりました」
　梨南は黙って立村先輩をにらみ返した。
　――どうして、好みの顔じゃないんだろう。
　――たったひとり、私のことを評価してくれる人なのに。

　本条里希（ほんじょうさとき）評議委員長が最後 に入ってきた。一年男子の座るべき席はがらあきのまま。すっきりしていた。本当は毎回出席するのが義務なのだけど、私が覚えている限り、五月以降委員会の 席に着いていたところを見たことがない。部活に入っているからだ。新井林の場合はバスケットボール部の練習が最優先だという。溝口先生公認だ。
　青大附中の運動部なんて、みんな初戦敗退なのを私は知っている。頭でっかちで弱いんだと、ばかにされていることを気付かないのだろうか。他の一年男子も同じようなものだ。硬式野球部、水泳部、柔道部。梨南は一度も勝利の報告を聞いたことがない。
「おい、一年生、今日もいないのかよ」
　顧問の駒方（こまがた）先生が穏やかに頷いた。
「一年の先生たちから報告は受けているよ。来週地区大会があるから、委員会は申しわけないけれどということだ」

「委員会活動は学校行事に入らないんですかい。ったく、今年の一年は」
　本条委員長が舌打ちして、じろっと空白の席を眺めやった。
　銀縁めがねをかけていて、見た目は優等生っぽい。ドライヤーのかけ過ぎだろう。髪の毛が先っぽだけ茶色くなっていた。めがねを外せばミュージカル俳優として成功しそう。目鼻ぱっちりの洋風顔が本当は梨南の好みだ。
　細面で唇の薄い感じの顔はそばに寄るなと言いたかった。
「本条、ぐちるな。お前の味方が、ほらいるだろ」
　駒方先生はテンポゆっくりと、膝を三回叩いた。
「わかりやした。本日の評議委員会始めるとするか！」
　教壇に上がり、本条委員長は黒板に一気書きし始めた。急いでノートに写した。早い。うつむくと、なぜか心臓のあたりが痛くなる。中学に入ってから特にそれがひどかった。

『青大附中六月全校集会・クイズ大会について
　目的：一年生評議委員が初めて自分たちの手で企画する。
　出し物：クイズ大会
　内容：各クラス男女二名ずつが壇上に上がり、青大附中で使用している日用品の値段を当てていく。最初は小物から、最後は学校内に飾られている絵や彫刻などの購買価を当ててもらう。
　優勝賞品：最高得点のクラスには、一学期末のクラスお楽しみ会用お菓子を、クラス人数分プレゼントする』

「以上、要は、一年生が企画する全校集会の内容をどうするかってことだ」
　本条先輩は書き終えた後、ふうと長いため息をついた。
「先週の段階で本当ならば、一年生同士で何をやるか決めるべきだろう。本当はだな。だが、まだ今の段階で話はきていないのはなぜなんだ？　先週杉本が持ってきた案でこのままだと決まるぞ」
　梨南、および他の一年女子評議委員の顔をにらみつけた。うつむいている子が多いけれど、梨南は見かえした。やられたらやりかえす。目には目を、歯には歯を。睨み返すのは当然のことだ。本条委員長は目をそらしてくれた。
「委員長、いいですか」
　二年の列で発言を求める声がする。少しテノールがかった、柔らかい声だ。
「どうした、立村」
「今年の一年生の状況はかなり特殊です。去年のやり方では通用しないんではないでしょうか」
「去年のやり方か？　ああ、お前ら、テレビＣＭ物まね特集だったよな」
　今の二年生が今と同じ時期に行った全校集会。立村先輩が代表で仕切ったとは聞いていた。
「僕たちの時は、同学年全員が委員会にに集中できました。話し合う時間もありました。今回は、男子一年生がほとんど出席していない状態です。去年は八人いたのが、今年は実質女子のみでしょう。四人だけです。難しいのではと思います」

「だからといって今の一年生が全校集会をしなくていいってことにはならないだろう」
　にやにやしながら本条委員長は前かがみになり立村先輩に話し掛けた。もともとこの二人は仲がよい。二年生の先輩で委員会中に発言するのは立村先輩しかいなかった。
「それはわかってます。ってことで二年生側としての案なんですが、いいですか」
　隣りに座っている清坂先輩にちらっと目をやる立村先輩。軽く頷いているのは清坂先輩と周りの二年生たちだった。
「どうせ言うだろ」
「今回は一年のサポートを二年女子が行うという形をとりたいんですが」
「おい、二年女子だけって、男子はどうするんだよ」
「もちろん力仕事関係などできることはやりますけれども、二年が全員手を出したら二年生の全校集会状態になる可能性があります。四人の男子が足りないところを、サポートするような形にしたらどうでしょうか」
　こつこつ、机を指で叩きながら本条委員長は聞いていた。口角が上がっていた。笑っているみたいだった。立村先輩の目がやたらと落ち着かないのが気になる。声に波はない。たんたんと、さっぱりした声だった。
「二年女子四人のサポートか。で女子はＯＫしたのか？」
「大丈夫です」
　清坂先輩が発言した。
「先週から二年生評議で集まって話していたんですけれど、女子が中心ということだったら、女子同士で相談する方が、一年生もやりやすいんじゃないかなって思います。私は賛成です、ね」
　他の女子評議三人も大きく頷いていた。
「立村に丸め込まれたんじゃないか？」
「本条委員長、まさかでしょ。私たちが立村くんを丸め込んだんです」
「立村、真実はどうなんだ」
　立村先輩は、あっさりと答えた。
「その通りです。すみません」
「まったく、お前もなあ。ま、いいよ。それも一つのやり方だな。一年生よ、、二年生女子軍団は怖いぞ。覚悟しろよ！」
　本条委員長は机を叩いて梨南を指差した。失礼な人だと思った。
「何か意味があるのですか」
　失礼なことをされたら言い返すのが当然のことだ。
「いや、すまん。杉本個人にってわけじゃない。みいんなだ」
　本条先輩は深く頭を下げた。あやまってくれるのならいい。梨南は頷いた。
「梨南ちゃん、委員長にはちょっとまずいよ」
　私の後ろにいるＣ組評議の子がささやく。
「失礼なことをされたら当然よ」
　梨南は誇りを持っている。

　親にもいつも言われてきた。
　人としての誇りを汚されてはならない。当然抗議すべし、と。

　今回のことについてはいろいろあった。
　部活に逃げ込もうとする一年男子評議連中を捕まえ、五月の半ばに「六月全校集会」について何をやるか話し合いを持った。先輩たちが去年やった内容につい ての台本を貸してくれたので、それを見ながら話した。前の前の年、本条委員長が一年だった時の全校集会は、時代劇をやったらしい。立村先輩の代でもＣＭコ ントだったということだし、なんとなく演劇っぽいことにしようかという意見が出た。また、三年前はクイズ大会を行ったというのも聞いた。候補は絞られた。
　演劇にするか、クイズ大会か。
　だけど全く、そこから話が進まなかった。男子はみな部活の時間ばかり気にしているし、女子は二、三年生の噂話に熱中していた。梨南がどうするのか聞いても無駄だった。早く終わらせたかったので、梨南は多数決を取った。クイズ大会に決まった。あっさり全員可決だった。
　決して間違ったことを梨南はしていなかった。
　男子たちはいきなり怒り出して、
「言い出したのは杉本だろ。お前が全部片付けろよ」
　と全員、教室を出て行った時も、気持ちは変わらなかった。。
　女子もみな、
「悪いけど私も用事があるから。二年生の先輩たちのことはよろしくね」
　用事のある子がなぜ、ファンシーショップのお店でハンカチ買ってたりするんだろう。嘘ももっと上手に言えと言いたかった。

「では、今日の評議委員会はここまでだ。駒方先生、とりあえずはこんなところでどうですか」
「一年男子を無視するのはよくないな。全員が揃ったところでもよくはないか？」
「もちろんそう思いますが、なにせ奴らが出てこないとですねえ」
　大人の会話をしている。本条委員長はきっともてるだろうと納得できる。他の学校に彼女が二人いるらしいと聞いている。顔だけだったらさもありなんと思う。
　一年女子の評議たちはそそっとかばんにノートを片付けて、
「梨南ちゃん、お先に！」と教室を出て行った。梨南もそうしたい、
　さっき清坂先輩に言われた、
「立村くんが残ってっていってたよ」
という言葉を忘れてなかっただけだった。清坂先輩の顔をつぶすわけにはいかなかった。
　立村先輩はと見ると、ささっと本条委員長のいる場所に移動して、駒方先生との話に割り込んでいる。時々かるく頭を叩かれている。本条委員長にだ。
「と、立村率いる二年は言ってるんですよ」
という声ははっきり聞こえた。ただ、内容については全く見当がつかなかった。

　男らしくはっきりものをいえと、梨南はひそかに毒づいた。小さすぎて、聞こえない。

「杉本、待たせてごめん。二年Ｄ組の教室に行こうか」
「はい」
　立村先輩は先生と本条委員長に頭を下げて、すぐにかばんを持った。扉のところで清坂先輩が待っていた。背を持たれかけてつま先を後ろにつんつんしながら、
「私もいた方いいかな」
　梨南の顔に笑いかけたままだった。立村先輩の顔は見なかった。
「残ってくれるんだ。ありがとう」
「二年生の教室にいきなり連れて行かれるのって、やっぱり怖いもんね」
　助かった。梨南も立村先輩とふたりっきりで教室の中、というシュチュエーションは避けたかった。
　どんなに梨南のことを誉めてくれても、どんなに丁寧にいろいろなことを教えてくれても。
　――立村先輩は、天敵の部類に入ってしまうんだから。

　三歩くらい前を立村先輩が歩いていった。紙のように破れそうな後姿をじっと見た。清坂先輩が半歩だけ梨南の前を進み、振り返った。
「今回は、杉本さんが頼りだよね」
　梨南にさらりとほほえみかけた。

二年Ｄ組の教室から見えるのは、雨が降りそうな暗雲だけだった。
梨南の家は青大附中の校舎から歩いて五分くらいだった。小学校より近い。
土砂降りになったら走って帰ってもかまわない。先輩ふたりと一緒にいるのは、やはり息苦しかった。清坂先輩が一緒にきてくれたからまだましだけど。
一度だけ、立村先輩とふたり、向かい合って話したことがある。
唯一、一年生評議が全員顔をあわせて話し合った日の午後だった。
吐き気がするほど、疲れたことを覚えている。

清坂先輩は窓際の席に座り、軽く手で来い来いと招いた。
「なんか蒸し暑いよね。雨降りそうなのにね。早く終わらせようよ、立村くん」
「そうだな。どうせ杉本とだったらすぐに説明は終わりそうだしな」
教室の掲示板には、男女委員名が順番にマジックインキで書かれていた。オレンジ色の枠に、几帳面に丁寧に。「評議委員」の欄には「立村上総・清坂美里」 と記入されている。立村先輩の字だと思う。清坂先輩の字は丸っこくてもっとかわいい感じだ。立村先輩は線の細い、習字っぽい文字だった。男らしくない。
「どうした、杉本」
「あの文字、先輩ですよね」
眺めたまま梨南はつぶやいた。
「下手だけどな。評議の義務なんだ」
「なあに言ってるのよ。私なんかよりずうっと、上手なくせに」
清坂先輩がまぜっかえした。でも感じたことはそのまま言うべきだと思った。
「ラブレター書けない文字ですね」
ぐぐっと噴き出す声がする。清坂先輩だ。立村先輩に向かって、
「ラブレター書けない、か。そうだよね。一発で誰かわかっちゃうよね。立村くん、書いたことあるの？」
「ないよそんなの。今度から清坂氏、時間割とかそういう掲示物を書くのやってくれないかな。杉本に言われてしまったら立つ瀬ないよ」
そっと立村先輩の顔をうかがった。大抵、男子は怒る。黙り込む。殴ろうとする。立村先輩はそうしない数少ない男子の一人だった。軽く笑みすら浮かべている。こういう男子はたぶん立村先輩ひとりだけだ。
「いいじゃない、読めればいいよ。それより早く始めようよ」
机を平手で叩きながら、再度清坂先輩は梨南に向かって声をかけた。
「杉本さんも、ほら、雨降っちゃうよ」
「大丈夫です。うち近いから時間遅くなっても平気です」

立村先輩だけが立ったまま、窓辺にもたれた。清坂先輩が寄り添う感じで座っている。男子女子仲がいいのが二年生の特徴だけど、Ｄ組評議であるこのふたりは群を抜いていた。
――清坂先輩のことを立村先輩はきっと好きなんだろうな。
――でもまさか立村先輩みたいな変な顔の男子を好きになるとは思えない。清坂先輩ともあろう人が。
梨南はノートを取り出して二人を眺めた。
立村先輩は手帳をかばんから取り出した。生徒手帳ではない。本格的な黒皮ものだった。立村先輩のお父さんは「週刊アントワネット」という青潟密着情報誌の記者だと聞いたことがある。
「先輩、この手帳、お父さんからもらったんですか」
「なんでわかる？」
「金文字で後ろに書いてます。でも、前の年のなんですね」
清坂先輩が下から覗き込むように手帳を眺めた。
「あ、今気づいた。立村くん、もしかしてずっと、去年の手帳で予定とか組んでいたんじゃないの？」
「いくら俺が数学できなくても、そこまで落ちちゃいないよ」
怒らなかった。梨南も、清坂先輩に対しても。
――いったいこの人の頭に「怒り」とかそういう感情はないんだろうか。
つい梨南もためしてしまいたくなる。
本当に怒ったところを見てみたかった。

立村先輩は窓辺を眺めたまま話し始めた。清坂先輩も、梨南の方も見ないままだった。人の目を見るのが好きではないらしい。あまりにも失礼だと思ったの で、一度覗き込んでやったことがある。当然だ。梨南にとって「正面から見ないで話をする」ことは、礼儀知らずだから。本当に分からない人だと思った。
「先週、一年生評議が集まって案を出してくれただろう。実際には杉本が一人でこしらえたようなものだけどさ。『クラス対抗・青大附中値段当てクイズ』で本 条先輩も納得していた。他の連中も異議なしだったようだし、二年としては別に言うことない。三年の先輩たちも問題ないみたいだし。あとは突っ走っていこう か」
突っ走る、という言葉が似合わない人だ。
やっと梨南の方を見てくれた。
笑っているのか、顔が麻痺しているのか、判断つかない顔だった。
「杉本さん偉いよね。誰も一年生の評議たち手伝ってくれなかったんでしょう。頭来るよね」
「かえって変な人がいると邪魔です」
「杉本らしいな」
立村先輩は凍りついた顔を少しだけ溶かしてくれた。薄い唇が少しだけ開いた。
「そこでなんだけどさ。杉本」
ふたたび外を眺めたまま。

「当日の準備とか、小物とか、そういうものは二年でも手伝えると思うんだ。清坂氏を始め、二年女子はみな経験しているからし。でも、みんな二年が手はず整えてしまうと一年生の立場がないだろう。一応は一年生が主体になって仕切る、初めての集会ってことだしさ」
「立場なんて関係ないです。できる人ができることをきっちりやればいいと思います」
　もう一度梨南も、立村先輩の顔を見上げて答えた。
「そうだな。俺もそう思う」
　ふいに立村先輩は梨南の方に身体を傾け、手を机についた。やくざが因縁をつけるポーズに似ていたけれど、表情は相変わらずやわらかいままだった。
「杉本にしかできないことを、ひとつお願いしていいかな」
「頼む時はきちんと説明してください。判断はそれからです」
　当然だ。分からないことをいきなり「はい」と答えられない。清坂先輩から言われたのならばまだ納得するけれども、立村先輩が男子のかさを来て攻めるのだったら、梨南は絶対に受け入れないだろう。
「クイズ大会用のシナリオおよび問題を、全部杉本ひとりでこしらえてほしいんだ」
　ひえっと、清坂先輩が息を呑む声がした。もちろん冗談っぽく。
「ちょっと立村くん、無謀だよ。だって杉本さんひとりなんてできないよ。それこそ、私たち二年生評議が相談に乗ってあげなくちゃいけないことじゃないの」
　ねえ、と梨南の方に頷いた。答えずに立村先輩の言葉を待ちつづけた。はっきりしないと、梨南は答えを出せない。びくんとしたし、ちょっと驚いたけれども、できなくはない。
　言われた瞬間にすぐ、ネタがいっぱいひらめいた。もし立村先輩が梨南のことを評価してくれているとするならば、猛烈に働く脳にあるのかもしれないと思っ た。立村先輩は数学の九九すら満足にいえない、という噂を聞いたことがある。オーバーだとは思うけれども、それに近いものはあるのだろう。梨南は高校生の 数学問題をあっさり解いたことがある。きっと勝てるだろう。
「いや、あえて杉本だけに頼もうかなって、今のところ考えてる。清坂氏、俺がもし杉本の立場だったら、やれたかどうか、自信ないのは認めます」
「当たり前よ。去年、私たちがやった全校集会、立村くんそうとう苦労してたよね。テレビＣＭのネタなんて全然知らないし。ふだんからテレビ見てないんでしょ。結局貴史と私が台本作ったのよ、杉本さん。私だってがんばったんだから」
「本条先輩がいなかったらできなかった。たぶん。けどさ」
　清坂先輩はずいぶん自信過剰だ。梨南も本音はそう思うけれども、こんなに軽がると口にしたりはしないだろう。言う時はもっと、ぐさぐさくるように言う。傷ついて立ち直れないように言う。
　清坂先輩の口調は、どんなことを言っても立村先輩には嫌われないという匂いがぷんぷんしていた。
「俺は、あえて杉本だからできるって、思うんだよな」
　――あ、雷だ。
　――風が雲に閉じ込められて苦しんでいる声だ。

――誰も返事ができないでいる、そんな声だ。
　幾重にも重なった雲が夜と同じ色となる。窓がちかっと光った。
「来るね、雷が」
「窓閉めるか」
「立村先輩、金具に触らない方がいいです。感電します」
　梨南は立ち上がった。窓の掛け金を掴んでいる立村先輩の手をたたき落とした。ぽろっと離れた。ガラスの部分を掴んだまま一気に閉めた。ちょうどよいタイミングで、ガラスに水滴がつき始めた。ひとつぶふたつぶつたった後に、太い水流が一気に流れた。
「続き話してください。私わかりません」
　清坂先輩ではなく、立村先輩の目を見据えたまま、梨南は返した。
　返事してくれたのは清坂先輩だった。
「立村くん、杉本さんに手を触られてびっくりしてるんでしょ。私だったら全然気にしないくせにね」
「そんなんじゃないよ」
　立村先輩が言葉を失うくらい変なことだったのだろうか。
　返事がないなら答えようと梨南は決めた。
「わかりました。立村先輩。私が一人でシナリオを作ります。少なくとも立村先輩よりも私、一年の時の成績はいいと思います。去年よりもいいシナリオ作れますきっと」
「たぶん、同期の評議仲間の中で一番成績が悪いのは俺だと思うよ、本当に。否定できないのが、辛いよな」
　清坂先輩がからんとした声でまぜっかえした。
「何言ってるのよ。立村くん数学を外した全科目で言ったら、絶対学年五番以内だよ。数学が悪すぎるの」

　鉛色の空から降ってくる雨。梨南は蛍光灯をつけた。まだ四時を過ぎたばかりなのに、教室の中は真っ暗。どうして立村先輩は気づかないのだろう。やっぱり 抜けている。二年Ｄ組といえば、稀に見るまとまりのあるクラスだと先生は言う。それは清坂先輩がいるからだろう。立村先輩だけではきっと無理だ。頭もいい し、人の気配りもしてくれるし。
　清坂先輩のことを好きなのは立村先輩の方だろう。ずいぶんな高望みだ。同情してしまう。
　立村先輩は手帳を覗きながらまた梨南に声をかけた。
「やっぱり杉本はしっかりしているよな」
「あのさ、私は私は？」
　またつっかかるのは清坂先輩だ。
「もちろん、清坂氏には感謝してますって」

　ふたりはしょうもない話ばかりしていた。
　もう居ても居なくてもよさそうなものだ。いくら家が近いとはいえ、この雨の中つっきってい

く気にはなれない。母が騒ぐだろう。この雨の中、何を考えているのかといって、タオルを持ってきて頭をごしごしと拭くだろう。不必要に親とべったりしたくない。
「杉本さん、傘持ってきた？」
「毎日かばんに入れてます。小さいものをです」
　毎日傘を持ち歩くのはエチケットだった。女子に限り誰かに貸してあげるのに必要だった。
「さっすが。ねえ、立村くん。一年生の方がずっとしっかりしているよ」
「悪かったな。俺だってロッカーにいつも傘一本入れてるさ」
「自転車で片手ハンドル運転は危険だからやめようね。私が途中まで、入れてってあげようか」
「いざと言う時はお願いします」
　あまりぱっとしない先輩と変な噂を立てられると、清坂先輩がかわいそうだ。
「清坂先輩、いいんですか。立村先輩なんかと一緒に歩くと変な噂立てられます」
　一年生の間でもささやかれている。
　――二年の清坂先輩は、同じ評議の立村先輩にほれられて振りたくても振れないみたいなの。ちゃんと清坂先輩には、かっこいい羽飛（はとば）先輩がいるのにね。
　もっとも立村先輩のことを、梨南のように「変な顔だ」と言い切る女子はいなかった。
　――あまり話したことないけれど、なんとなく小公子って感じだよね。
　梨南以外には立村先輩の外見、受け入れられているらしい。。
「いいのいいの。そうだ杉本さん知ってる？　私なんてね、一年の時『男ったらし』ってさんざん言われちゃってたんだから。理由は簡単。立村くんと、あと同 じクラスのダチ一名としょっちゅう三人で遊んでいたから。遊ぶったって、近所の大型スーパーで三人、ソフトクリームなめてたくらいなんだよ。なんか勘違い してるよね。頭に来る。ま、この前、本条先輩に厳重抗議しておいたから」
「うちのクラスの男子よりはましです。立村先輩も」
　本当に思っているから隠しようがない。梨南を困ったように見て、立村先輩はやっぱり表情を整えたままだった。
「杉本に少しはこれで、認めてもらえたってことか。よかった。そうだ、同じクラスで思い出したんだけどさ、一年生の男子評議同士とは何も話さないのか。あの、新井林とか」
　いやな名前だ。
　イニシャルで省略したい。
「私、男子なんかとしゃべりません。それに先生も、委員会よりも部活優先にするようにって言ってますから。弱小バスケ部をなんとかしたいけど、無理でしょう。勝ったら奇跡です」
「確かに。だから貴史はバスケ部に入らなかったんだね」
　清坂先輩が机を叩いて笑い転げた。
「いや、それは失礼だと思うよ。清坂氏。まあ、青大附中の場合委員会活動が最優先と言われていたけれども、今の一年生からはどうもそうではなくなったみたいだしな」
「どうしてだろね。楽しいのにね」
　立村先輩の顔を見上げて清坂先輩は笑った。窓ガラスに激しく流れる水流が、なんだかふたり

には似合わなかった。文句を言ってやりたくなった。
「私、評議に男子なんていりません。立村先輩、例のシナリオなんですけれど、私ひとりで書き上げます。絶対、奴らの手なんて借りません」

　梨南の口調は周りを凍らせることばかりだという。本当のことを言っているだけのにいきなりしゃべっている連中が作り笑いしだしたりする。女子だけの場合 でもそうなる時がある。男子の時は言うにおよばず。梨南が梨南であろうとして発言すると、大抵みなが黙り込む。わからない連中が悪いのだからと開き直るこ とにしている。少なくとも女子は何も文句言わない。
　清坂先輩だって戸惑ってはいたけれど、
「わかった。じゃあ、去年の全校集会の経験とかを明日、他の女子評議集めて教えてあげるね」
「清坂先輩なら平気です」
「ごめんね立村くん、ごひいきの杉本さんを奪っちゃって」
「残念だけど、一年の連中よりは評価していただけたようで光栄です。あとは二年女子の最強メンバーが守りについてくれるから、もう怖いものなしだな。ただひとつだけいいか」
　今度こそ怒られるかも。梨南は身構えた。ぐっと立村先輩の目を見つめた。一歩踏み出して近づいた。逃げられないために。
「あ、そんな怒らなくてもいいよ。これでも俺が今回、一年生の補佐をする責任者になっちゃってるんだ。実際は清坂氏だけど、建前だけは。本条先輩に俺がい ろいろ報告しないと、後であの人に何されるかわからないしさ。報告だけは直接、レポートにして、俺にくれないかな。頼みます」
　にらめばにらむほど、立村先輩は優しくなる。
「まずは来週中にそのシナリオをＤ組に持ってきてほしいんだ」
　だから梨南もエスカレートして、とめどがなくなってしまう。
「わかりました。今週の土曜日に持っていきます」
　シナリオの構想がデゴブロックのお城をこしらえる要領でかちかちと組み立てられていく。家に帰って、ノートに書いて、清書してしまえばもう終りだ。
　せっせと働く頭の中。
　立村先輩はそんな梨南の能力に気づいてくれたのかもしれない。

　――クラスの男子もみんな立村先輩みたいだったら。
　――たとえ立村先輩みたいに変な顔だって、きちんと話できるかもしれない。
　――新井林なんかと平気でおしゃべりできるはるみなんて人間じゃない。

　一段落したところで梨南は先に教室を出た。雨音もおさまってきたし、清坂先輩が立村先輩に一方的に話を持ちかけるので、自分でも理解できなくなったからだった。同じクラスに、清坂先輩の幼なじみでかっこいいと評判の羽飛貴史（はとばたかし）先輩がいる。
　絶対に羽飛先輩と清坂先輩はくっついている。一年の中では定説だった。立村先輩と羽飛先輩

はさらに仲がいいらしい。しょっちゅう三人でつるんで遊んでいるというのは、さっき清坂先輩が話してくれたとおりだ。
　男子と一緒に歩くこと自体、梨南には理解できなかった。

　青潟市唯一の私学で、一応は「青潟の成績優秀な小学六年」が一度は受験する。
　一学年百二十人、一クラス三十人構成。
　まあいわば、エリートの集まり、のはずなのだ。
　確かに梨南の成績は小学校の頃から群を抜いていた。毎日新聞を読んでいたし、暇な時は百科事典を開いて気に入った事項を書き出すのが好きだった。小学校図書館の本はほとんど読みきっていた。
　成績だったら誰もが太鼓判を押してくれたはずだった。実際、ペーパーテストの点数はかなりの高得点だと聞かされた。
　なのに、小学校の担任は受験前に親を呼び出して、
「梨南さんは友達とのコミュニケーションが一種独特なので、なかなか理解されずらいところはあります。青大附中の入試はペーパーの点数よりも面接を重視しますので、ご家庭でその辺を見てあげてくださいね」
と、嫌味なことを言ったのだそうだ。母が父に憤りつつ話していたのを聞いた。
「梨南ちゃんのどこがいけないんだろうね。友達のコミュニケーションたって、礼儀正しくしているだけだって言うのにねえ」
　両親は梨南をまるごと受け入れてくれていた。

　――失礼なことを言われたらすぐに言い返すこと。
　――自分の考えをきちんと伝えることは大切なこと。
　――自分を信じることは正しいことなのよ。

　子どもの頃から教えられてきたことを、梨南はそのまま実行しているだけなのに、どうして男子たちはみなああいう態度を取るのだろうか。きっと、あいつら は頭の程度が低いからに違いない。レベルの低い人間とつきあうなんて、同類と思われるから最初から縁を切っておくほうがいい。
　男子を軽蔑することがふつうのことだと思っていた。

　青潟大学附属中学に入り、教室に一歩踏み出した時の失望は忘れられない。
　よりによって同じ小学校の男子連中および佐賀はるみが詰め合わせセットされてくるなんて。可能だったら退学届けを出してさっさと帰りたかった。できるわけないのが中学一年生だった。
　はるみがべったりと「梨南ちゃん梨南ちゃんと」とくっついてくるのもうっとおしかったし、新井林を筆頭とする男子軍団に嫌がらせをされるのも面倒だった。辛いとか悲しいとか、そういう感情はなかった。梨南にあったのは、殺してやりたいとつぶやくくせだけだった。

――死ねばいいのに。

毎朝、「男子全員が滅亡してますように。明日こそ一人は死にますように」とつぶやくことが、そんなにおかしいことなんだろうか。梨南はそれだけのことを、かつてずっとされてきたのだ、手を下さないならば、感じたっていいはずだ。大人たちはみな責め立てる。
当然感じることを封じるなんて、自分であることを否定するなんて。
相手に対して、自分に対しても失礼なことだ。
失礼なことを言われたら当然戦うこと。
怒るならば怒ればいい。それがエネルギーになって跳ね返ってくる。

――殺してやりたい。死ねばいい。

つぶやくたびに力がみなぎる。
イメージが千差万別に広がっていく。全身が痺れる。
「殺」の入る言葉を口にするたびに、頭の回転がどんどん速くなっていく。

――はるみなんて、新井林と一緒につるし首になっちゃえばいい。
――はるみは私を裏切ったんだもの。
――絶対に私は許さない。

ちょっとぱらつく雨だけど、思いっきり走って帰れば大丈夫だ。
気合を入れるためにもう一度、梨南はつぶやいた。
「死ねばいい」

立村先輩から与えられた宿題、「全校集会・クイズ大会」のシナリオは簡単に出来上がりそうだった。
頭の中にはるみと新井林の姿を思い浮かべれば、血が滾る。

　掲示用に使う大きな紙を一枚抜いて、梨南はマジックで一文字一文字書いた。オレンジと黒の二色使いで、形の崩れない、きちんと曲がるところは曲がった文字でだった。立村先輩とは違う、読みやすい文字だった。
　内容は「六月学年集会・クイズ大会についての告示」
　他のクラスは、評議委員が朝のホームルームで報告するのだろう。
　それができるならば、楽なのに。一年Ｂ組がそんな平和なクラスなわけがない。梨南はこの二ヶ月でほとほと理解していた。理解していない奴がいたとしたら、きっと周りのものが見えないのだろう。
「杉本さん、何を書いているの？」
　昨日かばってくれた花森さんが、梨南の机からぶらさがっている紙をつまんで尋ねてきた。近くに寄られるとシャンプーの匂いが漂う。香りの残るシャンプー がはやっているけれども、まだ濡れているせいかやたらと臭い。でも女子だ、言わないでおいた。朝、お風呂に入ってきたのだろうか。
「昨日、評議委員会で発表になったことを書いてるの。六月の学年集会」
　くき、くきとマジックの擦れる音がする。気持ち悪い擦れ方だ。
「そうなんだあ。でも何で紙に書くの。口で言えば終りなのにね」
　スカートのポケットからリップクリームを取り出し、塗りながらさらに聞いてくる。リップの色は檸檬色。今日のところはまだ口紅塗っていないらしい。口を尖らして塗りながら、
「こういうことをどうして杉本さんばかりやらされてるわけ。新井林にやら　せちゃえばいいのにさ。男子って、そういうところやだよね。手伝えっていいたいよね」
「馬鹿に手伝わせたって無駄なだけだもの」
　近くでぎくりと言葉が途切れたような気配。敏感に察知する。すでに男子の数人が教室の隅でくだらないテレビの話をして盛り上がっていた。さっそくご注進されることだろう。梨南は慣れている。どうせ言いつけようとするのだろう。勝手にしろだった。
「そうだよね、杉本さん頭いいから、うちのクラスみたいな馬鹿男子は無視だよね」
「あたりまえ。花森さんに対してあんな失礼なことを言う人は、無視して当然なのよ」
　ここだけは顔を上げて答えた。花森さんは一瞬、リップを塗る手を止めた。唇の真中に、
「しーっ」っとするようにリップクリームの先を当てた。
「私にってかあ。なんかちょっと変わってるよね、杉本さんって」
「私、きちがいだっていわれてるから平気」
「そんなんじゃなくって」
　指先がきらきら光っている。清坂先輩よりも桃色の爪だ。絶対、マニキュア塗っているに違いない。普通の評議委員だったら注意するのだろう。規律委員だっ たら絶対に。でも梨南にそんな趣味はなかった。男子ならともかく、女子だもの、きれいなものは絶対きれいだと思うだけだった。先生にばれなければいい。ま た花森さんがつるし上げあうかもしれない。

「ふつう、私みたいのって、杉本さんみたいな子って嫌いだ思うんだよね。ほら、杉本さんって評議でしょ。頭いいし、真面目だしね。でも、私とかにはすごく親切だもんね。他の子とかからは『やーい不良』っていわれるけどさ」
　不良とはどういう概念なのだろう。梨南からしたら、花森さんは少々派手な格好をしている印象があるけれども、似合っているから許されるものだと思ってい る。他の学校に恋人がいるとも噂にきいたけれども、たぶん青大附中一年Ｂ組の男子よりははるかにましなのだろう。人を見る目はあるはずだ。「また男子にそ んなこと言われたの、花森さん」
「なあに、慣れてるわよ。うちの学校の馬鹿さ加減にはうんざりしてるから。杉本さんじゃないけど、ほんと、ガキっていうか馬鹿っぽいよね」
　もし、花森さんがまた、男子たちに失礼な言葉を投げつけられていたとしたら、梨南は黙っているつもりなんて全くなかった。すぐに学級会を開くことを溝口先生に要求する。そして言った奴をつるし上げる。
「馬鹿はいくらしても馬鹿」
　一番下の行を黒いマジックで書き込み、梨南はゆっくりと発音した。
「どうしてこの紙を作ったかがよくわかるから」
　新井林は鐘が鳴るぎりぎりに教室に入ってきた。鐘が鳴り終わってから微妙なずれで、はるみが後ろのドアに滑り込んだ。たぶん遅刻ではないだろう。入学してからいつもそうだった。
「おはよう、梨南ちゃん」
　しつこい、黙れ。梨南は紙を広げて誤字脱字をチェックしている振りをした。
　――はるみ、裏切り者としゃべる気なんて、私はないから。
　――あんたは新井林とだけくっついていればいいんだから。
　くだんの新井林は、タオルで汗を拭きながらじろっとにらみつけている。
　本来だったら梨南も新井林に「評議委員会で決まったこと」を報告し、朝の会で一緒に発言するところなんだろう。申しわけないけれど、そんな気はさらさらなかった。昨日評議委員会に出席したのは梨南ひとりなのだ。新井林の出番はない。
　――朝は、杉本梨南が仕切らせていただきます。

　大抵授業前、授業後の号令は、男女評議委員が分け合って担当しているらしい。なぜかＢ組は新井林が一方的に担当している。別に無理にやりたいとも思わな いので梨南はそのままにしている。もっとも、号令をかけたってきちんと頭を下げる奴なんて数えるほどだ。女子は立ってこくんと頷くだけだ。口うるさいタイ プの先生だと怒鳴ってやり直しさせたりする。もっとも新井林だって、ポケットに手をつっこんだまま「起立、礼、着席」ってやっているのだ。人のことは言え ない。
「評議委員会からの報告をしていいですか」
　梨南は「着席」の号令に従わず立ったまま、溝口先生に尋ねた。昨日の今日ということもあり、溝口先生は小さく頷き、教壇を指差した。隅のパイプ椅子に座ったまま、脚を組んだ。
　細長く丸めた用紙を、竹刀のように抱え持ち、梨南は教机に手をかけた。まだ広げない。男子

たちの「はやくひっこめ」
「うっとおしいぜ」
「死ねぶす」
の声をＢＧＭに。
「六月の全校集会についての報告です。今回は各クラス対抗のクイズ大会に決定しました。そのことについては、先週報告しました」
　全く静まらない教室。溝口先生が雷を落としたさそうににらんでいる。
「少し静かにしろよ。新井林、少し注意しろ」
　新井林は廊下側を向いたまま、シャープペンシルをくるくる回しているだけだった。
「先生、いいです。私のやり方でやります」
　たしなめるように答え、梨南はさっと紙の竹刀を引き抜いた。　両手一杯に広げても届かない大きさだった。もう一人だれか手伝ってほしかったが、そんなこと求めてはいけない。
「今からこの紙を、一日だけ後ろの掲示板に貼り付けておきます。昨日の評議委員会で決定したことはすべてここに記入されています。このクラスには日本語を 読めない人はいないはずですし、この紙を一時間以上かけて読む人もいないと思います。ですから、今日の帰りには外します。もしこれを読んで、文句がある人 は私、杉本のところまで言いに来てください。何もなければそのままクラスの人間が全て目を通したということにしますので、ご容赦ください」
　あ、それと。付け加えた。
「なお、私に言いたいことがある人は、一対一ですと証拠が残りませんので、かならず男女一人ずつ証人を用意してください。あとで言った言わないになるのはいやですから」
　新井林は一切黒板を見なかった。
「おい、新井林、お前も評議だろう。何かいいたいことはないのか」
「どうせ昨日は部活だったんで俺は出てねえし」
　言い返す新井林。たぶん、こいつも溝口先生を嫌っているのだろう。頭のよしあしで評議委員を決めると、結局、こういうことになるのだと梨南は思った。
「杉本も、もっと新井林と協力して……」
「不必要です。邪魔です」
「なんだと！」
　初めて新井林の顔がゆがんだ。シャープを投げつけるように机に置いた。
「今回の全校集会については、私が仕切ります。昨日の評議委員会で、そう決まりました」
「どういうことだい？」
　戸惑う表情の溝口先生。そりゃそうだろう。昨日のことで、もっとクラスの男女仲がよくなるはずと信じていたからかもしれない。甘い。そんなに楽だったら、人間じゃない。
「六月の全校集会は、シナリオを私が書くことに決まりました。はっきり言って、男子は邪魔です。手伝いにきませんし、それに二年の先輩達が私を守り立ててくれるからです。頭の悪い一年男子がいるよりはずっとはかどります」
「杉本、言ってもいいことと悪いことがあるぞ。男子に謝りなさい」

「そういう必要はありません」
「人を傷つけてそれでも平気なのか！」
「はい。真実を伝えただけです」「ならば、聞くが」
　溝口先生が怒ったらしい。髪に手を突っ込んで掻いた。いきなり指をさした。
「昨日も聞いただろう。杉本の言葉で男子がいかに怒っているか」
「理由がある以上当然のことです」
「それはお前の屁理屈だ。今のことにおいては、杉本、お前が一方的に間違っている。謝れ。謝らなければ教室から出て行け」
　顔を真っ赤にして怒鳴る溝口先生。でも梨南は怖くなんてなかった。なに考えているのだろうとじっと眺めて観察するだけだった。

「教室で授業を受ける権利が私にはあります。溝口先生。私がここに立ったとたん、『馬鹿、死ね、ぶす』と叫んでいたあの連中も一緒に、外に出されるのだったらいいのですが、私だけというのは納得いきません。もし出て行くのでしたら」
　梨南はすっと、指先を扉に向けた。目を溝口先生に向けたままだった。
「後ろの三名、名前言えます。一緒に廊下に立たせてください。もしそれがだめだったら、私が教室を出て行きます」　梨南は間違ったことを一言も告げていない。
　溝口先生の額に皺が三本、波打った。
　男子たちと同じまなざしだ。そりゃそうだ。先生だって「男子」なのだから。いまさらながら梨南は気づいて、笑えてきた。
「もういい、席に着きなさい」
「掲示板に張り出してからにします」
　言い返さずに、梨南はそのまま、後ろの掲示板に向かった。まだ金色の画鋲がたくさん刺さっていた。まだこの学校で梨南は刺されていない。言葉は相当なも のだけど、実力行使にはまだ誰も出ていないらしい。その辺が「紳士であれ、淑女であれ」たる、青大附属の校訓ゆきわたりしところであろう。
「けっ、ざまあみろ」
「先生に怒られてやんの。ばっかみてえ」
　わかっていない。本当に男子はばかだ。　溝口先生が言い返せないのを気づいていないなんて。
　女子たちはみな、自分たちのおしゃべりに専念しているようすだった。それでよし。梨南は何も言い返すことなどなかった。みんなが好き勝手に、やってくれればそれでよい。クラスのまとまりなんてどうだっていい。
　梨南の目的はひとつだけ。
　――六月、学年集会は、私のシナリオで仕切らせていただくから。
　――一年男子たちの手になんて、絶対に落とさないから。
　――だって。

真上を見上げた。頭の上、天井は二年教室の床のはずだった。
ひとつにまとめたポニーテールの結び目がひっぱられて痛かった。
誰かが軽く、天井からつついているようだった。
――立村先輩は、私を指名してくれたんだもの。

授業は相変わらずだった。梨南にわからないところなどひとつもなかった。前もって予習復習しているし、暇があったら百科事典でいろいろな知識を増やして いる。新聞も隅々まで読んでいる。社会情勢も毎朝、両親と話し合っている。女子同士の約束事、おしゃれについても、ちゃんと夕刊に入ってくるデパートチラ シでチェック済みだ。その点、梨南はきっちりしている。雑誌こそ買わないけれども、最近はやりのセーラー襟ワンピースが可愛いとか、丸襟のふんわりしたブ ラウスとか、梨南好みのものにはちゃんと話をあわせている。
「そうだよね、杉本さんってかわいらしい感じの洋服が似合うよね。襟にフリルをたくさんつけた感じで、ジャンバースカートを着たりとか、そういうのが一番 よさそう。ほら、ピアノの発表会で着るようなビロードのワンピースってあるじゃない？　それを普段着使いにして着ると可愛いよね、杉本さん、髪を下ろした ら絶対可愛いよ」
花森さんがひとりで梨南の席に近づき、一気にまくし立てた。「私も、そういうのが好きだから」　残念ながら、今年の流行とは違うことも、ちゃんと調査ずみだ。
自分の顔が、目をのぞいてぼんやりした雰囲気だというのは、女子たちの態度からもよくわかる。ほどけばたぶん、はるみよりも長いだろう。頭のてっぺんに つき立てて結んだポニーテールは、動くと少し痛い。ひっつめてピンで留め、黒いリボンを大きく結んでいる。梨南が唯一こだわっているおしゃれポイントはそ こだった。鏡で見ると、猫の耳に見える。ぴんと立っていて、校則違反をしなくても派手になる。
花森さんが誉めてくれるのは、正反対のタイプだからかもしれない。
指先に赤いマニキュアを塗ってみたって、唇にリップを重ね塗りしててからせたって、梨南の好みとは合わないし、たぶん似合わない。
「私、花森さんは自分の似合うもの知っているから、偉いと思う。だからそう素直に言ってるだけ。ばか男子なんかにかまわないで、うまく校則をごまかしていけばいいと思う」　波のない言葉だった。感情がないと罵られること多し。
「ありがと。その言葉、杉本さんにも返してあげるよ。ばか男子なんかに負けるなって。それにしてもねえ、新井林の奴、むかつくよね。なんで自分の彼女のことしか目に入らないかなあ。あんなことしてたら、かえって佐賀さんの立場が悪くなるって気付かないのかな」
はるみのことを言っているのだろう。
きっと、花森さんは小学校時代の出来事を知らないのだろう。　梨南も、口には出さない。そこまで最低な人間ではない。
「勝手にすればいい。私、ひとりひとりのことまで思いやる余裕なんてない」
「杉本さんは男子と戦うことで今は精一杯だもん、わかるよ。私だってそうだもんね。負けちゃ、だめだよ。うちのクラスの女子はみんな、杉本さんの味方なんだからね」

花森さんはリップをポケットにしまいこんで教室から出て行った。エスケープだろうか。そういえば次の時間は溝口先生の授業、理科だった。用意するものは 何もない。評議委員としての義務は、新井林が勝手にやってくれている。授業前、先生の教科書を運ぶため職員室に通うのが評議の仕事だが、梨南はこれまで一 度も、担当したことがない。気が付いたらすべて新井林がはるみと一緒に運んでくるのだから。出番はなし。

理科の授業中はみな寝るだけだった。女子たちは罫線が桃色のノートを用意して、破って手紙を書いている。匂いのするカラフルボールペンを駆使して、芸術 的な手紙を完成させる。最後に複雑なたたみ方をして、こっそり後ろに渡す。女子の手でお目当ての人のもとへ届くしくみだった。読んだ相手はすぐ、手紙専用 ファンシーノートをまた破る。書く。渡す。繰り返しだ。先生たちはそれを見つけるとすぐに取り上げて立たせたりする。梨南はいつも、手紙を経由するだけの 立場だからどうでもいい。溝口先生の単調な授業を聞いているよりははるかに大切なことをしているんじゃないかとすら思っていた。それぞれに、言いたいこと は、たくさんある。
前の席。背中を丸めて居眠り寸前の姿勢でいるはるみをちらっと見た。
右腕が小さく揺れている。
これは絶対、手紙を書いている手だ。
でも、Ｂ組に現在、はるみが手紙を書こうとする相手、女子の中にはいないはずだ。
――新井林に書いてるのかもしれない。
――きっと私の悪口を書いているのかもしれない。
――それとも交換日記をしているのかもしれない。
小学校の頃は、梨南にも折り手紙を送ってきた。梨南はめったに返事を書かなかったが。だって内容があまりにも意味のないものばかりだったから。先生に怒られた。お母さんに怒られた。テストができなかった。マラソン大会出たくない。そういうたわいもないことばかりだった。
――はたしてそんなくだらないことを、新井林は喜ぶんだろうか。
――だから男子はばかなんだきっと。
梨南は結論付けた後、もう一冊ノートをひっぱりだした。　昨日の帰り、用意した味もそっけもない大学ノートだった。青大附中の校章が浮き彫りだった。白い霜降りの表紙。昨日の夜、十ページ書き込んだ。
――立村先輩にもよくわかるよう、きれいな字で書き直したほういいかな。　耳もとのほつれ毛がぴくっと引っ張られた感じ。天井を見上げた。Ｄ組の教室の真上に、立村先輩は座っているはずだ。どこの席かわからないけれど、いるはずだ。
――はるみよりも、私の方が内容あること書くんだから。内職しても文句いわれないはず。溝口先生の授業聞くよりも、うちで百科事典読んだりしてるほうがずっとましだもの。

内容は、「青潟大学附属中学　一年学年集会用企画書」
クイズ大会の内容。
一年から三年まで各クラス男女一名が壇上に並んで問題を解く。

司会者は一年評議委員の誰かがなる。
問題の内容は主に学校内の展示物、文房具、授業道具などの値段を当てるのが中心。ただし、購買部で扱っているような、誰にでも分かる値段のものは使わない。誰もが意識したことのないようなものの値段を当てる方がいい。
梨南はしばし考えた後、続けて書きこんだ。教科書の表紙を立てて、影を作りながらゆっくりと。
「青潟大学附属中学の制服の価格を、一通り当てること」
単純で、なにかぴんとこない。鉛筆の先が丸くなったので、携帯用鉛筆削りを取り出してくるくると削った。円錐形のかすがきれいに残った。
――私が言いたいのはこればっかりじゃなくって。

「制服の場合、買った店によって値段も違うし、布の感じも全く異なる。特に女子の場合は値段の差が店によって全く違う。そこで、今年の一年生が購入した制服の値段をできるだけたくさん調べて、店ごとの値段を当ててもらう」

梨南の場合は母がすべてあつらえてくれた。気が付いたらうちに五着くらい、制服が揃っていた。いつも清潔な格好で通えるのが嬉しい。人によっては夏服冬服の二種類しか用意していないということで、近寄るとにおいそうな人もいたからだった。
でも、他の子たちに聞くと、みなそれぞれが洋品店やデパートで揃えたらしい。確かに細かく観察すると、リボンの色合いや布地の雰囲気、スカートのひだの数、腰のしまり具合、なんとなく違っていた。　たまたま評議委員会の時、清坂先輩と話をしていた際、
「制服って似合う人と似合わない人がいるよね。私、親の行きつけの店で縫ってもらったんだけど、なんか胸ががふがふで変なの。他の子みたいに、もっといいとこで作ってもらえばよかったって、昨日も母さんとけんかしちゃったんだ」
と、制服談義で盛り上がったことがあった。別に梨南が語ったわけではないし、清坂先輩の一方的なおしゃれリズムに付き合っただけだ。でも、なんとなく言 いたいことは伝わった。洋服って似合う形、似合わない形がはっきりしている。そういうのを比較してみたりしたらおもしろいんじゃないか。男子の制服は地味 なブレザーとネクタイだけだが、それなりにこだわりポイントもあるのではないだろうか。今度立村先輩にも聞いてみようと決めた。
「ねえ、杉本さん。男子ってやたらと制服着崩しているよね。ほら、うちの羽飛貴史なんか何考えてるんだか、ネクタイ思いっきり緩めてるよね。ズボンも短くはいてるし。あいつ、足短いんだからそんなみじめなことしなければいいのに。何考えてるんだろうね」
短くはないんだけど、と梨南は思う。一年Ｂ組の連中のように、胸をはだけんばかりにワイシャツのボタンを外しているのに比べたら、はるかにましだ。そういうつもりが、別の言葉に化けてしまい、あせったことを覚えている。
「立村先輩は、いつもきちんと着てますよね。汗かかないで、ブレザー着て」
「そうね、立村くんは制服を着崩さずに着て許される、唯一の男子よね。ここだけの話だけど、

立村くん洋服にはこだわるよ。秋になったら笑うから。とんびのマント着て学校にきたことあるんだよ」
　いつだったか忘れたけれども、清坂先輩のおしゃれ談義は果てることがなかった。せっかく二年生の女子を援軍につけてもらえるのならば、清坂先輩に思いっ きり頼ってしまおう。昨日の夜決めた案だった。一年の同期連中が当てにならない以上、頭のいい二年女子評議のみなさまに案を出してもらおう。一年と話して いるよりもずっとそちらの方がよかった。
　はるみが振り返った。まなざしが細い。手紙を新井林に届けてくれというのだろうか。一切無視してやるつもりだった。
　気付かないふりしてノートを埋めつづけた。
「梨南ちゃん」
　か細い声で、耳に響いた。　もちろん先生には気づかれない程度だった。
「読んで」
　緑の罫線がひかれているノートの切れ端だった。おりがみの騙し船をこしらえる要領で織り込まれていた。こんなことのためにわざわざなにをしていたんだろう。
　読んでといわれた以上は、読まねばならない。
　梨南はいったん手を休め、騙し船をもとの紙にもどした。

「梨南ちゃん。二年の評議の先輩のことが好きなの？　私にはわかる。健吾も他の男子も知っていると思う」

　こんな複雑な折り方をして、要件はこれだけか。　端と端をきちんと合わせて折りつづけた。小さくたたんだ。返事は書かなかった。うちで破り捨てよう。学校でうっかり捨てたら、拾われてろくなことにならないかもしれないから。

　――はるみ、あんたたちとは違うもの。
　――はるみみたいに、私は男子を顔で決めたりしないもの。
　――どんなに顔が変でも、ろくに九九が言えなくても、私を認めてくれた先輩だもの、嫌いになんてなるわけないのに。ばかみたい。
　――嫌いでないことを知って、何自慢できるっていうの。だからこのクラスの男子は頭が悪いのよ。

　はるみからの手紙をしまい終えた後、梨南は企画の続きを綴った。教壇では来週の実験に使う道具について溝口先生が説明している。耳には入ってきた。塩酸 を使うらしい。劇薬らしい。飲むなと言っている。そんなことを説明しなくてはいけないなんて、やっぱり一年Ｂ組はばかばかりなのだ。結論はいつもそこに行 き着いた。

　青大附中から徒歩十分くらいのところに、「リーズン」と呼ばれる大型スーパーが建っている。スーパーと呼ぶよりも小型デパートといった方が通りがいい。 近所には下宿生が多いとかで、通りはおしゃれな学生街化していた。梨南の隣り家も、大学生専門の下宿屋だった。徹夜マージャンのちゃりちゃりした音が響 き、よく梨南の両親は苦情を言いに足を運んだものだった。

　清坂先輩と待ち合わせたのは、「リーズン」二階のソフトクリーム店だった。一応、学校では寄り道禁止だ。校則違反で捕まるのを避けるため梨南は家に戻っ て着替えてきた。基本として青大附中は、周りが思うほど校則にうるさくない。清坂先輩はたかをくくっているのか、制服のままだった。
「杉本さん、可愛いなあ、そのジャンバースカート」
　一回転するとふわっと広がるベージュのジャンバースカートだった。母の手縫いだ。白いブラウスの襟は肩まで広がっている。申しわけ程度にレースがほどこ されている。母が「似合う髪にしていきなさい」と、ポニーテールを解いてくれた。腰まで届く髪。はるみよりもはるかに長いはずだった。
「ふうん、お母さんが縫ってくれるんだ。いいな。うちの母さん、そういう細かい仕事苦手だからなんもしてくれないよ」
　きっちりした格好を心がけていた。梨南が自分の好みを押し通すたび、一緒にいる人が子どもっぽく見えてしまう。なんとなく、清坂先輩の方が自分よりも年下に思われそうだった。
「杉本さん、絶対、可愛いんだけどな」
　清坂先輩の誉めことばを、梨南は素直に受け取った。
　――私は間違ってない。

　ソフトクリームはバニラを選んだ。コーンにくるくるつめてもらい、テーブル席に着いた。通路沿いはぶあつい透明ガラスで仕切られている。青潟市内の制服姿で高校生たちがふらついている。長い時間粘ってもいやな顔をされない店だった。梨南は子どもの頃から知っている。
　清坂先輩には思いっきり感謝された。
「杉本さん、この辺の地理は詳しいよね」
「詳しいだけでいいことないです。毎日いやな奴と顔を合わせなくちゃいけないし」
　はるみも、新井林も、同じ小学校だ。清坂先輩は知っているのだろうか。
「気持ちわかるなあ。あ、でもね、もしかしたらうちの学校の連中も通るかもしれないね。立村くんと貴史、今日はふたりでぶらつくようなこと言ってたし」
「立村先輩は品山の出身なんでしょう」
　品山町といえば、自転車でここから四十分は掛かる。かなりの僻地だ。
　立村先輩は毎朝七時に出発しているという話を、先日聞いた。
「遠いよね、体力よく持つよね。貴史が無理やり誘うんだもんね」

「よくおふたりは、つるんでいらっしゃいますよね」
　清坂先輩は、羽飛先輩のことを名前で呼んでいた。梨南の前でもだった。幼なじみだからだろうか。
「あ、でもね。立村くんは、今日私が杉本さんと会うことを知っているはずなんだけどね。かえって避けるかもしれないな」
「なんでですか」
　言う意味がわからず問い返した。
「言ってたんだ。立村くん」
　コーンの端に白い液体が滴り、あわてて清坂先輩はなめた。
「『俺のいないほうが、杉本も安心して清坂氏に相談できるだろうし』って。気にしないのにね」
　立村先輩の声を耳によみがえらせて見た。テノールがかった、重たくないひよひよした声だった。顔は思い出さないようにした。
　――その通りです。立村先輩。
　コーンのしっぽから、アイスの汁がしたたった。さすがに下をなめるわけにはいかなくて、紙のナフキンで包み直した。まずは食べ終わることに専念した。結 果、梨南の方が早く平らげた。ちょこちょことなめつづけている清坂先輩の前に、梨南はノートを置いた。黒いガラステーブルの上に広げた。
「清坂先輩、これがシナリオです」
「もう書いたの？　話してから一日しか経ってないよ」
「はい、今日、授業することなかったので」
　どうしようもなく暇だった。いつものことだけど授業の内容は、前もって梨南が予習しておいたところばかりで、つまらなかった。先生のお説教が途中挟み込まれた程度。聞いている奴なんていないのに。特に一年B組は一度騒ぎ出すと押さえがきかない。
　これがもし、他のクラスだったら。
　評議委員が立ち上がってなんとか治めようとするのだろう。
　一年Ｂ組では絶対ありえないことだ。さらさらなし。
　詳しいことは口にせず、梨南は清坂先輩がノートを一心不乱にめくるのを眺めていた。
　――クイズ、青潟大学附属中学における制服のお値段はいくらか？

　一度だけウエートレスさんが水を汲んでくれた程度。邪魔されなかった。根が生えたように学生たちが座り込むことを、いつも知っているのだろう。ソフトクリーム屋の人は。たまにお茶まで運んでくれる。
　隣りの席は男子高校生が三人、おとなしくしゃべっている。後ろでは、青大附高の制服を着た女子が五人、激しく笑いの渦をこしらえている。騒音と思うか思わないかで、居心地の基準が決まるものだろう。
「なるほどね、すごいすごい」

「先輩たちの時もこういう感じでしたか」
「案を立村くんが出したの。あとはシナリオの元ネタを他の男子がこしらえたんだ。立村くんって、全くテレビバラエティのことわからないからね。ほら、テレビふだんから見ないって言ってたし。シナリオを本条先輩や結城委員長にチェックしてもらったりしたんだって」
　声を潜めた。
「やっぱり立村くんが立村くんらしいな、って思ったのは」
　目がきょろきょろしている。肩をすくめる。頼んでもないのに教えようとする。
「コントをやる人を集める時、私のクラスからほとんど出てもらったの。ものすっごく恥ずかしい踊りとか歌もあったからみんないやがるかなって、私は思って たんだ。それをね、立村くんはひとりひとり、男子を説得してったの。みんな立村くんに頼まれると、『いや』っていえないんだって。なんでだろうね。『立村 に頼まれたなら、まあいいか』って感じで、みんな協力してくれたのよ。人の前でお尻ふりふりダンスを正気のままやるなんて、信じられないんだけど、立村く んに頼まれてしかたなくやってくれちゃったのよ」
　どういう尻振りダンスか見当もつかない。梨南も家でテレビをめったにつけない。時代の流れは本でしか判断できない人間だ。梨南が計らずしも立村先輩に似ていると感じるところだった。
「立村先輩も、そのダンスに出たんですか」
「まさか。評議だもん。ずっと袖にいて、出演する人たちに声かけたり、人をいう字を書いて飲ませたり、いろいろしてたよ。めずらしく立村くんから、一生懸命話しかけたりしてたのよ」
　意外だった。立村先輩といえば、評議委員会のみばりばりと話すけれども、他の人たちとはそれほどばか話をするタイプに見えなかった。梨南は見たことがなかった。
「どういう話題持ってたんでしょうか。信じられません」
「でしょ。立村くん、クラスであまりしゃべらないよ。行事がある時だけは、テンションを上げて必死に話そうとするのよ。不思議な人だよね」
　気になったことを聞いてみた。
「舞台が終わった後もまだくだらないことを話していたんですか。立村先輩って」
「それがね」
　さらに声を潜めて清坂先輩は唇に人差し指を立てた。
「いつのまにかいなくなってたんだ」
「逃げたんですね」
「私も最初はそう思ったの。後で聞いたら幕が閉まる寸前で貧血起こして倒れて、本条先輩に保健室へ運ばれたんだって。立村くん、次の日学校休んだわ」
　立村先輩の仕切り上手を聞かされても、いまひとつイメージが繋がらなかった。頭の中に展開される場面は、本条先輩の腕の中で崩れ落ちる姿だった。

　一通り目を通した後、清坂先輩は自分のメモ帳らしきものを取り出した。うぐいす色の無地で、上には小さなスパンコールのシールが貼ってある。
　銀色マーカーで、ひらがなで「きよさかみさと」と記入されている。まるっこい文字だった。

「今、杉本さんの案を読ませてもらったらね、私もやりたいことのイメージがどんどん沸いてきちゃったの。いいかな、書いちゃって」
　いきなりメモ帳に、青大附中の制服イラストを描き始めた。顔はなし。ブレザー、スカートのデザイン、ささっと線を引いた。細いけど形づくるところは濃 く、力強く。インナーのブラウス、ネクタイは抜きだった。透明人間が制服を着て歩いているような感じのイラストがあっという間に出来上がった。
「制服の値段そのものを当てさせるのもいいけどもったいないよ」
　目を宙に泳がせた後、清坂先輩はつんつんとテーブルをつついた。
「杉本さん、規律委員会が毎年作っている『青大附中ファッションブック』って知ってる？」
　初めて聞いた。首を振った。
「毎年、規律委員会が、おしゃれなイラスト付きで、クラスに一冊ずつ配っているコピー誌なんだ。今年はまだ作ってないみたいだけどね。少女漫画っぽい絵で ね、制服の可愛い着こなし方テクニックを紹介しているんだ。規律を守れってうるさい、規律委員会ですら遊んでるんだもん。評議でも、ちょっとくずしたこと していいんじゃないかな」
「崩すって、どういう風にですか」
　制服を着崩すということだろうか。
　――校則違反をするってことだろうか。
　口に出せなかった。清坂先輩の話は止まらなかった。さっき描いたイラストの上に、インナーのTシャツを付け加えた。白と黒の市松模様を入れた。一こまずつ塗りつぶしていた。
「うちの制服ってトーンがちょっと濃い目の灰色じゃない？　グレイってね、大抵の色に合わせられるのよ。薄すぎないし、かすかにチェックも入っているから 地味派手にもできちゃうし。学校以外のところで、もしおしゃれに着るのならば、インナーのTシャツ、ブラウス、アクセサリーを使って、可愛く着こなしてみ るっていうの。で、ファッションショーのようにひとりひとり、体育館に入ってきてもらって、一人あたりトータルの値段を当ててもらうの。これって頭脳ゲームだから、そう簡単には決まらないよ」
　――さすが、清坂先輩、目の受けどころ違う。
「モデル役を一年の女子と男子に割り振った方がいいですか」
「いいじゃない、あまった評議の人たちでやれば」
「いやです。私は出ません」
「杉本さん、絶対可愛く着こなせるのに。ま、いっか。Ｂ組は別の子に頼むとして……そうだ。そうよ。Ｂ組の男子評議。なんもやりたがらないんでしょ。な ら、無理やりモデル役にして協力させちゃうのよ。一年評議の女子もやる気ない人ばかりなら、適当にモデル役に押しこんでしまえばいいのよ。評議委員として の義務は終了。あとは私たちと杉本さんが全部計画を立てれば、ＯＫじゃない？」
「それいいです。清坂先輩、頭いいです。頭、働かない人には一番いいです」
　一年のばかどもに手伝わせるよりは、清坂先輩のように頭のいい二年生に手伝ってもらった方が絶対いい。梨南以外の一年評議には、仕事としてモデル役を押 しつけておけば他の先生も文句

を言わないだろう。梨南はひとりで舞台裏、シナリオどおり進んでいるかどうかをチェックすればいい。
　仕事をきっちりする一年生は、梨南だけでたくさんだ。
　――完璧。
「先輩、私、やります。ありがとうございます」
「よかったあ、私、杉本さんにこんなこと言って、あきれられたらどうしようって思ってたんだ。先輩扱いされなかったらどうしよう！って」
　ばんざーいと、両手を上げた。ウエストのブラウスが少し持ち上がった。うっすらと白っぽいレース模様が、ブラウスの中から透けていた。たぶんブラジャー といわれるものなのだろう。梨南には理解できないものだった。息苦しそうだった。胸のじゃまな贅肉はうっとおしい。梨南はそのままにしている。すっきりし た胸で楽でいいのに、清坂先輩はなんで必要ないものをつけているのだろう。
「清坂先輩、私はあまりいい組み合わせ考えられないんです。二年の先輩たちに洋服の合わせ方をお願いしていいですか。決めていただけたら、私、その通りにします」
「まかせて！　二年女子はね、おしゃれのプロばかりなんだから！」
　清坂先輩はノートを綴じた。裏表紙にはハート型の銀色ものが大きく貼りつけてあった。
　「好きな人の名前を書いてシールを張って一ヶ月すると、恋が実る。もしくは告白される」と言うおまじないだろう。Ｂ組にも同じことをしている女子がいた。
「先輩、裏に誰の名前書いてるのですか」
「え？」
　あわてて両手でノートのシールを隠し、目だけ笑うような感じで清坂先輩は向いた。
「一年でもやたらこのおまじないはやってます。私はやりません。好きな男子絶対いませんから」
「あ、やだなあ。ただなんとなく、こう貼ると可愛いでしょ」
「そうですか」
　意味を知っていたら、ショックを受けるかもしれない人が約一名、思い浮かんだ。
「じゃあ気をつけたほうがいいです、清坂先輩」
　ゆっくり、声を潜めた。幸い、隣りの席の男子達はひそひそながらも熱く盛り上がっているようす。盗み聞きの気配はなかった。
「立村先輩が、絶対、はがそうとするに決まってます」
「なんでなんで」
　いたずらっぽく黒目が動いている。銀色のシールを指差し、梨南は説明した。
「一ヶ月で清坂先輩が別の人に告白されたら困るのは立村先輩です」
　かすかに、戸惑ったように目をぱちぱちさせている。
「あの、もしかして、私のことを立村くんが好きなんじゃないかって、そう思ってるの？」
「嫌いだったら、話しないと思います」
「あのね、杉本さん。それを言うならね、杉本さんにだって、立村くんたくさん話しかけてるよ

」
　あっさり返事した。
「私が一年評議の中でまともなことしているからです」
　同じ顔のまま、清坂先輩はゆっくり首を傾けた。かしげたというのではなかった。機械的に、動かした、という感じだった。

　全校集会のシナリオについてつめていると一時間くらいあっいう間に過ぎてしまった。清坂先輩がオレンジジュースをおごってくれた。二年女子の先輩たち は、しょっちゅう梨南に飲み物をご馳走してくれる。男子ならともかく、女子の人からプレゼントをもらえるのは大歓迎だ。少しずつすすった。
「あれ、貴史？」
　いきなり清坂先輩が立ち上がった。ガラス越しに両手を振った。ばんざいの格好だった。隣りの席の男子高校生が話をやめて清坂先輩の方を指差した。
「貴史、がこの辺を歩いてるってことはもしかして。ちょっと待っててね」
　財布をテーブルの上に置いて、店を飛び出していった。

　ガラスの向こう側に姿が見えた。すぐに青大附中の制服を来た男子を捕まえ、ツーショットのまま立っていた。通路の真中じゃまになりそう。手振り身振りがどんなものなのかわからなかった。ちょうど、パントマイムショーを見ているような感じだった。
　羽飛先輩はポケットに片手を突っ込み、片手にかばんをぶら下げて反り返るような格好で立っていた。前髪だけがつんと上がっている。ネクタイをゆるめてい るところがちょっとだらしない。目鼻立ちは鮮やかで堂々としている。絶対に女装できないタイプだ。本条先輩とはまた違った意味で男らしい顔だ。一年女子の 一部が、羽飛先輩を発見するなり「きゃー」と騒ぎ出すのも頷けないことはない。
　立村先輩よりははるかに「かっこいい」範疇にはいるだろう。
　――『ローエングリン』みたい。
　以前両親に連れて行ってもらったオペラの舞台を思い出した。
　ワーグナーの「ローエングリン」。白鳥の騎士。
　歌った男性の日本人オペラ歌手が梨南にとって初恋の人だった。
　名前は覚えていない。ちゃんと眉毛が太く生えていて、目も大きくて、がっしりしていた。小学校二年の時だっただろうか。「ローエングリン」の夕べ以来、 梨南の理想は「白鳥の騎士」様と相成った。禁断の名前を名乗らざるを得ず、ラスト、すがる姫を捨てて去っていくところなんて、男の中の男ではないだろう か。もっとも、「ローエングリン」はおろか「ワーグナー」すら知らない連中ばかりだったので、ひそかな憧れはあっさり隠すことができた。
　羽飛先輩がそうだと、立村先輩の場合は。
　――『ローゼンカバリー』ってとこだろうか。
　シュトラウスのオペラ「ばらの騎士」が思い浮かんだ。小学校三年の時が初めてだ。

十七歳の少年、「ばらの騎士」。年上の女性に恋焦がれ、結局結ばれるというハッピーエンドの物語だった。こちらはテレビ中継で両親と一緒に聴いた。終わった後両親に激しく「どうして、あの公爵夫人が傷つかなくちゃいけないの？」とくってかかったことを覚えている。
許せなかった。ばらの騎士という名の少年があっさりと、別の女に乗り換える行為を。
よくわからないながらも、ばらの騎士役の声は見事だった。名前はすぐに覚えた。何度もテレビ中継でその歌手の声を聴く機会はあった。でも、物語の影響は消せなかった。『ローゼンカバリー』はすでに梨南の中で誉めことばではなかった。
――『ローゼンカバリー』役の人はよかったのよ。ストーリーが悪いのよ。
ガラス越しのふたりがいきなり後ろ向きに手招きした。
――『ローゼンカバリー』様がやってきた。

立村先輩はやはり白いジャケットを腰から下まで長くたらして、カバーのかかった本を抱えていた。買ったばかりなのだろう。わら半紙に小さくムササビの絵 が刷り込まれていた。待たせていたのか、何度か頭を下げていた。羽飛先輩に本を渡していた。すぐに清坂先輩が横取りし、ぱらぱらとめくっている。文庫本 だったようで、首をかしげた後、立村先輩になにか尋ねていた。開いたまま指差しつつ、立村先輩は説明している。漫画の大きさではなさそうだった。
梨南の座っている方へ顔を向けた。
じっと見つめていたから露骨に目が合った。
立村先輩から目線を合わせることなんて、めったにない。
しっかと梨南は受け止めた。ジュースから口を離して、目を見つめたまま、お辞儀をした。そのまま立ち上がり、深く頭を下げた。最敬礼だ。
――きっと、びっくりして目をそらすに決まってる。
顔を上げた。はっとした。
立村先輩の表情は、教室で見た時と同じ、あどけなさの残ったやわらかい笑みをたたえたままだった。こんな顔、男子では立村先輩以外で見たことがない。背中に堅いものが這いつくばった。梨南は目に力をこめて、立ち尽くした。
――立村先輩、私だってことに気付かないのだろうか。
――こういう時、男子が取る行動は、露骨に顔をしかめるかなにかするはずなのに。

身振り手振りよろしく清坂先輩は、何度か梨南のいる席へ手を差し伸べた。羽飛先輩も細かく頷き、いかにも「な、行こうぜ行こうぜ」と言いたげに、腕をひっぱっていた。肝心の立村先輩は首を振っている。表情はおだやかなままだ。たまにすうっと梨南の方を見た。
しばらく押し問答が続いたようだが、結局通路の真中で歩行者の邪魔をするのはまずいと思ったらしい。ふたりは清坂先輩に手を振り左側の通路に向かった
立村先輩だけがもう一度梨南へ、目を向けた。
視線に笑みが含まれている。
――男子があんな目をしたのって、見たことない。

――きっと清坂先輩と間違えているんだ。
――そうよ。立村先輩は教室でいつも、ああいう表情しているけれど、私を清坂先輩だと思って、ふつうに接しなくちゃって思ってるんだ。きっと。
――目だけは、いい人なのに。

「いやあね、来ればいいのにね。立村くんたらね。貴史とふたりで本屋に行ってたらしいんだけど、咽が渇いたからどっかで座ろうって話してたんだって。でも、杉本さんに悪いからって帰っちゃった。ね、そんなこと、気にしないのにね」
戻ってきた清坂先輩に、梨南はこくりとお辞儀をした。
「私、立村先輩に嫌われてますから」
「どこがよどこが！」
梨南の言葉を強く遮り、清坂先輩はまんまるな目で見つめ返した。そんなに驚かなくてもいいのに。
「今のこと聞いたら、立村くん泣くよ絶対」
「だって、私と目を合わせたくないって言う感じでしたし」
ふう、ともう一度ため息をつき、清坂先輩は首をゆっくり振った。
「なわけないでしょ。だって、覚えてる？　一年生が全校集会の時に放課後集まって、何をするか決めた時のこと。どういう話し合いがあったかはわかんないけ ど、結局杉本さんに男子女子みな押し付けて帰っちゃったでしょ。その後、立村くんが二年Ｄ組の教室で待っているってことになってたでしょ。次の日立村く んってば杉本さんのことを絶賛しまくっていたんだから。『今年の一年にいる杉本って人、死ぬほど頭いいよ』ってね」

その通りだ。一年生がまず案を煮詰めて、代表者が二年生の先輩たちのところに持っていくという、儀式だった。五月中旬の放課後、評議委員が八人残って、 話し合いをしたのだけど、男女が全くかみ合わず、梨南の鶴の一声で無理やりクイズ大会に治めた。男子が納まるわけもなく、女子がやりたがるわけもなく、
「じゃあ、杉本が言い出したんだから、お前がすべて片付けろよ」
と押し付けられた時のことだった。
押し付けられた以上は仕方ないので、二年の先輩達が待っている教室へ向かった。なぜか、二年Ｄ組、立村先輩、清坂先輩のクラスだった。
待っていたのは立村先輩だけだった。席について、文庫本を読みふけっていた。髪の毛が夕暮れの光で黄色く透けていた。フランス映画に出てきそうな上流階 級の小学生に似ていると思ったことを覚えている。あのまま、顔を見せなければ、梨南もあんなひどい顔、とは思わなかっただろう。
声をかけるまでの一瞬だけ、梨南は立村先輩を先入観なしで見た。
たぶん、気付かなかったのだろう。あの時だけは。

「立村先輩は、私が持っていった案がまともだったから、誉めてくれただけです」
「それだけだと思う？　私は違うと思うな」
　清坂先輩は妙にねばっこかった。つっかかりそうだけどやさしかった。
「『杉本ひとりに押し付けるなんて、今年の一年は最低だな』って、ちゃんと本当のことを認めてくれたんです。後で、『ありがとう、やっぱり杉本みたいな人 がもっと認められなくちゃ、嘘だよな』って誉めてくれました。立村先輩は頭悪いし、顔も不細工だけれども、でも、すごく私の考え方や能力を認めてくれまし た。だから、きちんと他の男子と区別して、私、接してます」
「顔、って、杉本さん、すごいこと言ってるよ。ああ、笑える！」
　清坂先輩は顔をつっぷして笑い転げている。隣りの男子高校生たちが不思議そうに梨南を見て、またひそひそ声で話している。梨南は間違ったことを一言も告げていないつもりだが、なんで清坂先輩がそこまで受けるのかわからなかった。
　女子と話す時は、みな「梨南ちゃんって面白い！」と言ってくれるので、楽だった。
「そうなんだあ、じゃあ、杉本さんは立村くんみたいなタイプ好みじゃないのね」
「顔だけはちょっと避けたいです」
「だったら、どういうタイプが好きなの？」
　比較対照が難しい。まさかローエングリン様とは言えない。第一、清坂先輩がオペラについて詳しいかどうかも定かではない。いや、たぶん知らないだろう。
「いません。人間として男子にそういう感情をもてませんから。男子はみな死ねばいいと思ってます」
「立村くんも？」
「いいえ、立村先輩は顔を見なければ、安心して話ができます」
　返事はない。笑いが止まらないらしい。
　梨南はずっと、ジュースをすすりながら、ノートを受け取りもう一度めくった。
　――人間って、モンタージュ写真のように、目だけ見て生きることなんてできないのかな。立村先輩の、さっきの視線だけだったら、安心して、話ができるのに。清坂先輩だって、立村先輩のこと、好きになってくれるかもしれないのに。

　清坂先輩はあとの準備を片付けてくれると言ってくれた。同じクラスの立村先輩にも伝言してくれるとも。でもすべて信用するほど梨南は甘くなかった。
　伝えるべきことは、きちんと目を見て一対一で話すべし。
　１Ｂのばかどもと違い、立村先輩は学校内で唯一の、「まともに会話ができる」男子だった。話をする時に目をそらすとか、数学の成績が壊滅的にひどいらしいとか、考えさせられるものはある。欠陥は山積みなのかもしれない。
　梨南の能力を正当に判断するという、極めて困難なことを「男子のくせに」きちんと行ってくれたのは認めるべきだろう。梨南もそのくらいの良識は持っていた。

　「二年女子を主体とした、青大附中制服コーディネート企画」と、一行だけシナリオノートに付け足し、梨南は真っ白なレターセットを取り出した。
　「きちんとした家の娘は、青とかピンクとかで変な絵の書いていない、上質のレターセットを使用するものよ」と、母にも言い含められていた。当然のことな がら梨南も賛成で、クラスの子の用いるファンシー柄を一切使用しなかった。小学校の時は友達にも「ばかになるからそんな甘ったるいの使わない方がいいよ」 とアドバイスしていたのだけれど、反応が芳しくなかったのでそれ以上は無視していた。
　六年時の担任からも、
「他のクラスメートたちが使っているような、かわいらしい文房具をたまには梨南さんにも使わせてあげてください。贅沢をさせてくださいというのではないん です。仲間同士のコミュニケーションとして必要な時もあるんですよ」と母に忠告してきたらしい。もっとも母は梨南と十二歳しか違わない女の担任を信用する わけがなく、あっさり切り捨てたという。当然だと思った。ふだんからやたらと匂いのついたケシゴムや、大きなくまの絵がついた下敷きなどを持ってきて、一 部の女子たちときゃあきゃあ見せ合ったりしていた。「なんか、子どもが子どもを教えているみたい。梨南ちゃんの方がずっと、大人よねえ」
　と母はことあるごとにあきれていたものだった。
　――大人があんな下手な絵のついたノートを持ってはしゃいでいるなんて、ばかよばか。

　――立村先輩――

　丁寧に一行、書いてみた。立村先輩ももしかしたら、梨南の文字を目にして、あらためて自分の綴る字の汚さに気付くかもしれない。反省してくれればそれでいい。梨南のことをきちんと見てくれる、あの目、あのまなざし。持っているなら、必ず気付くはず。

　――昨日、清坂先輩と相談して、「一年学年集会」のシナリオを完成させました。簡単でしたが、二年女子の先輩達の意見と、制服のコーディネイトをうまく生かして作りたいので一通り

、目を通してください。お願いします。――

　ためらい加減にペンも止まった。

　――私は、一年男子にものすごく嫌われています。ですから、このシナリオの作者が私だとわかった場合、絶対に、一年男子評議たちからはボイコットされる と思います。そこで、他の評議委員には私が書いたということを知られないようにしたほうがいいのではないでしょうか。よろしくお願いします。杉本梨南――

　封筒に納めると、父が使っている封印蝋をもらいに部屋から出た。めったに使用しないものなので、「梨南ちゃんが特別な人に手紙を書いた時には、いつでも 使っていいよ」と言われていた。たまたま父が部屋にいた。火で蝋をあぶってもらい、きれいに押してもらった。イニシャル「Ｌ」の花文字がきれいに浮き上が り、金色に留まった。

　――立村先輩へ

　パーティへの招待状ってこんな感じだろうか。
　梨南が信じる美学が間違ってなければ、必ず立村先輩は納得するはず。
　梨南の真剣さが。

　次の日の放課後、梨南は立村先輩のもとへ行くつもりでいた。金曜だった。いつもだったら評議委員会の続きがあるはずだった。しかし、三年生の実力テストが絡んでいる関係で休みになってしまった。本条委員長がいないと、いくら真面目に語りたくたって、しょうがない。
「杉本さん、放課後はどうするの？」
「委員会の関係があるから」
「杉本さんって偉いよね。やっぱりすごいよ」
　花森さんが、掃除のために机を奥に下げた後、声をかけてきた。手を振りながらだった。髪先が赤茶けているように見える。枝毛が異常発生したのでなければ、美容院でいろいろ仕込んできてもらったのだろうか
　いつだったか、四月終りのホームルームで、いきなり花森さんがつるし上げられたことがあった。髪型の校則について話をしていた時に、たまたまパーマをかけているのを見つけられたのがまずかった。
　もっとも梨南はためらうことなく花森さんを弁護した。ばか男子たちがさんざん、花森さんについて悪口を投げかけている姿に怒り心頭となったからだった。 改めさせるべきは、花森さんの髪型ではなく、平気で「ばかじゃねえの、にあわねえ頭でさ」と悪口をこきまくる男子の、頭だ。
「佐賀さん、さっさと帰ったね」

「そうみたい」
「なんか、ね。やり方がね」
　花森さんはカンペンケースをからから鳴らしながら取り出した。蓋を開けると、右端にアイドル歌手のサインに似た文字が、サインペンで書かれていた。何を 書いているのかよくわからない。梨南が「アイドル歌手のサイン」と認識するのは、「わかんない殴り書き」というものを意味している。でも本当は花森さんの 彼氏らしい。見せびらかしたいんだろう。顔をカンペンに近づけて、見つめた。名前は読めなかった。
「別に、ね。彼氏が新井林なら、もっと堂々とすればいいんだよねえ。彼氏がいることを隠すことないよね。私みたいにさ。そうすれば、みんなだって佐賀さんにふつうに話をするにね」
「趣味、悪すぎる」
「杉本さんの気持ちはすごくわかるよ。『むかつく』とか面と向かって言うなんて、ふつうじゃないよ。うちのクラスの女子は、新井林を代表とする一同の顔を 見るのも嫌だと、絶対に思ってるよ。杉本さんのことをかばおうってしてるよ。そんなばか男をさ、好きだっていうんだもの、無視されたって当然だよね」
「だでくうむしも好き好き」
　少なくとも新井林健吾の顔立ちは、立村先輩より男らしくはっきりしている。もしも小学校の奴が梨南に何をしてきたか、知らなければ、はるみが新井林に一目ぼれしても納得する。梨南も認めたいところだ。
　しかし、はるみと梨南は同じ小学校なのだ。
　梨南に新井林が何をしてきたのか、重々承知のはずなのだ。
「ねえ、杉本さん、ここだけの話、どういうタイプが好きなわけ」
　困った。まさか「ローエングリン様」とは言えない。賭けてもいい、花森さんが「ローエングリン」というオペラを知っているとは思えない。
「人間らしい会話ができる人」
　ナイス！と、手を打つ花森さん。
「だよねえ、うちのクラスってさ、そういう奴がいなさすぎ。あああ、二年とか三年にはたくさんかっこいい先輩いるんだけどなあ。ほら、２Ｄの羽飛先輩とか」
　机を元に戻すまでの数分間、花森さんの与太話に、梨南は付き合った。女子クラスメートとうまく話をあわせるのは、一年Ｂ組評議としての義務だ。すっかり喜んでくれた花森さんは帰り際、細い臙脂のリボンをプレゼントしてくれた。
「杉本さんに似合う」からだそうだ。

　ノートをかばんから取り出し、すっかり帰り準備を整えて、梨南は２年Ｄ組に急いだ。二階に上がる踊り場の窓からは、門を出て行く連中の姿がくっきりと見える。毎日目の前で見慣れた髪型がちらついたので足を留めた。
　両耳の上におだんごっぽく、三つ編みを巻き上げている。
　本日は新バージョンとして、ちょこっとだけ団子の真ん中からひと束、たらりと流している。

中華娘風。もちろん校則違反だ。帰りに解いたのだろう。隣りに いるのは、頭ひとつぶん背の高い男子のブレザー姿だった。もちろん誰かはわかる。顔を見ると殺してやりたくなる奴のひとりだった。新井林とはるみの肩は、 触れ合わんばかり、腕はぶつかりあっているだろう。真っ正面を向いて歩いて行く。
　二週間くらい前だったろうか、はるみの髪型が変わった頃に、クラスの女子たちが「なあに気取ってるんだろ」とささやいていたことがあった。耳にはしてい た。昼休み、新井林がその女子数人をどこかへ呼び出し一言二言「話」をしたらしい。以来、はるみへのひがみねたみはぴたっとやんだ。
　気にはなっていた。女子たちが新井林の顔を恐る恐る見ている様子を。
　たぶんしめられたか何かしたのだろう。
　あとで、個人的調査を入れてみるつもりだった。状況によっては、一度梨南側から、ホームルームの議題にあげて、新井林本人をつるし上げることも考えている。
　――ばかはばか同士よ。
　一呼吸置いて、シナリオノートを、かばんと一緒に抱きしめた。

　二年Ｄ組はすでに帰りの会も終り、みな解散状態だった。仲がきわめていいクラスというだけあって、時間をつぶしている連中の多いこと。一年Ｂ組では絶対にありえない光景だった。
　後ろの席に陣取ってファッション雑誌を広げている女子の先輩。
　プロレス雑誌を広げて技を掛け合っている男子集団。
　立村先輩は先輩とふたり、窓辺で静かに語り合っていた。かしいだ光がちょうど窓辺のガラスを直撃し、立村先輩を白人の少年っぽく見せていた。目をこすりながらも何かを語っているふたり。シャツの襟元が崩れていないのが立村先輩、ネクタイをゆるくしているのが羽飛先輩だ。
　――もう終わっているなら入ってよし。
　堂々と梨南は乗り込んだ。
　一瞬静まりかえったけれども、すぐに元の空気に戻った。女子集団の脇を通った時、「わあっ」という声が耳に残った。
　梨南が話したいのは、立村先輩だけだ。
「先輩、お話したいことがあります」
　一対一で話すこと。
「杉本？　どうした？　ああ、そっか。昨日清坂氏と話していたんだよな」
　羽飛先輩も梨南の方を頭から足までずっと眺め、頷いた。
「美里と語っていた一年生か。そうだ忘れてたぜ」
「立村先輩、そのことなんですけれど、どこまで聞きましたか」
「一通りかな」
「まだまだたくさんお話したいことあります。先輩。言いましたよね、私がシナリオを書くってこと。全部仕上げるってこと。昨日、完璧に仕上がりました。今すぐ見てください」
　一気に畳み掛けた。もし「またあとででいいよ」と言われたら、無理やりでも腕をひっつかん

で廊下に出そうと思っていた。仮にも、梨南に指示を出した人なのだ、責任を取ってもらわないと困る。
　窓辺にもたれていた立村先輩はきちんと姿勢を正した。梨南に向き直った。
「そうだよな、俺言ったよな」
「早いけどとっくに出来ました。それに手紙もあります」
　声に迫力がつくように響かせた。にらみつけた。
「手紙？」
「わあ、立村、ラブレターじゃねえの？」
　肩肘で小突く羽飛先輩がいた。勘違いもいいところだ。慌てて否定すると、また誤解されるだろう。どうも羽飛先輩は信用できない。顔だけの男子は新井林を筆頭として危険だ。
「なわけないだろう。あまり杉本に失礼なことを言うなよな。ほら、顔に露骨にいやって書いてある」
「言ってやーろ言ってやろ。美里にちくってやろうかな」
「ばかばかしい。清坂氏は知ってるよ。それに教えてどうするっていうんだ」
　こめかみをつつくしぐさをして、立村先輩は、机の上に投げっぱなしだったかばんをぶら下げた。そのまま羽飛先輩に、
「じゃあ、悪いけど、今日は先に行く」と答えた。
「わあいわあい、立村やっぱりデートだぞ」
「俺はかまわないけれどな。ただ、俺がいなくなった後に、杉本に対して失礼な噂が流れていたら、明日の太陽拝めないと思えよ」
「へえへえ、わかりました」
　軽く流そうとしている羽飛先輩を、立村先輩は笑わずにくぎさした。
「羽飛、よくわかっているよな」
　でも梨南に振り返った時の瞳は昨日と全く変わらなかった。柔らかい表情と穏やかなまなざし。ガラスごしでも、接近距離五〇センチでも、変動なかった。

　梨南を従えるようにして、立村先輩は最初三階に上がった。図書館に入るつもりだったらしい。
　ドアを開いて中を覗いた後、
「一年の連中がうろついているけど、どうする」
「ばかがうつりますから、別の場所がいいです」
「もっともだ」
　階段を下りながら、踊り場で立ち止まった。
「杉本、今日は時間どのくらいまで大丈夫か」
「はい、私はうちが近いので大丈夫です」
「なら、ちょっとだけ歩いて、外で話をしようか」
「野外はいやです」

「もちろん、家の中だよ」
　喫茶店に連れこむつもりだろうか。清坂先輩にジュースをおごってもらったのは嬉しかったけれど、立村先輩に変なものを食べさせられるのは避けたかった。
「変なところはいやです」
「いや、たぶん杉本は平気なとこだと思うんだ」
「なら、いいです。立村先輩の良識を信用します」
　靴箱で履き替えた後、梨南はそっとノートをかばんにしまいこんだ。

　一緒に歩いているとよけいな噂が飛び交う恐れ有り、ということで、自転車置き場で落ち合うことにした。梨南を気遣ってくれていることはわかる。立村先輩 のように、変な雰囲気の人と歩いたら、周りでいやな噂を立てられるのは覚悟せねばならないと、自覚しているからだろう。清坂先輩にいつも迷惑かけているこ とを知っているからだろう。
　――やはり立村先輩は、常識をわきまえてる。
　――自分の価値がどのくらいのものかを理解してるのよ。
　――自分がどれだけ人に迷惑かけているかを気付いているのよ。
　立村先輩は、いい人だ。
　いい人というのは、「人に迷惑をかけないよう気を遣う人」「身の程を知っている人」さらに言うなら、「価値のある人を価値あると、判断する人」のことだった。
　立村先輩は梨南の価値をちゃんと理解してくれている。
　両親と同じくらいにだ。

　大学生がたむろするようなところではなさそうだった。
　梨南の家とは反対方向のだった。大学の建っている場所から三分くらい歩くと、細長いしらかばの林に入る。陽射しがすっきり隠れてしまう。夏は涼しいだろう。梨南の両親は絶対に一人で通ることを許さないだろう。痴漢に会うかもしれないとか言いそうだ。
　数日前の夕立でぬかるんでいる叢。ハイソックスに泥が跳ね返っていた。あとで履き替えよう。替えの靴下はいつも持ち歩いていた。きちんとした家の娘の常識だ。
　立村先輩は黙ったまま、梨南の方を見つめて、すぐに前を向いた。
　――本当は、一緒にいるのが清坂先輩だったらいいのに、って思ってるのね。きっと。
　二ヶ月の間、立村先輩と清坂先輩を観察していてよくわかった。レベルの違いすぎる相手だけに、立村先輩も思い切れないのだろう。清坂先輩はしかたなく立 村先輩のことを相手してくれているけれども。清坂先輩は羽飛先輩のものなんだってことを、立村先輩は覚悟しているに違いない。
　――そりゃそうだ。あの顔だもの。
　林を抜けて付き合ったのは、舗装されていない道路越しに立っている、大きな和洋折衷の建物だった。見た目は洋風だけど、入り口は妙に和風っぽかった。引 き戸、すりガラスに菖蒲の花が施されている。木目の目立つ看板がぶら下がっていて「おちうど」とある。筆にたっぷり墨を

含ませて書いた、自己主張強い文字 を、彫刻刀でぼりぼり彫りつづけた結果、という感じだった。
　もう一度引き戸の前で立村先輩は立ち止まった。手をかけ、振り向き、梨南に、
「お先にどうぞ」
　と声をかけた。
　よく、梨南の父や親戚のおじさんたちがしてくれることと同じだった。父は「レディファーストっていうんだよ」と教えてくれた。立村先輩がそういうことを、自然にする人だとは思わなかった。
　――かなり「まとも」な教育を受けた人なのではないだろうか。見た目で思いっきり損をしているだけなのかも。
　――もう少し眉毛が太くて、もっと目鼻がくっきりしていて、もっと色が黒かったら。
　――清坂先輩も立村先輩のことを好きになってくれるかもしれないのに。
　梨南は軽く一礼して中に入った。

　なじみある雰囲気。いかにも「教養」の文字をおなかに詰め込んだ感じの人々が、両手で茶碗を抱えてすすっていた。奥で話が盛り上がっているのは、着物姿の女性五人だ。
「今度の舞台なんですけどね……」
「『鐘の岬』を取れたのよ。あぶなかったわ」
「そうよね、早いもの勝ちなのよね。演目っていうのはね。私も本当は『賎の苧環』を狙っていたんだけどね」
　両親に連れて行ってもらうオペラの会場にも、こんな感じの人たちがうろついているものだった。違うのはみな、スーツか光物のドレスが多いことくらいだろう。
「場違いと思ったか？」
「いいえ、全く」
　ほんのり、抹茶の匂いが漂った。
「あら、かあさくん」
　レジの奥の暖簾から「いらっしゃいませ」の言葉をあわてて消して出てきたのは、白髪を黄色く染めた女性だった。年のころ、五十前後。梨南の両親よりは若い。淡い卵色の着物姿だった。同じ点の模様が羅列している、たぶん「紬」と呼ばれるタイプの布だ。
　「かあさくん」と呼ばれたとき、すぐに頭を下げた立村先輩の横顔が翳ったのを、梨南は見逃さなかった。

　漆塗りの赤茶色テーブルに通された。人は見た目に寄らないものだと思った。きちんと立村先輩は梨南を奥の上座にすすめてくれた。自分はちゃんと通路側 に、ちょうど斜めになるように腰掛けた。硬くもないクッションのきいた椅子。納まりよかった。母の実家にも似たタイプがあったっけ。子どもの頃から何かが あると連れて行かれ、お茶をすすったものだった。
「杉本、和菓子食べられるか？」

「はい」
　言葉少なに立村先輩は、扇に記されたメニューを指差した。値段は書いていない。墨で金色の背に「煎茶・抹茶（季節の和菓子）」と記されていた。
「お金ありますか。先輩」
「ないからここに連れてきたんだよ」
　口元をかすかにほころばせ、立村先輩は目を細めた。
「店の二階には、ちょっとした板張りの舞台と、茶室があるんだ。うちの学校の、茶道室のような感じに近いかな」
「舞台？」
　びんとこなくて梨南は問い返した。
「日本舞踊の先生とか、茶道の先生とか、うちの親には知り合いがたくさんいるんだ。そのつながりで、俺はしょっちゅう、人足その一としてこきつかわれるは めになるんだ。ほら、日本舞踊にしろ茶道にしろ、日本伝統芸能って男手がないからしかたなく、俺がひっぱりだされるってわけなんだ」
「二階って、そんな小さな舞台で、発表会やるんですか。お客さん入りきらないんじゃないですか」
　梨南の頭の中には、オペラを聴きに行く時の様子が浮かんでいた。青潟で行われるオペラ公演はいつも満員で、立ち見さえ出る有様だった。父がいい席を取っ てくれるので、梨南は当然のように舞台真ん中のちょうどいい場所で楽しんでいた。しかし、建物の大きさから考えると、とてもだが五分の一くらいの面積しか ないのではないだろうか。
「俺もその辺は分からないけれど、でも派手な舞台っていうんじゃないよ。そうだな、青大附中の体育館をもっと磨き上げて、半分に割ったような感じかな。さっき通ってきた暖簾奥には、エレベーターもあるんだ」
「エレベーターなんて。そんな、人間、足があるんだから階段昇ればいいのに」
　喫茶店にしては大きい造りかもしれないけれど、エレベーターが必要なほどとは思えなかった。立村先輩はそっと見渡して、梨南を手で近づくよう招いた。耳元にささやきたいらしい。顔を見ないように、梨南は向かい側の和服集団に目を向けた。声だけに集中した。
「ほら、日本舞踊やっている人って、足腰が大変な人多いんだよ。それにさ、大道具とか背景用の板とか、とにかく持ってくものが大変なんだ」
「先輩はそれもってどうするんですか」
「もちろん運ぶに決まってるさ。踊る人たちがきれいな着物きて、ずらっと並んでいる陰で俺はずっと、机を運んだり板を出したり、壊れそうになったものを直したり。最後はみんなが帰った後で後片付けするんだ。なんで俺だけこんなことしなくちゃいけないんだって、思うよ」
　話が読めてきた。梨南はこっくり頷いた。
「先輩はお金もらってやってるわけじゃないんですか」
「杉本、そうなんだ。ボランティアなんだ。だから」
　人差し指を一瞬だけ立て、すぐ引っ込め、つぶやいた。

「『おちうど』では、俺はここでただ食いしてもいいって約束になってるんだ。いわば、肉体労働した後の駄賃ってことかな」
　すっと、目の前に煎茶と、濃い緑の草もちが出てきた。絣を纏った女性が、立村先輩の方をにこにこしながら見つめていた。梨南に先に、
「さ、どうぞ。美味しいですよ」
と声をかけた。
「かあさくんは？」
「お茶だけでいいです」
　目を下に向けたまま、立村先輩は答えた。どうも「かあさくん」というのが、先輩にとって呪いの言葉らしい。そのまま「ごゆっくり」と微笑んで、去っていった。ほおっとため息をついて立村先輩は、両手を組んで、初めて梨南の顔を見つめた。
「先にシナリオ、見せてもらっていいかな」
　ふらふらしないで、しっかりと。
　――この人は、場所がまともなところだったら、まとも人間になれる人なのね。
　梨南は改めて感心した。
　――昨日ずっとソフトクリーム屋に入るか否か迷っていたのはきっとそういうことだったのよ。清坂先輩の前でまさか、ゆらゆらした目して、墓穴掘りたくなかったのね。
　ノートをかばんから取り出しながら、梨南は手を止めて尋ねた。
「清坂先輩とは来ないんですか？」
「え？　清坂氏と？」
　戸惑ったように立村先輩は、鸚鵡返しした。意外だったのか、図星をさされて焦ったのかわからない。ちらりと梨南の茶碗に目を留めて、またもとに戻った。
「和風の雰囲気ってさ、人を選ぶだろ」
　すうっすうっと、漆塗りのテーブルを撫でた。あとでかぶれても知らない。
「あまりみんなでわいわいできるところでないし、和菓子ばかりだし、しゃべっているうちにエキサイトすると、迷惑になるだろ」
「清坂先輩もですか？」
　意地悪をしてやろうと決めて、もう一度。
「清坂氏だとさ、感じとしてはやっぱり、ソフトクリームだを食べる雰囲気なんだ。俺、ここだけの話だけど、杉本たちがいた喫茶店のような雰囲気、苦手なんだ。集団でわあっと音が耳元で響くだろ。めまいして倒れそうになるんだ」
「清坂先輩の前で恥をさらすのは嫌ですよね。当然です」
　聞いているのかいないのか、立村先輩は一人語った。
「今日は杉本ひとりだけだから、まあいいかなと思った次第なんだ」

　草もちの匂いは、甘ったるすぎたけれどもお茶ですぐに消えた。今度は番茶とシャーベットを持ってきてくれた。本当にただでいいのだろうか。立村先輩にも お菓子もセットにしている。

ただ食いのくせにこれだけ丁寧に接待してもらっているなんて。日本伝統芸能における男手がいかに貴重かを梨南は理解した。
　オペラとかクラシックコンサートとかだったら、もっと楽だっただろう。立村先輩のように肉体労働でこき使われることなんてないだろう。お菓子を食べて漆塗りテーブルについている客を眺めていると、オペラ会場内の喫茶店と似た雰囲気だということはよくわかった。
「なんか、ここにいる人たちにきれいな服を着せたら、オペラハウスのような感じになりますね」
「オペラ？」
「うちの両親と、一緒にいつもオペラを聴きに行くんです。この前は『マイスタージンガー』に行きました」
「『マイスタージンガー』って、ワーグナーの、ドイツのだよな」
　知っているらしい。口先だけかと思って目をじっと見詰めた。嘘じゃないらしい。茶をすすりながら立村先輩は、真っ正面でかたまっていた。
「ご存知ですか。立村先輩」
「うちの親にビデオで無理やり見ろって命令されたんだ、つい最近」
　単なる押し付けか。けっと笑うところを、なんとなくがまんした。
　ため息をつきながら立村先輩は続けた。
「俺、ドイツ語知らなければよかったって思うんだ」
　意味不明なことを言い出すのはなぜだろう。
「オペラはふつう、外国の言葉で歌います。日本語のオペラなんて少ないです」
「うん、ドイツ語でいいんだよ。ただ」
「たまたまドイツ語のドリルを先生に渡されてはまって解いていた時期だったんだ。ほんのちょっとしかやってなかったんだけどさ。歌の歌詞がみんな、意味ある言葉に聞こえてしまって、意味がいやってほどわかって頭の中がおかしくなりそうになったんだ」
「立村先輩、どういうことですか」
　言っている意味がわからない。くやしいけれど問い返した。立村先輩の目は変わらない。ただ自分のことが情けないと思っているのだろう。ため息交じりだった。
「わかんないよ。俺だってどうしてこうなってしまうのか。知らない言葉だったらいくらでも音楽だけで寝てられるのに、意味のわかる言葉が耳にずんずん飛び 込んでくると、もうだめなんだ。いろいろ考えてしまってどうしようもなく、疲れるんだ。それだったら、日本語だけど古語だから意味不明な、日本舞踊の長唄 とか清元の方が楽だよ。俺、思いっきり頭悪い奴だと思うけど、でもたまにどうしようもなくなる時が、あるんだよな」

　初めて梨南は絶句した。
　立村先輩の語学能力が優れているらしいと、前から清坂先輩から聞いてはいた。でもまさか、わずかの期間ドイツ語を勉強して、あっという間にあの難しい歌詞を聞き取ることができるとは梨南、全くもって想像を絶する事実だった。

　はったりかましているのではと、もう一度立村先輩の瞳を探った。学校にいる時とは違い、しっかり見つめ返してくれた。

結局、立村先輩にはシナリオのことを横に置いてもらった。梨南のオペラ観劇歴を語るはめになってしまっ た。「マイスタージンガー」の言葉がドイツ語のまんま、字幕スーパーなしで理解してしまった立村先輩が、どんなパニック状態に陥ったのか想像つかない。決 して梨南も語学が弱い方ではないのだが、さすがに三日でドイツ語をマスターするなんてことはできないだろう。

「おちうど」二階にある舞台は本当に檜なのか、立村先輩はお茶会で長時間正座を耐えられたのだろうか、とかいろいろ聞きたかった。やっぱり根っこのとこ ろで立村先輩は評議だった。巨峰のシャーベットをしゃりしゃりスプーンでかき回し、ページをめくり始めた。漆塗りのテーブルに、小さな市松模様が掘り込ま れているガラス器にぶどう色のしずくが溜まっていた。

立村先輩の読むスピードは遅い。清坂先輩よりもゆっくりだ。

「完璧だな」

ひとりごとっぽく聞こえた。

「あたりまえです。できない人がばかなんです」

「杉本の案に、プラス、二年女子チームの恐るべきセンスが混じるってわけか。盛り上がること間違いなしだな。一年の評議連中にモデル役を押しつけるだってところがなんともいえない、うまいよ。お見事だ」

「一年の連中は全く手伝う気ありません。私だって手伝われても邪魔です。だったら、無理に手伝わせるよりもやることだけやってもらえたらそれでいいと思います」

話したところで、梨南はかばんの中に入れていた手紙のことを思い出した。

本当は、口で話したほうがいいかもしれないと、ちらっとは思ったのだ。でも、封印蝋まで使ってとじたのだ。奮発したもの、無駄にはしたくなかった。Ｌの文字を表に向け、梨南は両手で立村先輩に差し出した。

立村先輩はまじまじと蝋の部分を眺め、

「あの、これは」

梨南の顔と交互に視線をさまよわせた。

「ラブレターではありません。誤解しないでください。手紙に分かりやすく書いてきました」

勘違いはすぐに訂正されたらしく、立村先輩は手紙をくるくると両手で回していた。封の切り方に悩んでいたらしい。かばんからカッターを取り出し、手の平 に手紙を載せて、器用に滑らせた。下手したら手のひら切って流血になるかも。ならなかった。シャープの先で切れたところを開き、すぐに読み始めた。

――清坂先輩にもらったとしたら、どんな顔するのかな。まずありえないけれども。

読み終えた立村先輩は、しばらく黙りこくっていた。字のきれいさに気付いてほしかった。

全く言及しない。やはり鈍感なのだろう。

「確かにな。杉本は鋭いところついてるよ。よくそこまで考えまわるなあ」

「企画を立てたのが私だと気付いたら、一年男子は絶対動きません。断言できます」
「異常だよ、それって。でもそうだな。二年女子が中心で動いているような感じで一年の評議たちには説明しておいた方がいいかもしれないな。シナリオ渡すなり、モデルになってもらうよう頼んだり、表だったことを清坂氏たちにやってもらえばいいか」
　さすがばかではない。立村先輩。ずっと茶を持ったまま、
「二年三年の指示ということだったら、むかついたとしても骨のある奴でない限り、言い返さないだろうしな」
「そんな奴、一年には絶対いません」
　梨南が逆の立場だったら女子の味方を引き連れてどんなことがあっても阻止しただろう。ばか男子どもにそういうことができる奴はいないだろう。
「最悪の場合は本条先輩の後光を借りるって手もあるし」
　あまり使いたくないことを立村先輩はさらっと言った。
「本条先輩を利用するんですか。立村先輩」
「本条委員長にうっかり逆らったら、何されるかわからないってことくらい」
　立村先輩はノートを閉じた。
「これで、百パーセント、完璧だ」
　梨南に微笑んだ。
「杉本、やっぱりすごいな。俺はこれだけのこと、去年の今ごろできなかったよ」
　細かい打ち合わせをした後、梨南は「おちうど」を出た。まだ外は明るかった。白樺の木を通りながら、立村先輩を見上げると、ふたたび目を見ない、ずいぶん礼儀知らずそうな奴に戻っているようだった。でも、梨南の顔を見る時は、無理して笑ってくれているのがわかる。
　初めて立村先輩と二人きりで話したのも、確かこんな感じだった。
　五月の風がほこりっぽくて、教室に来る前に梨南の髪は砂のムースで固められてしまっていたことを思い出した。あの時の立村先輩も、今日と同じようなことを言ってくれた。

　一年評議委員は最初に、六月開催「一年生学年会」という行事に参加しなくてはならなかった。
　青大附中における評議委員会とは、学級代表者の討議機関ではなく、「委員会」という名のもとにある倶楽部活動だった。教師側にもすでに了解されている。 生活委員会、美化委員会、放送委員会、図書委員会、すべては「委員会」という名を「部」「倶楽部」に置き換えて考えるべき存在だった。ただし前期後期の入 れ替え時期以外は退会が許されない。一応そこが「委員会」たるゆえんだった。希望者が必ずしも入会するわけではなく、場合によってはいろいろな問題が起こ るらしいが、評議委員会に関しては特になにもなかった。ただ評議委員の顔ぶれにより、各年度のつながりは強いこともあれば弱いこともある。二年生たちの団 結力は相当なもので、さらにいうなら本条委員長を代表とする三年生同士も気持悪いくらい仲がよかった。なぜ梨南たち一年生があそこまで嫌悪しあったのか、 よくわからなかった。
　一年生同士で、どういうイベントを行うか考え、案を用意し、二年生の先輩へ持っていってア

ドバイスを受けるという決まりがあった。持っていく一年生は、 一人だけ。別教室で待つ二年生もひとりだけ。どうしてこういうわけのわからない決まりがあったのかわからないが、当時の梨南は真剣にそれを実行していた。

　男子たちは面倒くさいとぶつぶつ言いながら、演劇の案、クイズ大会、物まね大会などとそれなりの案を出してくれた。女子もしばらくは黙っていた。しか し、どの案に絞るかを決める段階で、男子連中がちょこちょこと文句を言い始めた。どうも男子連中もあまりそりが合わなかったようだった。決まりそうになる と、余計なことを言い出して他の連中を惑わせる。梨南もおとなしくしていようと思っていたものの、二時間くらいたっても全く決まる気配がないので、とうと う立ち上がった。

「それでは、演劇とクイズと物まねの決戦投票をしたらいいんじゃない」

　すばやく梨南は演劇、クイズ、物まねのよいところ、わるいところを箇条書きした。

「なんだよ、みんなで真剣に考えてるんじゃないかよ」

「どれもいいところと悪いところがあるし、それは繰り返さなくてもわかるはずだから」

　だらだらした時間よりも、強引だけど多数決を取る。それが一番だと梨南は思っていた。

「それでは、この三点のうち、どれがいいか、一点だけ挙手してください」

　結果。演劇一人、クイズ九人、物まね〇人。

　あっさりとクイズ大会に決まった。その間三分。早かった。

「なら、杉本が決めたことだから、おまえが二年生の先輩に持っていけよな」

と言い残し、さっさと教室を出て行った。また女子たちも状況が決したと見て、それぞれ用事を思い出して帰っていった。残されたのは梨南一人だった。待っている二年の先輩の下へ行かなくてはならなかった。

　――クイズ大会の方がみんなで参加できるし、退屈しないですむし、仕込みの時間もかからないものね。　　二年生の先輩というのが立村先輩だった。軟弱そうで、自分から積極的に会話に加わらないタイプに見えた。当然不細工の極地であることは、言うまでもない。

　そんなばか男と一対一で離さなくてはならないこと。寒気がした。

　結局、二年Ｄ組の教室で文庫本を読んでいた立村先輩の元に行き、どうして自分がこなくては鳴らなかったのか、どうしてクイズ大会を案にしたのか、説明するはめになった。

「どうして、杉本になったんだ。他の男子とか、自分がやるとか言わなかったのか」

「はい。決まったら、すぐ帰りました」

「とんでもない連中だな。大変だったね。でも、杉本で正解だったと思うよ。お疲れさま」

　机に向き合って、緊張したままずっと説明した。時には黒板も使った。立村先輩もところどころ質問しながら、穏やかな表情で梨南の言葉を聞いてくれた。な ぜか、しゃべりつづけるのが立村先輩相手だと苦痛でなくなった。会話らしい会話はほとんどなかったはずなのに、うなづきながら立村先輩は何度も繰り返し た。

「すごいな、一年だろ、杉本は。そこまでしっかりしている奴、俺の代にはいなかったよ。なんていうかさ、この一年生学年会、去年はコマーシャルの物まねー 発芸大会をやったんだけど、確かに盛り上がりはしたんだ。ただ、手伝ってくれたのはほとんど三年の先輩たちだった。杉本の

ように完璧な計画、立てられな かった」
　そして、最後に一言、聞こえるか聞こえないかの声で耳元にささやいてくれた。
「やはり、来るべき人がくるって、ほんとだよな。俺も杉本くらい頭がよければって思うよ」
　生まれて初めてだった。
　梨南を「能力」で認めてくれた男子という存在は。
　女子はみな、小さい時から「梨南ちゃん頭いいね」「梨南ちゃん才能あるね」と誉めてくれた。「可愛いね」とか「性格いいね」とは誰も言ってくれなかった。それが誉め言葉とは思わなかった。
　ありのまま、梨南を女子たちと同じ目で見てくれた。
　ありのままのお前が好きだなんて、白々しいことは口にしないけれど、梨南が一番誉めてほしかった言葉を、立村先輩は知っている。

　土日が入ったこともあり、シナリオをすべて方眼紙に書き出してコピーするところまで自宅で終わらせた。あとはコピー室で評議委員人数分用意すればいいことだ。
　日曜の夜には、清坂先輩から
「コーディネイト、完成したよ！」
と明るい声で電話がかかってきた。梨南の知らない間に、二年女子評議四人でもって丹念に選んでくれたらしい。土曜日の午後は洋服店をあちらこちら尋ねて値段を確認するのに忙しかったらしい。
「女子五人分は完璧なんですか」
「問題は男子よね。それでね、立村くんとも話していたんだけど各クラスの洋服テーマを『四季』に分けて、Ａ組からＤ組まで、現してもらったらどうかなあ。たとえば冬はセーターとブーツと冬服にしてみたりして」
　今は五月の末だ。着る奴は暑くて死ぬぞと梨南はつぶやいた。
　言わないのは相手が清坂先輩だから。
「Ｂ組は順番でいくと夏の組み合わせですか？」
　どうせ梨南はモデルにならない。関係ないから気軽に尋ねた。
「そう、男子のブレザー下なんだけど面白い案が出てるのよ。ただ着るのが新井林くんなのよね。説得するのは骨かなあって思うんだけどね」
　説得するのは立村先輩、本条先輩だ。関係ない。
「待っててね。杉本さんの期待を絶対に裏切らない内容にするからね」
　清坂先輩はふと、言葉を止めた。
「あのね」
　クリームを入れた風にまろやかな声だった。ちょっと苦味のあるコーヒーっぽい清坂先輩の口調だが、なぜか甘かった。梨南は白砂糖を好まない。飲むなら絶対ブラックだ。
「なんでしょうか」
「この前、立村くんとどこで話してたの。ううん、変な意味じゃなくって、杉本さんが立村くん

にシナリオを見せるために来たでしょ。私いなかったから、もし何か困ったことあったら手伝おうかって思って探してたんだけど、いなかったから、心配してたんだ」
「わざわざありがとうございます。最初、図書館で打ち合わせするつもりだったんですけれども、いやな男子がたくさんいたので、立村先輩が、らしくもなく気を遣ってくださったんです。別のところに行きました」
　場所は『おちうど』と口に出しかけた。さすがに梨南も気を利かせた。立村先輩だって思いを寄せている清坂先輩に、別の相手とふたりっきりになったことを 知られたくはないだろう。顔さえよければ梨南とまともに会話のできるだけの能力を持っている人だ。努力は認めてあげたい。
　かなわない恋はあきらめろという正しい助言もしてあげたい気がする。
「別のところって？」
　濃いクリームをたっぷり注いだような、たぽっとした声。沈んでいた。
「近くの喫茶店に連れていかれました。たぶん、清坂先輩とふたりになる前に練習したかったんだと思います。努力は認めます、私、練習台になりました」
「れ、練習台って、何よそれ！」
　いつものことながら清坂先輩は笑い転げた。カップのコーヒーをぶちまけてしまったように。
「清坂先輩と、目と目を見て話ができるように、だと思います。めずらしくその時立村先輩は目をそらさないで、真っ正面で話してきました。いいリハビリだと思います。すごく努力していたのは認めるので、清坂先輩も少し立村先輩のことを大目に見てあげてください」
「杉本さん、もう、最高、私もうがまんできないかも。ごめんね、切るね、笑い死にそう！　じゃあね」
　たぶん受話器を握り締めたままあえいでいたのだろう。どこが受けたのかが梨南にはよくわからなかった。自分で感じていたことをそのまま女子に伝えるとみな、喜んでくれる。今まで男子がかわいそうだと思ったことはないし、手伝いたいとも感じたことはなかった。
　でも今回だけは、まともに「マイスタージンガー」の話をしてくれた立村先輩を応援してあげたかった。梨南の能力を認めてくれた人にはきちんと心を込めてお礼をするのが当然だ。
　目には目を、歯には歯を。原則だけど、善意にだってこれは応用できるのだ。両親がいつも教えてくれたことだった。

――良いことすると気持ちもすっきりするもの。正しいことを口にするとその分きちんと自分に帰ってくるもの。だから当然、人には正しいことをきちんと教えてあげなさい。それが梨南ちゃん、あなたの義務なのよ――

　月曜日。
　いつもなら足の重たい通学路も、用事がある朝は早く着く。二年生の教室へたったと昇っていった。シナリオのコピーを渡さなくてはならない。七時五〇分。 梨南が到着した時、教室には羽飛先輩と馬鹿話している清坂先輩しかいなかった。なんでふたり一緒なんだろう。やはりいろいろ考えるものがあるのだろう。こ くっと頭を下げ、あえて羽飛先輩を無視して清坂先輩に近づ

いた。いきなり電話を切ってしまったのが申しわけなかったのだろう。目を大きく見開いて、おいで おいでをしてくれた。

「立村くんね、暑いのが苦手なんだって。この前長距離走らされたからあれでまた、熱出したみたいよ」
　くすりと秘密めかしてつぶやく清坂先輩。どことなく髪のつやが異質だった。無理やり光らせている。小学校時代、学期末に磨いたどろっとしたワックスを思い出した。。黒髪なのにローラーの白線らしきものがが目立つ髪。気になった。
「清坂先輩、シャンプー替えたんですか」
　何気なく尋ねてみた。
「すごいね杉本さん、よく気付いたね」
「ふつうの光り方じゃないですから」
　おかっぱ髪という言葉が似合わない。アイドル歌手の真面目な雰囲気の子がこんな感じで固めている。
「実はね、トリートメント、替えたんだ。ほら、鈴蘭優のコマーシャルでやってる、『髪に五月の風をはらませて』とかいうの。使ってみたら本当に合ったみたいなんだ。はやってるから試すとみんなばかにするけどね、たまには貴史のお勧めも悪くないってことかな、ね、貴史」
　あえて尋ねるのはなぜだろう。羽飛先輩、またの名ローエングリン様はネクタイを取っ払い、紺のランニングを襟元から覗かせ、
「優ちゃんの勧めるもんが間違ってるわけないだろ、美里」
　ちゃん付けで呼ぶのがすごい。
　梨南はゆっくりと羽飛先輩の額を見つめ、鼻、口とずらしていった。顔に文句の付け所はない。アイドルファンであることを顔のいい男子は、ふつう隠したが るものだろう。一年Ｂ組でそんなこと口にしたら、さっそく物笑いにされるだろう。二年Ｄ組の日常は、梨南の知っている場所ではない。
「なあにが優ちゃんよ。あんたって、変なとこでロリコンなんだから……」
　言い終わる前に羽飛先輩は風を切って清坂先輩の頬に手を上げようとした、
　微妙なところで止めて、にやりと口角を上げた。
「俺は美里みたいに同級生好みなんかじゃねえんだからな」
　手加減したのは男子の腕力があることを気付いているからだろう。しかし清坂先輩は全く自分の意志、赴くままに行動していた。羽飛先輩の頭をひっつかんでぽんと投げ出した。よろける羽飛先輩は、かろうじてバランスを取り、とんとんとんと片足飛びした。、
「こいつ本気出しやがったあ！　やっぱしなあ、うっしろめたいこと、あるんだもんなあ」
　不思議なことに怒らない。やりかえそうとしない。顔はまだへらへら笑っている。きれいな顔立ちそのまま崩さないように。
「なにえらそうなこと言ってるのよ、ばあか」
「美里、無理すんなよ。「服装の乱れが心の乱れ」ってな、胸の真ん中、ほら開いてるぜ」

両手で胸のボタン部分を手探りし、うつむく清坂先輩。梨南の見たところしっかり留まっている。はったりだ。一秒ずらして清坂先輩もはったりかけられたと気付いたらしい。
「貴史！　ちょっと待ちなさいよ！　あんたって何考えてるわけ？　変態、すけべ！」
「ほおら、意識してるくせになあ、顔に出てるぜもろにな」
これ以上いても清坂先輩と羽飛先輩の漫才を見せ付けられるだけだ。二年Ｄ組の教室にも、ひとりふたりと「おはよう」の声が響き始めた。まっすぐのぞいた 窓には、中庭にそびえている胡桃の木が揺れていた。人がだいぶ揃ってきた。とりあえずは立村先輩に渡すようお願いして、梨南は教室を出た。
――清坂先輩も大変なのね。トリートメント替えて一生懸命、羽飛先輩に振り向いてもらえるよう努力しているのに、あんなにからかわれてたらたまったもんじゃない。羽飛先輩だって清坂先輩のことを名前で呼ぶくらいだから、思いっきり好きなはずだわ。
――ただ、鈴蘭優のファンだとは思わなかった。
――たぶん、はるみのような感じが好みなのね。なら清坂先輩の思いは届かないな。
もうひとりの、かなわない恋の相手を思い出した。まだ教室にはいない相手だった。
――立村先輩はアイドルで好きな人いるのかな。
――清坂先輩に似たアイドルっているのかな。芸能人でもいいわ。今度うちにある古い映画のパンフレット、開いて調べてみよう。届かない思いに悩む立村先輩に、プレゼントしてあげるのがいいかもしれない。喜ばせてあげたいな。

のどかな二年Ｄ組が光ならば、影の空気ただよう一年Ｂ組。
いつものことながら梨南が教室に入ると男子たちのじっとりしたまなざしが飛んでくる。気に入らないなら無視すればいいのだ。存在を消してしまえばいいのだ。それができないのが、男子のおばかなところである。
女子にはちゃんとおはようを言い、前の席が空いていることを確かめた。向こう側にいる男子席が空っぽであることも。たぶん、ぎりぎりに一緒にくるかするのだろう。現在一年Ｂ組においてカップルと言われるのは、男子評議ともうひとり、鈴蘭優に似た髪形をした女子だけ。
決して触れてはいけない禁断の言葉。
なぜか男子たちも、はるみに対しては悪口を言ったりしない。
新井林の力だろうか。にらみだろうか。
――腕力で頭を下げさせる最低な人間だものね。
――本当にばかよみな。
花森さんからもらったリボンを腕の時計に軽く巻きつけた。このくらいならば校則違反にはならない。やはり似合うと自分でも思う。お礼を改めて言おうと思ったが、今日は欠席らしかった。

一時間目の授業準備は頼まなくてもさっさと新井林が片付けてくれる。意地なのだろうか。梨南には一切クラスの仕事に触れさせないようにしようとする姿は こっけいだった。清坂先輩が立

村先輩と楽しそうにおしゃべりしながら教科書を運んでいるのと違う。一度、きちんと分担のけじめをつけるべきだと梨南は思っ ていた。最初から新井林が男子評議として、クラスの仕事を片付けたいのならばそれはそれでいい。ただ、評議委員会関係には一切口を出さないでもらえるのな らば、さらによい。
　ふだんならばそれがベストだ。しかし、前の日に清坂先輩と話をした通り、全校集会に関しては絶対に新井林の協力が必要である。幸い梨南と組になってしゃ なりしゃなりと歩いてもらうわけではない。奴の不快感持たない女子とくんでもらえばそれでいいだろう。指名しろと言っておけばいい。
　起立、礼、着席、と号令がかかる。全部新井林のどすが効いた声だった。いつのまにか、決まっていた。

「欠席は……また花森か。全く困ったもんだなあ」
　陰で「男と寝てるんだぜきっと」とへらへらしながらつぶやく声がする。失礼だ。自分が何を言っているかわかっていないのだろう。溝口先生もこういうこと こそ注意すべきなのに、全くチェックをしようとしない。もしかしたら彼氏の所に泊まっているのかもしれないけれど、花森さんは自分の意志でもってきっちり と行動しているだけのことだ。自分の意志もなく、新井林の顔をみながらへらへらしている男子たちにくらべたらはるかに人間だ。
　梨南は心の中で言葉を始末すると、すぐに挙手した。
「溝口先生、よろしいでしょうか」
　まゆ毛を吊り上げそうになりながら、溝口先生は垂れた一本髪を摘み上げた。
「どうした杉本。評議委員の発言か？」
「はい、手短に終わります」
　パターンは決まっている。「またあの女かよ」「死ね」「ひっこめ」
　耳慣れた言葉に免疫はついている。
　しかし、もう一つの言葉に梨南は慣れていなかった。
「二年のばかにくっついてるばか女がか」
　発信源は同じく、同じバッチをつけた男子より。
　やらなくてはならないことを片付けたい。だから、噛みつかなかった。

「今回の六月全校集会の詳しい予定が決定しました」
　切り出したが誰も聞いている奴なんていない。男子の方がまだ罵声を投げかけるだけ、反応を持っているのだろう。女子は隣りの子に手紙を回し合っている.スパンコールを交換しあっている。
「一年生の評議委員が主催する『クラス対抗・青大附中ファッションプライス・マッチングゲーム』について説明します。ほとんどの内容は二年女子の先輩が仕切ってくれました。一年の評議が使い物になりませんでしたから、しかたないことです」
　言葉を切って、第一の敵、溝口先生を見つめた。がむっと、口元をかたっぽあげて、続けるよ

うに指示された。言われなくたって梨南は続ける。
「青大附中の制服を、一年の評議委員が独特の着こなしで、春・夏・秋・冬のイメージで着てもらいます。この組み合わせも、二年女子先輩にお願いしたものです。もししないということでしたら、二年、三年の評議委員の先輩から怒られること確実です」
　後半は新井林のみに伝える言葉である。横目で奴の顔をうかがうと、反応はわずかながら、ある。
「もっと安心させることを言います。私は、この企画に徹底して裏方に回ります」
　さて、どうだろうか。
　反応はちょっとだけ、増えた。
　ついでに新井林のお相手もチェックした。自分の席が空いているから目立つ。髪形はやはり丸くまとめたお団子「鈴蘭優」まねっこだ。しかし瞳は机を向いたままだ。梨南を見るのが怖いのだろう。立村先輩にしたように、ぐうっと覗き込んでやりたかった。
「そこで、この場で決めたいことがあります」
　正面の壁には、先週貼り付けた直筆の説明書が貼りっ放しのままだった。男子が誰もはがそうとしないのは奇跡に近い。いろいろ事情があるのだろう。
「私の代わりに立つ、女子のモデルが一人必要です。この中で誰か立候補する人はいませんか」
　いるとは思えない。この辺は読み通りだった。ざわつく教室の中で、明らかに新井林の目がひとつに向いた。黒髪のお団子頭に向いた。見つめるまなざしの色は、教壇から見下げる梨南にも読み取れた。たぶん二年Ｄ組の立村先輩か清坂先輩だったら納得できるようなもの。
　男子・女子の組み合わせとして考えるならば、梨南は許せる。
　そうだ、立村先輩と清坂先輩のバランスの悪さに比べれば。
　はるかに。
「先生、いいっすか」
　いきなり手を上げた奴がいた。ずっと意識をそちらに向けていたから先生よりも先に気がついた。
「よし、新井林」
「今の話だと、俺が一年Ｂ組の評議だから、当然モデルをやらされるってことだから、俺が相性の合う奴を指名したいんですが、いいっすか」
　梨南は動かなった。声は耳を通りぬけていく。頭の中のデータが狂いそうな予感だった。
「ほう、どうした」
「俺は相手が佐賀だったら、受けます」
　きいきいとねずみの泣き叫ぶような声が響く。ただ女子が騒いでいるだけだと、周りの人は言うのだろう。聞こえるのは女子だけだった。男子の空気は一切、動かないまま。誰もがびしっとかたまったままだった。羊羹の表面を見ている、そんな感じだった。
　はるみを見下ろした。頭は動かない。びくりともしない。
「ほお、佐賀か。どうしてだ」
「女子の中で唯一まともだからです」

　新井林はゆっくりと、全員に聞こえるよう発音した。
「このクラスの女子は、全員、狂ってるからです」
　男子が、息を合わせて、「っせーの一で」とささやき、「うん、うん」と頷いた。
　示し合わせているのはどういうことなのだろう。
　どこかで計画が漏れたとしか考えられない。
　教壇の上の梨南を追い詰めようとする、男子一丸の意志だ。
　気付かないほど梨南はばかではない。
「新井林、あやまれ。何はともあれ、お前はクラスの女子を侮辱してるぞ」
「じゃあ、なんですか。佐賀に対するＢ組女子のシカトのしかたはなんだっていうんだ。気付かないのかよ！」

　阿鼻叫喚阿鼻叫喚。
　その後の教室は溝口先生も押さえようがなかった。とりあえず梨南の決めたいことは決まったので、さっさと教壇を降り自分の席に座った。はるみはうなだれ たままだった。発作的にお団子三つ編みをひっぱって解いてやりたい気持ちにさせられた。何を考えているのかわからない。しかし、梨南の直感は決して間違っ ていないとも、確信させられた。今まで「梨南ちゃん梨南ちゃん」とぶりっこ声で呼びかけてきたのも、意味もなくかばおうとしたのも、立村先輩との思いを匂 わせるような手紙も。
　そしてさっき、新井林がつぶやいた言葉。
　――二年のばかにくっついてるばか女がか。
　これはわなだ。梨南を陥れようとする二人組だ。
　もし新井林が立ち上がって、「俺はモデルなんかやるもんか！」とわめきだしたら、本条委員長の名前を出して頭を下げさせるつもりだった。たぶん誰も女子 は立候補しないだろうと決めてかかっていたからだった。もし花森さんがいたら、梨南から頭を下げて、モデルをお願いしようと思っていた。クラスで一番の華 を持つ彼女なら、きっとセンス良く着こなしてくれるだろうと確信していたからだった。
　まさか、佐賀はるみを指名するとは思わなかった。
　新井林があっさりと飲むとも、思わなかった

　――私は戦う。
　喧喧諤諤わめき散らす声と、溝口先生の怒鳴り声が錯綜する中、梨南ははるみの頭が新井林の方を向くのを見た。首だけ、ゆっくり、鳥のように動かして。

　他のクラスはＢ組以上に炸裂することなく、モデルを決めることができた。評議委員同士では組みたくないという声もあって、男子評議がお気に入りの女子をひとり、指名するという方式を取った。
　女子評議は司会進行に二人、問題を読み上げるのが梨南ともうひとり。
　出番はほとんどない。

　いささかフェニズムに反する結果だった。
　梨南としては別にそれでもいいと思っていた。どうせ出たがらない相手を無理やりひっぱりだしたってろくなことにはならないし、二年生の女子がほとんどま とめてくれるのだからかまわない。機嫌よく梨南の読み通りに動いてくれればよかった。梨南の仕事は二年評議委員との打ち合わせだけ。女子と話し合いをし て、二年男子に肉体労働のお願いをすればよかった。
　本条委員長は納得顔で
「あ、そっかそっか。立村から聞いた。うんうん」
と頷くだけだった。会話を求めようとしないのは非常識の極み。
　梨南はさらに言葉を要求した。
「何を聞かれたのかを、理解するために教えてください」
「たしかに杉本はなあ。立村が絶賛するだけあるぜ。本当に。君は単に『さわりごこちのいい胸をもった一年』じゃなかったんだなあ」
　梨南は本条委員長の顔を見上げた。目鼻立ちがくっきりしているまともな男の顔があった。自分の胸をもみながら考えた。
　――贅肉なのに。
「そういうことしか考えられないのですか。本条先輩」
　梨南は、めがねを外して拭こうとする本条先輩を、生の目でにらみつけた。
答えは簡単に帰ってこなかった。その辺が立村先輩と違うところだ。二歳違いは「男」に近いからだろう。全身に威圧感がぬったくられているせいかもしれない。青大附中きってのプレイボーイ、本条委員長には逆らえない迫力がある。
　梨南が「いざとなったら本条先輩の命令を利用しよう」と思っていたのも、そこにある。
　席についた後、本条先輩のところへ立村先輩が強い口調で抗議しているのが聞こえた。日本語化していない。後ろに回って、本条先輩の耳もとにささやいてい た。梨南には聞こえなかった。ただ本条先輩の表情がだんだんにやけてきたのと、立村先輩がかちんときた表情でもって口を尖らせているのが気になった。
　――男子は、顔で人格まで判断してはいけないっていい例だわ。
　――せっかくいい顔を持っているのに、本条委員長は贅肉好きな変な先輩。

　立村先輩がどのような命令を、一年評議委員に下したのかは聞いていなかった。とりあえず新

井林は納得しているようで、素直にはるみと教室の隅で相談し あっている。いちゃついている、というわけではなかった。放課後はふたり落ち合って帰るようだけれども、特別に手をつなぐとか、笑顔で語り合うとかの場面 は一度も見たことがない。新井林なりにはるみを誘い、座ったまま事務的に語り合っている。
――放課後、来い。
――うん、わかった。
――ひとりでだぞ。
――はい。
耳をそばだててみると、ずいぶん男として堂々とした言い分だ。顔と態度と言葉がつりあっている新井林は、梨南とのつながりさえなければ当然学校一の人気 者だっただろう。はるみとお似合いのカップルといわれても当然だろう。実際、一年Ｂ組の男子、および評議委員男子一年からはきっちり支持されている。はる みに当たらず触らずの態度を続けているのはむしろそのせいなのだろう。逆らったら、殺される。わかっているのだ。
問題は、逆らっているのが梨南と女子一同だということだろう。

当然のことながら花森さんをはじめとする女子グループはいい顔をしなかった。
「私たち、いじめたりなんかしていないよね」
梨南の席にまた寄ってきて、話し掛ける花森さん。今日は金の小指大ハート型ペンダントを首筋に覗かせていた。近所の露天で、彼の名前と一緒に彫ってもらったのだという。
「いじめてなんかないよ。だってさ、もし私たちが佐賀さんに文句言っていることがいじめだったら、男子たちが杉本さんに対して『くたばれ』っていう方が断 然、そうだと思うもの。あたりまえ。むかつくったらないよ。そのくせ、新井林の彼女だってだけで、佐賀さんには親切。
そりゃ、佐賀さん可愛いよ。ぶりっ子 してるからなおさらね。でも、許せないよ。杉本さんの許可を得ないで新井林と付き合って、こっそり陰口叩くなんてね」
「勝手にすればいいのよ」
曇り空の五月。梨南は冷たく、見上げた。

ひとりで調べるのは大変だ。
どうして、ばれているのだろう。
――二年のばかにくっついてるばか女がか。
佐賀はるみ指名が行われた朝の会で、発した新井林の爆弾発言。
立村先輩と二人で「おちうど」に入った日のことを意味しているのだろうか。それしか原因は思いつかなかった。二年Ｄ組に行って立村先輩を迎えに行った、あの時に誰かが梨南と一緒にいるところを見かけたのだろう。
白樺林を通り抜ける間、立村先輩とはほとんど口を利かなかった。
誰かがつけてきたらすぐに振り向くはずだ。立村先輩がぼおっとした性格だとしても、青大附中の人間を見かけたらもっと反応するだろう。

あと考えられるのは、一度図書館に立ち寄ろうとした際、、立村先輩がさっときびすを返したことくらいだろう。一年の連中がうろついているから別の場所にしよう、といわれた記憶あり。たまたま一年のばかどもが梨南と立村先輩を連れて行ったところを見たのかもしれない。
別に梨南は悪いことをしたわけではないし、有意義なひと時だったと思っている。新井林が鬼の首を取ったように大騒ぎしても、怖くなんてない。きっと梨南の弱みを握ったと勘違いしているのかもしれない。
「二年のおばかな立村先輩に恋した嫌われ女杉本梨南」について、また評議同士で情報を流したのかもしれない。
まったく、怖くなかった。
顔と頭が救いようのないくらい崩れている立村先輩とだったら、梨南はきらわれもの同士ゆえにくっついて当然と思われているのだろう。思わず笑った。
――あいつらは、人間を顔でしか判断していない。
――きっと新井林は顔面ばかりなめているから、はるみに参ってしまったのだろう。
見るのが楽しい顔、不愉快な顔と二種類に分かれている。本条先輩、羽飛先輩が前者だとするならば、立村先輩はあきらかに不細工に入るだろう。梨南の美意識が正しければと信じる。
しかし、人間は顔ではない。
いきなり梨南の贅肉について、太りすぎといわんばかりの発言をした本条先輩、清坂先輩の思いに気付かないで、さんざんからかってばかりいる鈍感な羽飛先輩。顔も頭も最高なのに、どうして梨南とは会話が成り立たないのだろう。
――人間を顔でしか判断できないかわいそうなな奴らよ。同情するわ。

はるみのことが絡むと、少々事情は変わってくる。
梨南とはるみが同じ小学校で、いつも「梨南ちゃん梨南ちゃん」とくっついてきていたことを知っている人は多い。同じ青大附中に進めたのは梨南を追いかけて勉強したはるみの努力、ともいえる。
現在の状況ははるみが自分で生み出したものだ。
はるみが新井林とつきあい始めたということにより、梨南が激怒したという、単純すぎる結論までついている。
男子連中ははるみの行動を「当然のこと」とみな支持している。
女子連中は梨南の怒りを「当然よ」と受け入れている。
結果、梨南がはるみをシカトしているというように見えるらしい。
恋人たる新井林は完璧にそう思っているだろう。
言い訳する気はない。勘違い野郎新井林健吾の思い込みを訂正してあげるほど、梨南は暇ではない。言葉が惜しい。
まだはるみは「梨南ちゃん梨南ちゃん」と懸命に声をかけてくるけれども、梨南の怒りに反応して、なんとかクラスの輪に戻してほしいというぶりっこのしぐさにすぎない。
梨南にはよく見えていた。

だから許せなかった。
――新井林を、よりによって。
――私ははるみを許さない。

青潟には梅雨時期がない。一応五月雨のように冷え込むことはあるけれども、基本としては六月もまだ晴れやかな季節だ。たまに夕立が来る程度だろうか。夏服仕様ということで、グレーチェックのブレザーを脱ぎ、梨南は黒いレースの肩掛けをまとって学校に通った。
大丈夫、校則違反ではない。色物だったらまずいけれども、かるく羽織る程度のものは地味な色ならば、許されるのだ。
梨南の髪の毛は黒く太く長い。ポニーテールでまとめて顔のラインをはっきりさせると、擬似セーラー服に見えて、自分なりに似合うと思う。
ブレザー制服が似合わない顔なのかもしれない。
青大附中向きでないのかもしれない。
「梨南ちゃんって、やはり黒とか茶とか、上品な色が似合う子なのよね」
母が毎朝、髪を結い上げながら微笑んだ。三角ストールの端っこを結び、母から借りた透明リップクリームを塗りなおした。清坂先輩からもらった、爪磨きで丹念に磨いた。見つけた母が自分のも分けてくれた。
――出陣準備、完了。
――本日は私の一人舞台よ。
鏡に映る自分の姿は、梨南の好みに段々近づいてきた。胸のぜい肉がもっとうすくなれば完璧なのだけれども。今日のおしゃれスタイルは、オペラを聴きにいく時の格好をできるだけ取り入れたかった。梨南の、完璧な自分を見せたかった。
そう、今日は一年の仕切る、全校集会『クラス対抗・青大附中ファッションプライス・マッチングゲーム』の日だった。

学校に着くなり、まずは立村先輩の教室に向かった。厳密にいうと清坂先輩も一緒の、だけれども、やはり先輩は敬わなくてはならない。八時になったばか り。二年Ｄ組の教室にはかなり人が揃っていた。扉から覗き込んで立村先輩を探すが、話をする先輩は誰もいなかった。立村先輩がいないわけがない。きっと、 三年の教室に行ってるのだろう。本条先輩に挨拶しているのかもしれない。
「あれ？　ーＢの杉本さんでしょ？」
聞きなれない女子の声がした。振り向くと、ふんわりしたショートカットの二年生女子が、やんちゃそうな顔をして立っていた。完全にブラウスとリボンのみの夏服姿。かばんと一緒に雑誌を二冊、抱えていた。近くのコンビニで扱っているような少女向き週刊誌だった。
「はい。どうして私のことを知っているのですか」
「杉本さん有名だよ。うちのクラスでは。この前も立村に会いに来てたんでしょ」
なんと、この先輩、「立村」と呼び捨てにしている。

「評議委員会の先輩です。立村先輩は」
「あの昼あんどんが、とうとう彼女作ったかって大騒ぎだったんだよ。あ、でもそれって杉本さんに失礼だよね。黒いストール、大人って感じ」
　ファッションセンスは人並みらしい。この先輩も。
「立村先輩の関係者ではありません」
　彼女、という響きには抵抗があったので答えた。
「関係者、わああ、笑える。そりゃそうだよね。あいつよりもっとましな奴いるよねえ。あ、そうだ、前からみんなで思っていたんだけどね」
　突然、ストールの真ん中をつんとつついた。ちょうど両胸の間にあるくぼみのところだった。下手に動くとボタンが外れそうになるので、ストールで隠すようにしていた。空間がなにげにあるので、つんと刺さった。
「杉本さん、ブラ、してる？」
「なんですかそれは」
　ブラジャーのことを言いたいのだろうか。してるわけがないので梨南は首を振った。
「してません。していたら呼吸困難になります。」
「それはやばいよ。絶対やばい！　だって美里のように、三々九度の盃程度しかない胸ですら、動かないようにってみんなかためてるんだよ。杉本さんくらい立派だったら、絶対しなきゃだめだよ。呼吸困難になるよりも、立村の『おかず』になるほうがもっとまずいよ」
「『おかず』ってなんですか。立村先輩は肉料理より魚料理の方が好きそうです」
　前「おちうど」で話した時に聞いた立村先輩の食生活を覚えていた。おかしいことを言ったつもりはない。ひざをかかえうずくまって笑うのが理解できなかった。梨南は見下ろした。
「杉本さん、狙って言ってないよね。美里言ってた通り、杉本さんって最高だよね。わあ、でも、ほんっとにまずいよ。これね、先輩が後輩をいびるってことじゃないから、説明するから」
　先輩はさっそく、廊下に梨南を引っ張し、手元の雑誌をゆっくり広げ始めた。窓辺にはななかまどの木が、ささやかな若葉をゆらして光っている。
　――風光る、か。
　梨南はぼんやりと思いながら先輩がめくるページを見下ろした。

「つまりね、杉本さん」
　目が清坂先輩よりも一回り大きくて、口がちょこっと大きい。梨南よりも胸の贅肉は落ちているけれども、歩いても動かない。たぶんブラジャーで押さえているのだろう。よく言葉がこれだけ出てくるもの。
「まず基本は、中学生男子の第二次性徴についてなんだけど、保健体育で知ってるよね。そういうのは」
　にやりと笑いながら、先輩は続けた。
「つまり男子は、エッチなことを観たりきいたりやったりすると、自動的にあそこが大きくなったり興奮したり押し倒したりするもんなんだって。でもふつうはきっちりと押さえてるんだって

。理性でね」
　すでに保健体育の知識は得ていた。百科事典で全部読んでいた。妊娠、出産、中絶の知識まで完璧だ。
　なんでこの人はわかりづらい雑誌で説明するのだろう。
　女子でなかったら、自分から説明してあげたのに。
「立村先輩も大変なんですね」
　冷静につぶやいた。
「でね、この前杉本さんが来た時、立村の目線がおかしかったのよね。ううん、前からそうだったんだけど、目がふらふらしているというか」
「礼儀知らずなだけです」
　きゃははと、先輩はさらに声を立てて笑いこけた。
「一理あり！　あいつは目を見ないところがあるからね。美里や私を見ている時と、杉本さんを見ている時とはあきらかに、位置が異なっちゃってるの。杉本さんと立村がいなくなったあとで羽飛と意見を交換したんだけどね」
　先輩は自分の胸をつんつんとつついた。
「杉本さんの胸が揺れているのと一緒に、あいつの視線も動いてるのよ。いやあ、立村ってわかりやすいよなって、笑っちゃった。で、必死に目をそらしてる の。単なる礼儀知らずなんじゃないよ。あいつほど人の顔色うかがって気を遣う奴いないもの。きっと杉本さんとしゃべった日の夜は、眠れなかったと思うんだ よなあ。目に胸が焼き付いて」
「立村先輩やせすぎてるから太りたいんでしょうか。」
　清坂先輩にもっと認めてほしいんだろう。男としての魅力を磨きたいのだろう。梨南の記憶している「ローエングリン」様は、男としての筋肉がきっちりついている人だった。梨南のようによけいなところに肉がついているのが、男としてうらやましかったに違いない。
「杉本さん受け狙ってるわけないよね」
「はい、私、胸に肉がつきすぎているので、減らしたいと思ってます。それと、さっきの『おかず』ってなんですか。立村先輩、やはり少し筋肉をつけないといろいろ、困ると思うんですけれど。食べる量も少ないんでしょうね」
　梨南なりに考えたことを、説明した。下の歯がきらきらしているので妙だと思ったのだが、どうやら歯の矯正をしているらしい。笑うたびに光る。
「杉本さんと話してると飽きないよ。あのねえ、『おかず』ってのはねえ。毎日の生理現象を美味しくいただくための……」
　言いかけたところで、ひょいと後ろに人影が見えた。
　逆光で、顔がはっきりしない。
「なあにが『毎日の生理現象』だ、いったい」
　――ああ、『ローゼンカバリー』様だ。
　顔を浅黒くした状態で立村先輩は立っていた。髪は自転車をこぐ勢いで乱れていた。耳に指先でひっかけながら、かばんを下げていた。

「それに、この怪しい雑誌はなんですか。南雲に言いつけようか。規律委員様にさ」
　怒ってはいない。ただあきれているだけだ。
「南雲くんはこういうのを、すでに実践している人だから没収した後、私に交渉するよ。譲ってくれないかってね」
「いいのかそこまで言って。それより杉本、いよいよ今日だな」
　だんだん目が慣れてきた。光がちらつく窓辺で、立村先輩は梨南を見つめた。決してストールの結び目ではない。しっかりとした瞳でだった。
　きちんとリップクリームを重ね塗りしてきた。梨南は背すじを伸ばした。
「はい。五時間目。任せてください。去年よりもずっといい出来にしますから」
「うん、それは全く心配してないよ。本条先輩も安心していたし。それより」
　間に挟まっているショートカットの先輩を、立村先輩はあっさり無視していた。しかたなしに雑誌をかばんにしまいこむが、全く離れる気配なしだった。
「もし、新井林になにか言われたら、今度はすぐ俺に報告しろ。これは命令だ」
　自分の手が思わず結び目にいった。握り締めた。どきどきするとすぐ、胸と胸のくぼんだところに手をやるのがくせだった。
「新井林に、ですか」
「そうだ。今日一日は特に何もないと思うけどさ」
　理由を立村先輩は話してくれなかった。
　首をわずかにかしげて、梨南の握り締めた手に視線を向けた。
　別に揺らしはしなかった。でもショートカットの先輩は見逃さなかったらしい。にやりとして立村先輩のネクタイをひっぱった。麻布のブレザー式ジャケット を羽織っている。これも自前だろう。いっそう肉がなさげに見える。やはり梨南は、自分の胸肉をプレゼントしてあげたいと、つくづく思った。
「ほおら、やっぱり思春期の衝動は無意識に出るもんだねえ」
「また何言ってるんだ。古川さん、俺が杉本に何したっていうんだ」
「ほおら、向きになる。気になるんでしょ。あ、そこ」
　古川先輩という人だと、初めて知った。つんと指を、もう一度梨南の握り締めた手に向けた。
「まったくあんたってガキのくせに、エッチなことには敏感なんだから」
「ばかばかしい」
「まあしょうがないよね、男だもんね。杉本さん見て鼻血出す前に、私に英語の訳、見せてよね。お互い英語得意同士、間違いないかどうかチェック」
「古川さんのノートって開くと、必ずどっかで調べたらしいスラングが書いてるんだよなあ。ふつうの英単語は俺が強いのに、なんで古川さんだけそういうのに強いんだ？」
「そりゃあ、『ベットで使う英会話』が私の愛読書だもんね。立村、あんだだって親にばれないように、今日何回抜いたかとか今夜どんな感じで一発やったかとか、メモっておきたいでしょうに」
「ばかばかしすぎて話にならないよ。とにかく、今日の訳のノートは出しとく」

話の内容からして、立村先輩と古川先輩とは、かなり仲がよいらしい。もちろん、会話の内容からするとかなりエッチな話もしているようだ。立村先輩の顔ゆえに仕方ないことなのだろうが、清坂先輩が相手にしてくれない以上、相談相手として利用しているのではないだろうか。
梨南は決して、男と女のああだこうだを知らない、はるみ的ぶりっこではないつもりだ。ちゃんと、夜の男女が何をして、どのような行為をして、子どもを作るかはよくわかっている。古川先輩が教えてくれたことは、すでに文学書でよく知っている。
しかし、大抵の場合、そういうことができるのは美男美女と決まっている。
立村先輩は辛いだろう。生まれながらのハンデを抱えているのだから。
しかたないから、古川先輩で情報を仕入れ、清坂先輩を口説くタイミングを狙っているというわけか。
この辺で退散しよう。梨南は立村先輩の手を取った。反応するのが遅そうだから、直接手を触れてみただけのこと。やわらかかった。その手をストールの結び目に当てた。軽く、雷打たれたような響きが残った。
「先輩、クイズ大会、絶対成功させます。一緒に脇で見ていてください」
言葉はなかった。立村先輩の瞳にすり抜けたものは、今まで見たことのないものだった。手を離すとそれも消えた。すとんと、力を抜いたまま、落ちた。
「わかった。それでは昼休みに」

一時間目から四時間目まで、給食時間までは何も起こらなかった。
何かが起こっているのかもしれないが、梨南にとってはごくふつうの日常だった。確かに新井林は梨南の方を見てはつばをわずかに吐きかけるし、はるみは振 り向かず新井林から離れずにいる。すでにモデルになる男女一年は、二年生女子に呼び出されて洋服を合わせ終わっているはずだった。その辺は梨南もタッチし ていないのでわからない。二年男子が部分用じゅうたんをかりて体育館に、昼休み、敷いてくれるはず。そこをしゃなりしゃなりと歩いてモデル二人が「春・ 夏・秋・冬」と分かれて登場する。ＢＧＭもすでに放送委員会の方に頼んで、準備してもらっているとのことだった。あとは、問題を梨南が読み上げて、各クラ ス代表の人たちに予想値段を書いてもらう。もちろん電卓使用可。
表だって梨南が出てくるのは、問題を読み上げる時くらいだ。
それしか仕事がない可哀想な一年評議だと思われていることだろう。
それこそつぼ。
それこそ計算通り。

梨南は給食後、教室を出ようとした。もちろん体育館に準備のためだ。
モデルたちは、全校放送で男女各更衣室に集まって、着替えることになっている。きちんと状況を把握するのは梨南だけ、のつとめだった。一緒に清坂先輩、本条先輩をはじめ、もちろん立村先輩が側にいる。
歌うように、一人、声が聞こえる。

「類は友を呼ぶと人は言う。あまされもんはあまされもの同士。天才は天才同士」
　二回やられたら、振り向くしかない。梨南は回れ右をして、自分の目に全身全霊すべての力をこめた。念力も呼び寄せたかった。
　机の上に座って、じっと見つめているのは新井林だった。側に隠れるように、おどおどしているのがはるみ。かすかに「梨南ちゃん」とささやいているようす。口を開きかけるはるみの手をぎゅっと握った。隠すように、梨南にははっきりと見えるように。
　用はない。梨南はそっと花森さんの姿を探した。にっこりと笑顔を作り、目線がこの二人に向くように手を振った。
「杉本さん、どうしたの。あ」
　花森さんをはじめとするＢ組女子は、すぐに新井林たちの様子に気がついたらしい。ひそひそとささやき始めた。大抵、はるみは真っ赤になって教室を出て行 くか、新井林が怒鳴るかのどちらかだった。いくら公然と付き合っているといっても、やれることやれないことがあるものだ。手を握り合うなんてもっての他。
　いつも、梨南はこうやってきた。周りの視線をうまく利用するコツを掴んでいた。

　しかし、新井林は手を離さなかった。握り締めたまま、机の上にとんと置いた。男子一同は気付かぬふりを、不自然な空気をつくりつつしていた。梨南の方を にらみ返したまま、はるみの手をがっちりと握りつづけていた。はるみがうつむきながらも、されるままになっている。抵抗したらいいのに。しないということ は、すべてを受け入れているということだ。
　かすかに新井林は口元で笑いを浮かべていた。何を知ってるのかわからないが、勝ち誇っているかのようにも見えた。
「しょせん嫌われもん同士がくっついてるってのにな。気付かねえのかよ」
　答えずに梨南はきびすを返して扉を閉めた。
　立村先輩に報告したほうがいいのかどうか、迷いながら体育館へ向かった。
　ぐるぐると蘇るものがある。
　小学校一年の時、知った梨南独特の法則をを思い出した。

　――男子を好きになると必ず相手は梨南のことを嫌いになる。

　新井林健吾。初めてその真実を知らされた、相手だった。

――あいつが私を殺したいほど憎んでいる理由。

梨南は体育館舞台の端で、小さなランプをつけたままシナリオを読んでいた。文字を追う必要はない。頭にすべて入っている。別の教室ではすでに、モデル役 の一年生男女が着替えて廊下前にてスタンバイしているはずだ。付き添いで二年の女子評議もうろうろしているはずだ。椅子や張り紙、飾り付けは二、三年の先 輩達が全部こしらえてくれた。ティッシュを五枚重ねて屏風だたみにしてこしらえる、白バラ赤バラも、全部先輩達の手から作られたものだった。じっと目をシ ナリオに落とした。

後ろに誰かがいるらしい。振り向かなかった。

――私が、はるみを奪ったからだ。

オペラ開演直前、弦を整えるごとに聞こえる不協和音。闇にこもっていると、ざわめきとともに思い出されるものばかりだった。きっと、新井林とはるみは、清坂先輩たちの選んだ格好をして、手を握り締めているのだろう。いや、梨南がいないならまだ、離しているかもしれない。

――はるみを、取り戻したから。

肩にかけたままの黒いレースストールは、風の通らない部屋だと少し暑苦しかった。結び目をもう一度、胸と胸の真ん中にくるよう引っ張りなおし、梨南は顔を上げた。

――そんなことで喜ぶのはばかなのよ。

「杉本、どうした」

避けられないくらいの接近距離。隣りに立村先輩が台本を片手に丸めて立っていた。

シャープで細かく、「フェードイン」「フェードアウト」とメモしてあるのは、立村先輩の手伝いパートが照明係だということ。自分の背丈に合わせた高さの スポットライトと並んで、軽く叩いた。清坂先輩も、本条委員長も、まだ袖にはいない。ふたりとも教室で一年生モデル連中を手伝っているに違いない。

梨南は軽く会釈すると、もう一度台本に目を通した。

司会進行役の女子評議ふたりが、台本どおりに話をして、舞台に上がったクラス代表の人たちに答えの台紙を渡す。あとは放送委員会の誰かが音響を担当してＢＧＭを流したり制限時間のぴぴぴと響く音楽を入れたりする程度だ。梨南の仕事は、ほとんどすんでいた。

「私のすることはほとんどないですか」

「杉本ひとりでずっとやってきたんだから、今は観客になっていいと思うな。早いけど言うよ。よくやった」

全く瞳を揺らさず、やわらかい笑みでもって答えてくれた。

「立村先輩、去年はどんな感じだったんですか。ずっと先輩は舞台の袖で出る人たちに話しかけていたとか、しらけるギャグを飛ばして顰蹙買っていたとか、いろいろ聞きましたが」

清坂先輩から聞いたことを、梨南なりの解釈で尋ねた。

「誰だよ、そんなこと言ってたのは」

「清坂先輩です。最後は、幕の陰で貧血起こして倒れ、本条先輩に運ばれて、保健室で寝ていた

とも聞きました」
「否定できないのが辛いよな。そうだよ、杉本の言う通りだよ」
　全く怒らず立村先輩は、丸めた台本で自分の方を叩いた。肩こりひどいのだろう。疲れるだろう。自分のレベル以上の手伝いをするなんて。幕が下りているの でまだ、ランプが明るくてもかまわなかった。立村先輩の顔色は薄墨色の影が塗ったくられているようで、ぎらぎらしたものが全くなかった。
「去年はクラスの連中に頼み込んで、無理やりお願いしたところがあったから、自分の中でも申しわけないってとこがあったんだよな。もともと俺がこういう外 にでてやること、好きじゃないからなおさら。当日になるまでずっと、本当に俺がこういうことやってていいのかどうかがわからなかったっていうのもあって、 頭がオーバーヒートしたんだろうな。もう何やってたか、記憶に残ってないよ。目の前が真っ暗くなって、気が付いたら保健室で寝ているところを本条先輩にぶ んなぐられた、ってことくらいだ。度胸はあるほうだと思ったけれど、杉本ほど、ではないよ。俺は」
　度胸があると、思っているんだろうか。それこそいい根性だ。心でつぶやくと、梨南はじっと立村先輩の目に話し掛けた。
「一年生たちは知らないはずですよね。私が台本を書いたということ」
「知らないはずだ。その辺は徹底している」
「だから新井林は喜んで出たのですね」
　ちっと、舌を鳴らすような音。虫歯を舌で撫でているように口をゆがませ、立村先輩は足下に視線を落とした。
「杉本、ひとつだけ聞きたいんだけどさ、いいかな」
「なんですか」
　新井林のことだろうか、身構えた。
「小学校時代から新井林とは、ああいう感じで過ごしたんだろう。あの態度は二年の俺たちからみても異常だ。何がきっかけでああなったんだ？　杉本に思い当たるふし、あるのか？」
　――答えるほういいのかもしれない。
　――原因はすべて私なんだから。
　隠すことはない。そう梨南は判断した。
「入学式の時から、そうでした」
　いきなり照明が消えた。向こう側の舞台袖から、音響係の放送委員が叫んでいた。
「それでは始めます！　クラス回答者入場にあわせて、サンバのテーマを流します」
　リオのカーニバルのりの曲が会場一杯に流れた。汗だらだらになりそうだ。ぐうっと、引っ張られるのは幕が上がる音。立村先輩はスポットライトをゆっくり と舞台に向けた。各クラスの解答者、およびモデル一同が登場する時に、スポットライトで追うのが立村先輩の仕事だ。梨南は見ているだけでよかった。
「それでは、一年生評議委員会主催の、『クラス対抗・青大附中ファッションプライス・マッチングゲーム』青大附属ファッション・総額おいくらですか？クイ ズをはじめます。各クラスの回

答者のみなさん、舞台前から整列してあがってきてください。そしてそれぞれの席についてください。まず問題の方法と説明をさ せていただきます……」
　棒読みで読み上げる評議一年女子。Ａ組の子だった。隣りでＢ組の子が、客席を見つめながら頷いている。ふたり、反対側の袖から出てきて、マイクを握り締めている。もう少し口から話せばいいのに。叫んでいるようだった。

「――音楽に合わせてこれから、『春・夏・秋・冬』の各モデルが、男女ペアで登場します。体育館後ろの入り口から、個性的な制服の着こなしをして入ってき ますので、みなさん、ご注目ください。壇上にモデルが上がった後に、それぞれ回答者のみなさんは男女別の金額を計算して、お手元の台紙に書き込んでくださ い。最後まで終わったところで正しい金額を発表いたします。ええっと、なお、青大附属中学の制服価格は一応、統一しておきます。みなさん、メモってくださ い」

　大きく「本年度青大附中制服男女アイテム別価格」を書いた模造紙を、三年の先輩達が二手に分かれて壇上と体育館、両方で広げた。本条先輩も中にいる。わ ざわざ他の生徒の座っている場所までぐるっと回っている。ちゃんとブレザー、ブラウス、シャツ、学生ズボン、スカート、すべての額を分かりやすく書いてあ る。立村先輩の文字だけど、思ったより読みづらくなかった。やはり梨南の言葉に奮起して練習したのだろう。そう梨南は思った。
　二、三年クラスの観客からは、
「ファイトー！　三Ａ！」
「がんばれよー！」
「こけんなよ！」
と掛け声が上がった。二、三年は気合の入り方も違う。反応してか、舞台の上でいきなりボディビルの真似してガッツポーズをする女子がいたり、手をふる男 子、投げキッスをする三年生男女、いろいろパフォーマンスしていた。一年生はさすがにおとなしく、ちんまりしていた。もちろん一年Ｂ組は静かなもの。早く 終わらせたくてならないような顔だった。袖から見ていてもよくわかった。
　サンバミュージックがだんだん静まっていった。全員入場が終り、制服の金額もわかったということで、あとは舞台に登場する奴らを待つだけだ。
「ＢＧＭ音楽も杉本が台本に書いて指示したんだよな。選ぶ曲がいかにも杉本の好みだ」
「はい。私のうちはクラシックのレコード、たくさんありますから」
　スポットライトをぐっと、舞台に向けたまま立村先輩は尋ねてきた。
　しゃべると手がぶれるのに。無理しないでいいのに。
「じゃあ、モデル登場の曲もか？」
「はい、ワーグナーにしました」
　聞きなれた旋律、「ワルキューレ騎行」のトランペットが、体育館内いっぱいに響き渡った。
　ボリュームを最大にして流してほしい。梨南が注文をつけたところだった。

一気に照明が消える。停電状態。唯一、立村先輩のスポットライトだけが光っている。差している場所は、体育館の後方入り口だ。
イメージとしてはファッションショーの雰囲気にしたかった。
あとは立村先輩がちゃんと、スポットライトを動かしてくれるかだった。腕力はそれなりにあるらしい。しっかりぶれないように、片手でライトの柄を押さえていた。

「春・夏・秋・冬」それぞれのモデルカップルは、ワーグナーのオペラからなるわかりやすい曲を、ＢＧＭとして登場する。
春は、立村先輩にも話した通り「ニーベルングの指輪」から「ワルキューレ騎行」。
夏は、思い切って「ローエングリン」の「結婚行進曲」。
秋は、「タンホイザー」の「序曲」。
冬は、同じく「タンホイザー」から「夕星の歌」

梨南の趣味がまるごと詰め込まれた選曲だった。ある程度梨南と話をしている人が、台本を確認したら一発で見抜けるだろうに。気付かないでへらへらしている新井林たちに、ひそかにあきれていた。
――気付かないなんて、救いようのないほど、ばかなのよ。
つぶやいたのが聞こえたのか、立村先輩が梨南の方に目を向けた。
「杉本のオペラ関係の知識、この前聞かされて、本当にすごいと思ったな」
さすが、「マイスタージンガー」観劇中に言葉でパニックになった人だから。ちゃんと覚えてくれたらしい。新井林よりはわかってくれている。
「ワーグナーのオペラは、頭の悪い男があまり出てこないから好きです。イタリアとかフランスとかのは、恋愛ばかりにうつつぬかすばか男ばかりなので、腹が立ちます」
「杉本が一番好きな演目は『ローエングリン』なんだよな。家に帰ってから百科事典で調べてみたよ。なんというか、日本昔話って感じなんだよな。鶴の恩返しのような」
いいこと言う。梨南は頷いた。
「そうなんです。ローエングリン様に救われたばか女のエルザが、絶対に素性を聞かないでくださいって約束したのに、結局聞いてしまって、ローエングリン様は去ってしまったって話です」
「なんか、杉本の説明で聞くと、すごいことになるよな。でもわかる。救いがないよ。そのくせ、なぜか『結婚行進曲』がこの中に入ってるんだよな。意外だよ」
「救いはないかもしれないけれど、ローエングリン様はおばかな女にひっかからないで、さっさと帰ることができたんだから、それはそれでいいんです」
エルザのばかさかげんには、いつも舞台を見るたびに頭にきていた。
勝手に惚れて、できるわけもない約束して、回りの噂に振り回されて、結局大好きなローエングリン様を失ってしまったというていたらく。梨南はこのエルザという女性が大嫌いだった。
「でもさ、さんざん噂を聞かされて、神経がおかしくなりそうな思いをしたら、名前のひとつくらい、聞きたくもなるよな」

「ローエングリンが馬鹿女をさっさと捨てて、帰るから、私は「ローエングリン」が好きなんです。ざまあみろって、感じです」
　梨南は繰り返した。
　――ばか女よ、ばか女。
「ワルキューレ騎行」の強烈な響きがまだ残っている。立村先輩が慌ててスポットライトを固め直した。闇にまぎれて、「おおう、おおう」と獣じみた声が聞こえる。顔が見えないと野生の動物にみな変化したかのよう。
　人間でいるのは自分だけのようだった。

「しっかし、最後まで清坂氏たちが隠していただけあるな。お見事だ」
　Ａ組モデルカップルが、肩を寄せ合ってスポットライトの真ん中に立った。二年の先輩が戸を開ける役だ。。
　男女別、二手に分かれて座っている。真中がちょうど登場通路として使えるようになっている。ひそひそと歩いてくるのだが、光に反射してか服がよく見えな い。ブレザーを肩から袖を通さずにはおり、男子はパステルグリーンのＴシャツ、女子は卵色のふりふりしたブラウス。もちろん制服のスカート、ズボンは変わ らない。
　ただ上を替えただけか、と思ったが、甘かった。
　よく見ると男子はベルトを緩めに、シャツの上から締めている。結んでいる、という方が近いだろうか。
　女子はスカートいっぱいに、かわいらしい黄色のボタンをたくさんくっつけている。ぶつかり合って、ちゃらちゃら音がするのは、こすれあうからだろう。胸には白いブローチをつけている。
「ブローチは二年の先輩の持ち物でしょうか。それを含めて計算するならば、高いかもしれません」
　梨南は答えながら、ざっとスカートに縫い付けられたボタンを数えた。
「たぶん、あれだと、百円くらいの安いボタンをどこかから集めて縫い付けたんだと思います。清坂先輩、すごいです」
　モデル役の二人は、梨南の知っている限り、まだ「お付き合い」まではいたってないらしい。Ｂ組ほどではないにしても、男女の仲がいいクラスだとは聞いていない。
　通路中央、だいたい二年生の先頭位置に来るところで、突然モデルの男子がかしわ手を打った。
　同時に、モデル女子はスカートの両端をつまんだ。一回転した。
　よく幼稚園、小学生低学年の女子が、スカートを広げてみせる、あんな感じだった。
「すげえ、やるなあ」
　壇上でしゃべっている声が聞こえてくる。当然ひゅうひゅう、ざわめいている。「ワルキューレ」が繰り返し同じサビを聞かせるように、曲は激しく流れていた。
「ポーズとか、歩き方とかも、二年の女子が決めたんだろうな」

　立村先輩はゆっくりとスポットライトを動かしながら、観察した感想をひとことひとこと、梨南に伝えてきた。
　何か口にしてないと落ち着かないのだろう。梨南の前で失敗したら恥ずかしいと持っているのだろう。
「一応、私の意見も、清坂先輩に聞いてもらいました。すごいって誉めてくれました」
　落ち着いている梨南は、あえてつんとしたまま答えることにした。

　モデル二人が舞台に上がり、しゃなりしゃなりと回答者の前を歩いていく。文句のつけようがない。さっそく男女回答者が相談しつつ持ち込んだ電卓を叩いていた。
　制服代プラス、ボタン代、プラス、シャツ代、プラス……。
　正確な数字なんて出るわけないので、直感が頼りだ。
　解答から一番近い数字をたたき出した人が、このゲームの勝利者となる。
「先輩はいくらくらいだと思いますか？」
「ボタンの値段によるな。たぶん野郎連中の格好はそんなにかかってないと思うんだけどさ」
　司会者の女子二人は素早く数字をチェックしているようすだ。向こう側の袖から走り出て、片手に電卓を持ち、答えを発表している。もちろん会場のみなさまにもわかるように、三年男子評議が答えの書いてある模造紙を持ち、走ったのはいうまでもない。
「答えは……円です！　一番近いのは、三年Ｂ組の……さんです！」
　つっかえながらも司会者ふたりは、数字を間違えずにマイクを握っている。調子はよさそうだ。梨南がカバーに走る必要もなさそうだ。楽でいられる。
　三年Ｂ組の集団は後ろから三番目に位置している。いきなりウエーブじみた真似を始めた。ひとりひとりがひょこひょこ、もぐらたたきののりで立ち上がり、 万歳をする。男女関係なくやっている。喜びの表現らしい。拍手喝采は、壇上の正解者だけでなく、観客の連中にも向けられていた。

「先輩のクラスは当たっているようですか？」
「外れてる。羽飛と古川さんだったら、結構いい線いけると思ったんだけど、甘かったな」
　今朝、エッチネタをかましてきた女子の先輩と、ひそかに「ローエングリン」と呼んでいる男子の先輩、同じ舞台にいるなんて。
　計画どおりに進んでいる。Ａ組モデルふたりは役目を終えて反対側の袖から下りていった。そそそっと隅を通っていく姿に、ひやかしの声が飛ぶ。Ａ組の男子 評議が、相手役をクラス女子から指名したのだから、嫌いな女子ではないのだろう。明日からどういう運命が待ち受けているか、楽しみだ。
「明日からは、Ａ組、戦争ですね」
「俺もそう思う。よかったよ。杉本と同じ学年でなくてさ」
　顔を合わせて笑い合った。

　いったん「ワルキューレ」が静まり、二秒くらい間の後、有名すぎるくらい有名な曲が流れるはずだ。梨南は息を殺した。
「次の曲は、杉本のクラスだろ」
「はい」
　オペラ「ローエングリン」は知らなくても、この曲を知らない人はいないだろう。
　ワーグナーの「結婚行進曲」。
　結婚式場のＣＭで必ず流れる曲だ。メンデルスゾーンの「結婚行進曲」に比べると落ち着いている。ローエングリンと関係なくても、梨南はワーグナーの曲のほうが好きだった。
　ローエングリンとエルザが結婚するにあたり流れる名曲だ。
「まずい、ライトを戻すんだよな」
　手元の台本を指で抑えながら、立村先輩はふたたび体育館にスポットライトを向けた。
　――「ローエングリン」のあの曲だ。
　――ローエングリン様。
　突然、目を伏せたくなった。すべてはっきり見えたのは、目が暗闇に慣れたからだろうか。
　立村先輩のあきれたような声が聞こえる。
「あいつらいったい。学校だってのに」

　白、赤、青、トリコロールカラーの無地スカーフを四隅結び合わせＴシャツ風にかぶっている。
「夏」モデルの男子は素肌に纏っていた。
　一枚の大きさは小さめの風呂敷くらいだろう。体をすぽりと覆うわけではない。空いている隙間から肌が覗いているはずだ。でも光でうまく隠れているのだろうか、首のところをきちりとまとめているのか、裸っぽい感じはしなかった。
　――清坂先輩が考えたのってあれなんだ。
　――清坂先輩だから、新井林を説得できたんだ。きっと。
　夏服バージョンだから、ブレザーは着ていない。ズボンはそのまま。髪だけは額をオールバックにまとめ、つんとムースーでかためているらしい。
　なかなか動き出さないので立村先輩がスポットライトをなかなか移動できないでいる。梨南は肩から覗き込んだ。
「あいつら、何もこんなところで」
　立村先輩の手が、ふたりを光の輪から飛び出させないように、ゆっくりと動いていた。つぶやきでほんの少し、輪が揺れていた。
　新井林とはるみ。
　ふたりは朝と同じく、手を握り合っていた。

　はるみもブラウスの上から同じくトリコロールカラーのスカーフを三枚結び合わせてスモッグ風にかぶっていた。さすがに女子だ。素肌同士なんてことはしな かったのだろう。さらに足首に

は小さく、赤と青のリボンが巻きつけられている。さっきまでおだんごにしていたはずの髪は、長く伸ばしたまま。梨南と同じく 腰まで伸びているのに、軽やかに見える。うらやましい髪だった。
「スカーフ代だけか。これなら正解者でそうだな」
　新井林は一歩前に出た。つなぎ合っている手が伸びた。はるみは動こうとしない。ばんばレースのそりを引いているような格好に見えた。こけそうになり、失笑が漏れる。三年がわだろうか。にらみつけて黙らせようとするしぐさ。はるみはとうとう歩き出した。
「あいつら、全校生徒のまん前だぞ、何考えてるんだいったい」
「ばか同士仕方ないんです」
　目が離せない。しかたなさそうに立村先輩はライトを動かした。
　やがて手が止まった。
「今度は何をしでかす気なんだ、杉本のクラスは」
　伸ばすようにつぶやいていた立村先輩が、思わず生声で叫んでいる。周りのざわめきと一緒で、目立たない。梨南だけがそばで立村先輩の声音を受けていた。
「新井林の奴、ひざまずいてやがる。中世騎士ごっこやってどうするんだ！」
　答えが出てこなかった。立村先輩の言葉どおり、新井林は壇上まではるみを引っ張っていき、一度手を解いた。そして、いきなりひざまづくと同時に両手を広げ、大きく深呼吸をひとつ。
　――けんごー、何やってるんだあ。
　――すっけべやろー！
　――一年のくせになあ。
　茶々が入る。気にしていないようす。はるみの表情が隠れて見えない。
　新井林は目一杯の笑顔を、壇上の回答者、そこからゆっくり天井に向けた。
　梨南には一生拝むことのできない代物だろう。
　上から見下ろしたのではわからない。
　本当に手の甲へ口づけしているのかもわからない。
　梨南が見たのは、新井林がはるみの片手を取り、左右を確認した後、ゆっくり顔を近づけたところだった。空いている片手はぴんと横に流したまま。中世の騎士が姫に忠誠を誓う姿のように。
　エルザを救ったローエングリン、生き写しのように。
　小学校二年の時に両親と観にいった、「ローエングリン」役のオペラ歌手に、日々近づいている。梨南の記憶に残っている、あの歌手が中学生だったらきっと新井林と瓜二つだっただろう。

　――「ワルキューレ騎行」にするべきだったかもしれない。
　すっくと立ち上がり、新井林ははるみの手をしっかと握り直した。ゆっくりと壇上への階段を昇り、回答者の前をひとまわりした。はるみが必死に抵抗してい るのに、全く無視。新井林にとっては壇上でポーズを取ることよりも、はるみの手を握りつづけていることの方がはるかに大切

なことらしい。梨南と立村先輩側 に近づいた時、目が合った。
　スポットライトを当てようとした立村先輩へすぐに視線を逸らし、唇と鼻の穴をかすかに広げ、あごを上げた．挑発するポーズだった。梨南ではなく、立村先輩にだった。
　立村先輩の表情は変わらなかった。穏やかなままだった。ただ、全く動けなかったようだった。機械的にスポットライトを揺らすだけ。ふたりが壇上を下りた後も、立村先輩はスポットライトを元に戻さないでいた。

「あのふたり、新井林と佐賀さんは、付き合ってます。六年の卒業式予行練習の時に、みんなの前で公表されてます」
「公表って？」
　気が付いたのか、スポットライトを大急ぎで体育館入り口へ向け直した後、立村先輩は梨南にたずね返した。
「さっき先輩、私と新井林がどうして仲悪いのか、聞いていらっしゃいましたよね」
「無理に言わなくてもいい」
「言いたいから話すんです。一度しか言いませんからちゃんと聞いてください」
　急いで梨南はささやいた。
「六年の予行練習の時です。たまたま佐賀さんの靴と私の靴が同じエナメルのおでかけ靴だったんです。私が死ねばいいと思っている男子連中が、蛆虫を靴に入れておこうと計画したらしいです」
　息を呑む声。答えはなかった。待ってなんてない。梨南は急いで続けた。
「ばかな男子たちは、蛆虫の群れをはるみの靴に注ぎ込んだんです。気付いた時にはすでに、佐賀さんはパニック状態になっていきなり泣き出して、教室を飛び出していってしまいました」
　立村先輩の目は、静まっていた。梨南の口元を静かに見つめていた。手はライトの柄にかかったままだった。
「私は佐賀さんを追いかけて、靴下を脱いではだしでエナメルの靴、履いて替えればいいっていいました。脱がせてあげようとしました。蛆虫くらい、私は平気でした。でも」
「タンホイザー序曲」が流れ始めた。早口に、立村先輩にしか聞き取れないようにつぶやいた。
「そしたら、いきなり新井林が飛んできました。私を足で蹴り倒して佐賀さんを背負っていきました。私は家に電話を掛けて保健室に寄って、教室に戻ったので、新井林がどういうことを話したのかはわかりません。ただ」
「ただ？」
　初めて問い返してくれた。
「『俺はどんなことがあっても佐賀はるみを守る。あの女からはるみを守る』って、ばかみたいに叫んでいたそうです」
　立村先輩はそれ以上何も言わなかった。すでにＣ組モデルカップルが登場しているのに気付かなかったようだった。ライトが、ずれていた。

立村先輩は言葉少なに、ずっとスポットライトを動かしていた。
梨南の言葉がどういう感情を呼び起こしたのかはわからない。「タンホイザー序曲」が流れる間、じっと梨南の手元を見つめて考え込んでいるようすだった。最後の「冬」パートで、「夕星の歌」が男性オペラ歌手の声で流れる頃には何かを決意したかのように唇をかみ締めていた。
――やっぱりそうなんだろうか。蛆虫事件のこと話したからかもしれない。
――そういう虫とか、気持ち悪いこと、立村先輩嫌いなのかもしれない。
――神経質そうだもの。
蛆虫事件はほんの氷山の一角に過ぎないと、付け加えたらもっと驚くだろうか。さすがに梨南も、小学校一年の頃から感じていたことを話すことはできなかった。
――好きだからいじめるなんて、ばかなこという人がいるけれど、私と新井林とはそんなもんじゃない。

結局、トップは本条先輩のクラス三年Ａ組が奪い取り、場内大興奮の中終了した。
モデル役一年評議のほとんどは着替えのため別教室に集合している。二年、三年の男子評議委員たちが道具の片付けを担当してくれた。
「杉本はここにいろ。あとは俺たちがやるから」
他の一年生がさっさと体育館を出て行った後、立村先輩が梨南に告げた。
「でも、私は」
「今回の総指揮者は杉本だ。最後まで見届ける、責任、あるだろ」
舞台袖に立っていても梨南のすることは特別ない。シナリオをしまって、舞台の上から見下ろすだけだろうか。ごみを拾う程度だ。すでに体育館の椅子はそれぞれの教室に運びこまれていた。十分前に溢れた熱狂のかけらもなかった。
ただ、舞台幕の影にひとつだけ、黄色いボタンが落ちていた。
拾って手のひらに載せた。
白いしつけ糸でとじていたのだろう。ひっぱると軽く切れた。
立村先輩ともう一人の二年評議が、ふらつきながらスポットライトを舞台から下ろすのを眺めていた。
評議委員は、五時間目終了後のホームルームに出なくてもいい。というより出られない。片付け物がたくさんなのだから。同じことは放送委員会、規律委員会、その他の委員会にも言えることだった。
未公認の締めとして、一応評議委員は三年Ａ組に集合することになっていた。
本条委員長の厳命である。
駒方先生の許可は当然のことながら取っていない。そこんところが、青大附属における委員会の「部活動」っぽいところだろう。
かばんだけ取りに戻った後、梨南は急いで三年Ａ組の教室に向かった。本条先輩のクラスでし

かも、本日の最高点を取ったみなさまのいらっしゃるクラス。
　本条先輩曰く、
「うちの担任のうちで、祝賀会やるんだとさ！」
　クラスの人たちはきれいに姿を消していた。たむろうのは評議委員会関係の連中だけだった。立村先輩が本条先輩に片腕で首を締められている。
「ったく、立村、何、肝心のとこでライトの輪から人はみ出させてるんだよ。お前が裏方やると大抵ミスやらかすんだからな。まったく」
　本気で怒っているわけではなさそうだ。片っ方の手で本条先輩は、頬をさすってやっている。気持ち悪そうな顔をしている立村先輩。噛み付く真似をする。
「今度しくじったら、お前がなんと言おうとも裏方になんか回さないで、全校生徒の前で役者になってもらうからな。わかったか」
「すみません。本条先輩のように面の皮が厚くないもんですから」
　評議委員会の別名が「かくれ演劇部」であることを、梨南は過去のビデオを見たりして、だいたい把握していた。
　――本条先輩くらい顔立ちが整っていればいいけれど。
　ばたばたやっている本条、立村両先輩に近づいた。
「立村先輩、手伝ってくださいましてありがとうございました。成功したと思います」
　少し腕が緩んだところを逃さず、立村先輩は払いのけて笑顔を見せた。
「いや、俺の方こそごめん。杉本が完璧にでかしたことを、俺の照明でみそつけてしまったみたいで申しわけない」
「いいんです、期待してませんでしたから」
　後ろに数人、他の一年女子評議の子が座っている。心配そうな声が飛ぶ。
「梨南ちゃん、あやまった方がいいよ。言い過ぎだよ」
　別に悪いことを言ってるわけではない。
　立村先輩に求めているものは、スポットライトをきれいに動かすことではなかった。
　頭が切れて顔のいい男子だったら、もっと別の二年先輩にもいたのだから。
　不細工で、頭の回転が少々とろくてもいい。まともに梨南と対してくれる人と一緒でいたかっただけだ。
　困惑したように立村先輩はうつむいた。
「本当に、ごめんな」
　一切怒りを見せなかった。
　純粋にあやまってくれたようだった。ちょっとだけ悪い、と思った。事実なんだから仕方ない。
　後ろでぽんと肩を叩いたのは本条先輩だった。
「それはそうと、清坂率いる二年女子のファッションコーディネート大作戦は、すごかったなあ」
「本当です。俺もあそこまで清坂氏がすごいとは思わなかった」

「だろだろ。あの四人にはなんとしても褒美を取らせねば」
　ひじを張って腕組みし、首をひねる本条先輩。やはり学校の日常でこういうことするよりも、もっと大きな舞台で、フリルのブラウスを着た格好でやってほしい。絵になるのだから。本条先輩って舞台俳優向けだと、つくづく梨南は感じた。
「なんか嬉しいこと言ってますね、本条先輩」
　清坂先輩が、本条先輩の後ろに立っていた。そろそろ近づいてきた段階で梨南も気付いていた。唇に人差し指を立てていたので、黙っていた。
「おお、拍手だ拍手。褒美を取らすぞ」
「『かすみ堂』のケーキセットを四人分！」
「おい、ケーキセットっておいおい」
「本条先輩ももっと誉めてほしいなあ」
　ちなみに「かすみ堂」のケーキセットとは、一人三百円分で、「ショートケーキ・紅茶・アイスクリーム」がセットとしてついてくる、最近人気の喫茶店メニューだった。
テストの終わった日にはよく女子同士で立ち寄るという。味はいまいちだけど、量が多いということで二年の先輩達は喜んで通っているらしい。
「四人分かよ。おいおいおいおい」
「男たるもの、二言はなしですよね」
「口は災いのもとって本当だな。わかった。ということで立村、お前もその時は半分出せよ。お前が手伝わせたんだからな。責任取れ」
　ため息をつきながら立村先輩は軽くのけぞるように、
「冗談じゃないですよ。本条先輩、本当だったら俺や杉本にも配分があるべきでしょう。それなのになんですか、俺が半分払えって言うんですか」
　二、三年が揃い始めると梨南の出番はなくなった。話は尽きることなさそうだった。このままだと永遠におちゃらけた話題が続くだろう。一年生男子連中が運動着姿で揃うまでは。
　先生のいない評議委員会なので、野郎連中は女子から離れた場所に席を取った。新井林は梨南たちへ尻を向けたまま、本条先輩のみに会釈していた。机の上に腰掛けるのもなんだと思ったのだろう。椅子に座った。梨南の方を見るのもいやだという風だ。
「いやあ、今回のＭＶＰは新井林だぜ、ったく。最高だ！」
　本条先輩が二年集団から抜け出して、わざわざ新井林の肩をぽんぽんと叩いた。にやりとして小指を立てた。表情は後ろ向きなので読み取れない。
「よくやってくれたよな。俺の難しい注文を、あそこまで見事にやってのけてくれるっていうのは、やはり一年のエースだぜ。バスケ部に置いとくのがもったいないぜ」
　髪だけはまだムースがついたままで、オールバックの形を保たせていた。何度か髪の毛をぐしゃぐしゃにかき回して、手の甲の匂いをかいだ。
「これで、一年評議としての義務は果たしたってわけっすか。本条委員長」
「十分すぎる。な、立村もこのくらいの度胸見せろよ。ったく新井林くらいの根性があればなあ、お前ももっとまともな女っけある生活が」

教壇に立って見下ろしていた立村先輩は、突然背を向けた。梨南側の方に向いた。
「本条先輩。全員揃ったところで締めをさっさとはじめませんか」
ぶっきらぼうに、ちょっと露骨に。
新井林が初めて梨南たちの方を振り向いた。厳密に言うと、立村先輩代表とする二年のたまっているところだった。新井林の目が再び上目遣いの格好で立村先 輩の方を見る。鼻の穴を見せるようにあごを上げる。目をそらしたまま立村先輩は、適当に椅子を引っ張り出して座った。当然、清坂先輩の隣りだった。

――まさか。
本条先輩の、やたらと新井林を褒め称える口調に、梨南はぴんときた。
一筋縄ではいかない新井林が、なぜあんなにあっさり、「モデル」になってくれたのだろうか。
梨南としては誰か内通している奴がいるのではと思っていた。一年か二年女子か。
本条先輩だとしたら話は通る。
立村先輩から詳しい話は聞いていたのだろうし、シナリオを書いたのが梨南であることも当然ご存知のはずだ。成功させるためには手段を選ぶタイプではない。
新井林に「実は」と話を持ちかけて、梨南に対抗させようとするのも一つの手だ。
「ばかはばか同士」と、いかにも立村先輩と一緒にせせら笑った口調を思い起こす。
本条先輩は立村先輩が、梨南ひいきしていることまで、新井林にささやいたのかもしれない。
その辺は梨南の想像力に頼るしかなくない。
本条先輩のネクタイを締め上げて拷問したかった。立村先輩に関して、どういう悪口を新井林に吹き込んだのだろうか。新井林がやる気まんまんになるようなことだから、はんぱなものではないだろう。
梨南を仮想敵に仕立て上げ
「このままだと杉本にさんざんこけにされるぞ。だったら、お前らの力を見せ付けてやれよ」
とそそのかしたとすると。
――本条委員長は、私にとって敵なのか、それとも味方なのだろうか。
――立村先輩は気付いているのだろうか。

もう一度、立村先輩の方を肩越しに見た。
ぴたっと視線が合ってしまった。戸惑っているのは立村先輩の方。梨南は落ち着いたまま、首をかしげてもう一度力をこめた。
――私のこと見てたみたいだ。
――気付いているんだろうか。本条先輩の本心を。
立村先輩は梨南に向かって次に、大きく口を動かした。声は出さない。でも言葉を話しているように。
隣りで清坂先輩がけげんそうな顔をしてささやきかえしていた。そちらの言葉ははっきり聞こ

えた。。
「口で言えばいいのに、立村くん」
　読み取れない。梨南は唇だけで言葉を理解することはできなかった。無視した。

「じゃあ、さっさと締めに入るか！　おかげさまで三年Ａ組は最高得点取らせていただいたしな。まあ、それを抜きにしても、今回の一年主催全校集会は今まで にない盛り上がりで幕を閉じたと。去年のように幕閉まる直前にぶったおれて俺に背負われて保健室に運び込まれた奴はいなかったしな」
　ちろっと立村先輩の方を見た本条先輩。教机に両手を付き、口角を半分上げて笑う。二、三年が示し合わせたように含み笑いする。
「さらに二年生女子軍団のパワフルなファッションセンス、あれにも参ったぜ。清坂ちゃん、あんたはすごい」
　一言に拍手喝采だ。二年、三年を中心に口笛吹く奴もいた。一年は黙っていた。小さく指を動かすだけだった。隣りで一年女子評議がぶつぶつ話している。
「私たちだって司会、がんばったのにね。誉めてくれたっていいのにね」
　――あんたたちはただ台本を読み上げただけだっていうのに。
　梨南は心でひそかに舌を出した。
　――裏方に徹した以上、そういうことを求めるなんてばかよばか。

「本条委員長、いいですか」
「どうした、去年倒れた人」
　今度は一年男子の方から笑い声だった。ちゃんと「ははは」と、言葉の切れ目がわかる笑い方だった。狡い。
　立村先輩は一切無視して立ち上がった。
「一番ミスしまくった人間としては、あまり大きいこといえませんが」
　まだスポットライトのミスを気にしているらしい。やはり神経が細かすぎる。
「しかし、誰も気付かないのかな、と思ったので言わせてください」
　本条先輩が一呼吸して、こくっと頷いた。
「まどろっこしいことしねえで、はっきり言っちまえ」
「いや、なんというか」
　口調はとぼけていた。今まで立村先輩と話した時には見えなかった、珍しい話し方だった。切れ味がない。わざと切れ目を入れていない。
　――仮面だ。演じている。
　梨南はまっすぐ向き直り、じっと瞳を見上げた。やはりそうだ、目は笑ってない。
「今回の全校集会は、一言で言ってしまうと」
　急に声音が大人びて聞こえた。かすかに唇だけほころばせている。
「杉本梨南が企画・構成・演出のワンマンショーでしょう」

「おい、お前が口止めしてたくせにばらしてどうする！」
　本条先輩の様子も動揺を隠せないようすだ。梨南の方に視線が集中してくるのがわかる。隣りで女子たちも、
「ねえ、今のほんと？　だって梨南ちゃんは二年の先輩達が作ったものを清書しただけでしょ」
「おいおいおいおい」
「あの女がか？　まさかだろ」
　一年男子たちは知らなかったら、わずかながらそれなりの感動をしゃぶっていられたはずだった。
　水をぶっかけられた心情だろう。背を向けたまま新井林は身動きしなかった。頭だけを何度もかきむしった。
　元の落ち着いた口調に戻って、立村先輩は続けた。今度はちゃんと、切れ目がついている。
「ＢＧＭがワーグナーの『ワルキューレ騎行』というところから、ふつうはもしかしたら、と思うだろ？　杉本とつきあいのある一年同士だったら」
「『ワルキューレ』って何？」
　動揺しているのは一年男子たちだけだった。梨南も秘密がどの辺までもれているのか見当つかなかった。三年の女子たちが、素直な声で、
「杉本さん、すごいね。よくがんばったね」
と誉めてくれた。こっくり、一礼した。
　黙りこんだまま、新井林は足下を見つめていた。バスケシューズが、椅子のしたでもぞもぞ動いていた。
「立村も爆弾発言するのはいいかげんよせ。お前だろ、最初に口止めを提案したのは」
「そうです。時間がくればみな見当つくだろうと思っていましたし、それなら最高の功労者を誉めるのが義務じゃないでしょうか。本条委員長」
　低い声で二人の会話に割って入るのは新井林だった。
「ってことは、杉本のシナリオに俺たち一年が踊らされたってわけっすか」
　腰を半ば上げて、机の上に座りなおし、じろりと立村先輩をにらみつけた。
「シナリオは完璧だったからな」
「あんたが、黙らせたんですか」
　「あんた」ときた。立村先輩の表情は微々とも崩れなかった。
「その通りだ。話す必要もなかったからな。モデルだけをやってもらうためには、シナリオが誰書いたかとかなんて、どうでもいいことだろう。それに」
　攻めの口調だった。
「最高の出来のシナリオをくだらないことで崩されたくなかった。俺の判断だ。文句あるのか。新井林」

　新井林の両手は握りこぶし、仁王立ちだった。

汚いものを見てむかつきたくない、それゆえ梨南の方は見ない。立村先輩の目だけをじっとにらみつけ、殴りかからんばかりの気迫を見せつけていた。ぴんと糸を弾いたら、大暴れしそうだ。
――立村先輩のことを、絶対あいつは年上だと思ってないわ。
気持ちが少し漣立った。
受ける立場の立村先輩は静かなたたづまいだった。
――立村先輩って、意外と度胸あるかもしれない。
男子のかもしだす空気が梨南への不快感あらわだった。立村先輩の発言する声で二年側にバリアが張り巡らされている。
「やるよな、立村も」
「言われてみりゃあ、確かに気付かないのも、間抜けだよなあ」
二年は立村先輩の味方だ。
一年と全く異なる、二色のオーラが漂っている。
新井林の方も負けていない。オーラからはみ出た位置で、梨南は座っていた。

「よし、ここまでだ。立村、新井林、座れ」
割って入ったのは、本条先輩だった。白と赤で区切られた空間に、いきなり青を入れてトリコロールに仕上げたような感じだった。素直に立村先輩は席に付いた。隣りの清坂先輩が目を見開いて何か話し掛けている。
新井林は仁王立ちを崩さなかった。ぐっと唇をかみ締めると、本条先輩に近づき真っ正面から立ちふさがった。
「本条委員長、俺は今の今までそういう話を聞かされてなかったってわけですか。こういうだまし討ちは許せねえ！」
完全に、他の奴の視線を忘れている。新井林がかっとなった時のくせだった。
「俺はあの女を殺したいって前から言っている通りだし、そりゃあ、からんでいると聞いたら、俺は本条委員長の案を蹴ったと思う。でも」
握りこぶしのままで教机を叩いた。指が折れるんじゃないだろうか。机壊れたら弁償金いくらくらいだろう。
「だったら、もうひとつの案、俺たち一年男子評議だけで仕切りまくるって手もあったんじゃないですか。あの女にやられるくらいなら」
立村先輩があきれたように、聞こえよがしにつぶやく。
「だからお前らが杉本に押し付けたんだろう。忘れてるのか」
「俺は本条委員長だけにしゃべってる」
背中を向けたまま新井林は答える。
「事情が分かれば俺だってばかじゃない。全校集会ってものが、勝負だってことに気がつけば、バスケ部をちょっとくらい抜けようとも思いましたよ。現に俺 だって、本条委員長とふたりで、やっとわかりやすい話をしてもらったから、ああいう恥ずかしい真似ができたんであって。最初

、二年の誰かの話では気持ちな んて盛り上がるわけもないだろうし」
　立村先輩への強烈な皮肉だ。ある程度は事実で、ある程度は事実でない。
　――やっぱり、本条先輩が新井林を、説得したんだ。
　――私のことを思いっきり悪くいうか何かして。
　本条先輩は頭を抱える真似をした。本気で困っている風ではない。要は見抜かれるのを覚悟してたってことだろう。立村先輩の表情は静かなままだった。ゆっくりと、発した。
「本条先輩、新井林との話とはどういうことですか」
　つぶやくでもない、答えは絶対ほしいという響きだ。
　――知らなかったんだ。やっぱり。
　答えない本条先輩に代わり、新井林は背を向けたまま答えた。
「悪いか、俺は二年なんかの」
　続く言葉をさすがに控えたらしい。いったん切った。
「本条先輩の命令だからこそ、俺は受けました。シナリオの出所がどこかってことをごまかすような汚いことする二年の言うことなんか、俺は聞いちゃいねえ！」
　立村先輩にあてつけているのは言うまでもない。二年男子たちが軽く腰を浮かしかけた。顧問の先生がいないからこそ、言えること、できること。立てること。立村先輩に近づくのもいる。
　――お前いいのか？　立村、新井林を黙らせろよ。
　――一年ごときにあんなこと言われて、悔しくないのかよ。
　立村先輩は首を振る。言いたい奴には言わせておけ、とでも言いたいんだろう。
「本条先輩、俺としては、一年男子評議が全員二年のだれかに騙されていたことについて、男子一同で今後どうするか、話し合いをしたいと思ってる。一同一Ｂに集合しろ」
　全員、かかれ！　戦の合図。
　新井林は振り返るやいなや、右腕をさっと上げて、まっすぐ教室の扉を指した。指はそろえていた。ポーズだけだったら、絵で見たことのあるナポレオンのポーズに似ている。そんな気がした。
　二年男子――立村先輩を除く――三人が立ち上がると一年男子をひっつかもうとする、女子が悲鳴をあげる
　瞬時、本条先輩が怒鳴った。
　新井林と同じ方向に指を差し、二年に片手で制するしぐさをした。
「二年動くな。一年を行かせろ」

　荒れた。
「本条、これを黙ってみてろってのはひどいぞ、お前」
「二年をこれだけばかにされて、黙れってどういうことですか」
「立村ががまんしているのを、俺たちが見過ごせって言うんですか、本条先輩」
　立村先輩だけが無言で本条先輩を見つめている。隣りの清坂先輩、他の女子評議たちも指をもみながらお互いの相棒たちを見つめている。

一年男子、四人全員教室を出ていくまで、本条先輩の制止は続いていた。二年、三年男子の目は猛獣そのものだ。
特に二年生は、あと一言でも本条先輩が妙なことを口走ったら、何するかわからない。
――私だったら、ここで解散するけどな。
同じことを考えていたのは、本条先輩も一緒だったらしい。
「大荒れの総括委員会だが、今日のところはこれで締める。立村、お前はここに残れ」
ふだんは仲のいい二人なのに、今は完全に上下関係の枠で区切られている。立村先輩は答えず、そのまま座っていた。視線が立村先輩に向けられていくのを、梨南は辿りながら重たく思った。
ためらうことなく「お疲れさまー」と出て行く一年女子、立村先輩を囲んでうろうろしている二年男女評議、三年評議が本条先輩に一声「お前も災難だな」掛けて去っていく。
「梨南ちゃん、先に帰るね、お疲れさま」
なんで一言も「男子のこと、大変だったね」と言ってくれないのだろう。あえて触れないようにしているらしい。割り切ることにした。
梨南を置いていけるのは、女子たちにとってほっとすることなのだろうから。
教室を出て、他の女子たちと反対方向に階段を下りた。
一年Ａ組の教室にもぐりこんだ。

青大附中の教室は、扉で区切られているので廊下のざわめきなどはわりとシャットアウトされる。ロッカー側の壁は思ったよりも薄いので、隣りの教室での声はくっきり響いてくる。後ろの席に座っているとよくわかる。
もっともよく聞こえるのはロッカーの中に入って耳を澄ませること。
背中いっぱいに、声を聞き取ることができるから。
どうして梨南がそれを知っているかというと、以前自分のロッカーを掃除していた時に、隣のクラスの試験問題についての情報を仕入れたからだった。

一年Ａ組の連中は誰もいなかった。自分のクラスではないので勝手が違う。席の並びは机を男女並べる形式で、二列ずつの川の字型だった。男女が机を付け合 う形だった。他人のロッカーにもぐりこむのはさすがに気が引けた。ロッカーと掃除用具入れの隙間に、人ひとり入るスペースが空いていた。身体を滑り込ませ て、片手でコルク型をこしらえた。
すでにＢ組において新井林の演説は始まっているらしい。窓をぴっちり閉められて、風の音もカラスの鳴き声も聞こえない。
聞こえるのは、新井林の声だけだ。
だんだん、そっくりになるあの声だ。
小学校二年の時に聴いた、「ローエングリン」様の歌声に。
――なぜ、新井林なんかに、似ていくんだろう。
盗み聞きすることは悪いなんて思わなかった。どうして罪悪感なんて感じるのか。梨南は耳を

ぴたりとくっつけた。耳たぶが冷たかった。

「――あの女を殺したいんだ」
　――あの女。
　誰を指しているのかはもう分かっている。初めて他の男子の声が混じった。ちょっといがいがした感じの、どこにでもありがちな声。
「あのさあ、健吾。どうしてあそこまで杉本を憎むんだ？　あの女は確かにむかつくし、顔を見るとへどが出そうになるのも、わかる。でもさ、ああいう奴はしょせんくその一種なんだから、叩いたら自分の方が汚くなるだけだぜ。臭いものは無視するのが一番だ」
「そうだよ、青大附属はそれこそ『紳士であれ、淑女であれ』だろ。いじめだとかリンチだとかになると、ちょっと違うと思う」
「まあ、健吾が佐賀にベタぼれなのを差し引いてもだ。お前の嫌い方、異常だぜ。本当に何かあるのか？」
　他クラスの評議たちが、懸命になだめている。思ったよりもまともな発想をしていることに梨南はちょっと、びっくりした。
「頼むから、聞いてくれ。俺の話をみんな聞いてくれ」
　涙ぐんでいるように聞こえた。コルクを太くして耳をくっつけた。
　――あの新井林が泣いている？
　――私を憎むあまりに？
　――それともはるみのことを思って？
　丸い空間から、声がくっきり、響く。
　新井林の叫びが、言葉として耳に、散った。

「俺が小学三年の頃だ。あの頃、俺にはふたり、めちゃくちゃ仲のいい奴がいたんだ。やはり俺と同じく、あの女をつぶしてやろうと燃えてた」
　――いたいた、ふたりとも転校してしまったけれども。
「ある日、たまたまそいつら二人が、死んだ猫の死体を三匹分見つけたんだ。猫いらず食べて死んでたらしいんだけどさ、それをあの女の家に投げ入れてやろうって、思ったらしい」
「実際、やったのか」
「やった。俺はかかわってなかったけれど、聞いた時は大成功だって拍手しちまったぜ。あの女の家は気取っていて、金持ちぶっていて、うちの親なんかもすげえ嫌ってた。近所でも村八分状態だったしな」

　記憶に三匹の白い猫が身体を寄せ合ってかたくなっている姿が浮かんだ。
　しろ、こしろ、ちびしろ、と呼んでいたのら猫親子だった。よく梨南の家にご飯を食べにきていた。近所からは
「のら猫にえさをやらないでください。増えるから迷惑です」

と文句を言われていたけれども、両親は無視していた。

「でも健吾、それはちょっと、嫌がらせだぞ」
「ああ、俺も今思えば、あれはやりすぎだったかもしれないと思う。そのことについてはあやまれって言われたら頭下げるさ。でもな」
　口から血を流して、ひっくり返っていた。きっとおなかが空いて食べようとしたら、それが毒饅頭だったのだろうと、母は話していた。
「うちに先に来れば、おいしいもの、食べさせてあげたのに」
と母はチャーハンをいためていた。
　庭に三匹を、箱に入れて埋葬した時、一緒にチャーハンも入れてあげた。
「今度こそおなかいっぱい食べるんだよ」
と話しかけて、母は泣いていた。

　梨南は泣かなかった。
　一緒に手を合わせて、たんぽぽをたくさん摘んで、飾ってあげた後、すぐに近所で遊んでいた幼稚園児たちを捕まえて、
「さっき、うちに誰か私と同じくらいの男子が来なかった？」
　と尋ねた。梨南の庭にそういうことができる奴は、必ずちびちゃんたちが見ているはずと、読んだからだった。外れていなかった。ちびちゃんたちは偉い。ちゃんと、胸の名札まで教えてくれた。お礼に梨南はたんぽぽの首飾りをちびちゃんたちに作ってプレゼントしてあげた。
　同じクラスの男子ふたりだということを洗い出すのに、三十分もかからなかった。

「確かに猫死体を投げ入れたことは悪いとは思う。でもな、そこまですることあるのかよ」
「したことは？」
　新井林は一気にまくし立てている。
「親に告げ口されるのは仕方ねえ。親に怒鳴り込まれるなら頭下げるさ。先公に絞られるのもあきらめる。でもな、なんで、あいつらの親に手を出そうとするんだ？」
「はあ？」
　聞いているやつらは全く見当つかないらしい。
　梨南だけだ。分かるのは。
　「あの女」とのみ、使う。
「怒られるのは、俺たちだけでたくさんだろ。父ちゃん母ちゃんにまで、文句言われる筋合いねえよ。あの女の親は、どういう手を使ったか知らねえが、会社の 社長に手を回して、俺の友達連中の親が働けないように仕向けやがった。嘘じゃねえ。実際、あいつの親が、転校前の挨拶でうちの親に言ってた。あの女関係に 関わるとどういうことをされるかわからないから気をつけろってさ」
「仕事しづらくされたって、どういうことだよ。つまりなにか？　首にされたってことか」

「俺だってガキだったから詳しいことしらねえよ。とにかくあれから俺の友達はいづらくなってしまい、いやな噂もたっぷりばらまかれてしまい、引越しせざるを得なくなってしまったんだ。猫三匹のことで、あの女は二組の家を追い出しやがったんだ。そうさ、金かなんか使ってな」
　――あたりまえのことしただけよ。
　梨南はため息をついた。なんもわかっちゃいない。

　梨南がしたのは、猫の墓に手を合わせた後、父に抱きついて泣きじゃくり、
「お願い、あの猫のために復讐してやって！」と叫んだくらいのことだ。
　父はめろめろに梨南に甘い。付け込んだと言われればそれまでだ。
　さらに猫好きの母が落ち込んでしまっているのを、父が見過ごしたとは思えない。
　もっというなら、両親はオペラやクラシック演奏などの趣味仲間で、有名な地元の社長さんとか、動物病院のお医者さんとか、雑誌記者さんとか、ネットワークが広かった。
　梨南もその辺の根回しがどういうことになったのかはわからない。ただ父が、
「梨南ちゃんの猫の敵討ち、してやったよ」
　と笑顔で報告してくれたのは覚えていた。同時に以前から続いていた近所の嫌がらせもぱたっとやんだ。
　毛虫を庭に投げ入れられることもなくなったし、回覧版を飛ばしてまわされることもなかった。
　陰でこそこそ言われているのは感じていたけれども、目の前で言われないのならばないも同じ
　新井林の親友たちが転校させられたのだって自業自得ってものだ。
　あれだけののしられる筋合いはない。
　――そんなことも中学一年になってわからないなんて、本当にあいつはばかなのよ。

「うーん、健吾の言う通り、とすると」
「当たり前だ、俺が嘘を言うと思うか！」
「そりゃあ、許せねえな。俺ならその場でぶっ殺してやるな」
　ぶっそうなことを言う奴ひとり。あいづちを打っている。ばかである。
「俺はあの女の顔がむかつくとか、しゃべり方が気に入らないとか、そういうだけで嫌っているんじゃねえんだ。あの女がこの世に存在する、ことそのものが許 せねえんだ。公立に行ってたら絶対に、俺はどんなことがあってもリンチしてただろうな。真面目に少年法ってもんも調べたぜ。十四才未満だったら罪にならな いって聞いた時は、早くやらねばって本気で思ってたぜ。俺だけじゃないって分かった時も、そりゃあ、嬉しかった。他の女では全くそんなこと思わないし、が まんできるんだけどさ、あの女だけば別なんだ。生物として、存在が許せねえんだ！」
　突然、派手に、小学生並みのうめき声が伝わってきた。
　――あの、新井林が。

「けど、青大附属ってとこは狂ってる。女子もほとんど狂ってる。結局あの女は、女同士で手を

組んで、手玉にとって、ざまあみろって仕組もうとするんだ。しかも、評議委員会もあの女に汚染されてる」
　ゆっくり、言葉を切った。
「立村先輩のことか？」
「先輩なんて呼ぶんじゃねえ！　男か女かわかんない、ついてるかついてないかわかんないような顔している、あんな奴のどこが！　悪いが俺はあんな奴をちっ とも年上だなんて思っちゃあいない。一年にいたら、当然締め上げてるさ。正々堂々とタイマン勝負でぶっつぶしてやる。よりによってあの女の味方ときたぜ」
　さすがに先輩についての悪口に共感するのは気がひけるらしい。
「でもさ、あの人は青大附属きっての、語学の天才なんだろ？　大学での英語授業を受けてもいい、附中では唯一の人だって」
「けっ、ろくに九九もいえないくせして合格したってことは、何か裏があるに決まってるぜ。知ってる限りじゃ、一年の頃から女の尻ばかり追いかけてるって話 だ。女だったら誰でもいいのかって感じだな。結局今度はあの女にひっかかったと。まあいいさ、ばかはばか同士。くっついてくれればいい。勝手にしろって な」
　誰も相槌を打とうとしない。たぶん、新井林ほどに男子たちは立村先輩のことを嫌っていないのだろう。もしかしたら英語の教科書とか、問題の解き方とかでお世話になっているのかもしれない。なにせ立村先輩はオペラを生で聞き取ってしまう耳の持ち主だ。
「あいつのことはどうでもいい。とにかく俺は、あの女の手で踊らされたってことが、何よりも許せないって言う、それだけだ！」

　――毒饅頭を食べて、苦しい苦しいって思ってのよ。あの猫たちは。
　――奴らの親には命があるだけでももうけもの。
　――私は、当然のことをしただけ。

　今でも家の神棚には、盃を三つ並べて、毎朝水を入れ替えている。
「猫にお水あげなくちゃ」
とは母の口癖だった。梨南の家は無宗教だけど、毎朝拍手を打って、神様を拝んでいる。

　梨南はそっと教室を出た。

　六年間、殺してやりたかった相手だ。
　塩酸入りの給食を食わせてやりたいと何度も思った。

　もし、新井林の叫び声を、オペラの舞台で耳にしたとしたら。
　――どうして、あの声とあの姿は、立村先輩に与えられなかったのだろう。
　新井林健吾は、あまりにも「ローエングリン」様だった。

　クイズ大会当日よりも、梨南にとっては後片付けの方が一苦労だった。もちろん新井林、はるみの「全校生徒公認カップル」がＢ組女子一同から総スカンを食ったこととか、あいかわらず梨南に対する男子の悪口攻撃とか、いろいろなことを処理しなくてはならなかった。
　梨南にとって大切なことは一つだけだった。立村先輩に提出するための総括レポートだけである。
　自分なりの反省点と今後の問題提議、解決策などを書けばすむ。
　書くことそのものは面倒でもなんでもない。
　梨南なりに言わせてもらえれば、
「やりたいと思っている評議委員だけで企画を立て、指揮をとる」方がいいと強く主張したかった。実際、本番そのものは成功したわけだ。締めの委員会が大荒れしたのは別としても。
　――と、いうことで、立村先輩に提出してこようかな。

　立村先輩は２年Ｄ組の、教壇近くの中間席で、朝自習のプリントを読んでいた。すべて書き込みがおわっているところみると、数学ではなさそうだった。軽く 会釈して、近づいた。全校集会から四日たった金曜日、放課後にはあらためての評議委員会が行われる。駒方先生の監視のもとだから、全校集会後のすさまじい のりにはならないだろう。直接顔と顔をつき合わせて話すのも難しいだろう。今のうちにきっちりとけりをつけておきたかった。
　めずらしく白いはおりものを椅子の後ろに掛けている。梨南の方においでおいでと招くような手の動きをした。
「杉本、もうレポート書いたんだ。早いなあ」
「それくらい当然です。出来ないほうが馬鹿なんです」
　梨南はあっさり答えた。すぐに目を通してほしかった。立村先輩の静かなまなざしを見つめて、机に両手をついた。
「先輩、内容、どうですか」
「うん、いいよ」
　上の空で答える様子。本当に読んでいるのだろうか。目の下にうっすらと隈が見える。襟元のネクタイが微妙に緩んでいる。今週から気温が急上昇しているからだろうか、暑いのだろう。
でも、梨南からしたら許せなかった。
「ネクタイ、曲がってます。直します」
　気付いていないのだろう。答えを待たずに梨南は立村先輩の襟元に手を伸ばした。濃いグレーチェックのネクタイを軽く引っ張った。三角の部分をきっちりと 直すだけでいい。立村先輩は黙って梨南の顔を見つめつつ、されるがままになっていた。今ごろ気付いてあせっているのだろう。梨南は当然のことをしてあげた だけだった。
　なんとなく、周りの空気が静まったような気がする。
　結び目が美しくなった段階で、改めて見回すと、すでに清坂先輩、古川先輩が窓際の席で首を

かしげていた。怒ってはいないようすだ。ほっとして頭を下げ た。同時にネクタイから手を離した。梨南と目が合ったとたん、けらけらと笑い転げるのが古川先輩。清坂先輩に「やめなよ」となだめられている。無視して、 立村先輩の席に近づいてきた。
「立村、ほらほら、なにフリーズしてるのよ」
「いや、杉本が、ただ」
　口篭もる立村先輩。
「いやあねえ、新婚さんみたい」
「やめろよ。杉本に失礼だろう」
「杉本さんも大胆だねえ」
　古川先輩の側にいる以上は、きちんと答えねば。
「見苦しい格好でいる人と、私は話したくないからです」
　そんな大きな声を出したわけではなかった。教室の中では十分響く声だったようで、ささやかに笑う人が幾人かいた。
「なんで笑うんですか」
　立村先輩以外の連中がなぜ笑うのか、梨南にはわからなかった。
　幼い頃から、父のネクタイを直して上げるのが梨南の習慣だった。他の人たちはそういうこと、一切していないのだろうか。
「それでは、委員会までに感想をください」
　梨南は頭を軽く下げて出て行った。
　立村先輩はおとなしく、やわらかな表情を見せ、頷いた。隣りの席の古川先輩は、さっさと席について、なにやら話かけている。ひじでつついて困りきった顔をしている。またエッチな話でもしているんだろう。

　一年Ｂ組。
　一切、男子たちとは口を利かない。
　はるみへの風当たりが想像以上に厳しいのも感じていた。

　溝口先生は梨南の時と同じように、ロングホームルームを利用して、「なぜ佐賀はるみを女子たちは無視するのか」という議題を用意してくれた。
　梨南の時と異なるのは、男子一同が何ひとつ、発言しないこと。
　「はい、はい、はい」と梨南への不満をわめきちらした連中がだ。
　おそらく、新井林のにらみがかかっているのは確実である。
　同じように女子側も発言は一切ない。梨南の時のように、花森さんがかばってくれることもない。その辺が異なることだろう。
　――どうでもいい、私には関係ない。
「杉本、この状態を、君はどう思うか」
　結局指されるのは、女子評議委員たる自分だった。

　その辺は義務だ。割り切っている。梨南は溝口先生の顔を見上げて、何を言いたいのかを読み取ろうとした。いやらしい雰囲気で「お前があれだけかばわれたのに、佐賀が無視されるというのはおかしいと思わないか？」という匂いを感じるのはいやだった。
　答えは、あっさり決めた。
「男子に聞いたほうが早いのではないでしょうか」
「どういうことだ？」
「女子が誰も発言しないのは、男子グループの復讐が恐ろしいからでしょう。腕力ではかないません。自分の身を守るためには当然です。佐賀さん以外の発言は、女子たちにとって命取りだということを、どうして溝口先生はわからないのでしょうか。不思議です」
「それでも評議委員なのか？　杉本、この前の全校集会を仕切ったのは君だと聞いた。あれだけ、見事な集会を企画できるのだから、その分人への思いやりも持っているのではないかと思うのだが」
　ぞっとする。結局はこの先生も、「男子の一派」に過ぎないのだ。
「それなら佐賀さんの発言を待つべきです。先生、ご存知ないかもしれませんが、ほんのささいなことをうちのクラスの女子がおしゃべりしただけで、とある男子に脅しを掛けられたという事実があります」
　初めて空気が動いた。梨南の発言がきっかけでいつも通りの「くたばれ」「なに嘘言ってるんだあの女」「ぶっ殺してやる」と飛び出してきた。これこそふつう。慣れている。こうでないと落ち着かない。自分にも火がつく。梨南は続けた。
「残念ながら、証拠はつかんでいませんので、これ以上追求しません。ただ、たたけばほこりが出てくるのは当然だと思います。私は、まだ生きていたいので、これ以上のことは言えません」
　はるみはうつむいている。じっと机の上で指をはじいているのが新井林。あの「結婚行進曲」以来、新井林の「はるみ守り」は拍車がかかった。目を離さなくなった。男子たちにも、頼み込むか命令するかしたのだろう。
　新井林の反撃が怖いから、女子たちは何も言わない。
　ただ、自分たちの意志で持って口を利かないだけ。
　梨南の見た限り、男子グループの中にも一部、反目している集団がいないわけではなさそうだった。たとえば梨南に「杉本さん」と呼ぶ男子とか。ただなにせ弱小だ。当てにはならない。
「お前のことをかばってくれただろう、佐賀も」
「その時おりの事実を伝えたのみです」
　悪口を浴びせ掛けられないですむだけでももうけもの、と利南は言いたかった。

　花森さんが、
「それにしても、すごい、すごかったよ。あのファッションショー。みんな杉本さんが企画したんでしょお」
「そう、本当は花森さんに出てもらいたかった。美的感覚からして」
「でも、なんかモデルがはしゃぎすぎって感じしたね」

　今日の花森さんは、幅をつぶした学生かばんをぶらさげ、入りきらない荷物を近所の洋品店からもらったビニール袋につっこんでいた。深紅の地に白いハート 型が真中にひとつ、のっかっている。最近人気らしいが、青大附属の中では見かけない。ごみ袋みたいとひそかに思ったけれども、当然梨南は黙っていた。
「それよりさ、杉本さんさっきすごいこと言ったよね。うちのクラスの女子が、男子たちに締められたって？」
「佐賀さんのこととかでいろいろあったと、噂を聞いたから」
「大胆だなあ、やっぱり杉本さんって優等生だけど、『いい子』ちゃんじゃないなあ。そういうところが私は好きだけどね」
　花森さんはちろりと男子側に目線をやり、耳元にしゃがみこんだ。
「でもね、新井林中心のグループには気を付けたほうがいいと思うよ。あの男子、何するかわかんないからね」
　聞き返す間もなく、花森さんは軽く手を振って、教室から出て行った。給食が終わったばかりだから、まだ帰りの時刻ではない。当然、エスケープって奴だ。 梨南はにこやかに見送った。他の男子、女子の一部がうさんくさそうに噂話をしている。きっと、「男とやってるんだぜ」とありもしないことをささやいている に違いない。
　梨南はすっと立ち上がり、二階へ向かった。男子たちの見送る声はいつも通り「またあの女、二年に媚び売りに行くんだぜ」だった。最近、梨南を敵外視する連中の流行り言葉である。

　別に立村先輩に媚びを売ってどうするっていうのか。ばかばかしい。
　ただ、梨南も花森さんの言う通り、男子たちの腕力がばかにできないものだということに気付いていた。にらみ合いだけなら負けることはないだろう。しかし、手を出された日には、梨南と言えども一人で立ち向かう自信はない。小学校の頃から、両親にも、
「梨南ちゃんは女の子だから、いろんな人に目をつけられやすいのよ。気をつけて帰るのよ。夜遅くなったら家に電話を掛けるのよ。ちゃんと、迎えに行きますからね」
　ちかんだとか、変質者だとか、そういう人たちがうろついているとは聞いている。幸いそういう関係の人に狙われることはなかった。むしろ、同年代の「恨みある男子」たちのやり方が危険だと、いつも感じていた。
　恨み買うことをしている自分が悪い、と思えというのだろうか。
　梨南は全く思わない。
　やろうとするのならば、こちらはバックを取って応戦するだけ。
　二年Ｄ組の清坂先輩や古川先輩の側でおとなしく話を聞いたり、立村先輩にいろいろ教えてあげたりとか、二年の教室ですることは結構ある。暖かく迎えてくれるところに行くのが当世だ。

「あのね、杉本さん、ちょっといい？」
　なにげなく通り過ぎて、覗き込んだという振りをした。教室の扉は開いていた。立村先輩はいなかったけれども、女子の数人が教壇の上に腰を降ろしてひそひそ話に興じていた。梨南を見つ

けてすぐ、清坂先輩が立ち上がった。
「なんですか。清坂先輩」
　わざときたのではない、風に梨南は答えた。
「ちょっとだけ、時間もらえるかな」
「はい、大丈夫です。次の授業、体育ではありませんから」
　隣りの女子二人に手を合わせると、清坂先輩は梨南を連れて中庭に出た。六月の花はあじさい。握りこぶし大の色違い花あり、手のひらで抱えられそうな紫、 ほんのり桜色したもの、咲き乱れるというよりも、居座っていた。ふたつ、椅子代わりの大きな石が並んでいた。梨南は白いのに、清坂先輩は灰色のに座った。 ちょっとお尻が痛くなりそうだった。
「この前は大変だったよね。二年のみんなで話してたんだけど、これ、杉本さんにお疲れ様のプレゼント。開けてみて」
「まさかブラジャーだなんて言いませんか」
　第一弾、の爆笑をしてのけた清坂先輩。
「こずえに汚染されてなんかないって！　杉本さん、ほんっと面白い」
　ポケットから取り出したのは、ふわふわした感じの白いコサージだった。かすみ草に包まれて、乳白色の薔薇が形作られたもの。手のひら大の、胸の真ん中に指すと、椿姫みたいな感じでいいかもという雰囲気だった。
　――これ、今度、「フィガロの結婚」観にいく時に、つけるといいかもしれない。
　すぐに胸に当ててみて、夏の黒いレースワンピースに合わせようと決めた。
「ありがとうございます。私、清坂先輩たちのセンス、好きです」
「よかった！　絶対杉本さんはこういう上品なものが好きだよね、ってみんなで話してたんだ」
　少しだけ洋服の話をした後、梨南は気になっていたことを尋ねた。自分にこれだけいいものをいただいたということは、当然、清坂先輩たち二年一同もそれなりのことをしてもらっているはずだ。
　そう、何よりも、立村先輩と本条先輩は、二人で仲良くお金出し合って、二年女子にケーキセットをおごったのだろうか。
「ああ、あれね。それがね！」
「立村先輩と本条先輩、あれからけんかしたみたいになってるんじゃないですか？」
「え、どうして？」
「だって、私が仕切ったことをばらしたせいで、本条先輩の計画はぼろぼろになってしまったわけですし。立村先輩もかなり頭にきたのではないかと思います」
　梨南がこっそりと、新井林たちの密談を聞きに出かけた後のことだ。
　さすがに立村先輩のまん前では聞けなかった。
　梨南もそのくらいのデリカシーは持っているつもりだった。
「それね、私も気になってたの。だから、しばらく私も、教室に残ってたんだけどね」
　なぜかそりかえったように、清坂先輩はつぶやいた。
「『さ、卓球場行くぞ』って、あっさり立村くんを連れて、どっか行っちゃったの。本当に、二

年女子みんな、立村くんのこと心配してたのにね。あっけに取られて、私もただ呆然」
　なぜ卓球なのか、わからず聞き返した。
「卓球、好きなのですか。本条先輩」
「得意なのは立村くんよ。いつも球技大会の種目、立村くんは卓球を選んで結構いい線いくのよ。強いよ。私は相手になるわけないし、貴史も勝てないって。そ うそう、本条先輩に勝つことのできる、唯一のスポーツだって。本条先輩も本条先輩よね。よりによって、自分が絶対に勝てない卓球に誘うなんてね。何考えて るんだろうね」
　本当に、わからないらしい。スカートを調えながら、清坂先輩は座り直していた。
「立村先輩はあっさりついていったんですか」
「行っちゃった。そうそう知ってる？　『本条・立村ホモ説』ってあるのよ。一部の噂なんだけどね。あまりにも仲が良すぎるんだもん。まあ、今回の件で立村 くんも少しは、本条先輩離れするかと思っていたんだけど、全くその気なし。私もその時だけは、説が本当かもしれないって思っちゃった。異様になついてるか らね、立村くん」
　わざと声を立てて笑おうとしている。何か、咽にひっかかった笑い声だ。
　梨南が考えていることまできっと、考えが回っていないにきまっている。
　本当のこと、聞いていてもわかっていないに決まっている。
　でも、清坂先輩のためにはそれがいいのかもしれないとも思った。
　『本条・立村ホモ説』がある程度本当だと思われたら、立村先輩だって清坂先輩のことを追い掛け回すのはやめるだろう。あれだけ梨南のことを気遣ってくれる人なのだ。好きで好きでならない清坂先輩がため息をつくのを喜ぶとは思えない。
「清坂先輩、その説、本当でもいいと思います」
「なんでなんでなんで？　杉本さん、それは危険な発言よ」
　この辺は含み笑いだ。嘘じゃない。安心して梨南は続けた。
「この前新井林が話してました。立村先輩は一年の頃から女の尻を追い掛け回しているという噂があるそうです。本当かどうか私はわかりません。でも新井林の ことですから、もっと悪い噂を流す可能性はあると思います。女の尻という下品な言葉で、立村先輩だけではなく、清坂先輩にいたるまで、失礼な言葉を撒き散 らされたら大変です」
「あの、いいでしょうか、杉本さん」
　笑いがこみ上げてきてもう押さえられない風に、梨南の肩をそっと抱いて、清坂先輩は問い返した。本当だったらあじさいの群れに頭をつっこんで大爆笑したいところだろう。梨南は指の間にあじさいの花びら四枚を落とした。
「一年の頃から女の尻を追い掛け回していた、という根も葉もない噂のことだけど、あれはね、大嘘よ。断言しちゃう」
「清坂先輩のことではないのですか」
　もうこらえきれないのか、清坂先輩は石から滑り落ちてしゃがみこんだまま声を立てずに笑いつづけた。何かしないとわるいと思い、背中をさすったのは梨南 だった。息がつけるようになるのに約一分弱。貴重な休み時間。早く話してほしかった。顔を上げた時、清坂先輩のまなざしだ

けが真面目で、思わず梨南は黙り 込んだ。

「一年の冬に立村くんが、クラスの中にいる別の女子に告白して、振られたらしいという噂が流れたのよ。たぶん新井林くんはバスケ部の連中からその辺を聞き かじったんだと思うの。かなり有名な話だったし、立村くんはそのことについて、全く言い訳しないで言われるがままになっていたから、たぶん本当だと思い込 んでいる人もいるだろうなあ。けどね」
　唇に指をはさみ、なめるようなしぐさをした。
「本当は、告白されたという女子が別のクラスの子にありもしない噂を撒き散らしただけなのよ。うちのクラスの男子たちはみな、立村くんの味方だったからそ のことで嫌なこと言ったりした奴、いなかったんだ。いつのまにかＤ組内では『ガセネタ』ってことで処理されちゃったけどね」
　新井林の言葉をそのまま信じたつもりはなかった。
　単なる比喩表現なだけよとも思った。
　でも、聞かずにはいられなかった。
「では、新井林の言ったことは、全くのでたらめと考えていいのですか。立村先輩は女の尻を追い掛け回したこともないと」
　清坂先輩ご自身はどうお考えなのですか、とはさすがに聞けなかった。
「当たり前よ。立村くんがそういうこと、できるわけないもん」
　自信たっぷりに言い切った清坂先輩の顔。梨南からすると妙だった。
　清坂先輩のことは好きだ。絶対になれないタイプだけれども、梨南のことを可愛がってくれるし、センスあるプレゼントを選んでくれたりもする。男子受けがいいのも当然だろうと思う。
　ただ、何かが違う。
　どうして平気で立村先輩の気持ちを理解したつもりでいられるのだろう。
　――清坂先輩は、立村先輩がどれだけ思ってくれているか、わからないんだ。
　――羽飛先輩に夢中だから、立村先輩が必死にアプローチしているのに気付かないんだ。
　――目に見えているものが本当に見えてない、そういうタイプの人なんだ。
　――男子だったら、そんな奴馬鹿だって答えられるのに。いい人だからなあ。
　後ろの方で窓ガラスを叩く音がする。ばしんと響いた。頭の上だ。
「あれ、こずえ、どうしたの」
「ほら、美里、これから家庭科だよ」
　梨南にも笑いかけた後、古川先輩は窓辺から姿を消した。
「そうだ！　忘れてた。今日ね、家庭科で将来の生活設計についての授業があるんだ。宿題、やってないの、急がなくっちゃ」
　コサージのお礼をもう一度言おうとした時、帰り際に、
「あ、それとね、これを選んだの、実は立村くんなんだ。杉本さんはこういうのが好きなんだって、えらく強く主張してたんだよ。あとでお礼言うと喜ぶかもよ！」

――立村先輩が。
――オペラの話たくさんしたからだろうか。
――オペラ向けの花がいいって言ったからだろうか。

あじさいの花びらは四葉のクローバーを軽くいじったようなもの。
少しだけむしった後、梨南は教室に戻った。コサージの中に生花をいれてみたかったからだった。

誰にも襲われることなく五時間目を終え、梨南はすぐに三年Ａ組の教室へ向かった。月曜日の全校集会に関する正式の締め。ごくふつうのやる気なさげな雰囲気あふれる静かな評議委員会だ。
理由は簡単。まず、一年生男子が誰も出席しない。
前もって中体連の関係でという、許可が出ていたという。
新井林は日曜に他の学校との対抗試合があるとかで、最後の練習、出なくてはまずいそうだ。他の連中も似たような理由らしい。モデルで義務ははたしたんだから、堂々と休めるわけである。
月曜の夜にあれだけ派手な騒ぎをやらかしたのだから、当然と言えば当然だ。新井林だって立村先輩の顔を改めてまじまじと見たくはないだろう。本条先輩が どういうことを言って説得したのかは梨南の想像でしかないけれども。立村先輩と一緒に「嵐の後の卓球ツアー」を行ったってことは、それほど二人の間は険悪 になっているわけではなさそうだ。
清坂先輩は気付いていないけれど、梨南にはわかっている。
立村先輩がもし、本条先輩の本心に気付いていなかったら大変だ。
教室を覗き込み、まずは本条先輩がまだきていないことを確認した。委員長お膝元のクラスでありながら、なぜか入ってくるのは最後だ。すでに二年の男子評 議たちが、いつものように机をかためて馬鹿話をしている。当然立村先輩も入っていた。馬鹿笑いはしないけれど、おとなしく頷いてばかりいる。清坂先輩はま だいなかった。

「立村先輩、お話したいことがあります」
びくっとしたのは他の二年男子たち、立村先輩は平然としていた。
「どうした、杉本。さっきのレポートのことか」
「いいえ、ふたりっきりで」
ふつうだと「ひゅーひゅー」騒ぐのだろうが、なぜか何も言わない男子たち。立村先輩は軽く回りを見た後、
「いいよ、何か杉本に俺がまた、とんでもないことしたかな」
後ろの掃除箱前に誘導された。ここなら誰もいない。ごみくさいだけだ。

「先日、のことなんですけど、ありがとうございました」

　ポケットから白いコサージを取り出し、梨南は丁寧に頭を下げた。
「清坂氏からも、杉本がえらく気に入ったみたいだって、言ってたからさ」
「これつけて今度、『フィガロの結婚』聴きに行きます」
　梨南は胸の真ん中につけるしぐさをし、一呼吸おいた。
　言いたいことはこんなことじゃなくって。
「まず確認させていただきたいのですが、立村先輩は月曜日の締めが終わった後に、本条先輩とどうなさったのですか？」
　完全にびっくり眼で、立村先輩はまじまじと見た。
「清坂先輩からは卓球場に出かけたということでしたが」
「よく知ってるなあ。そうだよ、うん。本条先輩に誘われて連れて行かれたんだ。俺が唯一本条先輩に勝てるのが卓球だからさ」
　清坂先輩から聞いたことにほとんど違いはない。
　梨南は続けた。
「本条先輩のことをどうしてそこまで信頼しようって思うんですか。もしかしたら、新井林に手を回したように立村先輩を騙しているかもしれないんです。私、 あの日、新井林たちの会話を聞きましたけれども、大変なことになります。先輩のことを『女の尻を追いかけている奴』とか言ってます」
　告げ口と言われるかもしれない。でも、梨南にしてみれば当然のことだ。
　自分を認めてくれた人のためには当然、伝えるべきことを伝えるべし。
　あの、月曜に、梨南の手柄をみんなに認めさせるよう、発言してくれた人だ。
　コサージと共に梨南のできることはこれくらいだった。
「先輩、本条先輩を疑わないとだめです」

　立村先輩は小さく頷きながら、梨南の話を聞いていた。前の扉から清坂先輩たちが入ってきたが、近づいてこなかった。様子をうかがっているようだった。
「杉本、どうして俺があの時も本条先輩のことを疑わなかったか、聞いてほしい」
　梨南の胸に挿したコサージは、白いブラウスに溶けて、曖昧なままだった。きっとコサージを梨南の瞳と思って話し掛けているのだろう、そう梨南は決めた。片手をポケットの端にすべらせ、同じく呼吸をひとつ置いた。
「あの日、本条先輩は三年Ａ組の祝賀会が控えていたはずなんだ。すぐに帰りたかったんだと思う。それを俺の言ったことで締めの委員会は延びてしまい、一年 男子連中は逃げ出すわ、みんな荒れるわで、本条先輩は気が気じゃなかったと思うんだ。俺みたいな馬鹿でも、それはわかる」
　目を伏せた。言葉を唇の隙間から落とすような話し方だった。前髪が軽く揺れた。
「あの時、俺だけ教室に残された時、きっと一発くらい殴られるだろうって、覚悟はしていた。それが終わってからさっさと祝賀会に出るだろうと思っていた。俺だって杉本のことを曖昧なままにしておくのは納得いかなかったからさ」

「杉本」と呼ぶ時に、思わず唇をなめるしぐさをした。
「私のことを曖昧にですか」
「あれだけ素晴らしいシナリオを書いたのが杉本なんだから、もっと認められて当然だって、俺はずっと思ってた。俺には出来なかったことだから、なおさらそ う思うんだ。でも本条先輩は新井林たちのことばかりを褒め称えている。どういう裏を使ったかはわからないけれど、なにかあるんだろうとは、思ったんだ」
　やはり、立村先輩も感じていたのだろう。ただの不細工な男子ではない。読みがはずれてなくてよかった。でも、どうして疑いを消してしまったのだろう？　立村先輩のことをきっと、本条先輩と新井林たちはさんざん悪口言っていたはずだ。
「問い詰めたり、しなかったんですか」
「最初は、しようと思った。納得いく説明がほしかったよ。けどな」
　言葉を切って、じっと梨南の瞳を見つめ直した。今度はコサージではなかった。かすかに聞こえる小さな声。たぶん、梨南にしか聞こえない声だった。
「本条先輩は、クラスの祝賀会を蹴って、俺を卓球場に連れて行ったってことがすべてだよ。当然こてんぱんに打ちのめしてやったさ」

　梨南は何も答えられず、じっと立村先輩の目を見詰めつづけていた。
「それだけで、先輩は本条先輩を信じられるんですか」
「うん、俺は本能的に敵と味方が見分けられる性格なんだ」
　元のしゃべり方に戻り、立村先輩は席に戻った。もう一度梨南に、
「妙なこと言ってごめんな」
　いつものようにやわらかい笑みを残してくれた。

――本条先輩は顔が完璧だし、頭もいい。だから、立村先輩は騙されてるんだ。いい人が必ずしも頭よくないってことの典型だわ。
――あの時、クイズ大会で。
――たった一人、私の価値を認めてくれた人だから。

廊下ですれ違い、礼を交わす時、梨南はひそかにつぶやいた。

――立村先輩、きっちりと、恩返しはさせていただきます。

先生付き「締め」の評議委員会も無事終了し、あいかわらず一年連中はぽやぽやしていて、二年生は仲むつまじかった。むつまじいといえば清坂先輩がなにげなく本条委員長に呼び出されて、なにやら突っ込まれている様子だった。
「なあに言ってるんですか、本条先輩ってば。私たちにケーキおごってくれる約束は、どうなったんですか？」
「だから、それは立村に任せたって言っただろう。清坂ちゃん、奴を口説けるのはあんただけなんだ。そこんとこ頼むな」
「なに意味不明なこと言ってるんですか！　もう、本条先輩って、そういうことしか考えてないんですね」
笑い口調なので、どんどん話が弾む。側で立村先輩は、梨南の渡したレポートに目を通している。が全部は読みきれないらしい。レポート用紙一冊使い切って 書いたから、静かなところでないとしんどいだろう。この前連れて行ってもらった「おちうど」なる和風喫茶店、あそこだったらまともな顔した立村先輩に戻っ て、落ち着くことできるだろうに。
どうせ立村先輩は食べ放題の権利を持っているのだから。
――私が教えてあげようか。
半分口に出しかけたところで、いきなり清坂先輩が振り返り、二年連中に声を掛けた。何気なく、気が付いてあら、という風に。
「私、ちょっと用事があるから残ってくね。ケーキのこと、あらためて本条先輩に交渉させていただきます。それと、立村くん」
集中するのに時間のかかりそうな立村先輩に、ずいぶんなことだ。
梨南はかばんにノートをしまいながら、何気なく観察した。
「今日は本条先輩と卓球なんか、行かないでしょ」
「行かない。ここで杉本のレポート読んでから帰る」
あら、と清坂先輩は梨南に目を向けた。笑顔だったが、かすかに不安そうな陰りが見えた。風が窓から吹き込んできて清坂先輩の髪を揺らしていた。近づいてみると、ブラウスの襟元にはちいさな猫のブローチが留められていた。

「なんかまた雨が降りそうね、杉本さん」
「はい、給食前にはやんでよかったです」
「でも、また降りそうでない？　傘持ってきた？」
　梨南は窓辺に戻ってあらためて窓を開いた。
「私は持ってきてますけれど、たぶん持つんじゃないでしょうか」
　重みのない空がたまに崩れて、夕立を降らせる時がある。
　自分の席に戻ってかばんをぶら下げた本条先輩が通り際に、立村先輩の頭を強くむしるようなしぐさをした。いきなりひっぱられてのけぞるものの立村先輩は何も言い返さなかった。
「暇だったら電話よこせ。今日は清坂にくれてやる」
　返事を待たずに片手を挙げ、本条先輩は出て行った。なんとなくそれが合図だった。梨南も清坂先輩と立村先輩に頭を下げた。あんな教室だったら落ち着いて 梨南のレポートを読めないだろうに。そう言ってやりたかったけれども、清坂先輩の前で恥をかかせられるのは、きっと嫌だろう。
　――来週の評議委員会が終わった時にあらためて。
　かばんの中にしまいこんだコサージを取り出し、梨南はすっかりしおれたあじさいの花びらを捨てた。
　――髪を解くのは、コサージをつけるときまで待っておこう。明日から、お下げ編みにしてこよう。
　ポニーテールよりも、実はお下げを太くぶらさげる方が梨南の雰囲気に合っている、そう母が言っていた。試してみて、そう自分でも思った。

　一週間はあっという間に過ぎていった。
　はるみが一年Ｂ組の女子たちから冷たい視線を投げかけられているのは変わらなかったし、新井林が何かとはるみの側を離れないのもいつも通りだった。男子 たちが梨南に対して憎まれ口を叩くのも、溝口先生が胃の辺りを押さえながら教壇に立つのも、何もかもがいつも通りだった。
　ただ不思議なのは、はるみの態度が梨南に対して全く変わらないことだった。梨南自身は、思いっきりはるみに嫌われたとしても仕方ないと思っているし、む しろそれが当然だと感じてもいた。天敵新井林健吾を選んで、仲の良かった梨南を捨てたのだ、そのくらいのことはされても当然だろう。
　なのに、いまだに「梨南ちゃん」と、すがるようなまなざしを投げてくる。
　「ちゃん」付けして呼ぶのはなぜなんだろう。
　もちろん梨南は無視して、立村先輩宛ての手紙を書いて推敲したりしている。クラスのみんなとうまくやりたいから取り入っているのだろうか。いや、はるみ の性格からして、自分からそんな器用なことができる玉ではない。いつも人にくっついて、人の言うなりに物事を鵜呑みにし、梨南の言う通りにしていた子だ。 それがむかついたといえばむかついたし、楽だったといえば楽だ。
　――しかたないか、私の真似ばかりしていたはるみは、今度新井林を選んだってことなんだ

から。
　――だったら、私は離れるのが当然よ。

「杉本さん、お下げにしたんだ。髪が長いからいいよね。うらやましいよ」
　いつも通りといえば花森さんのファッションチェックも欠かせなかった。
「たまにはこういうのもいいかと思って」
「うん、似合うよ。できればふわふわっとした花柄のドレスとかで合わせると可愛いと思うんだけどなあ」
　梨南の考えていたコーディネート通りだ。やはりこの人は分かっている。梨南は頷きながら、花森さんの「校則をぶっこわした」ファッションをチェックした。
　口紅、太いカールの入った髪形、まぶたの桃色、細かには変わっているのだろうけれど、特に目立った変化はなかった。左の小指に小さくイニシャルが入っているのは、花森さんの彼氏の名前だろう。聞いてみた。
「やだなあ、どうしてわかっちゃうのかなあ。杉本さんは鋭いんだから」
　隠したりはしない。唇にその小指をくわえ、花森さんは優雅に笑った。
「ま、どうせあとで先生から呼び出しくらうけどね。いいんだ。ここにいる時間はどうせほんとの自分じゃないんだもんね。杉本さんも、そうでしょお」
「ほんとの自分じゃないって？」
　鸚鵡返しした。
「こんなばかばかりの教室で、うんざりしているよりも、もっと別のところで羽根伸ばしてるって感じだし。杉本さん、今度よかったら私の彼がやっているライブ、来ない？　もちろん高校生っぽく化けてもらうけれど」
　花森さんは、聞き覚えのある音楽ホールの名前を口にした。
　梨南がよく両親と行っている場所だった。
「結構地味なんだ。ジャズと和楽器と、ピアノがセットになってるバンドのようなもので、別に学校に見つかっても怒られないと思うけどね。でも、かっこいいんだ。彼はピアノパートなんだけどね」
　花森さんだったらハードロック系じゃないかと想像していたのだが、気持ちよく予想が外れた。今度、お誘いがあった時にはぜひと、約束した。

　一段落したところで梨南は、いつものように二年Ｄ組の教室へと向かった。
　一週間待ったのだからきっちりと、立村先輩はお返事を用意してくれるだろう。あらためて静かなところできっちりと教えてほしかった。今日こそは、きちんと話さなくては。
　――立村先輩が本条先輩の悪巧みに気付いてないってことを教えなくては。
　金曜日は評議委員会の日だ。もっとも臨時委員会がしょっちゅうなので、正式な曜日を忘れがちだった。何かがあるといつも集まっているような気がする。

「杉本さん、ちょっとちょっと。まだ立村来てないよ」
　古川先輩が席についていた。立村先輩の隣りだということはすでに知っていた。何人か二年の先輩は揃っていたけれども、みな朝自習プリントに熱中するか、もしくは紙飛行機折って飛ばしているかのどちらかだった。
　手まねきされたので、さっそく机に駆け寄った。立村先輩の机の上には、数枚プリントが重ねられていた。
「あいつ昨日学校休んだのよ。全く、知恵熱出してるんだから。ばかよね」
「何かあったのですか」
「単なる風邪よ風邪。立村ってね、もともとひよわだから夏近くなると熱だしてぶっ倒れるのよ。今日来るかなあ」
「来ると思います。今日は評議委員会ありますから」
　にやにやしながら古川先輩はじっと、梨南のブラウスを眺めた。
「そうだよね。でもね、杉本さんにも責任あるかもよ」
　耳をよこせと、手招きする。仕方なく梨南は耳を貸した。
「先週、立村のネクタイ直してやったりしてたじゃない？　杉本さん」
「はい、見苦しいの嫌いですから」
　大げさに頭を抱える真似をする。
「あん時の立村の視線、すっかり杉本さんの谷間に向かってたって気付かなかったでしょお。きっと、リビドー発動状態だったと思うな。杉本さん、本当にブラした方絶対にいいよ。走ってると苦しくない？」
　言われて見ると、確かに体育の時、胸の辺りが痛くて動きづらい時はある。
　今度病院に行って結核の検査を受けた方がいいかもと、思ったりもしていた。
「結核？　なあに言ってるの杉本さん。ほんっと、おかしいよね。言うこと笑える！　でもね、冗談抜きでした方がいいよ。今度、一緒に近くの店で安いの探すの手伝ってあげるよ」
「そんなに、先輩たちから見て、見苦しいものですか。確かに私も胸だけ太っているのは良くないと思います」
「違う違う、みんなうらやましがってるの！　美里なんて本当に憧れてると思うなあ。ま、女子の見る目と違って男子は、毎日夢に見てうなされてるんじゃない かと思うけどね。この前の立村なんてまさに、その典型だもん。あれだけ鼻の先に杉本さんのつぼみが接近してたら、まあ、私が男だったとしても鼻血出してる ね。よくこらえたよあいつも。目を丸くして凍り付いていたもの。杉本さんの揺れる胸に完全にノックダウン状態。別にね、十四才の健康な男子が反応しない方 がおかしいと思うけど、でもね、可愛い杉本さんを立村の魔の手から守るために、あえて私は言わせてもらったってこと」
「立村先輩はあまり贅肉のない人の方がお好きなのではないでしょうか」
　暗に清坂先輩のことを示したつもりだった。
「贅肉？　って杉本さん、もう、どうしよう、私こういう贅肉だったら、もっとちょうだいって言いたいよお！」

なんでみなあえて、太りたがるのだろうか。
梨南は机を叩いて笑い転げる古川先輩を見下ろしながら、ちらっと朝自習プリントの内容を覗き込んだ。よかった。社会の歴史年号問題だった。立村先輩が朝から泣かないですむ。
「立村先輩に渡しておいていただけますか」
たくさん書いたけれど、結局二枚のレポート用紙にまとめた、「一年生全校集会」の追加感想を古川先輩に渡した。
「じゃあね、来週行こうか！　ソフトクリームおごったげる」
二年の女子はみなソフトクリームが好きらしい。清坂先輩といい、古川先輩といい。

梨南はいつものように五時間目終了後、三年Ａ組の教室に走った。
クラス全員の顔写真が葬式のように飾られているのは相変わらずだ。真っ正面の黒板上には、先週のクイズ大会後記念に撮ったらしいクラス写真が引き伸ばされて張られていた。
いつものように一年の座る席、廊下側にまとまった。本日は珍しく、一年男子連中もまともに並んで座っている。新井林も、他のクラス評議も制服のままで、女子たちに背を向ける格好でひそひそ話していた。声は聞こえる。聞く気がないから、耳をそばだてないだけのことだ。
――あれだけ先週、立村先輩とやりあったんだから。
――どんな顔して、挨拶するんだろう。
新井林の態度がそう簡単に変わるとは思えなかった。立村先輩に対しての罵り文句、おそらくあれは新井林の本音に違いない。「女の尻ばかり追いかけてい る」「ついてるかついてないかわからないような顔をしている」立村先輩に対して、「申しわけありませんでした」とは死んでも口にしないだろう。
いや、本条先輩の出方によっては変わるかもしれないが。
――だから、立村先輩はわかってないのよ。
――新井林と本条先輩が結託して、立村先輩を落としいれようとしているのを気付かないでいるの。
梨南は自分の頭脳が、ふつうよりも優れているということに感謝していた。
――立村先輩に、私、恩返しできるから。

駒方先生はまだ入ってこない。本条委員長がネクタイを緩めた格好で、
「しっかし、蒸し暑いよなあ」
他の三年男子に声を掛けながら教壇に上がった。やはり一年男子たちに、
「よし、お前ら、来たか」
ピースサインをして見せた。新井林を除く一年男子は、おどおどとした口調で、
「この前はすみませんでした」
とか、謝り文句らしきものをつぶやいていた。耳に入らない様子で本条委員長は、無視する新井林に近づき、なにやらささやいた。聞き取れなかった。梨南たちの方も、二年たちの方も見なかったところを見ると、人の悪口ではなさそうだ。

「いいか、わかったか」
「わかりました」
　ぶすりと答え、シャープペンシルで耳をほじくる新井林。
　――とにかく、立村先輩に報告しなくては。
　見ないふりをして、あらためて梨南は耳に盗み聞きスイッチを入れた。

　立村先輩はまだ来ていなかった。
　古川先輩の話していた通り、風邪を引いて休んだのかもしれない。昼休み、確認のために行けばよかったと思った。清坂先輩だけが二年の列にひとり、座って いた。なんだか様子がいつもと違っている。前後に座っている二年女子同士と二言三言話をする程度で、なにやら文庫本を開いていた。カバーがかかっているの で題名は見えない。
「聞いたよ聞いたよ、美里」
「だから黙っててよ！　もう」
　周りが笑顔で話しかけるのに、今日の清坂先輩は口をきゅっと結んだまま、早口に言い返すだけだ。でも誰も言い返さない。わかってる、わかってる、とばかりに何度も微笑み返す。一年女子にはありえない光景だった。
　いきなり本条先輩が、二年男子を教壇へ手招きした。流し目を使っている。ひょこひょこと三人が立ち上がり、本条先輩を囲む。二年女子には気付かれないよ うな声で、やはり秘密を話そうとしている様子だ。残念ながら梨南の盗み聞き専用耳も、そこまでは聞き取れない。仕方ないので目尻でちろちろ伺うだけだっ た。
　二年男子、みな一同、驚きの表情で口角を上げて、感嘆符付きのため息を漏らしている。いきなり指を互い、指し合っている。本条先輩の顔を見上げて、「ほおお」とつぶやいている。
「……と、いうことらしいんだが、どうだ？　二年野郎組のご意見は」
　野郎組のご意見は、
　Ａ組「いやあ、あいつめでたいんじゃないっすか」
　Ｂ組「あいつも、一年の時から不幸だったしなあ」
　Ｃ組「本条先輩も知ってるってことは、もう解禁ってことっすね」
　おめでたいことらしい。

　先週あれだけ荒れた二年野郎組と本条委員長との関係も、あっさり修復されているらしい。立村先輩があっさりと本条先輩と信頼関係を見せ付けてしまったから、二年の先輩たちも言い返しようがなかったのだろう。
　――立村先輩はこんなに、同期に恵まれているのに。
　――どうして気付かないんだろう。自分の側にいる相手が敵だって。
　あらためて、梨南の決意は固まった。
「おいおい、なあにがめでたいんだ、お前ら」
　声が大きすぎたようで、廊下に響いたらしい。駒方先生がようやく、入ってきた。一応、評議

委員会の顧問ということだが、梨南からすると、単なるお飾りとしか思えなかった。
「すんません、いろいろ世の中、春が来てるみたいなんで」
　ひょうきんな声で本条委員長が片手を上げて言い返す。
「全く、本条お前だろう、年がら年中春なのは」
　全く、先日の騒ぎを知らないから先生たちは平和なことを言っていられるものだ。
　二年Ｄ組の片割れがまだ来ていないのをもう一度確認して、本条先輩は気持ちを切り替えたらしい。
「じゃあ、始めるぞ！　過ぎてしまったことはどうでもいい、未来を見ようぜ未来をってわけで、今回の御題は夏休み評議委員会合宿だ！」
　本来だったら、一年男子が揃ったところで、本条委員長がなじりつつ締め上げるのが筋だろう。それを無視して、さっさと夏合宿の話に持っていくところが怪しい。立村先輩はそこのところも気付いていないのだろうか。梨南はメモしながら、全身をスパイ装備に切り替えた。

「ええと、来てない奴は誰だ。ははあ、二年Ｄ組か。あとでしばき上げるか」
　一年のわが身には全く関係のない話題だった。梨南は機械的にメモを取りながら、ちらちらと清坂先輩の方を眺めた。いつもだったら元気に発言しまくる清坂 先輩がうつむいたままノートを見つめている。たまに写している様子だが、よく見ると文庫本を下に隠している。めくっているけれども進んでいるようには見え ない。指がそれこそ「機械的」だった。落ち着かないのだろうか。指が。
　時折、別のノートをひっぱりだして、同じ指で撫でつけたりしている。表紙が黒い。きらっと光るものが見え隠れした。あれはたぶん清坂先輩がハート型のシールを張って愛用していた奴だ。好きな人のイニシャルを書いて貼り付けておくと、思いがかなうというあれだ。
　誰も様子がおかしいことに気付いていないのだろうか。いないんだろう。たぶん。
　二、三年男子たちがいろいろと、部屋割りやら日程やらの意見を挙げていく。
　前もって用意していたネタなんだろう。すんなり進んでいる。

　風が前の扉からもわりと流れて暖かく迫った。
　立村先輩が白いジャケットを羽織ったままゆっくりと顔を差し入れ、足を踏み入れた。
　本条先輩は何も言わず、ちらりと目を走らせた後に持っているチョークを投げつけた。チョークは硬くて意外と痛い。みけんを切るかとどきどきした。でもあっさりよけたのでちびたチョークは閉まりかけの扉にぶつかり、破裂した。白い粉だらけだ。
「本条、お前が掃除しろよ」
　駒方先生がのどかに、居眠りしそうな声で告げた。実は鋭いところのある人ではないだろうか。
「ったく、立村、遅いぞ」
「申しわけありません」
　一礼すると、すぐに清坂先輩の隣りにかばんを置き、何か尋ねていた。清坂先輩の指がすばや

く文庫本を隠していた。ノートを取っているふりをした。さっきから見ている梨南には、それが真似だとすぐにわかった。
「どのくらい、進んでいる？」
「今、始まったばかりだよ」
　かすかに聞こえる声。
　清坂先輩は立村先輩にちらりと目を走らせると、そのままぶっきらぼうに答えていた。
　悪いけれど清坂先輩のご機嫌は、立村先輩ごときでは直らないのだろう。
　――そうとう怒らせることしたのかもしれない、立村先輩。
　――やっぱり、私、放課後、立村先輩にお話しなくてはいけないな。
　結局ぼーっとしている間に、青大附属の合宿施設を借りることだけ決まった。一応意見は揃ったということで、来週の委員会で話を煮詰めるという。。
「一応、参加者は自由だが、まあ、俺のことを愛してくれてる奴は集まれ、ってとこだ。いいかわかったかてめえら！　忘れるなよ」
　おちゃらけた締めの言葉でお開きとなる。
　清坂先輩の言う「本条・立村ホモ説」が正しいとしたならば。
　これは立村先輩へのラブコールだ。
　すぐに打ち消しておいた。当たり前だ。
　――新井林をひいきしている人なんだから。信じちゃだめです。立村先輩。

　突然新井林が、Ｃ組の男子に背中をつつかれ振り返った。梨南の方を一切見ないのはいつものことだが、背だけを向けている。
「……まさかだろ？」
「……らしい」
「……俺には関係ねえよ」
　一年男子同士で情報を交換している。女子側には聞こえないようにひそひそとつぶやいている。
　気付いたのは梨南だけではない。視線の針でちくりと刺したのが二年男子三人だ。互いに目配せするなり、一人が後ろの掃除箱に立ち、にやついた。他の二人が立村先輩の腕を引っ張り、
「あ、の、さ、立村。ちょっと来いよ」
「どうした？」
　両腕を取って、掃除箱前に連れて行った。声ははっきりと聞こえる。わざと聞かせているのではないだろうか。冗談めかしているけれども、なんとなく宣伝く さい匂いがする。清坂先輩が振り向かずにぎゅっと唇をかみ締めている。やたらと明るい二年男子たちと比べてアンバランスだった。第一、清坂先輩が「文庫 本」を読もうとしていること自体がおかしい。読書魔なのは、立村先輩くらいだ。二年女子たちも肩をすくめながら清坂先輩を取り囲み、きゃいきゃいと騒いでいる。
「美里、とうとう、解禁よね。あとで報告ね」

――立村先輩、本当に大丈夫かな。
二年男子たちが立村先輩を軽く小突き合っている。悪意はなさそうだ。明るいリンチののりだった。立村先輩も肩を押されてあっちふらふら、こっちふらふらとよろけている。
「だから、そんな大それたことじゃないってさ」
無表情で、少し困ったようにうつむきながら、笑顔の攻撃に耐えている。
――少し様子みて、二人になるまで待ってようっと。
そのまま耳を澄ませていたかった。でも後ろから声を掛ける子がいる。いらだたしく答えるしかない。
「梨南ちゃん、知ってる？　立村先輩と清坂先輩が付き合ってるんだって！」
言われた意味が分からなかった。息をつかずにささやくから聞き取り間違えたのかと思った。
「付き合ってるってどういうこと？」
「立村先輩が、清坂先輩に付き合いかけて、ＯＫもらったんだって！」
まじまじと言っているＣ組女子の顔を見つめ直した。口元がゆがんでいる。あごの辺りに汚い皺が出来ている。せせら笑いに見えたのは気のせいだろうか。でもクラスの女子たちに見かけたことのある顔でもあった。
「ねえ、梨南ちゃん、どうして清坂先輩、受けたんだろうね」
「本当じゃないかもしれないのに無責任なこと言ったらだめだと思う」
梨南は受けた。
「さあ、わかんない。だって二年の先輩たちがみんなそう言ってたよ。ほら、向こうでも立村先輩にいろいろやってるみたい」
やっぱり一年評議女子は無責任だ、あらためて思った。
どこでどういう展開で、そういう読みになるんだろう。
確かに立村先輩は清坂先輩のことが好きだと思うけれど、だからといって清坂先輩が立村先輩のように不細工で少々頭の回転がとろい人を好むとは考えられな い。いや、友達としてはいいと思っているかもしれないが、梨南は知っている。清坂先輩がひそかに、幼なじみの羽飛先輩のことを想っているのを。
一年たちはみな、気付いているはずなのに、なぜかみな、誤解している。
檸檬色を混ぜ合わせた窓の光がまぶしかった。梨南は書きものをする振りをして、帰っていく一年女子たちを見送った。一年男子たちも、しばらく「だろ？」「俺たちには関係ねえよ」程度の会話を交わしていたが、用がないと見極めたのだろう。いつのまにかいなくなっていた。本条先輩を頭とする三年生たちも、一 年たちを追うようにして教室を出て行った。中には立村先輩の頭を撫でていく男子もいた。このざわめきのきっかけが、立村先輩と清坂先輩にあることは確かの ようだった。
本当だったら、本条先輩の後をつけて、新井林との対談をやらかすのかどうかを確認したかった。でも今は、立村先輩に「真実」を伝えることの方が大切だっ た。きちんと「おちうど」に連れて行ってもらって、現在立村先輩がどのような状況にいて、大変なことになっているかを知らせてあげないとだめだと思った。

最後まで残ったのは、梨南、清坂先輩、立村先輩の三人だけだった。
清坂先輩は身動き一つせず、指を動かして、文庫本をめくっていた。声を掛けるのもためらわれた。
軽く服の乱れを直し、ジャケットの襟を撫でた後、立村先輩はようやく梨南の顔を正面から見つめた。ようやく、気付いたという風だった。柔らかい視線と、さりげなく呼び寄せるような響きの声。

「杉本。朝もらったレポート、良かったよ」
受け取ってもらえたらしい。ほっと一息ついた。でも顔は崩さぬよう堅くして次の言葉を待った。
「本当は、本条先輩に渡そうと思っていたんだけどさ。明日見せるよ。やはり、杉本は頭が切れるよな。うらやましい」
――もう少し立村先輩も頭を使ってください。お願いします。
心の声を瞳に響かせて梨南は答えた。
「ありがとうございます。私、どうしても書きたかったんです」
「わかっているよ。杉本が一生懸命やっているってことは、俺もよくわかっている」
――違います。先輩しか、わかってくれてないんです。
お下げ編みが肩に重たかった。声にも髪の分おもりを加えているようだった。うまく出ない。胸の重みと一緒に、言いたいことが押さえられているようだった。
「あのさ、杉本。明日の朝、詳しいことを説明するから今日は早く帰った方がいいよ」
――帰るわけにはいかないんです。先輩、何言ってるんですか。
全身がスパイ装備状態、どんな感情もどんな言葉もどんな感じ方もびんびんに届くはずなのに。
自分でコントロールができない。違う言葉が飛び出していた。
「私、家近いから、遅くなっても平気です」
「そうか、でも今日だけは、どうしてもだめなんだ」
立村先輩は、じっと梨南の目を見つめた。一瞬だけ、やわらかさが消えた。ひと呼吸おいて、
「今日は清坂さんと一緒の、用事があるんだ」
なぜか、清坂先輩の方は見なかった。立村先輩に隠されている。梨南が見るに、ずっと文庫本をめくり続けているのだが、ページが進んでいないようす。読んでいるとは思えなかった。
――どうして清坂先輩帰らないんだろう。
――用事があるのは私の方なのに。
――清坂先輩に、何の用事があるの。
立村先輩の言葉は有無を言わさぬ調子だった。先週、梨南のことを新井林たちからかばってくれた時と同じ口調だった。黙るしかない、あの新井林ですらも、一年同士で愚痴りまくるしかない。あの響きだ。
――行かなくちゃ、いけないんだ。

――今は、ここにいちゃ、いけないんだ。
――清坂先輩に向かって言ってることなんだから。

梨南は一礼して、立ち去るしかなかった。
三年Ｂ組の教室にもぐりこんで盗み聞きしようとはしなかった。
立村先輩と清坂先輩との空気に、梨南の場所はなくなっていたということだった。
――私はここにいては、いけない。

　梨南の集めた情報から導き出した結論。
　「二年Ｄ組評議委員カップル誕生」に関する説は以下の通りである。

　――一年の頃から立村先輩は、清坂先輩のことを「高嶺の花」として見上げていた。清坂先輩はもともと男子に人気のある人だ。最初は立村先輩を「同じ評議委員」という意識でしか見ていなかっただろう。
　――しかし、幼なじみの羽飛先輩が、立村先輩と仲良くなり、必然的に清坂先輩も一緒につるむはめになる。清坂先輩は以前から羽飛先輩のことを好きでいた のだが、男は鈍感だから全く気付いていない。一生懸命シャンプーとリンスを替えてみても、「人気アイドル鈴蘭優」以上の扱いをしてもらえない。幼稚園くら いの頃からの幼なじみだ。長い想いは切なかっただろう。
　――日常的におしゃべりする立村先輩の想いに、次第に感じるものを覚える清坂先輩。もちろん立村先輩の「ついてるかついてないかわからない」顔立ちに抵 抗がなかったとは思えない。でも、梨南の持っている感性をあれだけ評価してくれる立村先輩のこと、全くの馬鹿だとは考えていないらしい。きっと、相談かな にか、していたのだろう。
　――そして、なにかの拍子で、立村先輩と清坂先輩はふたりっきりになる。おそらく清坂先輩は、立村先輩に「貴史は私のことを女子だと思っていないのか も」と相談したのだろう。最初はふんふんと、あの穏やかなまなざしで聞いていた立村先輩だが、とうとうこらえきれなくなり愛の告白をしてしまったらしい。 なぜか、清坂先輩はＯＫしてしまう。

　机に向かって文庫本を一心不乱にめくっているようす。立村先輩が、
「今日は、清坂さんと二人の、用事があるんだ」
　と言い放った時、清坂先輩は何も言わなかった。ちゃかしもせず、否定もしなかった。没頭、していたというんだろうか。
　――きっと、立村先輩と付き合うというのを、最後の最後まで迷っていたんだわ。
　――あれだけ羽飛先輩のことを思い続けていたのだもの。
　――立村先輩で身代わりにするなんて、覚悟、必要だもの。

　ただ、嫌ってはいないようだし、コサージをくれた日の昼休みも、
「立村くんは何も悪いことしてないのよ」
　と言い切っていた。
　清坂先輩は結局、立村先輩の熱意に押された形になったのだろう。
　梨南が立ち去った後、二人っきりで最後の商談が行われ、立村先輩は想いをぶつけ、清坂先輩は羽飛先輩とのてんびんにかけたということか。

　――清坂先輩は、わかってない。

――立村先輩がどれだけ本当に清坂先輩のことを。
――本当にわかってないんだ。
あらゆる仮定を組み立ててみたけれども、「清坂先輩が立村先輩のことを好きだ」という結論には辿りつけなかった。どう考えても、羽飛先輩に立村先輩は勝てない。
どうして清坂先輩は、立村先輩と付き合おうとしたんだろう。

ひとつ考えられるのは本条先輩の影だ。
立村先輩はひたすら純粋に、本条先輩のことを慕っている。気持ち悪いくらいだ。「本条・立村ホモ説」は健在なり、を証明するかのごとくだ。
でも、本条先輩が新井林とつるんで、なにやら糸を引いているのもまた確かだ。梨南は確信している。さっきだって新井林に耳打ちしていたし、素直にあいつも頷いていたではないか。
新井林がなつくということは、きっと女性好みも似ているのかもしれない。
はるみみたいなタイプが好きなのかもしれない。
当然、梨南的性格は大嫌いに違いない。
立村先輩がひいきしてくれるから、本条先輩もがまんしてくれているのだろうが。
なにかがひらめいた。
――立村先輩が私のことを好きなのではと、本条先輩が誤解したのかしら。

先週の、立村先輩発言
「杉本梨南のワンマンショーでしょう」
に、かなり慌てていたのは本条先輩だ。もちろんあの後、卓球場に連れ出して友情にはひびが入らないですんだらしいが。
だが梨南のことを目かけてくれているのだということが証明されてしまった。本命は清坂先輩であることを梨南は知っていたから、何にも想わなかったけれど。でも、本条先輩はおおいにあせっただろう。
なんとかしても、「立村先輩と杉本梨南」とのカップルができるのを阻止しなくてはならない。
立村先輩のことを気に入っているならなおさらだ。大嫌いな女と仲のいい奴がくっつくのを見るのは、誰だっていやだろう。
――私だって、そうだもの。
一瞬、はるみと新井林が教室で顔を合わせているところが浮かんだ。すぐに消した。

そこでなんとしても阻止するために、清坂先輩に協力を依頼したと考えると簡単だ。
清坂先輩は自分に嘘をつくのが大嫌いな人だ。もちろん抵抗しただろう。羽飛先輩のことが好きだとか言ったかもしれない。でも、本条先輩の命令により、立村先輩と付き合うことを決意する。
――決めたのは、きっと、昼休み後よね。

――コサージをもらった時はふつうだったもの。清坂先輩。
――委員会前に、何かあったのよ。きっと。

立村先輩はきっと、本条先輩に「清坂のことが好きなんだろう。言ってしまえよ」とけしかけられたのだろう。女子みたいな仲良し同士だとするならば、本条 先輩に立村先輩はきっと、相談していただろう。あれだけ新井林との裏を見せ付けられていながら、卓球場に誘われただけであっさりと信用してしまうところ が、立村先輩のいいところでもあり、おばかなところでもある。
――そうよ、立村先輩はきっと、本条先輩に背中を押されたのよ。
――だめでもともとで玉砕しようとしたんだわ。特攻隊の気持ちね。
――まさか、私を陥れようとする本条先輩と新井林に利用されているなんて、知らないで。
――敵ながら、あっぱれ。そこまでするなら私も覚悟があるわ。

梨南はコサージを、自分の机に飾った。家に着いてから母に見せびらかし、「本当によく似合うわ」と誉めてもらった。白い花。立村先輩が選んでくれたとい う。何も疑わない、気付かない。ちょっとお馬鹿かもしれないけれども、梨南のことを誰よりもみとめてくれた、たった一人のひとだ。

――立村先輩。私は、戦います。
――本条先輩と新井林の魂胆を、立村先輩にもよくわかるように、明るみに出します。
――たったひとり、私を認めてくれた人にできることはこれだけだから。

次の日は土曜日だった。ちゃんと立村先輩が「待っているから」と言ってくれたのだから、向かうのは当然のこと。梨南は何気なく二年Ｄ組の教室を覗き込んだ。評議委員会時のざわめきなんて記憶にないような顔をしてみせた。
いつも通りといえばいつも通り。立村先輩は机の上に朝自習プリントを見つめつつ、鉛筆を転がしている。たぶん数学なんだろう。隣りで古川先輩が話し掛け ているが、きっと、エッチネタなのだろう。うざったそうに頭を振っていた。清坂先輩はというと、別の席で他の女子たちと身振り手振りよろしくおしゃべりし ている。羽飛先輩が机に座って、プロレスの技について熱く語っているようす。
――立村先輩、待ってるからって言ってくれたもの。約束は守るのが当然よ。

梨南が足を踏み入れたとたん、誰かが息を呑んだように静まり返った。こんなことは今までなかった。でも気にしない。
「杉本、来てくれたんだ」
立村先輩はすぐに梨南を見つけて、笑顔で迎えてくれた。
「ほらほら、変なところ見るんじゃないよ」
隣りでちゃちゃを入れる古川先輩。軽く頭を下げて、すぐに立村先輩の机にむかった。

「昨日はごめんな。杉本。約束どおり、レポートのこと少し話すよ」
「お願いします」
　古川先輩の視線を一切無視する格好で、立村先輩はファイルから梨南の書いたレポートを取り出した。清坂先輩と二人っきりというシュチュエーションに舞い 上がりつつも、ちゃんと約束は守ってくれる。そこがやっぱり、立村先輩のいいところだと思う。ふと、背後霊のような気配あり。朝っぱらから幽霊なんて出る わけなし、怪談の季節でもなし。振り返ると清坂先輩がちょこんと顔を出していた。
「おはよう！　杉本さん、昨日、追い出しちゃったみたいでごめんね。じ、つ、は」
　ポケットから赤い包み紙にくるまさった棒のようなものを取り出した。
　白い飴のようなもの。千歳飴を二十センチくらいにちょんぎって、くるんだようなお菓子だ。青大附中では飲食物持込禁止のはずだけど、隠している分にはさ ほど文句を言われない。評議委員の清坂先輩が堂々と持ち歩いていることからして、校則の力はさほどのものでもないということが、よくわかった。
「よかったらあげちゃう。先生たちに見つかったらまずいから、しっかり隠してね」
「ありがとうございます」
　こんなにもらっちゃっていいんだろうか。なんだか清坂先輩はやたらと人にプレゼントをするのが好きらしい。
「清坂氏、も、一緒に聞くか」
　と、声を掛ける立村先輩に、
「うん、でも立村くんもしかして、朝自習のプリント手付かずのままなんじゃないの？　今日は数学の空間図形でしょ。苦労してるんじゃないか、って思ったんだ」
　円錐の面積と体積を求める問題だ。そんなにむずかしくはないように思う。
　まあ、九九のできない立村先輩のことだから、白紙であるのは予想がつく。
「よくわかるよな」
「当たり前でしょ！　じゃあ、立村くんが杉本さんに説明している間、代わりに解いてあげるね。こずえ、ちょっと机借りるね」
　梨南の隣りにしゃがみこみ、はらりと一枚プリントを摘み上げ、清坂先輩はなにやらすらすら書き始めた。古川先輩と目配せしながら、楽しそうに問題を解いていた。
　立村先輩は片手で拝むようなしぐさをした後、すぐに梨南の方へ顔を向けた。さらに背後霊その二。
「あーあ、俺も明るい未来がほしいよな。美里ばっかりずるいよな」
　清坂先輩の頭をはたいて去っていく羽飛先輩の姿あり。なんとなく匂いが濃い。柑橘系の匂いだ。よく見ると、前髪をオールバックにしている。目鼻立ちがはっきりしているから、おでこが自己主張しすぎないでいい。やっぱり目鼻立ちがいいと得だ。
「何よ、あんただって明るい未来、いつだってチャンスあるってのに。ばっかじゃないの」
　わけのわからないことを、きっと言い返した清坂先輩。すぐに立村先輩の顔を見上げながら、
「早く、杉本さんに説明してあげなくっちゃ、教室に戻れなくなっちゃうよ」

せかす様子が、気になった。立村先輩は頷いて、二言三言、簡単に誉めてくれたけれども、やはり落ち着かないのだろう。梨南の方から一礼して去ることにした。立村先輩の目は優しかったけれども、すぐに清坂先輩へと戻り、古川先輩にからかわれていた。
――やはり、私がなんとかしてあげなくては。
――清坂先輩の事情を考えると、きっと何も言えないだろうし。
――立村先輩が騙されていることを知ったら、きっと立ち直れないかも。
――私は立村先輩よりも働く頭を持っているんだ。だから、立村先輩がこれ以上、本条先輩に騙されないように恩返ししなくてはいけないんだ。

自分の教室に戻り、適当に女子たちと話をし、相変わらずはるみとは無言で通した。四時間目が終わるまでの間、梨南は授業を聞き流しながら、自分なりの仮説を立て続けた。ノートがどんどん埋まっていく。たまに当てられると答えるだけ。
新井林とはるみが一緒に立ち上がり、すぐに教室を出て行った。
誰もはるみに「さようなら」を言わない。
花森さんはお休みだった。
ノート一杯に仮説の嵐が吹き荒れてようやく、梨南は結論を出すことができた。掃除をしようと窓を開けると、生徒玄関から清坂先輩、立村先輩、羽飛先輩の 三人が自転車置き場へ向かう姿が垣間見えた。一年の教室は窓から一呼吸おいて飛び降りれば大丈夫な高さだった。梨南は窓枠を磨きながら三人の姿を見送っ た。

いつもだったら立村先輩は梨南をどこか廊下に連れ出すかして、ふたりっきりでレポートの感想を教えてくれただろう。まあ、古川先輩くらいはしつこくエッ チな突っ込みをするため居座ったかもしれないが、清坂先輩がああも割り込んでこようとするなんてこと、ふつうなかった。
ポケットの赤い飴棒が気に掛かる。
本条先輩に指令をもらっているのだろうか。
梨南と立村先輩とを二人っきりにしないでおくようにとか。
清坂先輩は羽飛先輩のことが好きに決まっている。でも、振り向いてくれない現実もよくわかっているのだろう。そんなジレンマの中で立村先輩に告白され、本条先輩にも頼み込まれて仕方なく付き合い始めた。そう考える方が梨南にとっては自然だった。
もちろん立村先輩は有頂天だっただろう。いきなり梨南に「二人っきりの用事があるんだ」と言い切ってしまうくらいなんだから。本条先輩がまさか、「杉本 梨南とふたりっきりになることを阻止せよ」なんて命令するなんてこと、考えるわけがない。ただでさえ立村先輩の、本条先輩を慕う姿は変な噂が出るくらいな のだ。みんながみんな、素直に祝福してくれていると思い込んでいる。
――あれだけ私のことを、評価してくれる人なのに。
――立村先輩、自分が踊らされているだけだって、どうして気付かないんですか。
――清坂先輩もきっとおつらいんだろうな。本当のことが言えないんだろうな。

　自分のせいで、本条委員長が動き出してしまったのは確かなのだ。なんとしても、梨南をかわいがってくれた二年Ｄ組評議委員コンビを、傷つけないようにして、引き離さないといけない。
　ちゃんと、あるべき姿に戻してあげなくちゃいけない。
　立村先輩と清坂先輩が、ふつうの友達として、傷つけあわないように元に戻れるように。
　そして羽飛先輩と清坂先輩とが、きちんと気持ちを通じ合わせることができるように。
　決して本条先輩のことを嫌っているわけではない。顔が外国の俳優さんみたいで整っていてよい、というのもあるけれど、きちんと梨南と話をしてくれる数少 ない男子の一人だ。頭は切れる、あの新井林を手手なずけたところからしても、さすが評議委員長の威厳ありといった感じだ。それ以上のことは感じない。評価 してくれるのは立村先輩だけで十分だ。
　――立村先輩がこれ以上騙されるようだったら、ちゃんと私も本条先輩に直訴状を送らなくちゃ。
　――いいもの、本条先輩に誤解されるのは平気だわ。
　頭の中には「ワルキューレ騎行」のサビが流れていた。「いくさおとめブリュンヒルデ」が馬にまたがって戦地を駆け巡る姿。自分の姿が浮かんできたようだった。

「梨南ちゃん」
　窓をからぶきんで拭いた後、梨南は窓から下を覗き込んだ。たくさんの露草が咲き乱れている。ちょうど六月に咲く水っぽい花だ。人の姿を探すと、お団子を二つ耳の上に丸めた、鈴蘭優ばりの髪型をした女子が立っていた。
　佐賀はるみだった。
　さっき、新井林とふたり、静かに教室を出て行ったあのはるみだ。掃除当番ではないから先に帰ったはずだったのに。目が合うと、答えざるをえない。
「何か用なの」
「お願い、一回だけでいいから、話を聞いて」
　はるみのまなざしがきらきらと光っていた。泣いてはいない。窓ガラスに反射する光が瞳に宿っている。
「いまさら私と何を話したいの」
「梨南ちゃん、私わかっているんだからお願い」
　ここまでだったらぴしゃりと窓ガラスを締めて、あっさり終りにしただろう。梨南の流儀だった。
「梨南ちゃん、健吾のこと好きだったって、みんな、知ってるんだから」
　首を窓に突っ込んで、思いっきりギロチンにかけてやりたかった。
「逃げないで、お願い。私、話さなくちゃいけないことが、たくさん、たくさんあるの」
　はるみは窓枠を背伸びして押さえたまま、叫んだ後走り去った。
「小学校の外庭に並んでいる、石油のドラム缶の陰で、待ってるから。絶対、待ってるから」

　――梨南ちゃん、健吾のこと好きだったって、みんな、知ってるんだから――

激しく首を振って追い出した。天敵新井林健吾をなぜ、梨南が好きにならなくてはならないのか。
顔が好みだったのは確かに認める。
完璧なローエングリンだったことも認める。
でも、決して、一度だって、想いをかけたことなんてない。
断じて、そんなことはない。
はるみにそんなことを言われる筋合いは一切ないはずだ。
かわいたままの雑巾をしまいこみ、梨南は腕時計を確認した。今からだったら、小学校へは十分もしないでたどり着けるはずだ。
――はるみと新井林、何をたくらんでるの。
――私を裏切ったくせに。
かばんの柄を強く握り締め、梨南は廊下を走り抜けた。ブラウスのボタンが軽くはじけそうで押さえながら走った。お下げ髪がじゃまくさくて、走りながら解 いた。軽くウエーブがかった髪が四方八方に広がるのを感じる。急に胸の付け根が痛くなり立ち止まった。薄い下着ではもう押さえられなかった。自覚した。

卒業してから三カ月しか経っていないのに、小学校の校舎はすべてがやせている風に見えた。
灰色の木造校舎、石を積み重ねて作った椅子、粘土状の土を重ねてこしらえた山のようなもの。古いタイヤを埋め込んで跳び箱代わりにしているグラウンドの 脇道。アカシアの木が団子っぽい葉をきらめかせていた。梨南がよく友達と遊んだのは、ジャングルジムの陰にひっそりと置きっぱなしとなっているドラム缶の 陰だった。一本は縦に、もう一本は乗っかって足を伸ばせるように横に。真っ赤にさび切っていた。入学した当時からこの状態だった。きれいなスカートをはい ている時は座らなかったけれども、よく馬にのった気分でまたがったりもした。
小学生はみな、帰ったらしい。人気はなかった。
梨南がたどり着いた時にはちらりと、編み上げの黒い髪が背中を向けているだけだった。ひとりで、待っていたらしい。ゆっくり近づいた。声を掛けた。
「はるみ」
ゆっくりと、振り返る様子。目が合ったらにらみつけようと、力をこめた。
「梨南ちゃん、来てくれたのね」
いつもだったら露草を腕一杯に摘んで、家に帰っただろう。はるみと一緒に、花の名前を説明したりしておしゃべりしただろう。かわいらしい折り紙と、梨南の家のレターペーパーを交換しては喜んだりしたものだった。
「ここは誰もいないから」
はるみの笑顔が、勘に触った。
小学校の頃だったら、素直に頷いてあげられたのに。
制服のブラウスが完全に赤さびで汚れていた。あの泣き虫でどうしようもなく甘えん坊だった

はるみならば、すぐに「ほら、汚れてる」と指を指してあげたのに。もう、それをすることすら、梨南はできなくなっていた。
「はるみ、早く終わらせたいの。いったい、私に何をさせたいの」
　笑顔は攻撃の一種だと、すぐに気付いた。梨南は先に切り込んだ。
「もう、私とは縁を切ったでしょう」
「梨南ちゃんが私の話を聞いてくれなかっただけ。お願い、最初から私の話を聞いて
　一呼吸おいて、はるみはゆっくりと、
「梨南ちゃん。私はちっとも、怒ってなんかないのよ」
　――なんかわからないけれども、危険だわ。
　微笑には決して騙されないようにしなくては。
　梨南はドラム缶を挟んで、はるみと対峙した。なぜ三カ月も無視されて、笑顔で「梨南ちゃん」と呼びかけられるのだろう。嫌われるのは覚悟の上だ。
「知ってる？　吉久先生が小学校やめちゃったってこと。赤ちゃんできたんだって」
　吉久先生とは、梨南たちよりも十二歳年上なだけの、幼い感じの担任だった。六年担任。母が馬鹿にしていた相手だった。やたらとファンシーグッズを集める のが好きで、女子たちと交換しあっては喜んでいた。たまに男子に泣かされたりもしたけれども、梨南以外の女子からは評判がよかった。みんな小学校を卒業し た後も、ちょこちょこ会いに出かけているという。きっとはるみもそうなんだろう。
　まてよ、吉久先生って、まだ結婚してないって話じゃ。
　疑問符が浮かんだ梨南に気付いたのだろう。すぐにフォローを入れてくれた。
「先週、手続きしたよって、話してくれたの」
　俗にいう、「できちゃった結婚」ってことだろうか。
　――やっぱり、馬鹿なのよ。あの先生も。
　梨南は冷たく言い放った。
「大人のくせに避妊しないなんてやっぱり馬鹿なのよ」
　ぎょっとした顔ではるみは口を覆った。答えないのはぶりっ子したいからだろう。
「それと、私と何の関係があるの。言いたいなら早く言って」
「あのね、梨南ちゃん」
　ゆっくりと、言葉をスタンプにして押していく。はるみの口調は、学校にいる時よりも軽やかだった。きっと新井林とふたりっきりの時も、こんなしゃべり方 をしているのではないだろうか。軽薄に思えて梨南は何度も「はるみ、あんたの話し方は下品よ」と注意してあげたのだが、結局変わらなかった。
「私が、梨南ちゃんを怒らせてしまったって、相談に行ったの。そうしたら」
　ろくな答えが返ってこないだろう。むかつきつつもこらえながら聞いた。
「『杉本さんは一年の頃から、健吾くんのことが好きだったのよ。はるみちゃん、気をつけたほうがいいわよ』って言われたの。『自分の思い通りにならないと、どんな手を使っても自分の考えを押し通すから、気をつけてね』って」

　梨南の中につめたい氷が、かき氷製造機でこしらえるようにざくざくたまっていく。いつか見た、北の街の雪像。半そでの腕に、鳥肌が立ちそうだった。腕の産毛が揺れそうだった。
　――吉久先生、やはりそうか。
　もう二度と、はるみとよりを戻す気はなかった。どんなにあどけない笑顔を振り撒かれようとも、梨南はもう許せなかった。気付いているのかいないのか、はるみは続けた。

「私のことを、梨南ちゃんはきっとやきもち妬いてるんだ、ってそう言われたの。それは違うって、私、言い返したの。だって、梨南ちゃんには別に好きな人がいるから」
　何をでっち上げたのだろう。立村先輩とのことだろうか。
「私ね、梨南ちゃんが二年評議の先輩のことを好きだというのを、他の人たちから聞いたの。二年の先輩も、一年の子も、みんな、知っているんだもの。梨南 ちゃんのすることはみな、どうみても好きな人へのことばかりだもの。それで思い出したの。梨南ちゃん、小学校一年の頃、健吾にこんなことしてたなあって」
　こんなことってどんなことだろう。梨南には全くわからなかった。
「こんなことって、どんなこと？」
　かろうじて尋ねた。はるみの目に、してやったりの表情が浮かんだ。
「梨南ちゃん、二年Ｄ組の教室にしょっちゅう行ってるって聞いたわ。いつも、あの先輩のネクタイを直してあげたりしてるって」
「だらしない馬鹿男子としゃべりたくないから、きちんとしてくださいと言っただけよ」
　うんざりだ。分かってもらえないのだ。いつものように。
「何かがあると、すぐに手を叩きたがるところとか。握りたがるところとか。この前は、梨南ちゃんが先輩の手を胸に当ててたって、言ってた人がいたのよ」
　誰がそんなことを流したのだろう。梨南にとってはごく当たり前の挨拶だ。言いかえそうとした時、はるみが遮った。
「健吾にも、いきなり腕をひっぱったり、頭を叩いたり、さわったりしてたでしょ。梨南ちゃん。あの時のことを思い出して、やっぱりって、思ったの」
　お団子髪を軽く直した。梨南は確信した。
　――はるみの、復讐だ。これはきっと。
　――私は負けない。なんとしても。

　土がかすかにぬかるんでいて、靴の先にしみていた。はるみが盾代わりにドラム缶を利用しているのを、梨南はそのままにしておいた。いつもだったら直接近づいて、真っ正面から、
「はるみあんた、何を言いたいの」
　と問い詰めるだろう。男子にだったら絶対にそうする。新井林相手だったら絶対に。
　はるみには、どの武器で立ち向かえばいいのか、梨南には判断がつかなかった。もし、梨南が本気で戦うのだったら、遠慮はしない。過去の恥ずかしい思い出 の数々をひっぱりだして、いかに梨南がはるみの面倒を見てきたかを思い起こしてやるだろう。汚い手だけれども、それだけの過去はある。
　また、はるみがなぜ、あえて新井林の方を選んだのかを白状させるのもひとつの手だろう。梨南に負い目があるはずだ。
　――私の怒りの炎で、ドラム缶が燃え上がればいい。
　――すべて焼き尽くせばいいんだ。
　梨南は、じっとはるみの言葉を待ち続けた。微笑みを絶やさないまま、はるみは言葉の準備をしていた。両手を組み合わせ、ふた呼吸ほどして。

「私ね、梨南ちゃんがもし健吾のこと好きだとわかっていたらこんなことにはならなかったと思うの。私だって、梨南ちゃんと友達でいたいもの。梨南ちゃんのように頭がよくて、可愛くて、私のことを大切にしてくれたんだもの。私、裏切りたいなんて思ってないの」
「勝手に決め付けないで。一言だって私が、新井林のことをどうのこうのと思っていると、答えてないのに」
　じっと鼻の頭に向かって言い返した。言葉は自分でも驚くくらい冷えていた。
「だって、吉久先生が」
「あの先生は六年の時しか知らないはずなのに、なぜ、一年生の頃から新井林が好きだったようなでっちあげができるの。そんなことも気付かないの。はるみ、どうしてそんなに馬鹿でいられるわけ」
　吉久先生は大学を卒業してすぐ、六年の担任となった。一年しか付き合いがないのだから、梨南たちが一年生の頃に何をしでかしたなんて、知るわけがないのだ。
「そんなの私もわかんない。でもね、梨南ちゃんには言わなかったけれど、六年の夏休み前、吉久先生と一緒にスーパーに遊びに行ったことがあったの、覚えてる？　梨南ちゃんは行かなかったよね」
　当たり前だ。やたらとあの先生は女子たちのご機嫌を取りたがっていた。ちょうど駅前の大型スーパーが鳴り物入りで開店して、派手なチラシを撒いていた。 開店三日間は来店者先着五百名に、玉子一パックとゼラニウムの鉢植えがもらえるとあって、結構並んだと聞いている。もっとも梨南は両親から、
「ただより怖いものはないのだから、そういうくだらないものに行くのはやめたほういいわよ」

　と忠告され、当然のごとく休んだ。クラスの半数以上は出かけたらしい。
「たかがスーパーの開店で何が面白いの」
「先生と一緒に、お昼を下のやきそば屋さんで食べたの。その時に女子たちを集めて、話してくれたの。梨南ちゃんとうまく行かない時の、おまじないを教えてあげるって」
　――私と、うまく、行かない時ってどういうこと。
　初めて、軸が揺れた。
「男子たちに説教したってことなの」
「ううん、女子よ。女子だけ。十人くらいいたの」
　男子たちに「杉本さんと仲良くしなさい」と説教するなら話はわかる。あの先生とはなぜか、女子同士のくせにうまく話がかみ合わなかったが、六年の時のクラス女子とは梨南もうまいやっていたはずだった。
「私と、うまく行かないなんてそんなこと言ってた子がいたの」
「みんな、言ってたの。梨南ちゃん、頭いいけど、難しいことばかり言うからついていけないって。私は言わなかったわ。黙って聞いてたの」
　それは暗に、その通りだ、と思っているだけじゃないか。
　軸がぶるんぶるんとゆれる。顔には出さないようにしたかった。
「吉久先生、話聞きながらうんうんって、頷いてたの。そしてね、『杉本さんみたいな人は大人でもたっくさんいるよね。ああいう人は、頭の中で呪文を唱えてみればいいのよ。そうすれば、がまんできるから』って」
「その呪文って、何。唱えてみて」
　ふわふわパーマに花がみっつ連なった髪飾りをたくさん差して教壇に立っていた、あの先生だ。いつも梨南には「杉本さんはおりこうね」と、白々しい誉め方 しかしなかった人だ。「梨南さんは人とのコミュニケーションが独特だから」と、失礼なことを言い放った人だ。ろくでもないことを言ったに決まっている。
　はるみの表情は変わらなかった。ばかにしているでもない、作っているわけでもない。だからなおさらたちが悪い。
「『あかちゃん、あかちゃん、ばぶばぶ、あかちゃん、べろべろば』って。みんな、赤ちゃんが泣いても文句言わないでしょって、赤ちゃんだったら仕方ないって思えるでしょって、吉久先生言ったの」
「他の子たちもそれ聞いて、私に失礼だとか抗議しなかったの」
　嘘は言えない子だ。はるみの性格も、梨南は良く知っている。
「しなかったの。みんな笑ってた。それならいいねって。でも、梨南ちゃん、私はそんなことしなかったのよ」
　言い訳をするのも表情が変わらない。慣れてしまっているのだろうか。梨南は読み取ったつもりだった。はるみが梨南のことを傷つけたくて言っていると思い たかった。でもそれにしては、はるみに嘘をついているような匂いが感じられない。単純に、吉久先生の話を告げ口しているだけ、という感じがしてならなかっ た。

――だからといって許す気なんてないわ。
――私よりも、吉久先生の方についたってことは、徹底して私を裏切ったってことだもの。どうして誰も私に吉久先生が言ったことを、教えてくれなかったんだろう。納得いかないのはそこだけ。
――男子はともかく、女子は私の味方だったはず。
おそるおそる梨南の顔をうかがうようなはるみの表情に、思わず梨南は血が昇った。
「いまさら、どうしてそんなこと言うの。はるみ。本当だったら私に、次の日すぐ教えてくれてもよかったはずよ。誰も教えてくれなかったのはなぜなの」
人は決して、梨南が激怒したなんて思わないだろう。声も、言葉も、波立たない。普段から感情を波立たせないよう発するくせがついていた。はるみは長い付き合いゆえ、気付いただろうか。また深く深呼吸して、はるみは頷いた。
「吉久先生は、梨南ちゃんのことを怖がってたんだと思うの。だから一生懸命、梨南ちゃんの弱みを探そう探そうとしてたんだと思うの。そう言ってたもの、この前も。吉久先生、私にね、梨南ちゃんがどういうことに傷つくかってこと、教えてくれたもの」
――やはりあの女は、ばかなのよ。
六年卒業担任とは名ばかりの、できちゃった結婚をしてしまう困った女。
――避妊も出来ないくせに。
どういうことが「避妊」なのか分からない。言葉でしか知らない。でも、大人だったらみな知っていることを、吉久先生はやり損ねたということだろう。梨南の概念からすれば、とんでもないことだった。
――私がどういうことに傷つくかって？
「言ってみてよ。本当に私が傷つくかどうか」
「でも、お願い。私のことを嫌いにならないで」
微笑を浮かべつづけた表情が、ふと、ひきしまった。
はるみの素の、感情だった。
唇が一文字、緊張していた。
「梨南ちゃんは健吾のことが好きで好きでならなくて、ちっちゃな頃からちょっかいかけていたけれど、全然相手にしてもらえなかった。だから、仲の良かった 私とくっついて、健吾をいじめようとしたんだって。でも、そんなことないよね。梨南ちゃん。私は私だから、友達になってくれたのよね」
何を言っているのかわからない。私は身を堅くしたままはるみの口元を見つめていた。
「どうして梨南ちゃんのことを健吾が嫌うのか、わからないわ。私と二人になるたび、ちっちゃい頃から『杉本とは離れろ』と怒ってた。いっつも怒ってばかりいたから、私も健吾のことが怖かったの。だから、梨南ちゃんの方に一緒にいたんだから。そのことは、わかって」
よりにもよって犬猿の仲ふたりが六年間同じクラスだったのだ。間に挟まれたはるみは大変だったのかもしれない。でも、梨南はずっとはるみの泣き虫をか ばってやったりしていたつもりだった。男子たちからの嫌がらせからも、梨南は自分の身をもって守ってきたつもりだった。はる

みだけではなく、女子全般に対 してのことはすべて。
「だったら、ずっと離れていればよかったのに。はるみ、そんなに怖い相手に、どうしてくっついたりしたのよ。やり方が汚すぎる」
　はるみは首を振った。まばたきを数回した。
「六年の時のことを言ってるの。梨南ちゃん、あれはただ」
　蛆虫事件のことを口にしようとしているのだろうか。遮られたくない、叫んだ。
「あの時、私が靴下脱がせてあげようってしてただけなのに、どうして新井林に突き飛ばされて、頭を石で打ちそうにならなくちゃいけなかったの。私ははるみ にわざと、蛆虫の入った靴履かせたわけでもないし、あの時までははるみのためにやってあげただけ。どうして、あんたは、新井林なんかとくっついてしまった わけなの」
　はるみの瞳が大きく見開かれた。両手をさびたドラム缶の上にちょこんと置いた。さっきまで張り付いていた笑顔は消えた。残るのは、おびえたような、軽く口を開けた顔だけ。
　――落ち着かなくちゃ、だめ。言ってはいけない。
　でも言わずにはいられなかった。
　四ヶ月言葉の酒樽に詰め込んだ、みっともない恨み節。
　――私が言いたいのは、こんなことじゃない。
　思いと裏腹に、梨南ははるみの開いた口めがけて続けていた。
「私が馬鹿な男子たちと戦っている間、はるみ、あんたはずっと私の陰にくっついていたよね。新井林たちにバケツの水をこぼされそうになった時も、ざぶとん の下に画鋲を詰め込まれた時も。はるみが泣いたから、毎日私は復讐してやってたのよ。それなのになぜ？　よりにもよって、私のことをとことん嫌っていたあ んな奴と、付き合うなんて信じられない」
「違うの、梨南ちゃん、話を聞いて」
　はるみの叫びの方が上だった。耳が痛いくらいの悲鳴だった。さびの上の手が、ひっかいていた。
「健吾はただ、私とふつうに話ができればそれでよかったって、言ってたの。この前、学校帰る時に、健吾、言ってたの。ちっちゃい頃とおんなじに、私と、ふつうの話、できればいいって、それだけだったって。そう、二年の羽飛先輩と清坂先輩みたいにって」
　――羽飛先輩と、清坂先輩みたいに。
　――ふつうに話をするって、そういうことなのか。
　自分でこらえられない、耳鳴りがした。聞きたくない、切に思った。でもふさぐわけにはいかない。見つめたまなざしを移動させるわけにはいかない。
「でも、梨南ちゃんが私と一緒だと、ふつうの話が全然できないし、梨南ちゃんは私と健吾が話すことを嫌がるって、わかっていたって。だから、ずっと六年間、がまんしてたって。でも、でも」
　うっとおしい、「でも」の連呼。
「健吾と話すことと、梨南ちゃんと話すことと、一緒にすることはできないの？　梨南ちゃん、それは許してくれないの？」

「許せるわけがないわ。はるみ、そのくらいのことも想像できないわけ」
　ドラム缶を間に挟んで言い返す。近寄ってはいけない。さわってはいけない。さびで手が汚れるから。自分も汚れてしまうから。梨南はかろうじて、自分を押 さえていた。はるみの目が哀願してるのか、それともしたたかに微笑んでいるのか、梨南には読み取れなかった。梨南と新井林、どちらとも仲良くしようとす る、虫のよさだけが感じられて、怒りの沸点に達してしまった。
「はるみ、あんたは卒業式間際のあの事件で、はっきりと、新井林を選んだのよ。私にさんざん嫌がらせしてきた、あの馬鹿男子を選んだのよ。邪魔なんかしな いわ。でも、新井林と一緒に帰るその足で、私のところに来て名前呼ぶなんて、そんな汚いことはやめてよね。私は、信じられる女子としか、話をしたくない」
「信じられる女子って、いると思ってるの？　梨南ちゃん。さっき私が話したでしょう。梨南ちゃんのことを、ほとんどの女子は、『赤ちゃん』だと思ってるん だって。六年の時のクラスはみんなそうなのよ。吉久先生がもっと言ってた。『女子はね、自分よりもおばかな子とか、ブスな子にはいくらでも親切にできるの よ。でも美人とかには、みんなやきもち妬いちゃうの』って」
　また、あの吉久か。
　小学校時代の女子をネタにするならまだしも、見も知らぬ青大附中Ｂ組の女子たちまでも一派一からげにするなんて、許せなかった。
「はるみ、あんたは吉久先生の言うことばかり鵜呑みにしてるのはなぜ」
　自分の中の、引き綱がみつかった。掴んで、引いた。
「今ずっと、話を聞いていたけれど、はるみの言うことはみな、新井林と吉久先生からの受け売りばかり。あんたは何かあると、私の味方なんだってことを言うけれど、話していることは全然裏腹だってことに、気付かないのはなぜなの」
　口がとがってきた。はるみの視線が手元のさびに向かっている。
「私のいないところで、吉久先生がさんざん悪口を言っていたらしいことは、わかった。もともとあの先生は、私のことも、両親のことも嫌ってたもの。女子た ちの前で私のことを『赤ちゃん』扱いしていたのもわかった。そういう事実があったってことはわかった。でも、あんたは吉久先生の言う通りだと思ってるわけ なの。他の女子たちがどう思ってるかなんて、決め付けられたくない。私が知りたいのは、はるみ、あんたが私のことを、どう思ってるのかってことだけよ」
　あの、蛆虫事件以来、はるみはずっと新井林と一緒に行き帰り歩いていた。梨南を見るたび牙をむく新井林。それに寄り添うはるみ。こういう相手を無視する以外、どうすることができるだろう。
　許せない、そういう以外、何ができるだろう。
　できるならば教えてほしかった。
　梨南は、あの時、どうすればよかったのか。
　はるみの答えはあっさりしていた。
「梨南ちゃんのこと、かわいそうだったから」
　答えを押し付けられたことが、こんなに重たいとは思わなかった。
　言葉のガムテープで、口をふさがれた。

――かわいそう、って、どういうこと。
「って、どういうこと」
かすれて声が出ない。
「梨南ちゃん、クラスの女子たちにも、男子に嫌われてかわいそうがられてるんだと思うの。だから、みんな梨南ちゃんの味方についてあげようって思ってるん じゃないかって、私は思うの。クラスで見てて、そう思うの。花森さんのように、ものすごい不良の人が、どうして梨南ちゃんのことを気に入ってるのか、わか らなかったので吉久先生に聞いてみたら、『自分より下の子だと思ってるからじゃないの』だって。私のことを冷たく見るのは、大人の女の嫉妬なんだって」
要は、はるみ自身、自分の顔、髪型を気に入っているということだろうか。
よく平気で言い放てるものだ。
――はるみは、自分が何を言ってるかわかってるのかしら。
だんだん冷えていく自分がいる。まだガムテープで息ができない自分がいる。
「私、もうクラスの女子と友達でいたいなんて思わない。私のことを嫌ってるなら、しかたないって思うもの。でも、梨南ちゃんのことは心配なの。梨南ちゃん は、自分でも気付いてないんだもの。周りの人がばかにしているだけだってことを気付かないんだもの。健吾のことが好きだったのに、嫌われるなんて、私だっ たら絶対いや。それに、今度も」
「今度ってどういうこと？」
ぴんとくるものあり。ずっと新井林への想いらしきものをちらつかされて、めまいがした。動揺なんてしちゃ、いけないのに。身体が言うことを聞かなかった。はるみは、ブラウスのおなか部分がさびにすれるくらい、身を乗り出した。
「梨南ちゃん、あの二年の先輩のこと、ずっと好きだったって知ってたし、健吾もきっとくっつくだろうって話してた。健吾の前では言わなかったけれど、そうだったらいいなって思ってた」
「私、そんなんじゃない！」
当てこすり、推測もいいとこだ。ヒューズが飛んだ。なのに動けない。はるみの声が真っ直ぐ突き刺さるから。
「梨南ちゃん、清坂先輩とあの先輩が付き合ったって聞いた時、どんなに悔しかったろうって、私、思ったの。私と健吾が、そういうことになった時、梨南ちゃんがどれだけ傷ついたか、わかってたから」

心では叫ぶ。
――でまかせばかり言うのはやめなさい、はるみ。
――そんなわけないじゃない。
――私がなんで新井林みたいな馬鹿男子を好きにならなくちゃいけないの。
――立村先輩のことを、好きだってことでしか受け止められない、はるみがばかなのよ。
――うぬぼれないでよ。なんではるみにやきもち妬かなくちゃ、いけないの。
なのに、言葉にならなかった。まるではるみの言うことをすべて認めてしまっているように、身体が動かなかった。

「だから、梨南ちゃん。私は怒ってなんかいないの。それだけは、わかって」
　締めに一言だけ告げて、はるみはドラム缶のさびから手を離した。ちらりと見た手のひらには、びっしりと赤茶けた汚れがついていた。ブラウスにもたっぷり残っていた。
「私は梨南ちゃんと、今まで通りの友だちでいたいと、思ってるの」
　殺し文句のつもりなのだろう。もう一度最初に見せた微笑を浮かべ、はるみはドラム缶の影から出てきた。身を守ったのはこの赤錆。梨南がかっとなって飛び 掛らんばかりなのを、見抜いているのだろうか。絶対に、もとの友達になんかなるものか、と決意している梨南の気持ちを想像できるのだろうか。
「言いたいことは、それだけ」
　こっくり頷き、はるみは梨南の肩位置に手を振った。誰かが小学校の校門近くにいるらしい。待ち合わせしているのかもしれない。振り返れば顔が見えるかもしれない。でも、梨南はまっすぐドラム缶をにらみつけるだけだった。きっと振り返れば見たくないものを見るはめになる。
「健吾が、いるの」
　振り返らない梨南に、はるみは一言添えた。

　はるみが走り去るまで、梨南は振り向かなかった。本当だったら嘘八百並べられたわけだし、一発くらいひっぱたくのが礼儀だろう。そうしろそうしろと命令している自分がいた。
　なのに、はるみに勝てなかった。
　はるみは一言も、梨南を罵りはしなかった。ずっと友達でいたい、そう重ねた。本当なのかどうかわからないけれど、梨南には想像できない言葉ばかり続けていた。血がたぎり、突き飛ばしたいのに、できないなにかがあった。

　小学校の門を出た後、梨南はまっすぐスーパーに寄り、ただで配っているシャンプーの懸賞ハガキを五枚くらい手に入れた。鈴蘭優が宣伝している新製品の シャンプー＆リンスに貼っているシールを送ると、抽選でビニールポーチとドライヤーセットが当たるらしい。やはり髪をお団子にして目一杯の笑顔を振り撒い ている鈴蘭優のアップ。羽飛先輩だったらきっと部屋にたくさん貼り付けて拝んでいるのだろう。
　自分の部屋にこもり、梨南は机の上に細かく破り、散らした。
　鈴蘭優の顔がパーツとなって、散らばっている。
　ただの紙ごみが山となり、積もっていった。
　――死ねばいい。
　いつものようにつぶやいてみた。でも、いつものように響かなかった。はるみの口にした言葉のパーツが、机に積もった屑のようだった。

　――梨南ちゃんのこと、かわいそうだったから。
　――梨南ちゃん、清坂先輩とあの先輩が付き合ったって聞いた時、どんなに悔しかったろう

って、私、思ったの。私と健吾が、そういうことになった時、梨南ちゃんがどれだけ傷ついたか、わかってたから。
　――梨南ちゃん、クラスの女子たちにも、男子に嫌われてかわいそうがられてるんだと思うの。だから、みんな梨南ちゃんの味方についてあげようって思ってるんじゃないかって、私は思うの。
　――梨南ちゃんは健吾のことが好きで好きでならなくて、ちっちゃな頃からちょっかいかけていたけれど、全然相手にしてもらえなかった。だから、仲の良 かった私とくっついて、健吾をいじめようとしたんだって。でも、そんなことないよね。梨南ちゃん。私は私だから、友達になってくれたのよね。
　――私は梨南ちゃんと、今まで通りの友だちでいたいと、思ってるの。

　どうしてはるみに、ぱちんと言い返すことができなかったのだろう。
　理由が今の梨南にはわからなかった。しばらく紙くずの山をかき回し、梨南は唇を噛んだ。

――このままでは、終わらせない。
真夜中の雨音を聞きながら、梨南は目を閉じた。

日曜日の朝、雨降りにも関わらず元気な古川先輩から電話が来た。
電話番号を教えたのは覚えているけれども、こんな早く、
「ほら、杉本さん、ブラが欲しいとか言ってたじゃない。せっかくだからさ、今度は私とデートしようよ。男だったら杉本さんみたいな子と付き合えるってラッキーだと思うんだけどな」
一応、裁縫用の巻尺を忍ばせ、十時に青潟駅前にて待ち合わせることに決めた。自転車で行けない距離ではないけれど、母が、
「梨南ちゃん、あんな車たくさん走っているところ、自転車なんかだったらひっかけられて怪我するわよ。雨なんだからなおさらよ」
と反対したため、素直にバスを使うことになった。二十分くらいだろうか。白地に真っ赤な薔薇の花びらが散らされている、柄の部分には釣瓶をあしらった金 色の傘。生成りのレインコートに身を包み、母の雨ブーツを借りた。かかとがちょこっと高くて、つま先に力を入れないと、足首をくじきそうだった。泥水がど ぶの間を猛スピードで走り抜けている。ぬかるみの泥でスカートを汚さないように歩いた。

「杉本さん、いきなり呼び出してごめんね」
古川先輩は膝上のデニムショートパンツに、黄色いＴシャツ、上には薄い水色のパーカー姿だった。ちらりと胸の真中に、八分音符のマークが黒く覗いてい た。良く見るとほんのりと唇に赤いぬめりが見える。リップで光らせているのだろうか。学校での制服姿がこの人は似合わないのかもしれない。こういう、小学 校の延長みたいな洋服でぴったりしたシャツとパンツ姿がしっくりくる女子はなかなかいない。梨南は素直に誉めることにした。
「古川先輩は制服よりずっとこちらのほうがお似合いですね」
「ちょっと、派手かなとは思ったんだけどね。せっかく駅前で買物するんだからこのくらいしなくちゃってね。杉本さんとはバランス取れないかなあ。いかにも、これからケーキ食べに行きますって感じだもんね。似合うからいいなあ」
洋服の誉めあいはこのくらいにして、まずは駅前の大型スーパーに立ち寄った。ちゃんと洋服や下着が置いている店だ。古川先輩はその辺きっちり目星をつけ てくれていたみたいだ。ブラウス、スカート、ズボン、靴下、それぞれの山をすり抜けながら、梨南をブラジャー連なる林へ連れてきてくれた。
「杉本さん、自分のサイズ知ってる？」
「サイズってなんですか？　体重だったら分かります」
「もう、体重量ったって胸の重さなんて分からないってば。ほら、私が計ってあげるから」
梨南が巻尺を取り出す前に、古川先輩は試着室に引っ張っていき、ぶらさがっていたメジャー

を取り出した。コートを脱ぐように促し、カーテンを閉めた後、 ブラウスの上にメジャーを巻いた。梨南はされるまま、手をぶら下げていた。ずいぶん手馴れているのは練習してくれたからだろうか。うちにトルソーみたいな ものとか、等身大の人形とかあるのだろうか。
「違うって。うちの母さんのサイズ、よく私が測らされるんだ。私もこんなちっこいバストだけど、中学に入る前に母さんに全部計ってもらってここで買ったんだ。一番ちっちゃい、スポーツブラって奴。でも杉本さんは、こんなにあるんだもの」
　目の前にメジャーをぶらんと垂らされた。八十の数字より数センチ長い。
「ここ試着しても大丈夫だって行ってたから、私、適当に持ってきてみるよ」
「いいです、私が」
「いいっていいって。一回こういうのって私やってみたかったんだよね」
　結局、梨南は「安くて、息が苦しくなくて、やわらかい」とお奨めの綿ブラジャーを一枚、買うことにした。古川先輩が何度も見繕って、鏡の前で、
「ほら、こうするとぶらぶらって感じじゃなくなるよね。立村もこれだと、不必要に目をそらすことなくなるし、これだけきれいな線だとさ、ブローチとかつけてもいいかもよ」
　と絶賛してくれたからだった。世の中には胸の贅肉に憧れる人がいると聞いたけれども、こうやって胸を包んでみると、確かに付け根が痛くなくなった。動き やすいとはこういうことなのかもしれない。古川先輩に促されて、その場でブラジャーを着けてから、梨南は同じ階のハンバーガー屋に立ち寄ることにした。食 べづらいのではないかと心配していたけれど、難なくチキンバーガーとポテトを食べることができた。

　古川先輩はちょっと身体が冷えたらしく、ジュースではなく暖かいお茶とホットドックを注文していた。すねをもろに出しているのだから、当然だろう。ふと ももをさすりながら、べらべらしゃべっていた。内容はたわいもないことばかりだった。溝口先生の一年前は、オールバックではなく七三分けだったこと。二年 Ｄ組は毎日がドラマだということ。羽飛先輩は一年の女子からラブレターをもらって毎日悩んでいるらしいということ。立村先輩は古川先輩にとって男を感じさ せない、典型的弟だということ。清坂先輩は一年の頃から仲良しだったけれども、実は結構感情の起伏が激しいらしいということ。意外なのか、それともよくわ かっていたことなのかわからないけれども、梨南は頷きながら聞いていた。
「でさあ、杉本さん知ってる？　羽飛に告白かました一年女子のこと」
「よくわかりませんけれども、一年生なのですか」
　立村先輩たちのことしか頭になかった。でもめずらしいことではないだろう。羽飛先輩、あれだけ顔がととのっているのだから。紅茶をストローですすりながらさらに話を促した。
「そうそうなのよ。そうなのよ。私もその辺よくわからないんだけどね。ほら、羽飛と美里って究極の幼なじみで、あの二人付き合っているって誤解されていたんだよね。二年ではさすがに告白しようって子いなかったみたいなんだ。でも今年の一年、思い切りがいいよね。ほんとに」
　歯型を残してホットドックにかぶりつく古川先輩。レコードをはや回ししたようなしゃべりようだった。普段は二十回転くらいゆったり話しても違和感ないのに。古川先輩の回転数、少し壊

れているんじゃないだろうか。
「一年生の間でも羽飛先輩はかっこいいと言われてます。クラスの女子でも、二年の羽飛先輩はかっこいいって言ってる人いました」
　いつぞや花森さんが話していたことを付け加えた。古川先輩は小刻みに頷くと、
「でも、私の掴んでいる情報によると、まだ羽飛はその子と付き合う決心してないみたいなんだ。そうだよねえ。あいつ、その子の存在をその瞬間まで知らなかったみたいらしいしね。羽飛はお笑いに見えるかもしれないけど、その点やっぱし、男だよね」
　ふうっとため息を付き、熱いお茶をすすっている古川先輩。
「すぐに答えたんだってさ。『俺はまだ名前と顔が一致していない相手とすぐに付き合うなんてことは言えねえよ。お互いに話してそれから、決めるもんだと思う』と言って、まあ、断ったみたいなんだよね。ところが」
「相手が引かなかったんですか」
　たぶんそうだろう。簡単に引くようだったら。告白なんてしないだろう。
「そうなのよ、どうしてわかるの杉本さん。それからというもの、その子が毎日羽飛に手紙を書いてきてるらしいの。自分がどういう人かを一生懸命アピールしてるのよね。いや、羽飛はそんなことばらさないよ。ただ偶然、手紙が見えちゃうだけなんだけどね」
　――体よく断られたことにどうしてその人気付かないんだろう。
　――プライドがないんだろうか。
　紙ごみだらけのトレイを下げ、まだ空いている椅子に座り梨南は首をかしげた。
「それにくらべて、あのふたりときたらねえ。杉本さん知ってるでしょ」
　二年女子のおごるお約束、ソフトクリームを梨南に渡して古川先輩は続けた。
「美里がずっと好きだったこと気付いてないんだよ。あいつはさ。ずうっと美里に思われていたこと知らないでさ。言われたら言われたで『付き合うってどういうことですか』って悩んで、結局自分の方からばらしちゃうんだもんなあ。あいつもほんっと、ガキよ。わが弟って感じ」

　「あいつ」の定義が梨南にはわからなかった。
　――そんなわけない。
　古川先輩の話が最初から最後までくっつくまで、まだ時間がかかりそうだった。
「美里ってばね、二年になってからずっと、暇さえあれば言ってたのよ。『立村くんもしかして、杉本さんのこと好きなのかな』って。まさかよね。だって杉本 さん、立村の顔が好きじゃないって言ってたもんね。きちんと私たちの前でそう言ってるから信じりゃいいのにさ。『立村くん、今日も杉本さんのこと、かばっ てたのよ』とかなんとか言って。毎日そのことばっかりで思い悩んでいたのよね。『杉本さんってすっごく可愛いから、私も男だったら好きになっちゃうと思う んだ。面白いこと言うし。一年の男子みたいに趣味が変わってる奴ならともかく、立村くんが杉本さんのことを気に入らないわけないよ』って。ほとんど、俗に いう、ノイローゼって奴？」
　けらけら笑いながら、大急ぎでアイスクリームをなめた。

「立村先輩の顔は確かに可哀想だと思います」
　機械的返答だけした。
「美里がしばらくそういう状態だったのに輪をかけて、大親友の羽飛に、あわや彼女ができるかもってとこだったわけよ。だったら悩むよね。私も早くって思うよね。だから私も言ってやったのよ」
「何をおっしゃったのですか」
　椅子の背にかけたままの傘が、すべって床に落ちた。広いながら聞いた言葉に、梨南は動けなかった。
「いちかばちか、立村に告白しちゃいなよって。あのままだったら、杉本さんに奪われちゃうよってね。ごめん、杉本さん、勝手に使っちゃって。でもね、本当 に美里の悩み方すごかったんだから。緑のサインペンで熱烈なラブレターを書いて、ブラの中に挟んでおくと恋がかなうっておまじないがあるんだけど、それも やってたし。そうそう、胸が小さいことが美里にとってすっごいコンプレックスみたいだったんだよね。さっそく三年の先輩たちに相談して、ヨガで胸の大きく なる運動を教えてもらったって言ってた。ほら、あと、『好きな人の名前を書いて、ハート型のシールで隠しておくと、はがれる頃に思いが通じる』ってのがつ い最近まではやってたじゃない。真剣にイニシャル書いてたもん。『Ｋ・Ｌ』って」
　Ｋ・Ｌ。
「Ｌは違うんじゃないでしょうか。立村先輩はＲじゃ」
「美里的にはＬなんだって。ほんっと、そこまでする奴なのかねえって思ったんだけど、まあ立村も悪い奴じゃないからね。それに」
　人差し指をノンノンノン、と動かして。
「私にとっては、そっちの方が嬉しかったしね。羽飛がもし、本気で付き合うとしたらたぶん美里だろうし、美里が立村とくっついてくれるのだったら、私にもまだチャンスがあるしね。そうそう、私は自他ともに認める、羽飛命なんだ」
　けろっとした顔で答える古川先輩の顔をじいっと見つめていた。
　とけかけたソフトクリームを無意識で、必死になめた。
　甘さが感じられなかった。

　確か、梨南が清坂先輩のノートに気が付いた時。
　清坂先輩は必死にシールのことを隠していた。

　梨南が立村先輩とふたりで教室を出た次の日。
　清坂先輩は梨南の家に電話をかけてきて、どこに行ったのかを尋ねてきた。

　立村先輩が梨南に、評議委員会後説明してくれた時、
　ずっと清坂先輩は話に割って入り込もうとしていた。いつのまにかふたりっきりの空気が流れていた。

　コサージを清坂先輩がプレゼントしてくれた時、
　清坂先輩は梨南に自信たっぷりに言い放っていた。
　――当たり前よ。立村くんがそういうこと、できるわけないもん。

　アイスの味は、清坂先輩と食べた時と同じだった。
「清坂先輩が、立村先輩のことを好きだったんですか」
　当たり前、なぜ気付かないの、と言いたげに古川先輩は頷いた。
「私は一年の時から知ってたけどね。杉本さんが気付かなくて当然だと思うよ。ガセネタだけど、立村が他の女子を追い掛け回していたって噂が流れたことが あったんだけど、その時は美里、悔しがってしばらく泣きじゃくってたよ。羽飛がその様子みて、かなり心配してたけど。まあ、立村みたいなガキが美里の片思 いに気付くわけもないし、なにせあいつほんっとに、ガキだから。好きも嫌いもなかったんだろうね。たぶん、美里が告白しなかったら、あいつの方から杉本さんに走っていた可能性もあるけれど、それは私がうまく阻止したからね、感謝しなさいよ」
「私に走るってどういうことですか」
　さらにわからなくなる。両手を組み合わせた。力がめいっぱい入っていた。汗をかいていた。胸の奥が痛い。がっちりとガードされているせいか、言葉が胸に落ちていくようだった。
「私が見た限り、立村は杉本さんのことをかなり、お気に召してたみたいだよ。胸の大きさで頭がボーっとしてしまった可能性もあるけれど、それ以上に、女子 として、なんかいいなって思ってたと、私には見えたんだわ。立村はそういうところ、隠さないからね。『一年の杉本は頭がいいよ』とか『杉本に失礼な噂が流 れていたら、羽飛、明日の太陽拝めないからな』とかさんざん言ってたもんね。ほら、一年の男子と立村が、杉本さんのことを巡って大喧嘩になったって話聞い たけどさ。美里の前で堂々と、『杉本のワンマンショーでしょう』とか言ってかばったんだって？　あれはかなり美里、堪えたらしいよ。ショックで眠れなかっ たって言ってたしね。『私にはあんなふうにしてくれたことないよ。私よりも杉本さんの方が絶対好きなのかも』とにかく、杉本さん杉本さんの連呼。まあ私か らしても、立村が杉本さんのことを気に入ってたのはわかっていたけどね」

　――私のこと、好きだったってこと？
　――違う、立村先輩は私のことを評価してくれただけだから。
　――それに、清坂先輩がなぜそんなにやきもち妬かなくちゃいけないの。

「でも、美里は偉いと思った。だって、ライバルだと思ってても決して美里、杉本さんのこといじめたりしなかったもん。なんか、応援したくなるんだってさ。 一生懸命で男子たちと体張って言い合いするところとか。私もおんなじだし、美里の気持ちはわかるんだ。ただ、やはり立村を取られたくはなかったからすっご く、告白するまでは悩んだみたいだよ。もしかしたら立村が杉本さんの方を選ぶかもしれないじゃないかって、毎日私と放課後の会議、してたもん」

梨南は自分のことを、想像力貧困だとは思っていない。立村先輩が清坂先輩の方を見つめて、物思いにふけっているところも、清坂先輩が羽飛先輩の側で頬を赤らめてはしゃいでいたところも、梨南の目には鮮やかに映っていたはずだった。
　どう考えても、古川先輩の話から出てくる結論と結びつかなかった。
　――でも、古川先輩が私に嘘を言う必要ないだろうし。
　すっかり女子として気に入ってくれたらしい、古川先輩のあっけらかんとした態度。裏があるとは思えなかった。
「あれ、杉本さん、どうしたの。なんか、目がうつろだよ。朝早かったから疲れちゃった？」
「そんなことないです」
　思い切って、質問をまとめてぶつけてみよう。
　角を丸めたような、歌詞の流れない流行歌ＢＧＭが流れている。だるい音楽で店内が覆われている。刃で細かく切り刻みたかった。本当の言葉で空間を埋め尽くしたかった。

「私の知っている限り、立村先輩は私のことを評価してくださっているとは思います。ちゃんと、ふたりできちんとクイズ大会のことを話し合わねばならないっ て思っていたからお願いしたら、ちゃんとふたりっきりになれる場所に連れてってくれました。私の目をみて、きっちりと話を聞いてくれました。それはわかり ます。でも、そんなことで清坂先輩が動揺するとは思えません。第一、立村先輩が好きなのは、清坂先輩だってわかっていましたから。古川先輩、疑うわけでは ないのですが」
　ここでいったん切った。ちょっとむすっとした口の古川先輩の目を見つめた。
「本当に、清坂先輩は立村先輩のことが好きだったんですか」
　はじけて笑い転げたところみると、古川先輩も怒ってはいないようすだ。
「あーあ、杉本さんって、ほんっとに素直で可愛い。私、レズじゃないけど大好きだよ。もう、美里が立村奪回作戦の時に、杉本さんを突き飛ばさなかったのってわかる。そうだよ、こんなにいい子だったら、女子として守ってあげたくなっちゃうもんなあ」
　いいこいいこ、と付け加えた。誉められたのは気持ちいいけれど、やはり雨の湿気に共通する、べたつきが残っている。傘が饐えた匂いを漂わせるような、気味悪さ。
「私を評価してくださるのは分かるのですが、古川先輩。どうして清坂先輩が私をライバル視するのでしょうか。そんなこと、されたことないです」
「あのね、杉本さん」
　次はふうっと口をつぼめて息を吐き出している。とがらせた唇のまま、煙草をすうような指先をつけた。
「今の話でよっくわかった。たぶんだけど、立村の奴、杉本さんのことが好きだったんだよ。でなかったら、いきなりふたりっきりで喫茶店なんかに連れて行か ないよね。あーあ、そう考えると、美里がきいきい騒いでいたわけもわかるよ。まあ、杉本さんは立村の顔が不細工だって常々話していたようだし、かえってよ かったのかもしれないけどね」
「男子は顔で決めるものではないと思います。私は」

　とんでもない、自分の口から妙な言葉が飛び出しそうだった。唇が緩んだ様子の古川先輩は、そっと首をかしげた。似合わない、大人っぽいポーズだった。
「私はって、杉本さん」
「男子の中で唯一、まともな会話のできる人だと思っています。私、立村先輩のこと、そう思ってます。顔さえ良ければ完璧なんです」
「ねえ、ちょっと、待って。今杉本さんが話していることって、もしかして」
　肩を怒らせ、ぐいとテーブルに身を乗り出した。
「あいつのことが、好きだったってこと？」
「そういうものではないです。男子は馬鹿しかいないと思っていた中で、唯一私とまともな話をしてくださった人です。だから、徹底して私は立村先輩と目と目を見て話をしたかったんです。それをどうして清坂先輩は誤解されるんでしょうか」
　脱力のポーズで古川先輩はぺたんと、両手をテーブルにつけた。首を傾げ、指を絡ませ、しばらくごにょごにょ言っていた。なにかをつぶやいているが意味不明瞭だ。わからない。
「杉本さん、今、ブラしててどんな感じ？」
　話をそらされ戸惑うけれど、先輩にきちんと答えるのは梨南の義務だ。
「はい、走っても付け根が痛くなくなりました。すごく楽です」
「だよね、私もそう思う。今まで杉本さんって、ブラをしてみたいと思ったことなかったんだよね」
「はい、ずっと贅肉を減らさなくてはと思っていましたけれど、これだけでこんなに楽になるなんて思いませんでした。古川先輩の言うこと聞いてよかったと思ってます」
「そう、ありがと。でもね」
　顔を上げた時、古川先輩の顔には少してかっていた。リップの赤がだいぶ取れていた。
「今、私が言うことをね、たぶん杉本さん信じないと思うんだ。私がもし、羽飛に関して似たようなこと言われたら絶対無視すると思うしね」
「大丈夫です。古川先輩は私の行動範囲を広げてくださった大恩人です」
　ブラジャーの恩義は忘れてはならないと梨南も思っている。本当にこんなに楽になるとは思わなかったのだから。
「立村はたぶん、美里に告白される直前まで、杉本さんのことが好きだったと思うんだ。あいつもたぶん面と向かって言われたら否定すると思うけどね。もしか したら、『好き』だってことすら、気が付いてなかったのかもしれないなあ。美里からも聞いたけど、立村は美里と付き合ったってことをぎりぎりまで隠してい たってことだし、本条先輩にも『付き合うってどういうことですか』とか勘違いしたこと質問していたっていうし。第一、あいつが好きでもない女子を連れて喫 茶店に連れて行くなんて、なかなか出来ないと思うんだ。美里ですら、めったにふたりっきりでソフトクリームをなめるなんてこと、絶対にしないって言ってた し。いつも羽飛と一緒の行動だもん」
　――そんなこと、ありっこないのに。
　梨南は唇を軽くなめながら、話の続きを聞いた。

「まえまえから杉本さんのことを、すっごく頭のいい後輩だと思っていたのは知ってたし、そのくらいだったら美里はそんな、やきもち妬かなかったと思うんだ よね。でも、この前杉本さんが２Ｄの教室に来て、立村と二人で教室を出て行った日、美里が私のうちに電話かけてきて、『杉本さんは可愛いし、頭もいい。私 じゃかなわないよ。どうすればいいと思う？』って。だったら、直接杉本さんに聞いてみたらどうなのって答えたよ。その後、美里から電話が来たでしょ」
「はい。そんな悲痛な雰囲気ではないです。私のことを心配して、探してたんだって」
「美里もその点、さすがにつっこめなかったんだね。立村は結構他の連中にもおおっぴらに、『杉本は頭いいよ。どうして一年の男子はあそこまで嫌うんだろう な。もっと認められていい人だと思うんだ』って、話してたよ。ああそうそう。美里と付き合っていることを白状する日の朝も、そんなこと言ってた」
　――私のことを評価してくれてるのは、わかってる。
　――でも、そんなこと、絶対ありえない。
　たどり着きたくない答えに届いてしまいそうで怖い。いつもは先を見通すことが快感なのに、今、古川先輩の言葉で導かれるのが恐ろしい。
「さらに例の、評議委員会の騒ぎでしょう。あれで美里は立ち直れなくなったみたい。たとえ杉本さんが立村を振ったとしても、あれだけおおっぴらに溺愛してるんだったら、もうかないっこないって」
　古川先輩の言葉は、はるみのようにわざとらしく押し付ける言い方ではなかった。むしろ花森さんとしゃべっている時に似ている。
「まあ、私も直接見ているわけじゃないからね。美里がどうやってつきあいをかけたのか。立村も坊ちゃんだからそういうところでいろいろ考えていたのかもし れないし。でも、今のところ美里のことを『ひいきする』からって言ってたみたいだしね。打ち明けられてあらためて、立村は美里を好きになろうって決めた と、思うんだ。これ全部私の想像だけどね。でも、まんざら外れてないんじゃないかなとも思うんだ」

　目の前に散らかっている、ソフトクリームのコーンを包んでいた紙。
　来月のキャンペーンを予告しているハンバーガー屋のチラシ。
　フライドポテトの油が染み付いているトレイ。
　色あせていた。見ていたものと同じく、答えが入り乱れていた。
　意味があるなんておもっていなかった。梨南はゆっくりと息を整えて、古川先輩に答えようと、決めた。背もたれにひっかけたままの傘が、ごつごつしていて居心地悪かった。
「私、勘違いしてたんでしょうか」
　答えられない風に、古川先輩はじっと梨南を見つめた。
「みんな、勘違いしてたんだと思うんだ。美里も、立村も、たぶん私も」
　さっと立ち上がり作り笑顔を満開にして、古川先輩は梨南の傘を手に取った。
「さあさ、雨上がったかな。もし降ってるようだったらもう少しここで遊んでようか。やんでた

ら美術館まで歩いていこうよ。ね、羽飛は絵が好きでしょっちゅう美術館に通ってるんだってさ。杉本さんとデートっていうのも、またいいかな！」
――清坂先輩よりもはるかに、大人だ。
――ただのエッチネタ好きな先輩じゃないんだ。
今日は古川先輩と「デート」でいい。レインコートを腕にひっかけたまま、梨南は古川先輩と一緒に席を立った。店内放送では、「雨の日タイムサービス」の案内が女性の声で流れていた。

夕方までたっぷりとおしゃべりをした後、梨南は家に戻った。すでに外はきれいに晴れていた。はっきりしない虹らしきものも見られたし、美術館で絵葉書を 一枚買ったりもした。バスに乗り遅れそうで走った時も、前に比べて胸に振動が響かなかった。ちくちくすれたりしなかった。
古川先輩の言葉が全て真実だとするならば、梨南は最初からとんでもない間違いを犯していたことになる。思いをかけていたのが立村先輩ではなく清坂先輩の 方だったとすると、ずっと梨南は清坂先輩の神経を逆なでするようなことを話していたということになる。また、立村先輩がずっと梨南のことを気に入っていた とすると、梨南は思いっきり立村先輩に肘鉄を食らわせていたことになる。また、羽飛先輩が清坂先輩の恋の悩みを聞いてやっていたということになると、また 話がややこやしくなる。
最初から整理して考えなくてはならない。
前の日に、はるみも言っていたではないか。
「健吾もたぶんふたりがくっつくんじゃないかと言ってた」と。
はるみの言い分は他人様の言葉をひっぱりだしてきたにとどまる。当てにはならないとわかっているけれども、周りが「立村先輩のことを杉本梨南は追い掛け 回している」と思い込んでいる可能性は高い。あの新井林が、クイズ大会の前後に見せた「ばかはばか同士」とあてつけがましく言ったところをみると、男子連 中にもその誤解が生まれていたとも考えられる。
――私はただ、立村先輩が男子の中でたった一人、まともな人だと思ったから。
――清坂先輩のことを好きだと思っていたから。
――私を評価してくれただけだって思ってたから。
また、清坂先輩が本気で立村先輩のことを好きだったとするならば。
本条先輩に頼まれたかなにかしてうその告白をかましただけではないかと思っていたけれど、古川先輩の言い方からするとそうでもなさそうだ。あの清坂先輩が泣きながら電話を掛けてきたなんて信じられないが、きっとそうなんだろう。女子の言い分は素直に信じることにする。

想いを打ち明けられた立村先輩は、清坂先輩に「ひいき」するからと約束したという。そういうことだろう。梨南を「おちうど」という喫茶店に連れて行って くれたように、これからは清坂先輩をソフトクリーム屋にデートで誘わなくてはならないわけだ。騒々しい場所で茶を飲むことに慣れなくてはならないわけだ。 梨南だったらそんなことはさせないだろう。静かにまともに話せる場所を探すだろう。オペラの話で盛り上がるだろう。清坂先輩とは洋服と評議委員会とクラス の話くらいではないだろうか。

――そんな相手で満足できるんだろうか。清坂先輩。

――だって立村先輩は、本当は。

梨南は清坂先輩と立村先輩との違いを拾い上げることに熱中していた。今までは、「立村先輩が身分違いの恋をしている」と思い込んできたこと。不細工で、 頭も悪くて、数学の計算もろくにできない人だけど、梨南のことを唯一認めてくれた人だった。全校集会締めの日も、『ローエングリン』が『エルザ姫』を守る ように、新井林と対してくれた人だった。

――どうして立村先輩ってば、言ってくれなかったんだろう。

「立村は杉本さんのことを、美里に告白される寸前まで好きだったんだよ」
はるみあたりに言われたのなら無視するだろうけれど、古川先輩相手にそれはできなかった。
価値を認めてくれることイコール「好き」なことだとしたら、納得する。
立村先輩は頭のいい人が好きなのだろう。
だから、梨南を気に入ってくれたのだろう。
梨南の頭に詰め込まれた鋭い英知を、ほしがっているだけ。
委員会で一緒に話をしていた立村先輩を思い浮かべる。顔を無視して、声と後姿だけをまぶたに蘇らせる。思い当たる節がありありと浮かぶ。
――きっと、私には相手にされないと思ってたのね。私はずっと清坂先輩のことを好きなんだと思って、無視していたけれど。でも、言ってくれれば。うるさい喫茶店なんかでなく、秘密の「おちうど」にきっちり付き合ってあげたのに。
巨峰のシャーベットは甘さがほとんどなかったことを思い出した。舌に残った氷のしゃりりと響く音。
――私は男が顔じゃないってこと、すでに十分、わかってるのに。

そうなのだ、男は顔じゃない。美形イコール性格良、とするならば、新井林や本条先輩、羽飛先輩は全能の神として存在してなくてはならない。
新井林ほど「ローエングリン」様たる外見を備えている奴はいない。
本条先輩も負けちゃいない。そのまま舞台俳優としてタップを踏んでもらいたいタイプの男性だった。
羽飛先輩に至っては、一年女子の騒ぎようからして明白だ。
――ほんの少しでも、立村先輩のまゆ毛が三ミリくらい太かったら。
――私に自信もって、ローエングリン様のように振舞えたのに。
男は顔じゃないけれど、顔ゆえに行動を狭めることもまた確か。
梨南はめぐり合わせにため息をついた。

眠れないうちに朝が来て、いつものようにノートに散らし書きした。
――やはり、裏では本条先輩が糸を引いてるはず。
結論は変わらなかった。

最初梨南の推理は、
「本条先輩が新井林の味方について、梨南の立場を悪化させるために糸を引いた」
という説を取っていた。

清坂先輩に立村先輩がぞっこんだと見抜いた本条先輩は、清坂先輩を口説いて立村先輩と付き合わせる。曲がりなりにも「彼女」ができれば、一年のやっかい ものである杉本梨南をひいきするのをやめるだろう。新井林の方がずっと、評議委員会で高い評価を受けることになるだろう。
が、しかしである。
清坂先輩の方が一途な片思いだったという事実が明白になると、少し書き換えが必要になってくる。
梨南は二重線を引きながら書き直した。

――清坂先輩の片思いが成就したのはめでたい。考えさせられることはあるにせよ、一年半近く想い続けてきた相手に通じたのだから。立村先輩だって、顔立 ちを除けばまともな人だ。多少、清坂先輩との話題には難があるかもしれないけれど、精一杯「ひいき」してくれるだろう。私ほどではないにしても、いくばく かは気遣ってくれるだろう。
――そう、本命が私だったことを隠した上で。
――本条先輩が新井林の味方についていることは変わりない。
――私の立場を悪くしたがってるのも変わらない。

違っているのは、清坂先輩が立村先輩のことを好きだったってことだった。おそらく本条先輩は清坂先輩の片思いを早い段階で見抜いていたのだろう。先週の 委員会で、本条先輩も何気なく話していたはずだ。「今日は清坂にまかせた。あとで電話しろ」と立村先輩に声をかけていたことを思い出した。
なるほど、意外と簡単な話じゃないか。
梨南は付け加えた。

――本条先輩は清坂先輩に、告白するようけしかけた。立村先輩が私にもっと近づこうとするのを、やめさせるためだ。立村先輩はもともと清坂先輩と仲がよかったから、断るにも断れない。しかたなく清坂先輩と付き合うことを決めたんだろう。
――私のことをどう思っていたとしても。きっと。そうだ。

もうひとつ、分からないことがある。なぜ、本条先輩は新井林をあそこまでひいきするのだろう。
たかが一年生の男子評議だ。ほとんど委員会にも顔を出さない。そんな奴を影でいろいろ撫でまわしている。単に気が合うだけなのだろうか。どうもそれだけではなさそうだ。直感だ。
――本条先輩は新井林をひいきしているはず。でも立村先輩は私のことを気に入ってくれている。このあたりで二人、対立したのかもしれない。水面下で本条先輩は新井林の味方として動き、立村先輩、そして私の居場所を、少しずつなくそうとしていた。。
――さしあたって、私は、外見上立村先輩に振られたってことになる。思いたい奴には思わせておけばいいんだ。立村先輩が本当に気に入ってくれているの は、ふたりっきりで「ワルキュ

ーレ」の話をしたり、和菓子をひっそり食べたり、そういうことをしたがっている人間だけなんだもの。
　――大丈夫、私は立村先輩の立場と本心を良く知っています。
　――清坂先輩は可愛いし、いい人だけど。でも、本当に私のことを気に入ってくれたんだとしたら。
　――私は、やっぱり本条先輩と新井林から、先輩をお守りします。
　恩返しは、続く。梨南はノートを一番下の引き出しにしまいこんだ。
　――私が立村先輩の気持ちを気付かないでいたことは、申しわけないと思います。私は男子を顔で決め付けるような、はるみのような人間ではないのですから。

　月曜の朝一番は全校集会だ。イベントのない時は、ごく普通に朝、整列して体育館に向かい、評議委員一同、舞台の脇に並んで「休め」の姿勢をとっているだ けだ。男女別々に分かれている中で、校長先生のお話が始まり、後は生活指導の先生から制服の乱れを指摘された。先日のクイズ大会ファッションショーが影響 してか、最近はやたらとボタンをスカートやブレザーに縫い付けるのが流行っているのだそうだ。一年生全校集会の後遺症である。
　梨南は戸口近くに立っている立村先輩を目で追った。隣りの二年Ｃ組男子とひそひそ話をしているが、本条先輩ににらまれて黙った。一方清坂先輩は女子グループと手話っぽく指を動かしている。うるさくない。やっぱりその辺、清坂先輩の方が頭いいと思えるところだった。
　本条先輩はいつもの三年集団とだべっているのか、と思いきや。
　なぜか一年男子グループに混じっていた。順番どおりに並ばなくてもいいことになっているから、おかしくはない。新井林の隣りにいる。危険信号だ。ずいぶ ん真剣なまなざしで、ふたことみこと、口を尖らせ話している。立村先輩には冷たい視線を飛ばすくせに、全く困ったものだ。
「本条先輩、静かにしてください」
　梨南は注意してあげた。
「すまんすまん、杉本、許せ」
　両手をするようにして、本条先輩は頭を下げた。当然だ。立村先輩なんてささやき声だっただろうに、
「新井林、あのなあ」
　と、梨南に聞こえるような声でしゃべるのは、よくないと思う。

　あっさり全校集会が終り、全員が教室に戻っていく。評議委員もてんでばらばらについて行った。梨南はあえて最後に戻ろうと決めていた。本条先輩と新井林 とが、何か耳に聞こえる会話を残さないか、気になったからだった。相変わらず二人は、小声で話をしている。梨南がさっき注意したことをを気にしているのだ ろう。話が聞き取れない。露骨に近寄るのもまずいと思い、代わりに立村先輩の側に近づいた。二年Ｂ組男子評議委員とくっきり聞こえる声で、
「あのさ、夏休みの合宿は、できれば二人部屋の方がいいよな」

もう七月の評議委員会合宿のことで盛り上がっている。
「今年からうちの学校の宿泊施設、新しくなったんだろ。ホテルと同じ形だってさ。本条先輩に頼んで、絶対そちらにしてもらおうと思うんだ。お前、どう思う？」
「次期評議委員長さまに全部任せたぜ、立村」
「何言ってるんだよ。まだまだわからないってさ」
――次期評議委員長？
耳をそばだてた。せんぱい、と声をかけられないままに。
「まあ、今回の夏休み合宿で発表にはなるだろうけどなあ」
「わからない。本条先輩は一年生あたりを指名するかもしれないしさ」
軽やかに立村先輩はしゃべっている。冗談めかした口調だった。
あらためて本条先輩の方を眺めやる。相変わらず新井林を捕まえて、別の話をしているようすだ。新井林はポケットに手を突っ込んだまま、適当に答えている らしい。先輩に対する態度ではない。この調子だと立村先輩に対してはどういう格好するんだろうか。せっかく神様から与えられた素晴らしい外見を備えてい るっていうのに、無駄遣いもいいところだ。
何度か清坂先輩に振り返った。
古川先輩が話していたように、立村先輩の写真を抱きしめて泣いていたようには、どう考えても思えなかった。ちくりと視線を感じる。
――もしかしたらいつも、こうだったの？
つい、思ってしまった。

あきらめて一年Ｂ組の教室に戻った。廊下に整列した時はいなかった花森さんが、ひとりでビーズ細工の指輪をこしらえていた。細い針金に真珠色のビーズを流しこむのに専念している。
当然、溝口先生がわめいた。
「花森、どうして集会に出なかったんだ」
「すみません。教室に来たら、誰もいなかったんです」
にこっと答えるところがさらに、火を注いだらしい。いつものことながら、オールバックの前髪を振り乱しながら花森さんの腕を掴み、廊下に連れ出した。しばらく授業開始は遅れるだろう。
全く、わかっていない。
せっかく花森さんが来ているのだから、それなりの話を聞いてあげればいいのに。花森さんは一年Ｂ組のばか男子たちよりも、はるかに面白いことをたくさん知っているはずだ。
――花森さんにならば、私は白旗を揚げてもいい。
たとえ、はるみの言う通り花森さんが、梨南を見下していたとしてもだ。
彼女は自分のことばで、自分の意志で、自分のしたいことをきっちりしている。彼氏のライブに行くことも、髪形を似合うようにまとめていることも、ばかは ばか同士と割り切って付き合っていることも。優れた人の資質を見抜くのは梨南のお得意だった。はるみの言葉を思い出すと自分の鑑識眼を曇らせられそうで、 思いっきり首をしめてやりたくなった。

花森さんはクラスの女子たちと全く違う。
はるみとは正反対のタイプだった。だから梨南も信用しているだけのことだった。

さてはるみの様子は。目の前の席にいる、お団子髪を見つめてみる。
「おはよう、梨南ちゃん」
相変わらず、振りまく笑顔は変わらない。
当然、無視することに決めていた。
親切のごり押しをしてもどうかと思ったのだろう。あっさりひいて、はるみは教科書を開いた。さりげなく花模様のレース風しおりをはさみこんでいた。セッ トでついてくる鋭い視線を確認したら、相変わらず髪をつんつん立てている新井林が、号令をかけようと深呼吸をしていた。肩を怒らせている。
いつもの「起立・礼・着席」だ。
いつものことながら、新井林はクラスの運営関係について一切、梨南が手を出すことを許さなかった。やったら殺す、気迫だけが満ちている。勝手にすればいいことだ。
それに、と付け加えてみた。周りの女子たちを眺めて梨南は目を閉じた。
――もうこのクラスに未練なんて、ないんだもの。
　ゆっくり、ひとりひとり、周りの女子を見渡していく。男子の存在は眼中にない。白いブラウスに薄いスカーフやショールを羽織り、女子たちは色つきマ ジックで手紙を書くことに専念している。髪が崩れてしまっている子もいる。アイドル歌手のサインいり下敷きをぱふぱふさせて、仰いでいる子もいる。蝿が窓 から入ってきたので、誰かが「やだあ」と追い払おうとしている。
梨南だったら、絶対にしたくない普段の行動だ。
クラスの女子たちがはるみの言う通り、梨南をものわらいにしたいと思っていたならば。もう二度と梨南はクラス女子たちのためになんて働かないだろう。はるみの言葉なんかに左右されたくない。気付かないほど自分は馬鹿ではないと思いたい。

――私が、男子とうまくいかないから、同情しているってことなの。
頭から苗を毟り取った。梨南は勉強に専念することに決めた。

土曜日にさんざん言うこと言ったくせになぜだろう。ひっぱたいてやればよかったと思う。さんざん梨南のことを「かわいそう」と侮辱しておきながら、それでいて平気な顔して「おはよう」だなんて、よくも言えるものだ。
要は、梨南のことを「あかちゃんあかちゃんべろべろばー」と唱えて見つめるよう心しているからだろう。
「梨南ちゃんはとってもかわいそうな人だから、同情して上げましょう。杉本さんみたいな人は赤ちゃんなんだから、腹を立ててもしょうがないわ」とでも言いたいのだろう

もし新井林的に徹底した憎しみを浴びせられたとしたら、まだ梨南は対処できたかもしれない。野郎たちとの戦いは七年間、年季が入っているのだ。手を出さ れたら大人を徹底して利用し、少しずつ首をしめていけばいい。腕力がかなわないなら脳を使う。梨南の鉄則だ。殺してやると、つぶやきながら考えていけばい くらでも、方法は見つかる。

しかし、はるみは梨南が噛み付いたら最後、「私は悪くない。梨南ちゃんのことを思って」と泣き落としにかかるだろう。自分のしていることはみんな、「梨 南ちゃんのため」、一生懸命「梨南ちゃんをかばってあげてるのに」、「梨南ちゃんが気付かないから、教えてあげたのに」と、誰もが納得しそうな言い訳を用 意している。いや、そこまで考えていない可能性もある。

――本当に私をかわいそうがっているつもりなのかもしれない。

無邪気な悪意、たちがわるい。振り捨ててしまいたい、一粒の種。梨南の頭に植え付けられたはるみの種だ。ずっと一昼夜、梨南を攻め立てていたものがある。それが許せなかった。

小学校時代の担任が、梨南の両親とぶつかって、結局負けて、いじけていたらしいことは知っている。

梨南の性格が「ふつうの子よりも心配」とか言って、家庭訪問の時に話したらしいことも覚えている。

「杉本さん、どうして他の人たちと、同じようにしないの」とつるし上げられた日の朝、母が直接校長先生の元に出向き抗議したことも覚えている。たぶんその 逆恨みだ。他の女子たちに梨南を「赤ちゃん」扱いするような言葉を放ったというのは、梨南だけではない、両親への復讐である可能性が強い。

はるみが土曜に話したことは、きっとすべてではないだろう。きっと、あの先生から梨南をつぶすべく方法を授けられたのだろう。あのぼんやりしたはるみが自分で思いつくわけがない。梨南がおぼろげにわかっていたことを、突き刺すなんてこと、するわけない。

大人の嫉妬、それを向けなくてもいい相手が梨南だったから、周りの女子たちは梨南の味方になってくれるというわけか。はるみの言い分だとそうなる。そんなわけない、言い張りたかった。

でも、種はたった三日で芽が出て、ふた葉が広がり、育ってしまっている。古川先輩から聞いたことも、栄養の雨として降り注ぎ、ずんずんと伸びている。

――一年Ｂ組の女子も、私を馬鹿にしてるから、受け入れてくれてるといいたいわけなの、要ははるみ、あんたが私のことを「怒ってない」と言い張るのも、私を馬鹿にしてるからなの。あんたは自分の言っていることを、そのまんま認めてほしいだけじゃない。

花森さんは次の休み時間にさっそく梨南の側へやってきた。両サイドの髪を縦ロール風に巻いている。。崩れていない。手をかけているだけある。まずは誉めた。

「やはり丁寧ね、花森さんの髪型」

「わかる？　苦労したんだからさあ。ところで、ちょっと相談なんだけどいいかなあ」

目の前のはるみを意識したのか、花森さんは梨南の腕をつついて廊下に連れ出した。あまり聞

かれたくないことらしい。相談ごとだったら、花森さんに限り乗ってもいい。
「どうしたの。何かまずいことあったの」
「まずくないんだけど」
　声をひそめなくても平気ということで、花森さんは廊下の窓から外を眺め真上を指差した。
「杉本さんがよく話をしている、二年の先輩いるでしょ」
「清坂先輩？　それとも古川先輩？」
「男子の先輩で、線の細いお人形みたいな感じの人」
　思いつく顔はひとりしかいない。
「立村先輩のこと？」
　声が少しだけ、上ずった。
「そうそう、あ、でもあの人立村って苗字だよねえ。じゃあ違うのかな。昨日、彼のライブがあって聴きに行ったんだわ。その時に、あの先輩っぽい人が楽屋裏 でなんか、一生懸命机に向かって何かしてるのよ。次回ライブ関係の宛名書きしてたんだって。イベント製作を担当してくれている女の人の息子さんだって聞い たんだよね」
　――あの、汚い字で。信じられない。
「それ昨日のこと？」
「そうそう。あれ、見た事ある人だなあって。でも、本番中はずっと楽屋で片付けとかそういう手伝いばかりしていたみたいだから、話はしなかったよ。ただ、杉本さんと歩いているところ良くみたなあって、思っただけ」
　梨南が立村先輩としょっちゅう、評議委員会の関係で一緒に話をしているところを見かけたのだろう。
「花森さんの行ったライブって、和楽器とピアノと、キーボードを取り混ぜたような音楽だと聴いたけど」
「ちょっとテクノがかっているんだ。今度行こうよ。杉本さんとあの先輩が知り合いだったら話も早いしね」
　梨南はそっと、花森さんの横顔を見つめた。
　なんとなく、妙な胸騒ぎがした。
「本当に立村先輩が、その手伝いしている人だって分かる？」
「あの顔は一発でわかるよね。一応私分の次回招待状なんだけど」
　スカートのポケットから取り出した、和紙の封筒上に走る、楚々とした細い文字。わざわざ筆ペンを使っているらしかった。見覚えがあった。
「この文字は、絶対、先輩だと思う」
　花森さんは、指でそっと、「花森　なつめ様」と綴られた文字をなぞった。
「次の予定は、九月の頭だって。あの先輩に早いうち頼んで、チケットとってもらったほういいよ。私が頼んでもいいけど。でも」
　ぴくりとくるものがある。ちっと舌を鳴らして、もう一度花森さんは空を見上げた。昨日の雨がすべて吸い込まれた空だった。

　ごたぶんにもれず、花森さんも梨南と立村先輩との仲を誤解しているらしい。
　一年生たちの考えるパターン「梨南ちゃんは立村先輩に恋しているが、清坂先輩に奪われて落ち込んでいる」そのまんま、頭に刷り込まれているに違いない。
「受ける分にはいくらでも結構だが、こちらからそんなことする気なし」
とは、誰も思っていないみたいだ。
　たいしたことではない。立村先輩の隠密行動をとある情報筋から知った旨つたえ、「和楽器と洋楽器とのジョイントコンサート」チケットを分けてもらえるよう頼むことに、梨南は決めた。
　花森さんには笑顔でお礼を言った。
　立村先輩に断られるわけがない。確か立村先輩のお母さんが、日本伝統文化関係のイベントにまつわる手伝いをしているとは、「おちうど」で耳にしたことだった。

　呼び出しをくらったのだろうか。職員室の廊下前で立村先輩は窓辺にもたれかかっていた。二年の教室に向かう前に通りがかってよかった。
　手には文庫本。ぼんやりと天井を見上げていた。
「立村先輩」
　そっと、声をかけた。
「先輩、目を覚ましてください」
　じっと目に力をこめた。真っ正面に立った。じっと見つめてほしかった。
「杉本か」
　戸惑う風に、それでもしっかと立村先輩は梨南に向かって背筋を伸ばした。
「今、ひとつ聞きたいことがあるのですが」
「どうした？」
　いつもと同じ、目を軽く細めて光を遮断しようとするまなざしだった。
　窓辺は半開きのまま、外から青葉がちろちろと見え隠れした。肩に黒く、木々の影が映り、消える。他の男子たちと違う。あぶらっこい匂いがしなかった。
「さっき、友達から聞きました。昨日、立村先輩、秘密のライブに出かけていらしたらしいですね」
「どうして知ってる？」
「クラスの子が先輩を見かけたと話してました。楽屋裏で封筒の宛名書きしてたってこと、聞きました」
「そうかそうか」
　二回頷くと、立村先輩は表情を全く変えず、片手を眉のあたりにおいて、こめかみをつつくようなしぐさをしながら、
「ほら、この前話しただろ。うちの親が日本伝統文化関係の仕事してるって」
「手伝わされるお駄賃として、『おちうど』ではただで食べられるってことですよね」
「良く覚えてるな。そうだよ。昨日行ったライブっていうのは、親が企画している仕事のひとつでさ、たまたま俺が暇だったからって無理やり連れて行かれたんだ。いつも日舞の発表会で手伝

わされていることを、そこでやらされたってだけだよ」
「何をやらされたのですか」
　さらりと答えてくれた。
「次回の招待状作り。うちの親は宛名や名前を全然書いていなかったらしいんだ。字が汚いから後回しってさ。しかたないから俺が全部、封筒にしまって、筆ペ ンで宛名を書いて、封をしていたんだ。曲がステージで流れている最中ずっとそればっかり。なんだか評議委員会の延長みたいなこと、させられてるって思っ た」
　――『おちうど』で話している時と同じ話し方かもしれないな。
　今の話だと、立村先輩は決して学校側にばれてまずいことをしたわけではないらしい。ライブに一人で出かけたりするのはいけないらしいけれども、ほとんど親の手伝いではないか。同情ものである。
「先輩、今度はいつやるんですか。私も音楽好きだから聞いてみたいです。もちろんお金は払います。友達も知りたがってます」
「今度は九月だって話聞いていたなあ。そうか、杉本はクラシックが好きだもんな。いいよ。一枚招待券くすねとく……」
　ふと、立村先輩の目の動きが止まった。

　誰か来たのかと、梨南は後ろを振り返った。聞かれてまずい連中は歩いていなかった。他の学年の呼び出しくらった連中か、放送委員の連中か。梨南の知り合い、および天敵は誰もいなかった。しゃらりと木の葉がすれていた。

「どうなさったのですか」
　あらためて向かい合った時、立村先輩の瞳は人形の瞳風、鈍い光を放っていた。陽の当たる加減か、それとも梨南の目が光の変化に戸惑っていただけなのか。一瞬目をそらしただけなのに、立村先輩には違うなにものかがそばにいるようだった。おばけだろうか。怪談だろうか。
「杉本、あのさ」
　ゆっくりと、言葉を舌で転がすようにして、あらためて立村先輩は梨南をじっと見つめた。真剣に話をしたい時、立村先輩が見せる姿だった。
　――先輩が、新井林とけんかした時とおんなじだ。
　違うのは、柔らかさだけ。
　背筋が軽く震えた。梨南は胸の谷間にそっと手をやった。ブラジャーでしっかりと押さえられているから、硬く、しっかと納まった。
「この話、今度、他の奴がいるところで話すよ。二人だけだとやはり、まずいだろう」
「何がまずいのですか」
「いや、なんというかさ」
　曖昧な口調ではなかった、確固とした、はっきりした口角で。
「こういった和楽器関係のライブなんかに俺が関わっているってことを、他の奴知らないんだ。

別に隠すことではないし、親にも宣伝頼まれてるからいつかは話すつもりだったんだけどさ。でも、やはり、順番があるよな」
「順番？」
「うん、杉本には最初から声をかけるつもりでいたけど。でも、やっぱりうちのクラスの連中、一部は誘わないとまずいだろう」
「清坂先輩には、お話になられたのですか」
　――話してない、絶対に、こういうのりが好きな人じゃない。
　わけがわからぬ、心臓の音と一緒につぶやいていた。
「まだなんだ。向こうの予定を、先に確認しないといけない」
　覚悟を決めているのか、立村先輩はつぶやいた。目をそらしはしなかった。誰かに聞かせたかった様子だった。誰も、いやしないのに。
　離れた廊下で週番担当の生活委員たちが集まってきている。担当の先生たちから注意を受けて、礼儀正しく聞いている。一年Ｂ組の男女が梨南たちの方を見て、なにやら顔をしかめている。腕には緑色の腕章だ。
「わかりました。私、先輩が招待状を下さるのを待ちます」
「ごめんな」

　立村先輩は九月初旬の和楽器ジョイントライブに招いてしてくれるだろう。嘘をつく人ではない。もしかしたらまた「おちうど」で和菓子と抹茶のセットをごちそうしてくれるかもしれない。でも、きっとその時は清坂先輩と一緒だろう。二人っきりではまずいのだから。
　付き合っている以上はそうだろう。梨南だって、立村先輩が清坂先輩を好きだと思い込んでいた時は当然のことだと思っていた。なのに、背を向けたとたん湧き上がる感覚はなんなのだろう。
　おなかにずしんと、落ちてくるもの。
　頬のあたりからだんだん麻痺してくるのはなぜなんだろう。
　――清坂先輩を「ひいきする」ってこういうことなんだ。
　――私よりも。
　――私がずっと立村先輩にされてきたことが、「ひいきする」ってことなんだ。そういうことだったら、私、平気でできたのに。はるみと新井林みたいなことじゃない、そういうことだったら。絶対に。

　立村先輩がもし梨南のことを価値ある存在だと思ってくれていたら「清坂先輩とはできない」話題のお付き合いをさせてもらっただろう。好かれているのならばしてあげて当然だろう。
　立村先輩にどういう感情が交差しているのかはわからない。梨南から一歩引いた「付き合い」にしようと決めているくらい、感じ取ることはできる。「ひい き」してもらえる付き合いを、もう梨南はしてもらえないのかもしれない。もう「おちうど」でふたりっきりでオペラの話をするのも、本条先輩への信頼を打ち 明けてくれるのも、新井林からかばってくれるのも、もう一番先

にはしてもらえないのだろう。
　立村先輩が最初に「ひいき」するのは、清坂先輩だって決めたのだから。
　清坂先輩が立村先輩のことを好きだと知るまでは、絶対に思わなかった気持ちが溢れる。家に戻ってふだん着に着替え、引出しにしまったノートを広げた。今朝綴った散らし書きだ。

　――やはり、裏では本条先輩が糸を引いてるはず。

　じっくり読み返した。二度、三度、四度。五度目で梨南は確信した。
　梨南を追い詰めようとする、人の影だった。
　初めて本当の敵を認識した。梨南の勘は外れるわけがないと信じていた。

　新井林が梨南を憎む理由はストレートだ。小学校時代、新井林のお気に入りであるはるみを奪い取ったことだと見当はつく。小学校一年の頃「親切にしてあげ た」ことが向こうにはむかつくことばかりだったようで、逆恨みされただけだと、梨南は解釈している。新井林は親切に気付かない大ばか者だと言い切れる。両 親、先生、先輩、同級生、あらゆるやり口で奴をつぶすことに罪悪感はない。ちらっとあの容貌にぼおっとしてしまったことは悔しいけれど認めるが、結局「顔 しかとりえのない奴」とせせら笑う自信はある。新井林だけだったら、梨南は徹底的に叩きのめす覚悟がある。
　しかし、本条先輩を本気にさせてしまったとは。
　立村先輩はぼんやりしているからいまだに、本条先輩を信じきっているけれどもだ。新井林を手なづけ、梨南の後ろ盾になってくれた立村先輩から引き離すた めに清坂先輩をくっつけた。もちろん清坂先輩が立村先輩のことを想っていたのは確かだろう。でも、きっかけをこしらえたのは本条先輩だ。前回の評議委員会 でも、他の二年男子評議たちを集めて、なにやら「二人を祝福してやれよ」ということを耳打ちしていた。詳しくは聞こえなかったけれども、金曜日の評議委員 会は一種のカップルお披露目になっていた。
　梨南の目の前で、見せ付けたかったのだろう。本条先輩はきっと、それをじっくりとにらんでいたに違いない。好きだったから、振られたから、と人はいう。違う。
　今まで立村先輩が「ひいき」してくれたことに気付かなかった。自分の頭が許せないだけだった。
　悔しいくらい、自分が罠を仕掛けられた自分がいることに気付く。激しくあがく梨南がいる。戦い方がわからなくて暴れている。
　恐るべし、本条委員長。
　男子として梨南にむかついたのか、それとも「本条・立村ホモ説」が本当なのか、それとも別に理由があるのかわからない。本条先輩は新井林のように単純で はない男子だ。立村先輩があのふたりの頭脳にぶつかったら、勝てるわけがない。ただ黙ったまま、本条先輩を信じたまま、裏切られるに決まっている。今朝の 集会で、立村先輩が次期評議委員長ではないかという話をしていたけれども、あの本条先輩のことだ。へたしたら新井林を引き抜くかもしれない。梨南をず

たず たに切りつけた才知で、立村先輩を突き落とすかもしれない。
――私の能力を男子でたった一人、認めてくれた、あの人に。
――たったひとつの特権を取り上げたあいつらが。

評議委員会は中間試験の関係で一週抜けた。
二年、三年の先輩たちとはほとんど顔を合わせなかった。
その間に梨南はいくつかの仮説、推論を書き散らし続けた。クラスの女子たちを観察し、新井林が率いる男子たちの行動に目を光らせ、はるみの相変わらずな笑顔に辟易した。立村先輩のお母さんらしい人についての話を花森さんから聞いたりするのが心の和みだった。
答えが出たのは試験後だった。全教科ほぼ満点の答案を返してもらいながら梨南は、答え合わせの間、本条先輩に手紙を書いた。

――本条先輩へ――

今度の水曜日、一年Ｂ組評議委員同士で一対一の話し合いを持ちたいと思ってます。私からの申し出だったら、絶対に血を見ることになると思います。本条先輩の立ち会いをお願いしたいと思っています。

白い封筒に入れて、本条先輩の靴箱に入れた。
もちろん立村先輩には話さなかった。
――勝ち目のない戦いかもしれない。けど、私は負けない。

　本条先輩が心配そうな顔で、梨南を呼び止めたのは次の日だった。
「杉本、下駄箱にはできればラブレターにしてほしかったんだが」
「どうせそれならお捨てになるでしょう」
　軽くあしらい、梨南は回れ右して本条先輩の方を見た。
「手紙の件なんだが。お前、新井林にはもう伝えたのか」
「いいえ、これからお付き合いしていただきます。教室までいらしてください」
　有無を言わせず梨南は一年Ｂ組の教室内を片手で示した。中にはまだいるはずだ。新井林がはるみを待ちわびて歩き回っているはずだ。誰もからかおうとしな いのは、奴に何をされるか、つるされたら怖いか、わかっているからだろう。現場を捕らえたら梨南もかばってやっただろうが、無理に自分の仕事を増やす必要 はない。本条先輩は天井を見てふうっとため息をついた。天に吹き出した。半そでのシャツと、ゆるんだ襟もと。ネクタイを軽く調えて、
「おーい、新井林、ちょっと来い」
　一声かけた。
「先輩だめです。直接、たくさん人がいるところで、きちんと話をしないと、握りつぶされます」
　仕方なさそうに本条先輩はドアから体を滑り込ませた。新井林がちょこんと頭を下げようとしているが、梨南を見るや顔をしかめた。
　慣れている。いつものことだ。おびえはしない。
　はるみがかばんに教科書を詰め込んでいる。今日は辞書が入りきらなかったようで、難儀している様子だ。教室にはまだ、一年Ｂ組の男女が各三名程度、うろうろしていた。花森さんが梨南を待っているのか、化粧に専念していた。
「とりあえずだな、新井林。現状を打破するために、杉本から話し合いを持ちたいとの連絡をもらったんだ。お前のことだ、いろいろ言いたいことあるだろう。な」
　がしっと肩を抱くようにして、本条先輩は立っていた新井林を座らせた。この格好、よく立村先輩にもしている。「本条・立村ホモ説」はカモフラージュで、実は「本条・新井林ホモ説」が本当のことなんじゃないだろうか。梨南の推理を補強する行動にほくそえんだ。
「この女とこれ以上何話せって。本条委員長、冗談じゃねえ」
「最初で最後。あんたとはもう二度と口を利く気もないわ」
　ローエングリン人形に話し掛けているつもりで梨南は答えた。
　人形と感情は別物だから。
「まあまあ、とにかく落ち着けよ。お前、男だろ。これで最後だって杉本も言ってるんだ。もちろん俺が立ち会う」
「けっ」
　鼻を鳴らしてあごを上げた。
「本条委員長じきじきのお裁きってことっすか」

「そうだ、俺が名奉行だ」
　あくまでも冗談めいた雰囲気が切れないように、必死に本条先輩は続けてくれた。ひいきしてくれている本条先輩ですら、新井林を説得するのが骨なのだから、梨南ひとりではまず無理だっただろう。
　計画はやっぱり、正確だ。
「一度、冷静にお前らの話し合いを聞いてみたいって気は、俺もあるぞ。おいおい、いいか、新井林。お前くらい気骨のある奴だったら」
　小さい声で耳もとにささやく。きっと梨南の悪口だろう。目の前でささやくのだから、本条先輩も度胸あるものだ。
「……わかりました」
　数秒、黙りこくった後、新井林は本条先輩の顔をちらっと見て、頷いた。
　完全にネクタイをとっぱらっている。前髪がつんつんしているところは相変わらずで、今日はやたらと前髪がてかっている。整髪料の使いすぎだろう。
「じゃあ、話し合いは明日だ。俺の教室だ」
　三年Ａ組を決闘の場所と定めた後、本条先輩はひょいと梨南の顔を見上げ、立ち上がった。
「というわけで、杉本明日頼むぞ」
「あの、すみません」
　新井林には聞こえないように、もうひとつお願いした。
「なんだ？」
「立村先輩には、言わないでください。フェアな形での話し合いにしたいので」
「奴にか？　いや、フェアとかそういう問題じゃないと思うけどな」
　背中を向けたとたん、わざとらしく笑い声が響いた。新井林ではなく、残っている三名の男子連中だった。
　きっと、「立村先輩に杉本梨南が振られた説」を鵜呑みにしている奴らだろう。
「はい。正当な判断をしてくださるのは、本条先輩のみだと思います」
　首をひねる本条先輩だが小さくあご先を動かして、仕方なさそうに頷いた。。
「一年同士の話し合いだもんな。二年を混ぜてもしゃあねえか。わかったよ。杉本」

　本条先輩がいなくなった後、梨南はきびすを返して教室を出ようとした。
　その時、いきなり新井林の怒鳴り声が響いた。
　立ち止まる。
「おい、ちょっと待てよ」
　てっきり自分に向けられたものかと思った。振り返りにらみ返そうとした。奴のまなざしは違う方向に向けられていた。
　梨南がいつも座っている席の、ひとつ前。
　まだ机の上にはかばんが載っている。はるみの席となりに立っている女子がいる。
　深紅の唇だけが教室の空気に浮いていた。

花森さんがはるみの席の横に立ったまま、ポケットに手をつっこんだままなにやら話し掛けているようだった。梨南が本条先輩にかまけていた間に、何か打ち合わせをしていた様子だった。はるみはうつむいている。辞書をしまい損ねて、手をどこにやればいいかわからない様子。
「てめえ、佐賀に何言った」
髪の毛先をもてあそびながら、花森さんはつまらなさそうに答えた。
「ばか男子に話す必要なんてないから、言わない」
「ばかだと」
梨南の方をちらっと見て、小さくピースサインをした。かすかな笑みを浮かべた。すぐに消して新井林に対した。はるみの頭越しに気抜けした声で、
「あんたも自分の彼女くらい、堂々とさせなさいよ。おどおどしていて見ててほんっとむかつくのよね。杉本さんひとりをいけにえみたいなことしてるなんてさ、男として恥ずかしいと思わないのかなあ」
違う展開が始まっていた。
――花森さん、いったい何をしようとしてるわけ。
梨南は戸口に佇んだままだった。他の男女が後ろの扉から抜け出していった。一人だけ窓から飛び降りた。
「もう一度言ってみやがれ！」
肉薄しようとする新井林。立ち上がってすごい勢いで花森さんと向かい合った。
「ほおお、手を出そうってわけ。やっぱりガキはガキだねえ」
鼻で笑いつつ、花森さんは冷静に交わした。
「ばっかじゃないの。別に私は佐賀さんをいじめてるつもりないよ。あんたらが杉本さんにしていることを『いじめ』だと思わない程度にね」
――私をかばってくれてるの？
何がきっかけだったのかわからない。確かに花森さんは梨南のことを気に入ってくれている。でも、予告なんてなかった。本条先輩と正式話し合いを申し込んでいる間にこんなことになっているなんて思わなかった。自分の想像つかないところで何が起こっているのかわからない。
梨南はゆっくりと近づいた。教机の隣に立った。サンドイッチの格好で新井林と花森さんがにらみ合っている。はるみが具だ。うつむいたままだ。
気が付いたのは花森さんも一緒だった。梨南の目をしっかり見つめて、はにかみ気味に笑みを浮かべた。
「杉本さんだってそうでしょう。いい子ぶって友だち友だちされるより、嫌われるならはっきりと嫌われた方がいいでしょう。やり方が汚いよ。佐賀さん。あんたがやってることって」
言いかけた花森さんに新井林が掴みかかった。さらりと交わす花森さん。指先だけが咽にかかりそうで、襟元のボタンがはじけた音がした。さすが野郎の腕力は半端じゃない。ボタンが取れたらしく、ちらっと襟が開いた。咽のくぼみがちらりと覗いた。
阻止するのが梨南のつとめ。素早く花森さんに走りより、引き離した。
「教室での暴力は許されないことだけど」

　自分をかばってくれる人にしてあげることは当然のことだ。
　梨南はゆっくりと言い放った。
「さっき、本条先輩の前で言ったことだけど、明日、その場ですべて片付ける。言いたいことがあればその場で聞く」
　花森さんに向かってあらためて。
「花森さん、私のことは大丈夫。明日、話し合いするから」
「でもさ、ちょっとやり口汚いよね。私もあまりいい子っぽいこといえないけどさ」
　ブラウスのボタンをそのまま開いたまま、花森さんは目を細めてつぶやいた。
「佐賀さん、自分ばっかりいい子でいるのはやめなさいよ。言いたいこと言わないで、同情した振りするのはさ」

「私にも言わせて」
　言葉を遮ったのは新井林でなかった。
　すうっと立ち上がったのははるみだった。髪型は相変わらずのお団子髪。後れ毛が落ちていなかった。
「悪いけど、言いたいことばかり言うのが、正しいとは思わない。私は、自分の意志でしているだけだから」
　梨南の方をじっと見つめて笑みを絞り出そうとしていた。
「私は梨南ちゃんのことが、かわいそうだと思っているだけ」
　新井林に向かい、大きく頷いた。奴の目がこわばっている。はるみの言葉に、相手の方が打たれたといった格好だった。挙げかけた手を下ろしあぐねてポケットに突っ込んでいる。
「健吾、行こうね」
　やわらかい、穏やかな言葉だった。
　はるみは新井林の腕を引いて教室を出て行った。

　確かに今まではるみがしなかった行動ではあった。
　三週間前、クイズ大会で手に口づけされ、はにかんでいたはるみではなかった。
「なあに、あの態度。杉本さん、負けたらだめだよ。うちのクラスの女子がみんな、杉本さんの味方なのはね、はっきり言わないことが許せないからなのよ。自信持っていいんだからさ。ああ、しっかし、私裁縫苦手なんだよね」
「私、ソーイングセット持ってる」
　梨南はかばんから針と糸のセットを取り出した。でもここでは難しそうだ。咽もとを刺したら大変だ。代わりに細い赤リボンを渡した。
「ボタンホールにリボン通して、飾りにしたらすてきだと思うわ」

　花森さんと別れた後、梨南は急いで家に戻った。
　もともと梨南との話し合いをあっさり受けるとは思っていなかった。だから本条先輩の威厳を

利用させてもらったのだ。読みは当たっていた。しかしながら本 条先輩の様子は、ちょっと戸惑っている様子だった。女子にはおちゃらけた態度を取っている本条先輩だが、梨南にも一応それなりの言葉をかけている。
――騙されたらだめだから。
――新井林の味方なんて、相手にしちゃいけないの。
どこかひっかかるものがあったけれども、それ以上にはるみの言葉が許せない。
なあにが「私は梨南ちゃんのことを、かわいそうだと思っているだけ」なんだろう。
どう考えてもばかにしている。かわいそうだからかわいそうだからと連呼して、梨南を貶めようとしているわけだ。むかついてきて胃薬がほしいくらい。でも よくもまあ、あそこまで言いたいことを言えるようになったものだ。小学校の頃なんて梨南の側を離れることなんて一切できなかった子だった。いつも梨南の真 似をして、髪の毛を伸ばして、無地のきれいな便箋を使って。
あの態度はなんだろう。
何がはるみをああまで変えさせたのだろう。
梨南は頭から振り払って、もうひとつ、誰にも言っていない推測を書き込んだ。

あくまでも梨南の憶測だ。月曜日の集会時に初めて聞いた、「立村先輩が次期評議委員長になるらしい。もしくは指名されるらしい」という噂のことだった。 青大附中の評議委員長は、夏休みの評議委員会合宿で指名されるのが「伝統」だと、以前清坂先輩に教えてもらったことがある。現評議委員長・本条先輩が指名 権を持っている。
一番仲のいい後輩ということもあわせて考えると、立村先輩が最有力候補であるのは間違いない。
ある程度みな、お約束という感じだったのかもしれない。梨南は気付かなかったけれども、他の二年先輩たちはすんなりと受け入れているようすだった。少なくとも、体育館での会話では、引きずり下ろそうとはしていないようだ。
だが、立村先輩はさらに「一年を指名するかもしれないしさ」と付け加えている。
本条先輩が新井林をやたらとひいきしている様子が見え見えなのは、鈍感な立村先輩も同じなのだろうか。
はたして一年生の男子評議委員を、いきなり評議委員長として指名できるのか。
頭の出来、切れ方で考えるならば、本条先輩が新井林の方をはるかに上だと思うのも、否定はできない。立村先輩のよさを梨南は分かっているつもりでいるけれども、すべての人が梨南と同じ人間鑑識眼を持っているとは限らない。あの本条先輩ですらも。
――本条先輩は、新井林を次期評議委員長に仕立て上げようとしているんではないだろうか。
――新井林中心で考えるとしたら、次にライバルになるのは私だ。
――立村先輩を引きずりおろせば、私は新井林と同じ立場に立てなくなる。

明日、思いっきり言ってやろう。向こうの言いたいことも全て聞いてやる。

そして、本条先輩の前で、たくらみをみな、暴露してやろう。
――私はそのことを立村先輩に告げ口すると断言しよう。
――私は、立村先輩にそれだけのことをしてあげる、権利がある。
梨南は決めた。

青潟には梅雨がない。それなりに雨は降るけれども、やんでしまえばさっぱりしたものだった。まだレースのショールをセーラー襟風に結んで通ってもおかし くない朝だった。今日は小さめの手編みレースを施したものを、襟元に結んでみた。純白だったので、ブラウスの白に溶け込んでしまいいまひとつだけど、自分 なりの正装といった感じにはなりそうだった。出発する前にもう一度、「ワルキューレ騎行」を部屋の中に流した後、梨南は立ち上がった。

一時期はしつこく通っていた二年側の教室。つい、足が向きそうになるのをこらえていた。本当だったら清坂先輩や古川先輩と、もっとおしゃべりしてみた かった。清坂先輩には、立村先輩がまたばかなことをしでかしてないかとか、古川先輩には間違った性的知識をばらまいていないかどうかを確認するとか、いろ いろ、ネタは豊富だ。
でも、行けばいやおうなしにひとりの人に会うことになる。
自分がいてはいけない気持ちになるから、いやだった。
しかたないからしばらくは一年の教室で他の子たちとおしゃべりに専念していた。花森さんがいれば話は別だけど、彼女が来るか来ないかは一種の賭けだった。

「梨南ちゃん、他の人たち、今言ったでしょ」
返事しないけれどはるみが微笑みながら声をかけてきた。
「梨南ちゃんがいつも数学の予習をしてきてくれるから、みなノート見たがってるって。あれはね、梨南ちゃんの答えだけを見たがってるだけなのよ」
こうも言う。
「梨南ちゃん、さっき一部の人たちがね、話していたのよ。『杉本さん以上に嫌われている人なんていないから大丈夫よ、告白しちゃいな』ってね。失礼だわ。梨南ちゃん、そういう人たちに親切にしてあげるなんて」
もちろん、聞き流すだけだ。
耳に入ってくるものは跳ね返せない。
――人の悪口をよく平気でいえるわね。
ほとんどがクラスの女子たちの行動だった。もちろん梨南も、自分の周りに近づいてくる人たちが、ノート写しだとか男子たちへの悪口だとかそういうものだ とは気付いていた。でもそれが悪いこととは思わなかった。少なくとも梨南は、女子たちのために必要とされているとわかっていたからだった。
はるみがささやくまでは、そう信じきっていた。
はるみの口から「かわいそう」という形容詞で出てくると、理性で押さえられない何かが飛び

出しそうになる。
「さっき、健吾から聞いたの。梨南ちゃん、二年の清坂先輩に操られてしまったんだなってわかって、本当にかわいそうだと思ったの」
「私が、操られる？」
　口から飛び出した。押さえられなかった。身動きしないようにするのがやっとだった。はるみの声はささやき声。笑顔は変わらぬまま。続けた。
「清坂先輩は梨南ちゃんから、あの二年の先輩を取ったことで嫌われないように、一生懸命ご機嫌とっていたじゃない。私、健吾からそのあたりの話、全部聞いていたから知ってたの。梨南ちゃんはずっと気付かないでいたのねって。かわいそうだわ」
　じっと、梨南の目を見据えた。笑顔が細切れになり、揺れた。梨南の顔になにか揺れる物を見つけたのだろう。唇が軽く開いた。本性見つけたり、と梨南は思った。思っただけで何一つ言い返せない自分がいた。
「だから、私は、梨南ちゃんの友達でいたい」
　――自分が何をしようとしているか、分かっていないふりしている。
「はるみ」
　決して悪口ではないことを、梨南は伝えなくてはならないと思った。
「もう、私なんかと一緒にいなくても、あんたは自分のやりたいこと、しているじゃないの」
　え、と思わず口をあけたままのはるみ。
「やりたいことあるのなら、一人でやればいいのよ」
「どういう意味なの？　私、わからないわ」
　もう答える気はなかった。梨南は無言を通し、次の授業の教科書を読む振りをした。

　妙に静かな教室だった。溝口先生が教室に来るなり、
「どうした、お前らおとなしいなあ」
　とぼそりとつぶやいたところみると、感じているのは梨南だけでないらしい。残念ながら花森さんはまだ来ていなかった。
　放課後、タイマン勝負を張る予定の新井林の様子を垣間見る。
　相変わらず面倒くさそうに「起立、礼、着席」の号令をかけている。はるみには閃光をひらめかせるように視線を投げているが梨南を見ようとはしない。
　――私と新井林が何かしようとしているのをみな気付いているのかもしれない。
　静かすぎた。大抵いつもだったら梨南の方にもう少し「死ね」「ブス」「くたばれ」を代表とする言葉が飛び交うはずなのだが、一切ない。好意的な視線ではないにせよ、無視する姿勢らしく、目を向けてこない。
　ひとり、ふたりならば気持ちの変化かもと思う。でも、クラスの男子一同が同じ態度というのが違和感ありありだった。空気が妙に白くなり、かえって息苦しさすら感じる。
　思えば、男子に悪口を言われない一日なんて、今まで一度もなかったのだから。

一時間限定か、と思っていたら結局放課後まで、悪口の封印は続いていた。信じ難い一日だった。他の女子たちは、戦わなくてもいい気持ちで、毎日過ごしているのだろうか。経験したことのない空気に梨南はまだ慣れていなかった。
――何か、おかしい。
――気持ち悪い。
放課後の決戦に向けて最後の仕上げをしたいのに、集中できなかった。

息苦しい真空パック状態から解放されたのは、放課後だった。結局花森さんは休みで、もう少し気兼ねなくおしゃべりすることもできなかった。残念だ。はるみははるみで気付いていたのだろうか、
「よかったわね。今日は梨南ちゃんを悪口言う人いなくって」
言い残すと、さっさと一人で教室を出て行った。たぶん同じ違和感を感じていたのだろうし、へたしたら新井林との話し合いが控えていることも知っていたのだろう。さすが、『彼女』だ。
――平常心を失っちゃいけない。
――私は、負けない。
叩きのめすのはこれからだ。梨南は教科書をしまいこむと、他の女子たちへ挨拶した後教室を出た。

三年Ａ組の教室には本条先輩ひとりだけだった。梨南の顔を見るとひょいひょいと手招きした。
「杉本も、ま、今日は一対一だ。徹底して言いたいこと言え。今のうちに片付けておく方がいいからな」
よけいなことを言わないようにしようと思っていた。
「立村も心配してたぞ。杉本が、野郎相手にひとりで戦ってるって。あのままだったらいつかつぶれるぞってさ。まあ、言ってるあいつの方がもっとやばい。気付けよって、お前言いたくなるだろ？」
お前呼ばわりだけど、まあいいかってところだ。本条先輩はそういうところで得体の知れない部分を隠している。梨南は小さく頷いた。
「本条委員長、今のうちに聞いていいですか」
「ああ、なんでもオッケーだ」
「なんで、そんなに立村先輩と仲がいいんですか」
小さなきっかけ。聞いてみたかったこと。でも立村先輩のいる前では絶対に口に出せないこと。
梨南の顔を、きょとんとして見返し、本条先輩は膝を叩いた。
「杉本、まさか俺と立村がホモだと思ってるんじゃねえのか」
「かなり近いです」
嘘はつかないことに決めている。

「『本条・立村ホモ説』は評議委員会の人間ならみな知ってます」
「なんだよ、清坂か古川か、あのあたりに耳打ちされたな」
　声を立てて笑う本条先輩。何も考えていない風にみえ、梨南はあらためて気を引き締めた。
　――こういうところで本条先輩に、立村先輩は騙されてるんだ。
　――私がひっかかってどうするの。
　椅子の背もたれに思いっきりのけぞって、本条先輩は大きくのびをした。咽仏からあご、鼻、額とながれていく一本の線。きれいに、彫刻の像のようだった。青大附中きっての女ったらしと人はいうけれど、こういうところを見てしまったら、そりゃあひっかかるだろう。
「期待させて悪かった。残念ながら、奴には彼女いるだろ？　俺もふたりいるだろ？　ま、そういうことだ」
「友達としてはどうなんですか？　立村先輩は頭がそれほどいいというわけでもないですし、それにくらべて本条先輩は学年トップですし」
「人間、成績イコール人間性ってことはないだろう。まあ、気が合うって、単純にそれだけだって。杉本だってそうだろ？　やはり相性が合うことが最優先じゃねえか」
　本条先輩の言うとおりだ。梨南は頷いた。花森さんの顔が浮かんだ。
「私、不良とか優等生とかのレッテルを貼ったお付き合いはしたくないです」
「ただなあ、立村と俺との問題は、一年の差ってことか。先輩と後輩だと、まだお互い遠慮みたいなもんがある。ため歳だったら、また違ってたかも知れねえけどな」
　意外と本条先輩、上下関係にこだわるところを見せた。ちょっとあきれる。
「では、もうひとつ聞きます。どういうとこが好きなんですか。立村先輩の」
「好きって、誤解を招くようなこと言うなよ」
　伸びをした態勢のままで、本条先輩は天井に向かって答えた。椅子をちょっとだけ蹴って倒してみたかった。糸が咽仏にひっかかっているような、切れ切れの声で、
「あれだけ俺のことを認めてくれたら、そりゃ誰だってひいきしたくなるわな」
　残りの言葉は独り言だった。梨南が聞き取っていなければ、無視していい代物だった。
「わかりました」
　どこまで本気なのだろう。梨南には判断できなかった。
　あと十分弱で、梨南は本条先輩を攻撃するつもりでいる。今ここで聞いた言葉が全部嘘だと、証明するつもりでいる。でも、別のアンテナが、もしかしたらどうしよう、という電波を捕まえている。梨南が作り上げた一つの推理をひっくり返そうとする、力が働いていた。
　――でも、私の推理が正しくないとしたら、あとの話が繋がらなくなる。
　――そうよ、本条先輩は私が立村先輩の味方だとわかっているから、まだ友情めいたこと、言ってごまかしているのよ。
　梨南はじっと、本条先輩の鼻の穴を見つめつづけた。
　背中から生ぬるい風が動いた。振り向いた。
「おお、新井林、来たか」
　『ローエングリン』様の到来だ。

　ネクタイは外している。襟のボタンは二つ開けたままだ。咽仏はきちんと形づくられている。前髪は、教室にいた時と違って少し下ろしていた。細く、光っていた。
「本条委員長との、約束は守りました」
　めずらしくきちんとした口調で新井林は名乗った。梨南を無視して教壇の上に立ち、あごで軽く、何かを指し示した。
「よっし、ではやるか。こう言う機会はめったにないんだからな。お前ら、言いたいこと、全部言っちまえ。すっきりしちまえ」
　本条先輩が立ち上がると同時に、新井林も教壇から降りた。先生用の机側に立ったまま、かばんを教壇に投げ捨てた。梨南の顔を真っ正面から見据えてきた。青大附中に来てから初めてかもしれない。
　あの大きな瞳と輪郭くっきりした顔立ちに、見据えられるのは。
　梨南が瞳の中に映るのは。
　答えに、梨南も睨み返すことにした。

「まずはだな、杉本、どうしてこういう話し合いを持とうと決めたんだ？」
　ゆるゆると、本条先輩はとぼけた口調のまま尋ねてきた。感情を見破られないように答える。
「はい、一年Ｂ組の不毛な状態を、いいかげん片付けたかったんです」
「そりゃあ、いろいろ問題あるだろう」
　すべて新井林あたりから聞いているくせに。心で毒づき梨南は続けた。
「私と新井林がお互いを憎んでいるのはよくわかっていますし、それがふつうなことなのでどうでもいいです。ただ、クラスにこれ以上影響するのは、いろいろ面倒だし、こちらもうんざりしたので、ひとつ、提案したいことがあります」
「ほう、なんぞやそれは」
　作り笑顔でさらに促す本条先輩。身をかがめて梨南の顔を見下ろした。
「はい。クラスと委員会の担当を、分けることです」
　肝心要の新井林の反応を待つ。口を尖らせたまま、黙って見据えているのは変わらない。返事をしない。
「担当をわけるって、よくわからないんだが」
「はい。一年Ｂ組は現在、クラスの仕切りおよび、先生のところへの御用聞き、ロングホームルームの司会、および号令、すべて新井林の担当になっています。私がさぼっているわけではありません。勝手に向こうがやるので、こちらは投げているだけです」
　本当のことだ。向こうは言い返せまい。変わらない表情が目の前にある。
「その代わり、評議委員会関係のことはみな、私が仕切っています。この前の全校集会の時も、実質企画を実行したのは私でした。立村先輩がばらさなければ、誰も気付かなかったかもしれませんが」
「はは」

　顔を崩さず、乾いた声で、二語だけ、発した新井林。
「つまり、得意分野がふたつに分かれてるってことです。それだったら丸く収まるのではないでしょうか」
　ここからが勝負だ。梨南は声を低くした。本条先輩にちらっと視線を投げ、新井林正面に向かい、ゆっくりと言葉にした。
「一年Ｂ組のクラスに関しての仕切りは、すべて新井林に任せます。号令も、荷物持ちも、あとはロングホームルームも、すべてです。私は一切クラスにはタッ チしません。たとえクラスの女子が新井林を代表とする男子連中に泣かされようとも、私はがまんしてます。文句は言う気もないし、勝手にすればということ で、黙っています。ただし」
「ただし、なんだ？」
　腕立て伏せの中途半端な格好で、本条先輩が身をかがめてさらに問うた。
「今後の評議委員会関係の仕切りは私がすべて引き受けます。どうせ新井林を始めとする男子評議は部活で忙しいでしょう。私は部活に入ってませんし、時間はたっぷりあります。評議委員会こそ私の部活動そのものです」
　梨南はさらに続けた。
「お互い、触れる分野と触れない分野をくっきり分ければ、無理に話し合いをすることもないですし、溝口先生も文句言わないですむでしょう。どうですか。この案は」
　簡単に飲み込んでもらえるなんて思っていない。答えを待った。一秒、二秒、三秒。
　本条先輩も黙っている。
「ふうん、それで」
　唇を微妙に狭く動かして、新井林が答える。身体をぴくりともさせずに目も動かさない。いやみを言おうとする奴の顔に似ていた。
「了解ということだったら、話し合いはこれで終りです」
　本条先輩は身体を起こし、手を机について、自分の頭と手で二等辺三角形をこしらえた。
「なるほど、ひとつの手だな。男女評議が協力しあってクラスをまとめるのもひとつだが。杉本なかなかナイスだな」
　答えを聞きたいのは新井林だけだ。梨南は無視した。

「けっ、そうなったとして、本条先輩、そういうことを許されると思いますかねえ」
　本条先輩に向けての言葉なのに、梨南から目を離さず、微妙な笑みはそのままに。
　新井林の勝ち誇った表情は変わらなかった。奴がどういう出方をするかによって梨南は答えるしかない。
「最悪のパターンだが、お前もそっちの方が楽じゃないのか。まあ、どっちにしろ評議委員がみな委員会を捨てること、できるわけないんだからな」
　息を吸い込み、もう一度新井林をにらみつける。
「俺がよくても、はたして他の連中が納得するかってな。本条委員長、前に俺が言った通り、俺は本気でやろうと思ったら、部活と委員会の二束のわらじくらい 余裕ではいてしまう奴です。今

まではこの女の顔を見るとむかむかするから、あえて身を引いてきました。でも、もしこの前、本条先輩の言ってくれた通りのこ とになるんだったら」
「何もしてこなかったくせに」
　もっと決定的な言葉を待っている。梨南はじれてきた。
「てめえや、あいつと違って正々堂々、俺は委員会もクラスも、みんな仕切りきってやるってな」
　ばしんと机を叩いた。拳骨だった。
　本条先輩がその手首を抑え、直角に首を向けた。梨南の方だった。
「第一の案は、否決だな、杉本」
「どうしてですか」
「新井林はクラス運営だけでは納まりきらない奴だからな。俺としては、できれば評議委員会の大切な駒として動いてほしいなあと思うわけだ。杉本の気持ちもわからないでもないが、別のことを提案してみた方がいいんでないか」
　やはり、梨南の読み通りだった。
　新井林をかばおうとする本条先輩。
　評議委員会から外すことに異論を唱えるというのは、想像していた。
　切り札をいつ出すか、迷っていた。
「どうしてそんなに新井林をかばうんですか。この前の全校集会の時も、新井林に影でいろいろささやいていらしたみたいですよね。本条先輩。そんなに私のやり方がむかつきますか」
「おいおい、どうしたんだよ。杉本、ほら、落ち着いて」
「私は十分落ち着いてます」
　きんと響く声。自分でも荒れてきているのがわかる。ぼほっと、鼻を鳴らす音。新井林が腕を押さえられたまま、反り返って梨南へ鼻の穴を向けた。
「俺を必要としてくれてるのさ、けっ。てめえよりも、俺の方を、本条先輩は大切な人間として、評議に置きたいって言ってくれてるんだ。俺はてめえが決め付 けているような頭の悪いばかでも、性格の悪い汚い人間でもねえよ。てめえのように汚いことをして、なんも関係のない奴らの親を街から追い出したり、てめえ の決め付けたことで口利けない奴を出したりなんて、してねえよ」
「本条先輩が何をあんたにしてほしいって望んでるわけ」
　知らないふりをして、決定打を待つ。梨南の推理が正しければ、新井林が単純に答えるならば。
「本条先輩、言っていいっすか」
「もういい。止めないぞ」
　手首を離し、本条先輩は観念した風にうなだれた。両手をついたままだった。
「俺は、評議委員長候補として、先輩たちから指名を受けることになってるってわけだ。いいか、杉本。てめえのことをやたらひいきしている、あのばか二年なんかに評議委員長の座を任せられるかって」

　ひょこっと、本条先輩がびっくりまなこで新井林を見つめた。
「おい、ちょっと待った」
「言わせてくださいてってんだ！」
　本条先輩の制止も聞かず、新井林はいきなり人差し指を梨南に向けた。ピストルだった。目の前に突き出して威圧させようとしているのだろう。
　梨南は黙って、新井林の言い分を待っていた。

「あんな二年のばか野郎に惚れてるてめえに人のよしあしなんか決め付けられてたまるかよ。別に俺は、あいつの数学能力が小学生以下だとか、女子の尻ばかり 追いかけてるとか、ガキの頃にはぎゃんぎゃん泣きつづけていたとか、そういう噂なんか気にしねえ。そうさ、俺はそんなことをネタにしていじめたいなんて思 う、てめえのような人間じゃねえんだ」
　――てめえのような、人間。
　梨南のような人間とはどういう人間なんだろう。
　指をしっかと見つめ、一点凝視しながら梨南はそのまま聞いていた。
「俺があいつを軽蔑してるのはひとつだけだ。てめえのような最低人間を、俺より上の扱いしたことが、死ぬほど許せねえだけだ。本条先輩、この前言った通 り、この女のせいで俺の仲間は、親の仕事を奪われて町を出て行ったんだ。たかが猫三匹死んだくらいで、親の仕事場まで奪われて、さんざん針のむしろみたい にされてだ。きっと、親のしたことだからたいしたことないと思うんだろうな。ああ、死んだ猫を投げ入れたことだったら俺はあやまる。プライドは持っている。でも、てめえのやり方は」
「自暴自得よそういうのは」
「はは、自暴自得かよ。そうだな、てめえがそれから周りの家やまともな奴らから、されてることも自暴自得だな。あれ以来、てめえの家が村八分になっていることも知らないできどってやがるもんな。まあ、それは勝手だ。俺には関係ない。だが、もっと許せねえのは」
　大きく息継ぎをする。手を下ろし、本条先輩が口を開きかけたのを遮り。
「てめえが気取りつづけてるのはいい、勝手にしろっていうんだ。だが、他の奴らにそれを押し付けることはねえだろ？　杉本、てめえが気に入らなければ、病 人だ、異常だと決め付けられた奴らはどうなるんだ？　俺だって別に女子をいじめたいとか思ったことはない。嫌いだとかそういうのはあっても、ふつうの話が できればふつうのことですんだはずだ。ところがどうだ？　てめえの取り巻き連中は、何されるかわからなくて怖くて、仕方なく俺たちに歯向かってくるってわ けだ。しかたねえから俺たちも戦うしかねえ。結局、てめえと俺との戦いは、その繰り返しさ。ふつうにしたいだけなのに、てめえが回りを異常にしてぶつかっ てきてってわけだ。親の決め付けたことを鵜呑みにして、結局自分ではなんも出来ないから、大人を利用してやり返すってきたないやり方だ。吉久先生はてめえ の汚さを全部、ご承知ってことだ。そうだ。はは、知らねえだろう。俺たちが勝手にクラス会やってたのもな。それも二回も、やってたってな」
「聞いてる。はるみに」
　これだけ間に挟むのがやっとだった。

「吉久先生がな、言ったんだ。てめえには、絶対言わないでやろうってな。女子たちも小学校卒業してから、俺とふつうの話をして、おかしくない奴に戻ってた。てめえの支配から逃れて、みんなまともに戻ったんだ。ところが今は、一年Ｂ組が狂ってきたってわけだ」
　新井林の目がぎらぎら光っている。狂犬だ。止められない押さえられない。本条先輩もあきらめたようで、黙って聞いている。
　一瞬の空気を逃さず梨南も言い放った。
「悪いけど、今の話聞いているとあんたたちのしていることが棚上げになっているみたいね。あんたがたが私にしてきたことは、世間一般でいう『いじめ』って やつだって、世の中の大人は決め付けているのよ。私が思っている以上にみな、同情してくれてるのよ。自分を正当化するなんてやっぱりばかなのね」
「ああ、そうだったさ。俺は確かに六年間、てめえを『いじめ』てきたかもしれない。嫌がらせはしてきたかもしれない。頭を下げれっていわれたらあやまる さ。反省するさ。本条先輩にも言われたしな。『評議委員長になる器を持っているのならば、姑息なまねはやめろ』ってな。だから、俺はけじめをつけたってわ けだ」
　朝の一年Ｂ組、異様なまでの静かな空気。
「けじめというのは何よ」
「気付いてねえのかよ。俺は、てめえなんかとは違う。姑息ないじめなんてしねえ。やるなら正々堂々タイマン勝負でけりをつける。ということで、連中にてめ えをこれ以上突き上げないよう指示を出したってわけだ。しつこいようだが、かわいそうだからなんてこれっぽっちも思っちゃいねえ、俺が評議委員長になるた めの、証明だ」

　答えが見えた。あの異様な静けさの理由だった。
　あれは梨南を男子たちが受け入れたのではない。新井林の命令に過ぎなかったのだ。
　クラスを完全に支配しているからできることだ。恐るべし、新井林健吾。

「本条先輩、私も言わせてもらいます」
　何度か口をあけようとした本条先輩を遮り、今度は梨南が口を切った。
「先輩、さっきお話してましたよね。立村先輩とどうして仲がいいのかってことを。立村先輩が慕ってくれるから、仲いいんだって。言ってましたよね」
「あ、ああ、言ったぞ」
「立村先輩だってひたすら本条先輩のことを信じています。この前の荒れた委員会締めの時だってそうです。私だったら本条先輩のことを信じられなくなったと 思います。でも立村先輩は、たかだが卓球に誘われたくらいで、この人は大丈夫だと信じきってしまってます。立村先輩が少しぼんやりしていて、まぬけなのは 私もわかります。でも、信じてくれた人を裏切るなんて、あんまりではないでしょうか。もしかしたら私は新井林の言うとおりの人間かもしれませんが、こうい う裏切りかたはひどすぎます」
　感情では訴えたくない。冷静に、独り言を言う調子で梨南は続けた。

「評議委員長がどのくらいすごい地位なのかはわかりません。ただ、立村先輩が選ばれるものだとみな、信じてます。二年の男子評議の先輩たちもそうです。新 井林なんかが、まさか、本条先輩に選ばれているなんて聞いたら、きっとすごい騒ぎになりますね。当たり前です。新井林みたいに委員会をサボりまくっている 奴が、いきなり引っ張り出されたら、許せる人はいないと思います。それともなんですか、問題は立村先輩の顔ですか、性格ですか。新井林みたいに顔しかとり えのない奴に、そんなことされたくないです」
「ほほう、顔しか、とりえないか、俺が」
　思わず口を押さえそうになる。かろうじて耐えた。
「立村先輩よりはという、比較の問題です。もし、本当に新井林を委員長にしようという計画だったら、私はどんな手を使っても阻止します。本条委員長を敵に回したとしても、私は立村先輩側につきます」
　梨南も息をほとんど継がなかった。

　本条先輩の顔がようやく、合点の言った表情に変わった。汗がひたいにうっすらと沸いている。ごしごしとこすって、新井林、梨南のふたりを交互に見比べた。
「よっくわかった。一年ども。今度は俺の番だ。黙って聞け」
　本条先輩が手を入れた。
「要点を整理したいんだが、杉本は俺が、立村を騙して新井林を評議委員長にしようとしていると言いたいんだな」
「だって、新井林もそう答えてました」
　次に新井林をじっと見つめた。
「お前は、俺がお前を次期評議委員長に指名するつもりでいると、思っているわけだな」
「この前、そう言ってくれたじゃないですか、本条先輩。『俺はお前を評議委員長候補の器だと思っている』って」
「ああ、言ったな。言ったな。確かにお前は器を持っていると俺は言った。だがな、新井林」
　しゃべりすぎて力が入らない。本条先輩の息使いに飲まれそうだ。救いなのは新井林も同じようだったことくらいだ。
「次期評議委員長は立村だ。こればっかりは絶対に変わらない」
「本条先輩、だって俺に」
「黙れ！　後にも先にも、俺の跡目を継がせるのはあいつだ！　今後、この件について茶々を入れることは俺が許さない」
　初めて本条先輩は声を荒げた。新井林をじっと見つめ、有無を言わさぬ口調で怒鳴り、黙った。

　新井林の顔は脱力していった。口を半ば開けて、ひとこと、
「あんな奴をなぜ」
　梨南も、しばらく口が利けなかった。何か言いたいことはある。また騙しているのではといい

たい。でも、それを封じ込める迫力に気押されて、わけがわからない。
　推理の一部は確かに当たっていた。
　新井林の性格が、評議委員長にふさわしいと思っていたのは当たっていた。
　だから、影で本条先輩が、新井林をひいきしていた理由も読めた。
　だが、本条先輩は、立村先輩を次期委員長にすると断言している。新井林の前で言い切ってしまっている。理由が見当つかなかった。

　本条先輩は続けた。
「今の内に言っとく。立村は見た目の坊ちゃん面とは裏腹に、怖いぞ。新井林、お前が本気で評議委員長を狙うのだったら、徹底して立村のやり方を追っかけ ろ。一年間どうやって修羅場を乗り切っていくかをまなこ開いて見ておけ。本当に超えられると思った時だけ、勝負してみろ。お前は奴の怖さを知らないから な。俺も、先輩でなかったら奴を使う自信は、なかった」
　ぼそっとつぶやいたのはどこまで本気なのだろうか。
「あんな奴、あんな奴の下に、また一年も」
　いつのまにか新井林の目がしょぼついてきた。うるんできたのだろうか。図体に似合わない。いきなり、声を詰まらせた。
「畜生、また騙されたのかよ。あの野郎に」
「騙してなんかないだろ。俺はお前を評議委員長の器だってことは、信じてたんだからな」
「あんな奴、なんかの言うこと聞くくらいだったら、俺は、俺は」
「おいおい落ち着けよ。新井林、評議委員会っていうのはな、人の顔色を見て、生徒会や規律委員会、音楽委員会、生活委員会などなどと連絡を取り合って、演劇やったりクラスのイベント開いたりととにかく忙しいんだ。入ったばかりの一年にやらせるのは荷が重いだろ？」
「私はどうなんですか」
　突き刺してやりたくて、つい口にでた。
「いや、杉本。決して君を無視したわけじゃない。評議委員長ともなると、とにかく身体が丈夫でないと持たない。もし君が新井林くらいの体力を持っていたら、ためらうことなく候補にしたと思う。でも差別とかじゃなくて現実問題、男と女の体力は、差がありすぎるんだ」
「だったら立村先輩はどうなんですか？　明らかに私と同じくらいの体力しか」
　口にでたのを押しとどめた。本条先輩は新井林をなだめるのに必死だ。こいつは感情が高ぶると涙ぐむくせがあるという発見。この前十分教えてもらったことのひとつだった。
「あのなあ、新井林、泣くな。俺も言い方が悪かった。俺が言いたいのはな、一年の中でもお前みたいなタイプはそうそういないんだ。今年の一年はいろいろ あってやる気がないとかさんざん言われているけどな、お前は本気を出したとたんすごい能力を発揮する奴だって、早いうちから俺は見ぬいてた」
「あんな奴と一緒にされたかねえよ！」
　顔色浅黒くしながらも、震えつつ新井林は叫んでいた。
　梨南だけが冷静に野郎ふたりの様子を見つめていた。

――本条先輩はやはり立村先輩よりも新井林の方が好きなんじゃないだろうか。
「まだまだこれからだろ。まだ入学して三カ月だろ。いいか新井林。俺がこれから少しずつ、うまく行く方法を教えてやるから。二年あるんだからその間に、立村のやり方と見比べてやってみろよ」

――こいつ、本当にばかかもしれない。
なにもかもばかばかしくなった。梨南の奥底に隠れていたかつての記憶が目の前にちらつき、消えた。小学校入学時から、卒業まで、ローエングリンという名 の憧れを重ねていた相手だったはずだ。どうして人間の性格と見た目とは重ならないのだろうと感じていた相手だったはずだ。卒業式前の蛆虫事件時に、突き飛 ばされ頭を打ってしまった時、はるみは新井林の背中におぶわれて去ってしまった。梨南ひとりで保健室で傷を見てもらいながら復讐を誓ったのは、その時だ。

小学校に入学した時から知っていた。
新井林健吾は佐賀はるみのことしか追いかけてなくて、はるみも幼なじみの新井林を慕っていたことを、
「健吾、健吾、一緒に行こうよ」と甘えていたから、いつも他の女子たちに総すかんを買っていたっけ。
梨南は見るに耐えなかったからすぐに、はるみの面倒を見ることに決めた。他の女子たちとなじませるために、新井林のことを嫌いにさせて、縁を切らせて、男子にくっつくのをやめさせた。
何もかも、はるみがクラスで仲良くできるようにするため、梨南がしてあげたことだった。
なのに、最後の最後にはるみは梨南よりも新井林を選んだ。
新井林に、「こんな女なんかより下に見られたくない」と罵られる覚えもない。
はるみに「梨南ちゃんは赤ちゃん扱いされていて可哀想」と哀れまれる、必要もない。

「新井林、ひとつだけ聞きたいの。これでもう二度と口を利く気はないから、答えなさい」
ひっくと、しゃくりあげながら新井林は顔を上げた。うるんではいても血走った視線は変わらなかった。
「てめえに命令される覚えはねえよ」
「どうして、ここまで私を嫌うわけなの。具体的な例をあげてほしいの」
本条先輩が梨南に軽く手を差し伸べた。何かを言おうとしたが梨南は首を振った。
「聞かないと、すべてが終わらないんです。本条先輩」
「お互い感情論になるのはやめろよ。杉本も」
「いいさ、言ってやるさ」
片腕でごしごしと目をこすり、新井林は仁王立ちして梨南をにらみつけた。言いたいことは言い放ったのだから、これ以上何を聞くというのだろうか、そういう顔だった。梨南はこれ以上に

らみ返さなかった。ただ黙って、答えを聞きたいだけだった。
「あいつが自分で言いたいことを、お前が全部取り上げてしまったことだ」
「あいつとは、はるみのことなの」
　下を向いて、言葉を選んでいる様子。
「お前の押し付けがましい態度で、あいつが……佐賀がどれだけずたずたにされてたかわからねえのか。徹底してクラス一丸で佐賀をつるし上げて自分はちっと も手を汚してない振りをしている、その態度が俺は許せねえ。しょせん、クラスなんてその時限りのもんだからどうでもいい。だがな、これだけは言っとく」
　梨南の前に一歩踏み出し、鼻の先すれすれまで指を指した。真っ黒い指の温度だろうか、鼻の先が熱くなりそうだった。
「悪いけど、私は一度だってはるみに手を出したことはないわ。それにね、新井林。あんたが思っているほどはるみは、弱くない。今日見たでしょう。はるみは 自分の手で、自分のことばで、徹底した復讐を私にしていることに、気付かないのかしら。だから新井林、あんたはばかなのよ」
「もし、これから先、佐賀に手を出してみろ。俺はどんな手を使っても、てめえをぶっ殺す」
　一呼吸おいて脱力したように手を下げた。小さくつばを吐いた。梨南は目をそらさなかった。見とれていた。梨南が幼い頃から憧れていた「ローエングリン」様の、完璧な姿がそこにあった。
　幕切れだ。梨南は黙って新井林の去るのを目で追っていた。

　ドアが閉まった後、足音が聞こえなくなるまで梨南は動かないままでいた。
　梨南の推理がどこまで冴えていたのかは判断できず、かといって新井林をさっさと追い出すことができたのも確かだったし。判定は本条先輩に任せるしかないだろう。
「はあ、終わったな」
「お付き合いいただきありがとうございます」
　機械的にお礼を言った。
「まあ俺もこれは、言葉が足りなかったってことだな。杉本。すまん」
「いいんです。どうせ私は評議委員長にふさわしくないってことですから。立村先輩くらいの体力でもできることが私に出来ないと決め付けられたのは残念ですから」
「あのなあ、そこでへそを曲げないでくれよ、杉本。ほらほら。しょうがないなあ。全く今年の一年は、面倒見切れねえぞ」

　もう一度梨南は確認したかった。
「本条先輩。もうひとつだけ確認していいですか」
「ああ、最後だしな」
「なんで、立村先輩と清坂先輩を、付き合わせようとしたんですか。立村先輩は清坂先輩のことを好きでもなんでもなかったのに、どうしてですか」

　もちろん「立村先輩は私のことを好きだったのに」とは言わなかった。
　本条先輩はポケットに手をつっこみ、よくわけのわからぬ顔で梨南を見た。何かに気付いた様子だった。ほおっとつぶやき、指を鳴らした。ポケットの中、鈍い音だった。
「立村はそういうのが得意じゃねえから、清坂の方から誘ってやった方がたぶん、楽なんだろうって思った。『彼女』よりも『本当に信頼できる仲間』があいつには、一番必要だと、先輩として思ったわけだ」
「『仲間』ですか」
「そ。評議委員長は、一匹狼だとやっていけない部分がある。俺も、気の合う奴らがいるからなんとかうまく回っているところがあるんだ。杉本もわかるだろ。 立村ももっと他の連中とおちゃらけられればいいんだけどな。新井林みたいな奴とは、あのままじゃあ絶対にうまく行かないだろう。ま、俺が見込んだ奴だ、な んとかやっていけるとは思うが」
「だから、新井林を立村先輩の下につけようとしたんですね」
「杉本は先が読めるなあ。立村の言っていた通りだ」
　本条先輩は、安心したようにこっくり頷き、顔を崩して微笑んだ。
「じゃあ、廊下に出るか」
　本条先輩は乱れた椅子を元に戻し、後ろの扉を開いた。夕暮れのあめ色な光が、四角に落ちた。梨南は扉を閉めて大きく深呼吸をした。玄関に向かうかと思っていたが、本条先輩は立ち止まったまま、じっと梨南の顔を見つめていた。胸元ではなかった。
「杉本、忘れていたんだが、この前のクイズ大会でお前にごほうび、やってなかったな」
「別にいいです。私はそれ目当てでやったんじゃ」
「今、思いついたんだけどな、俺のロッカーにひとつ、渡すものが残ってたんだよな。俺は急ぐから先に行くけど、悪い。杉本。三Ａの教室に『本条』と書いているロッカーがあるから、そこをあさってくれないか。すぐわかる。いかにもお前が好みそうな包みだからさ」
　本条先輩は急に時計を見て、腕をぼりぼりと掻いた。
「気を遣ってくださるなんて嬉しいです。ありがとうございます」
「じゃあ、先に行くな。おつかれさん」
　廊下には窓ごとに、橙色の光がタイルのように光っていた。梨南はちらつく木々の葉影を追い、廊下を全速力で駆け抜けていく本条先輩の姿を見送っていた。

　見えなくなるまできちんと見送るのが礼儀だった。完全に本条先輩の気配が消えた後、梨南はもう一度三年Ａ組の教室に入った。相変わらずクラス全員の「葬 式写真」がずらっと並んでいる怪しい室内。一呼吸おいて、ロッカーの男子名を探した。「本条里希」というのが名前だ。「ほ」の字だったら後ろだろう。大体 の目見当をつけて、すぐに見つけた。よく神社に張られている、太いデフォルメした文字のシールが張られていた。「本条参上！」と本当に目立たない程度に。
　手をかけて、一呼吸おいて、開いた。
　もあっと流れた。

　生きている空気。
　「……杉本か」
　立村先輩が膝を抱えてロッカーの中に座りこんでいた。

　半そででネクタイは締めたまま、かなり暑かったのだろう、顔が火照っていた。ゆっくりと立ち上がり、かがみながらロッカーから出た。
「立村、先輩、どうして」
　大きくのびをした後、ため息をついていた。
「いつから、ここにいたんですか」
「あの、それは」
「盗み聞き、してたんですか」
「結果的には、そうなるよな。ごめん」
「まさか、最初からここにいらしたのですか」
　自分でも思わずことばがヒステリックになりそうだった。目の前にいるのは確かに立村先輩だ。間違いなく、梨南の言葉も、新井林の罵詈雑言も、本条先輩の心も、みな聞かれていたということだろう。
「本条先輩に用があって、教室に来たら、いきなり拉致された」
　立村先輩は梨南にいつもの、やわらかい表情を向けた。
「杉本、よく耐えたな。偉かった」

　――怒っていないんだ。私がさんざん、顔が悪いとか、頭が悪いとか言ったのに。
　――新井林ほどではないけど、立村先輩、私を嫌ったって当然なのに。
　――そうよ、男子が私のことを嫌うのが、ふつうのことなんだもの。
　男子に嫌われない自分がどうしても信じられなかった。自分が自分でないみたいだった。
　立村先輩が梨南を嫌わないこと自体が、今までおかしいことだったのだ。「ひいき」してもらえないというショックを受けるなんて、梨南にとっては絶対にあってはならないことだったのだから。
　――先輩に、嫌われればいいんだ。
　知らず知らずのうちに言葉が飛び出していた。新井林や本条先輩の前では落ち着いていたのに、立村先輩の瞳を見つめたとたん、あふれ出た。

「立村先輩、さっき新井林が先輩について言った言葉はすべて本当のことですよね」
　はっとした風に、立村先輩はまじまじと梨南を見返した。
「女子の尻を追い掛け回したことも、小学校時代泣き虫だったことも、数学が小学校以下の能力しかないってことも」
　言葉が出そうになくて、梨南はさらに続けた。
「立村先輩。先輩は女子と同じ体力しか持ってないし、頭だって悪いし、なんで清坂先輩みたい

な可愛い彼女がいるのかわかりません。そのくせ、本条先輩には ものすごく評価されて、評議委員長になるんですよね。顔と頭では数段上の、性格の悪い新井林に取られるかもしれないのに」
　一気に畳み掛けた。
「でも、新井林なんかに取られなくてよかったですね。もう、本条先輩は意地でも立村先輩を委員長にしようって決めてますから。今年は問題ないんじゃないで すか。でも、本条先輩が卒業されたらどうするんですか。先輩だけになって、もしかしたら新井林に評議委員会をかく乱されるかもしれないんですよ。清坂先輩 は可愛くて頭もいいけれど、評議委員会の手伝いができるようなタイプじゃないと思います。それに先輩の体力ではきっと倒れてしまうと思います」
　止まらず、立村先輩へ叫んだ。もう、嫌われてもいい。言わなくちゃ、と溢れる言葉。
「私、私の頭だったら、絶対に、新井林に対抗できます。それだけは自信があります。もう本条先輩がいなくなったとしても、絶対にあの男を負かす自信があります。だから」
　言葉が詰まった。ふりきるように首を振った。手を、レースショールの結び目にかけた。力がこもった。
「これから、私をあの、和風喫茶のお店に連れてってください。あそこで、これから私を、先輩の次、評議委員長になれるよう、詳しい話を聞かせてください。 本条先輩が新井林を仕込むより早く、私を次期評議委員長の勉強させてくれれば、丸く収まるんです。先輩、傷つきましたか」

　――もし嫌われたら、私はひとりで評議委員長の座を狙うだけ。男子の味方なんて、いらないんだから。

　立村先輩は、軽く髪をかきあげ、しばらく目を伏せていた。いつか梨南にライブのチケットについて話をしていた時、物思いにふけっていた時と同じだった。
「思いっきり、傷ついたよ」
　もとに戻り、ふっと微笑んだ。
「否定できないからな」
　もう一度、つぶやくのが聞こえた。
「でも、俺は杉本のことを嫌いにはならないよ。行こうか」

　古川先輩の教えてくれた、「立村は美里に告白される直前まで、杉本さんのことが好きだったんだよ」という声が響いたような気がする。身動き取れず、梨南は自分の中の声がずしんと響いたのを感じた。
　確かに聞こえてたものがあった。

　清坂先輩の手前、もう二度と「ひいき」してもらえないことはわかっていた。
　だから、新井林とのタイマン勝負を打ち明けなかった。
　もう、梨南の味方でいてもらえないと思い込んでいた。
　でも、立村先輩は今言ってくれた。梨南を嫌いにならないと言ってくれた。

――立村先輩は、絶対、私のことを、本当に好きなんだ。
――きっと、今でも私のことを、「ひいき」したいって、思ってくれてるんだ。
――それなら。

きっと新井林とはるみは、彼らなりの正攻法で梨南に歯向かって来るだろう。評議委員会の人間として目覚めてしまったのは怖い。奴の能力がただもんじゃな いことを梨南は一番理解しているつもりだ。立村先輩がいくら本条先輩に評価されているとはいえ、簡単にいなせる相手ではない。かつては「ローエングリン」 と呼んだ相手なのだから。
立村先輩に今、必要なのは、梨南の頭脳と切れ味だ。一番お気に入りにしてくれた、梨南そのものだ。そう信じた。
――立村先輩。清坂先輩と「お付き合い」した以上、私をおおっぴらに「ひいき」できないことはわかっています。それは当然のことです。でも、私はいやお うなしに先輩が「ひいき」できる場所にいてあげます。人前で堂々と私の価値を認めてもらえるような場所に、いてあげます。評議委員長になるためだったら、 立村先輩に毎日会ってもかまわないし、先輩も清坂先輩を「ひいき」しながら、私のことをそばに置いておけるんですから。それが立村先輩、あなたの求めてい るものならば。
――私は、自分の好みを妥協して、先輩のそばにいてあげます。
たぶん、連れて行かれるのは、「おちうど」という名の喫茶店だ。これから二人っきりで、評議委員会の内部事情について、改めて教えてもらわなくてはなら ない。と同時に、立村先輩のために、ひさびさにライブの話をきいてあげなければならない。清坂先輩にはできなかったであろう、音楽関係の話題につきあって あげなければならない。梨南のすべきことはひとつだけ。
夕闇の中、先に出た立村先輩の背を追いかけ、心に誓った。

――私は戦う。どこまでも。

――終――

柳條梢色づいて

http://p.booklog.jp/book/77979

著者：舞夜じょんぬ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/77979

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/77979

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ